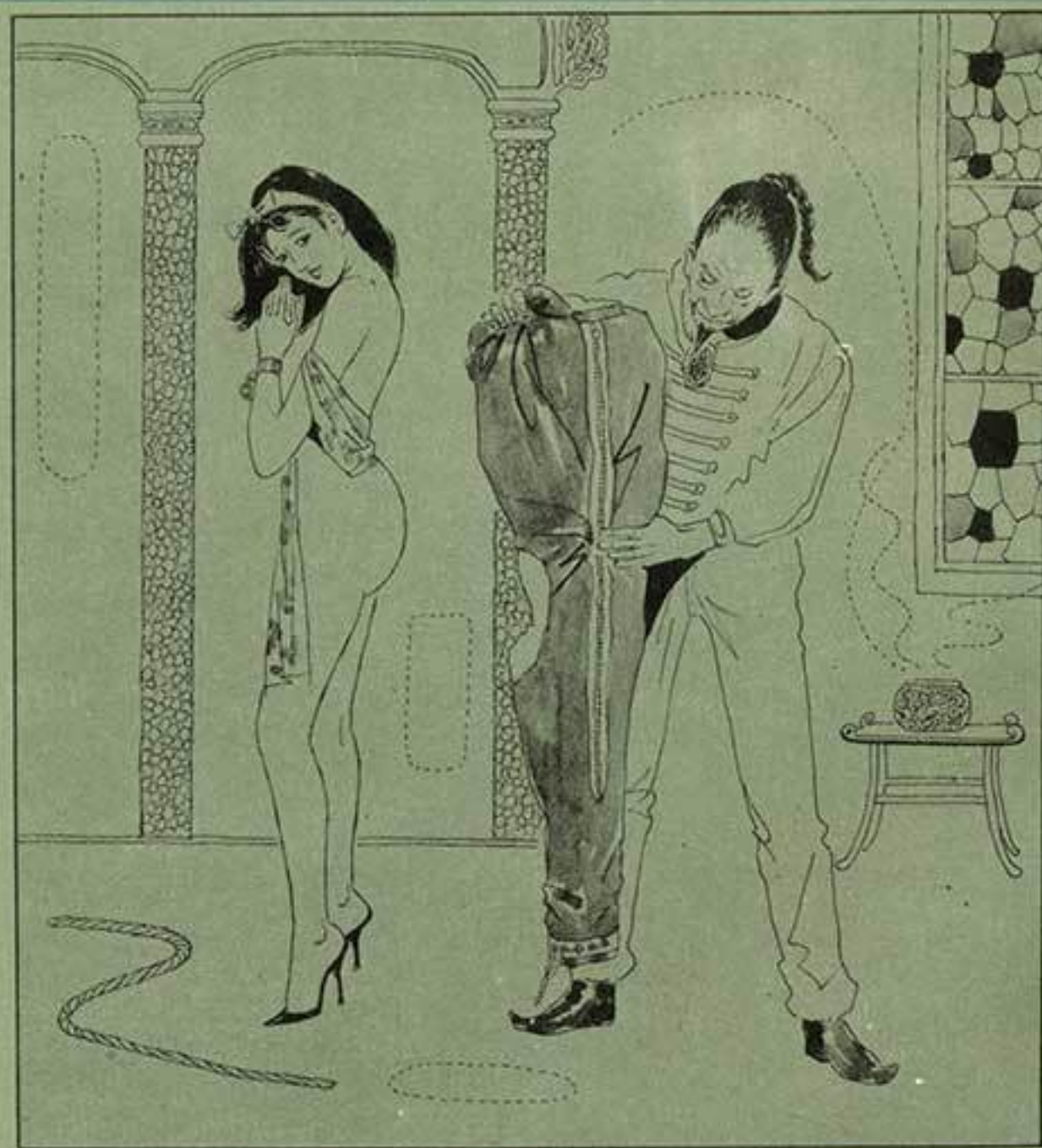


奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

1964・7



7月号

昭和三十九年六月二十日印刷 昭和三十九年七月一日発行 七月分(第十八巻第八号)毎月一回一日発行 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和三十一年六月十七日国鉄大島特報掲載承認第一二二二号

奇譚クラス

7月号

定価三〇〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



7月号

¥300

臨月腹妊婦フォト

田中弘氏特別提供
モデル 田中美佐子

六月号の読者通信にて便りを寄せられた福岡市の田中弘氏の特別の御厚意によって、ここに妊婦フォトの方々のために、貴重な資料を提供して頂きました。
モデルの田中美佐子夫人は、本年満二十二才の初産婦で、このフォトの撮影は予定日の十日程前で文字通り出産寸前の臨月腹の写真ということができます。

臨月妊婦緊縛

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にち)

産み月のお腹は、只でさえ動くのにも苦しいのに、後手高小手に縛りあげられて、その裸身をカメラの前に晒した可憐な初産婦。

診察を受ける妊婦

大手札印画紙焼付
四枚一組 五〇〇円
略号 (にし)

もともと普通の状態の臨月腹を、ごらんになりたいという方々のために、べんべんと膨れ上がったお腹を衣服をめぐって突き出したところを、いろいろのポーズでもってお目にかけます。オーソドックスな妊婦の生体写真。

臨月腹開陳 (座位)

大手札印画紙焼付
四枚一組 五〇〇円
略号 (にり)

臨月の大きなお腹を大いばりでぐいと突き出して、皆さまの目の前に、その全貌をあらさまに、ごらんになれるフォト。

臨月腹開陳 (立位)

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にす)

張り切ったお腹の中央に、むくれ上ったお臍が、出産を目前にした腹部の膨大さを物語っているのです。立ち上った妊婦のお腹だけが異様に目立ちます。いろいろの角度からごらん下さい。

柱縛りの妊婦

大手札印画紙焼付
二枚一組 三〇〇円
略号 (にや)

これは珍しい、床柱に後手の縄を縛りつけられたフォトです。妊婦嗜好ばかりでなく、女体緊縛マニヤの方々にも、一見をおすすめしたいコレクションです。

臨月のヌード

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にわ)

妊娠は女性を最も動物的な姿態に変えさせるといいます。着衣の上から見てさえ、異常に大きな腹部には、何か奇異な連想を起させるのですが、ここに全裸ヌードのフォトによって、妊婦の神秘のベールを剥いてみせます。

妊婦の裸身立像

大手札印画紙焼付
二枚一組 三〇〇円
略号 (にた)

神々しいばかりに美しい臨月妊婦の裸身。初めて妊娠した二十二才の女性の身体的変化は、ヌードの立像によって、くぐりこなる皆様の目の前に、かくすところなく提供されるのです。はちきれんばかりの若さが、健康的な妊婦の特徴を内包して、輝くような美しさを發揮しています。

縛られた妊婦

大手札印画紙焼付
二枚一組 三〇〇円
略号 (にる)

臨月腹をつき出して、後手に縛られた妊婦。両手の自由がきかないので、膨れた腹部がこれみよがしにさらけ出され、一片の布さえ纏わしてもらえぬ裸身が、美しい妊婦のベージュを、しみじみと醸しだしている。

臨月の裸身像 立位

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号 (にお)

このように若々しい臨月腹を手にとるように、近々と眺めることが出来るだろうか。妊婦線もあざやかな西瓜のような腹部が、触って下さいといわんばかりに、鮮鋭なレンズの目によって、はっきりとキャッチされています。

臨月の裸身像 座位

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にぬ)

自由のびのびと、自然のままのポーズで腰をおろした妊婦のヌードが、気どらない普通の状態でカメラに全身を晒しています。愛らしい妊婦の表情です。

突き出た臨月腹

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にい)

出産を旬日に控えて、もうこれ以上は大きくならないという位、突き出た腹部をもて余して、中腰になつて、休息したところをシャッター・チャンスと狙ってキャッチしました。

○提供者の御希望により、口絵には発表しませんから、直接お申込みにの方のみお分けします。
○お申込みは略号にて、お願いいたします。勝手ながら一枚宛の分割はいたしかねます。



奇譚クラブ 7月号 目次

第一グラビヤ

樹間の妖美吊り風景……………梨花悠紀子
縄に喘ぐ黒い下着……………大塚啓子
布に嵌口された表情……………大塚啓子
猿ぐつわの種々相……………大塚啓子
乱れた白衣の魅力……………梨花悠紀子
手摺に責められる美女……………大塚啓子
手足並行吊りの表情変化……………大塚啓子
鼻を弄ばれて……………大塚啓子
麻縄と荒縄のタッチ……………大塚啓子

巻頭口絵

アイデア画「柔肌をくびる」……………四馬孝・画
責画「古寺の怪」……………四馬孝・画
ドミナとスレイブの部屋……………(13)ゴリラと美女
女相撲「禁じ手五題」の内……………雪崎京人・提供
「相手の頭髪を把んではならない」……………四馬孝・画
女体切腹「若妻の後追い切腹」……………四馬孝・画

第二グラビヤ

美しい鼻の荒療治……………絹川文代
顔面翻弄四態……………大塚啓子
ポリウム女体抵抗……………絹川文代
カメラに囲まれた麗人……………梨花悠紀子
受縄の愛情と法悦境……………高田勇・提供
豊かな被虐表情美……………新宮明夫・提供
新着外国SMフォト……………新宮明夫・提供
夫婦のSMプレイ・フォト……………新宮明夫・提供

◆奇クサロン◆

○本誌は同人雑誌か……………編集子(49) ○サロン楽我記……………辻村隆(50) ○生首フ

オト礼讃……………剣持逸人(51) ○最近の縛り映画展望……………東山映史(52) ○夫婦のSMプレイ写真……………新宮明夫(53) ○Mフォト・モデル志願……………喜多利一(54) ○閑人漫語……………S生(54) ○私の「生首」作品……………水野弘(55) ○マニヤ通信「私の撮ったS子」……………松永景子(56) ○「8ミリ」緊縛行……………登治(57) ○鑑賞用臨月妊婦……………瀬沼五郎(58) ○女の首級……………前川成雄(59) ○武智鉄三氏が「谷崎もの」製作……………(59) ○本誌4月号の迷評……………佐藤耕作(60) ○続世界残酷物語より……………中屋敷真(61) ○森田敬三画肉筆「腰元切腹」評……………兵頭庫一(62) ○変天古林(63) ○短信往来「同名異人の中田君へ」……………中田明(64) ○雑誌通信「男はみな女のドレイ」……………高原逸見(63) ○編集室だより……………(64)

悦虐の美女を懐う……………近藤 一……………(65)

逃亡……………(悦虐絵灯籠 その七)……………万田 不仁……………(70)

映画にあらわれた処刑シーン……………黒田 寿……………(77)

妖異女斗美八景……………佐藤 健児……………(80)

モデルの手記野晒し……………大塚 啓子……………(86)

新連載サディズム小説……………西条 操……………(92)

心傷たむ遍歴……………三原 寛……………(99)

ラ・ムール・デスクラヴァージュ……………佐出 須登……………(107)

「十三人の女死刑囚」……………(その八 大決戦の巻)……………(107)

「奇譚三十九夜」物語……………(第三十七夜)……………辻村 隆……………(116)

強精飲食直接採集法……………芳野 眉美……………(136)

連載小説花と蛇……………(第13回)……………団 鬼六……………(147)

長篇SM小説 宇宙のどこかで……………佐治 麻造……………(151)

マニヤ雑誌 A 感覚と浣腸……………小林 薫……………(165)

女子寮の押え込み……………高木紀久枝……………(168)

テレビの責め……………牧 高志……………(180)

マソヒスチック画廊……………芳野 眉美……………(181)

北川京子ぎみに寄せ参らすふみ……………波良桐太郎……………(186)

可愛い啓子を求めて……………近藤 一……………(188)

◇読者通信◇……………(192)

女相撲と女斗美

女相撲ファン並に女斗美ファンの待望久しい女相撲写真、女斗美写真、裸女組打ち写真の第一作をここに提供いたします。

女相撲組打ち

相撲マワシ着用
大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円
略号(すか)

雲斎の相撲フンドシを本格的に締め込んだ若々しい裸女二人。お互いに相手のマワシを上手、下手しつかと握りあって、組み合ったもろもろのポーズ。これから技を掛けようと全身に力をこめたところ、前ミツの取りあい、吊りあい

とさまざまな変化をめ収める。

女相撲投げ業

相撲マワシ着用
大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円
略号(すね)

同じく本格的な相撲マワシを締め込んだ二人の裸女。互いに全身に力をみなぎらせて、内掛け、外掛け、下手投げ、吊り、腰投げとさまざまな技を見せて、相争う女相撲の美しさ。いずれも若々しい女体を相持たせる女相撲マニヤ待望のフोट。

裸女の争闘

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円
略号(めん)

白晒の六尺フンドシをいなせにきりりと締めた二人の裸女の女斗場面写真。プロレスまがいの技を用いて、互いに相手の最後の止めをさそうとして相争う、女体相搏つ女臭ぶんぶんたるフोट。

裸女の寝業

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円
略号(めき)

激しい争いの結果、一方が勝つていたのか、遅ましい臀の下に相手を組み敷いて、誇らしげに馬乗りになったポーズ。組み敷かれた女は必死になって反撃に転じ、組

んずはぐれつの大熱戦。互い相手の急所である乳房に爪を立てあいの寝業の形相も物凄く、二人の裸女の寝業の応酬はつづく。

裸女相搏つ

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円
略号(えく)

魅力的な臀部に、きりりと締め込んだ白晒六尺フンドシ一本の凛々しい姿になった二人の裸女が、互いに相手のフンドシをとりあい自分の意のままに屈伏させようと全身の筋肉を躍動させる見事な美しさ。裸一本の裸女の魅力と肉体美を最大限に発揮させた素晴らしいフोट。

四馬孝画廊

浣腸美媚態

大判判 (13×19) 印画紙焼付
三枚一組 六〇〇円
略号(のゆ)

新しい狙いによる四馬孝画伯による浣腸美の極致を最高度に描写した女性の美しさを女体浣腸に求めた芸術的作品

一、令嬢の浣腸

美しい令嬢、二人の看護婦に両

二、BGの浣腸

腕をとられて身動きできぬようにつかまえられる、真白な遅ましい尻をあらわにされて、百CCの巨大なガラス製浣腸器が医師の手によって迫ってくる。美に対する汚辱のスリル。

診療所の治療室にて、花恥しきビジネスガールが、羞らいながら、医師の目の前に臀部をつき出して浣腸ポーズをとるといふ、医療という目的のために、やむにやまれぬ受縛をうけて、浣腸の祭壇に立たされる美しい女性。

三、女学生の浣腸

セーラー服の可憐な少女が、ズベ公とチンピラ達に、よってたかつて浣腸される。華々しい美の断層の一場面。

処刑場面写真

新宮明夫氏提供

絞首刑

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円
略号(るく)

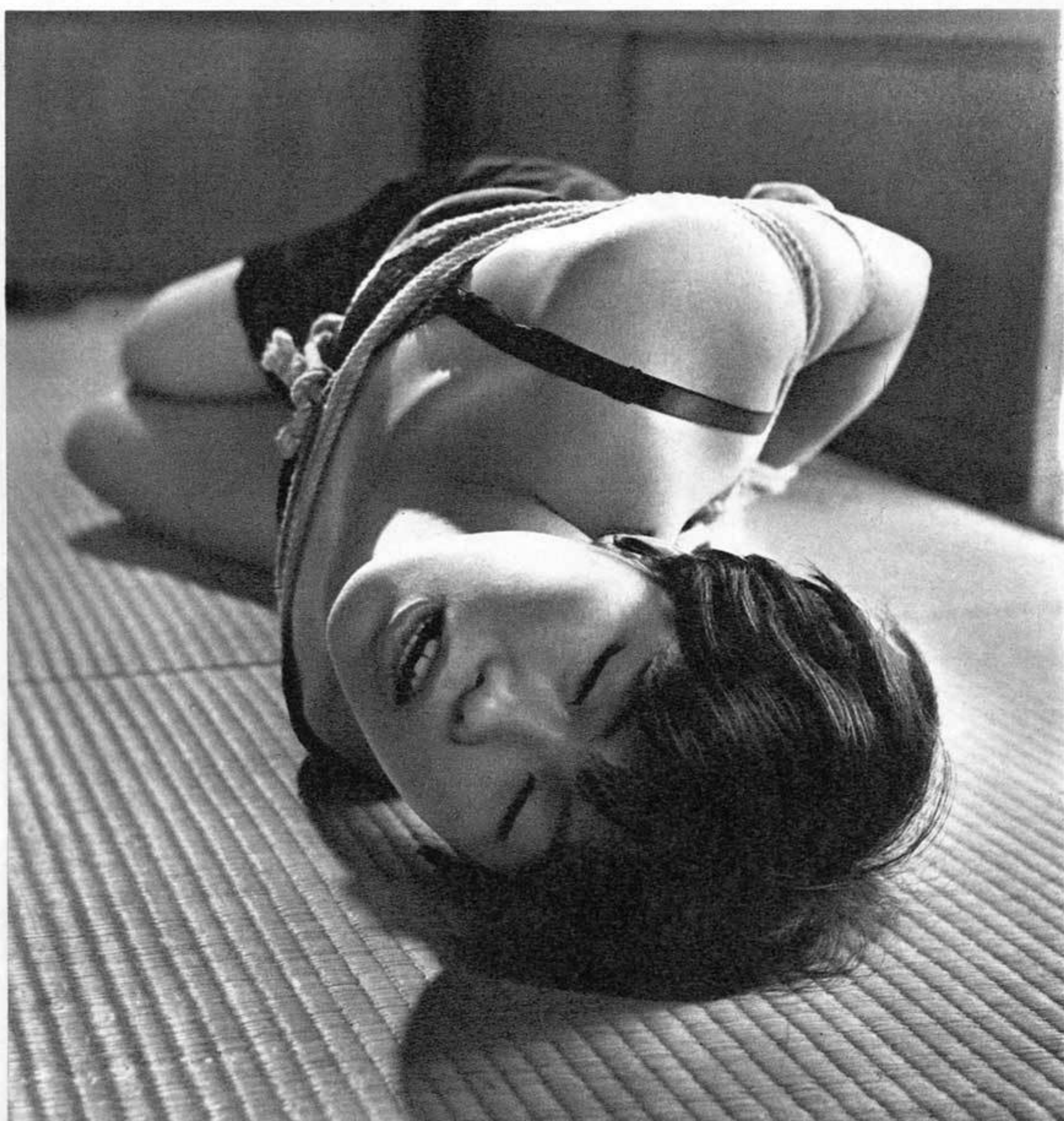
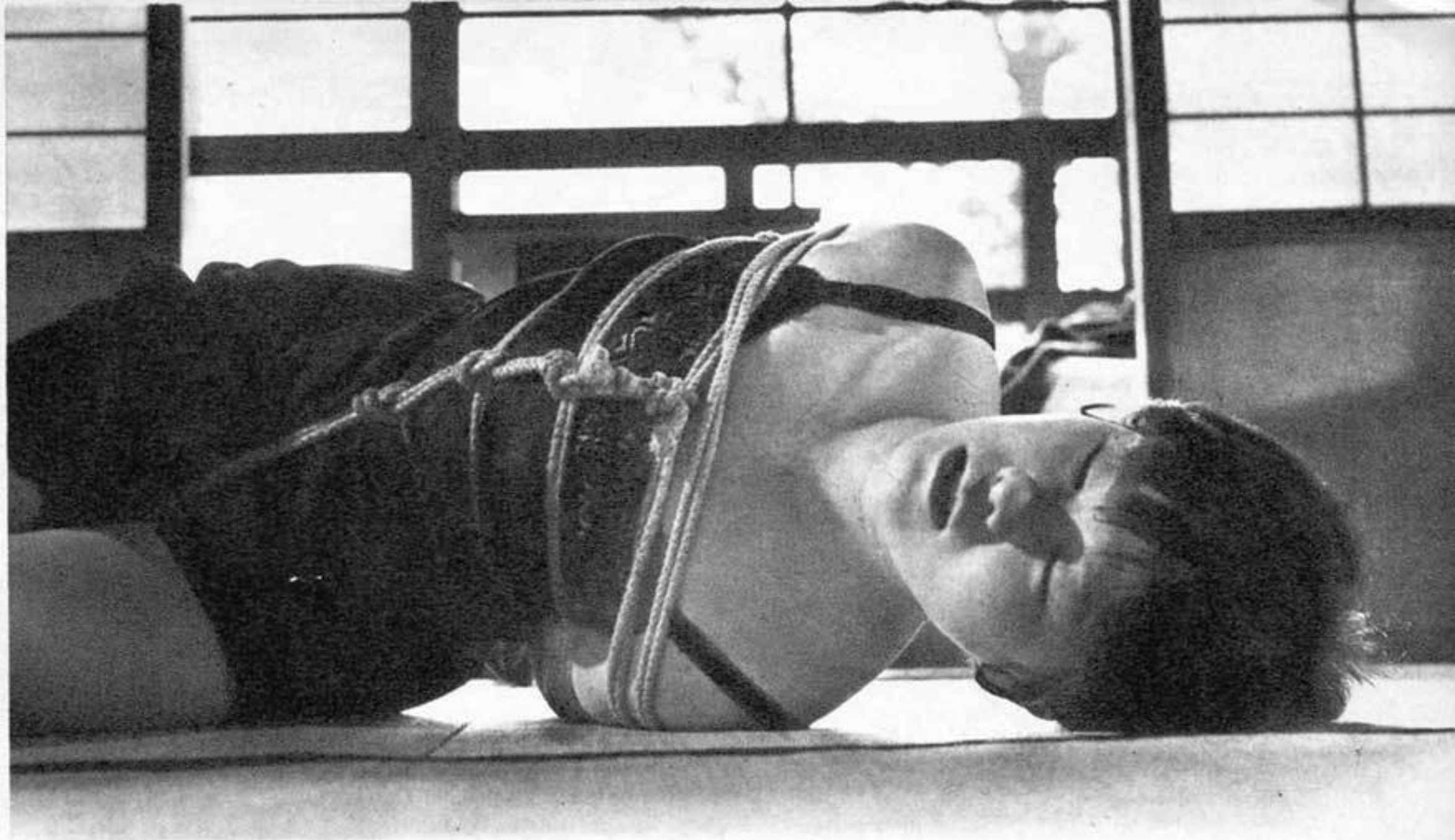
引廻しと晒

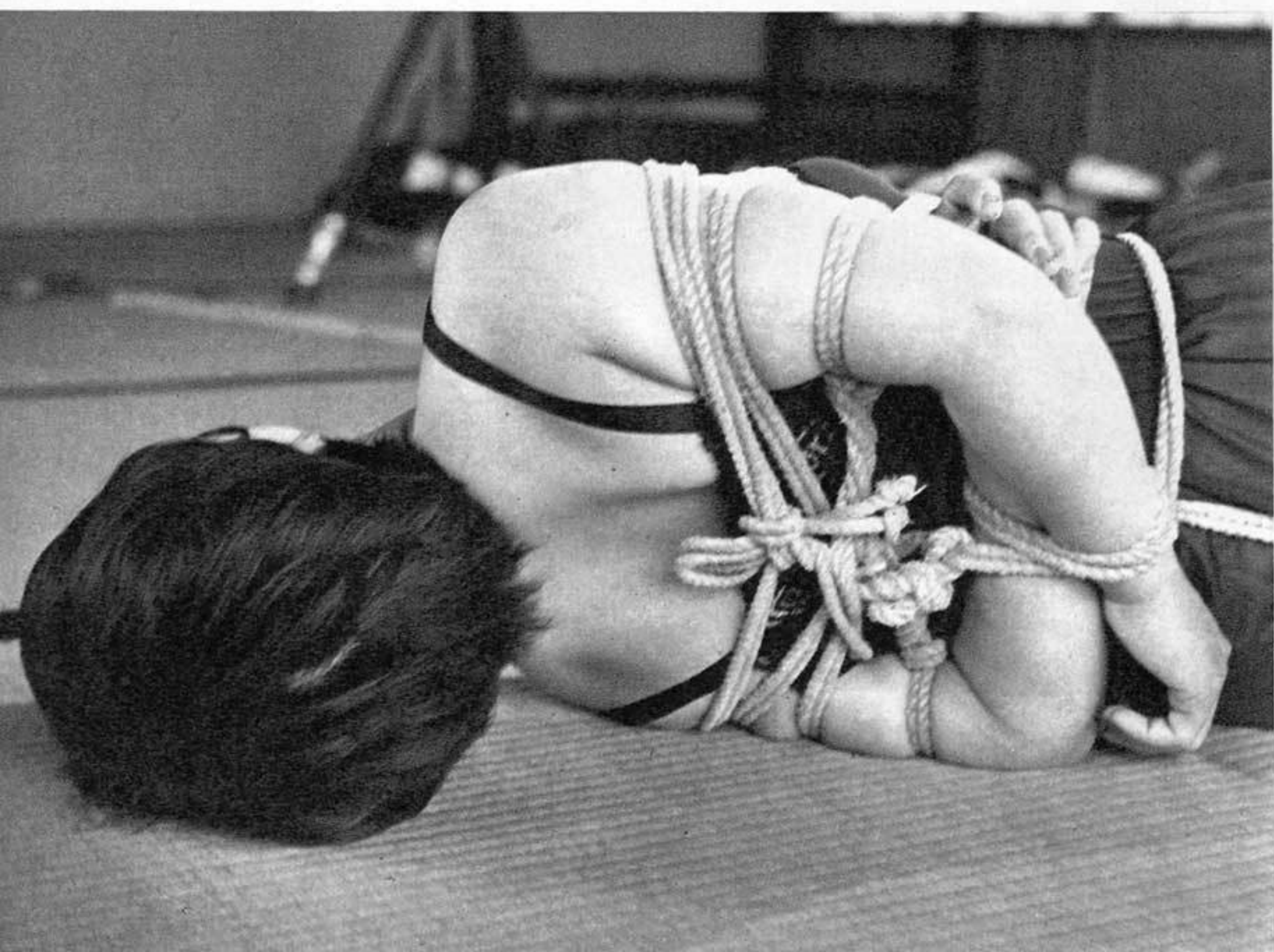
大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円
略号(るに)

首繩後手高小手にきびしく固められた裸身を縄尻をとられて、固引廻される美女の哀れさと、前手縛り目かくしのまま、放置されて晒される裸身の心もとなさ。













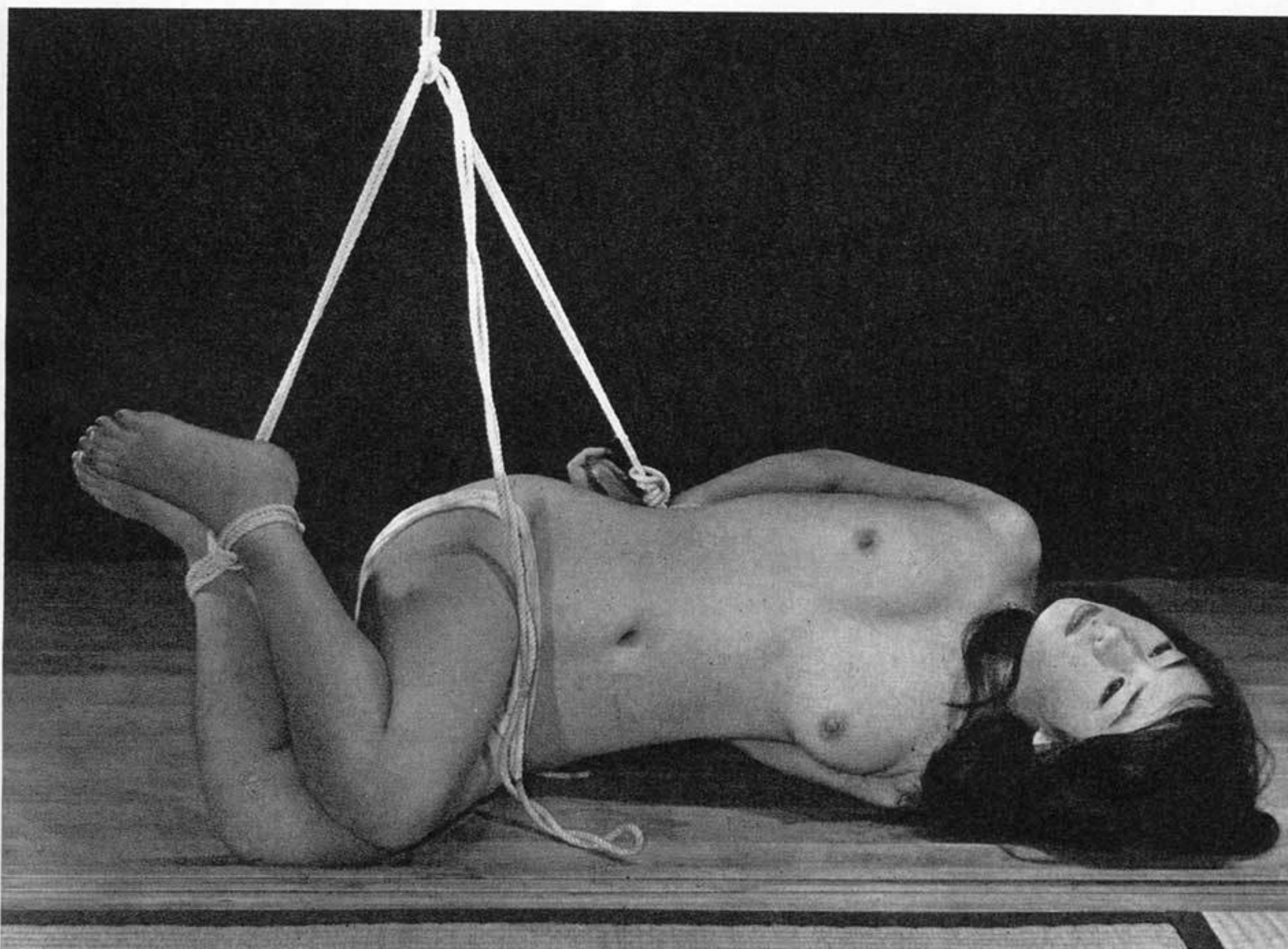


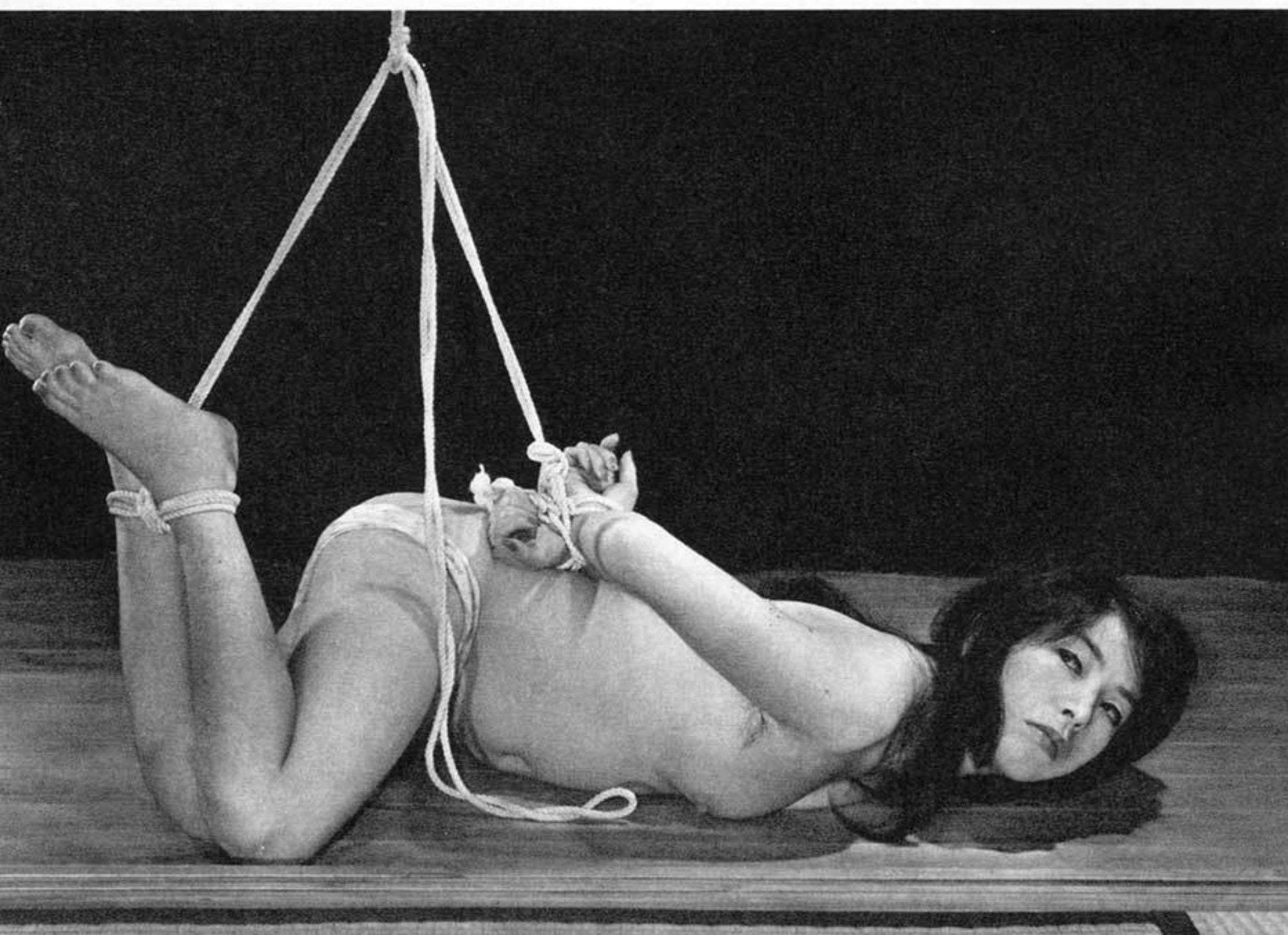
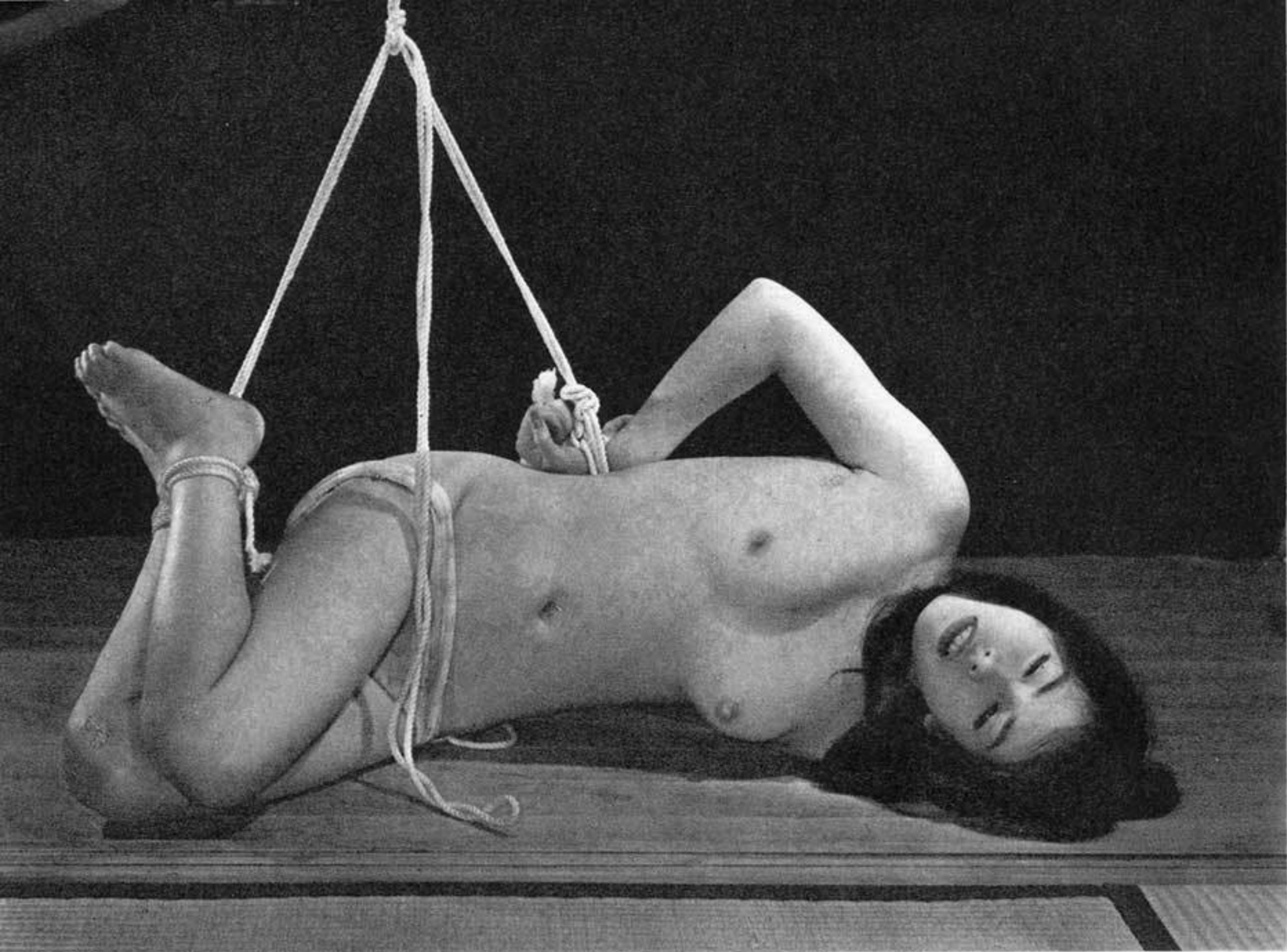


















柔肌をくびる

四馬孝・画





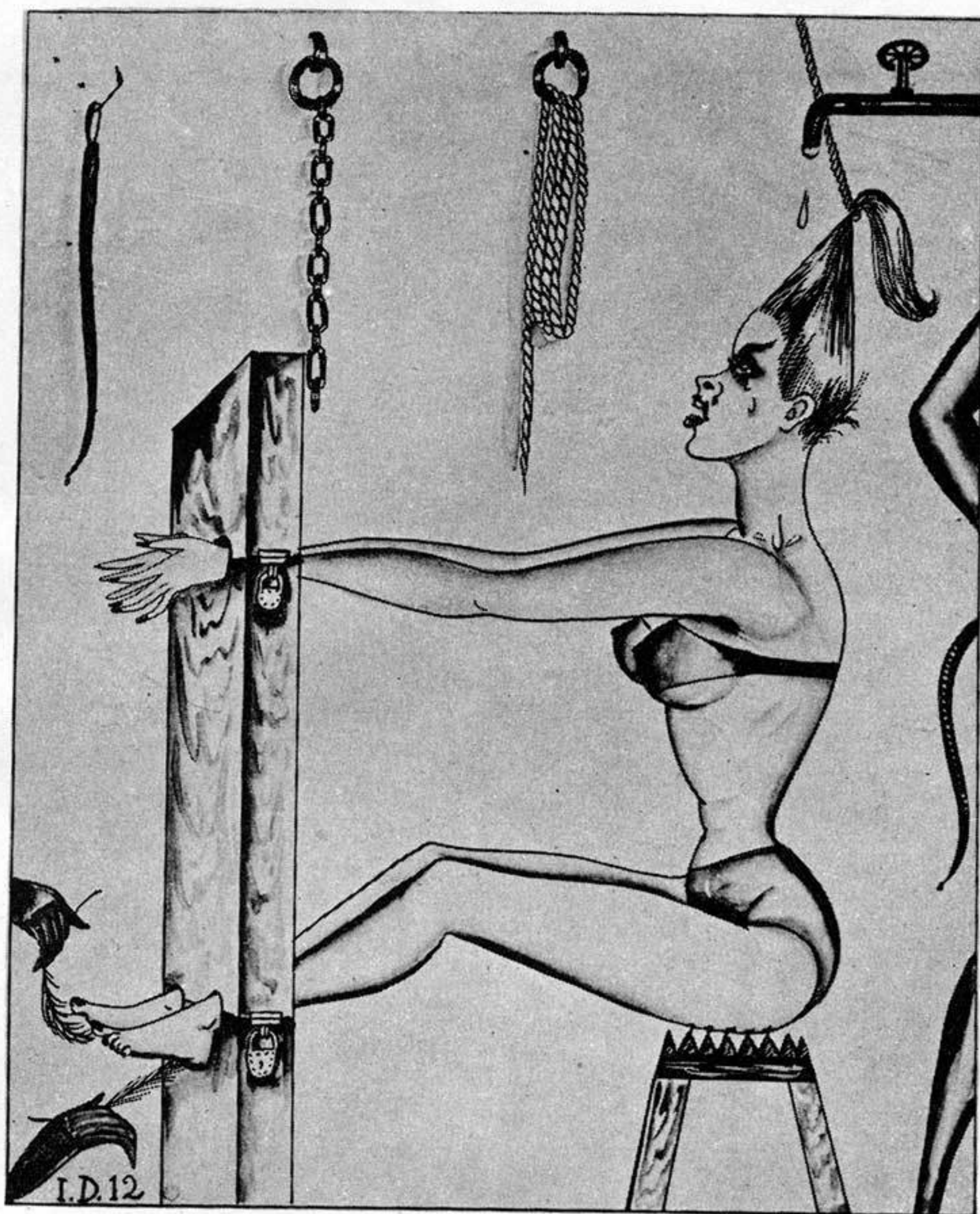
古寺の怪

四馬孝・画

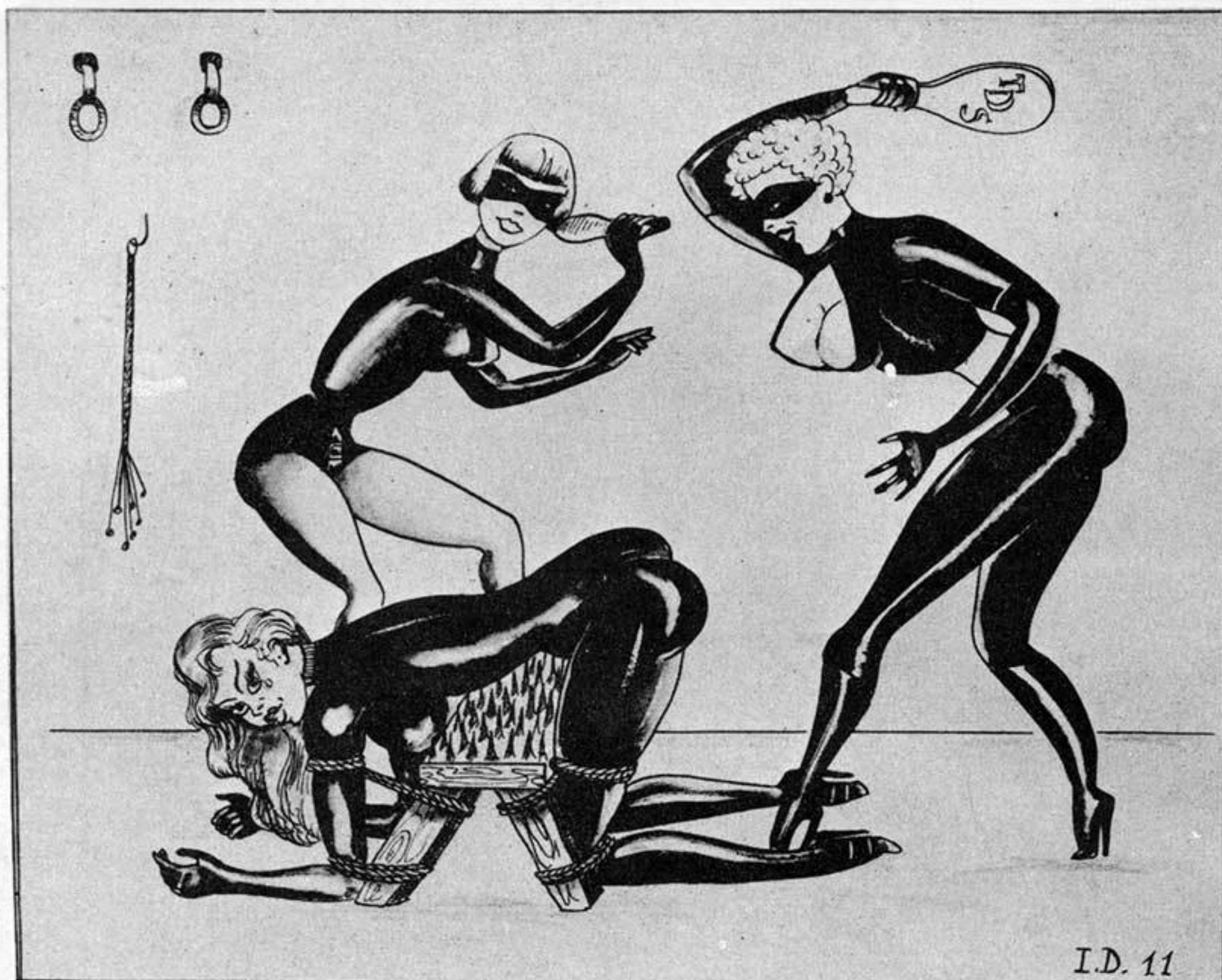
レイン・コートの外出

画・孝馬四





ドミナとスレイブの部屋



I.D. 11

(11) 臀部打擲



(13) ゴリラと美女

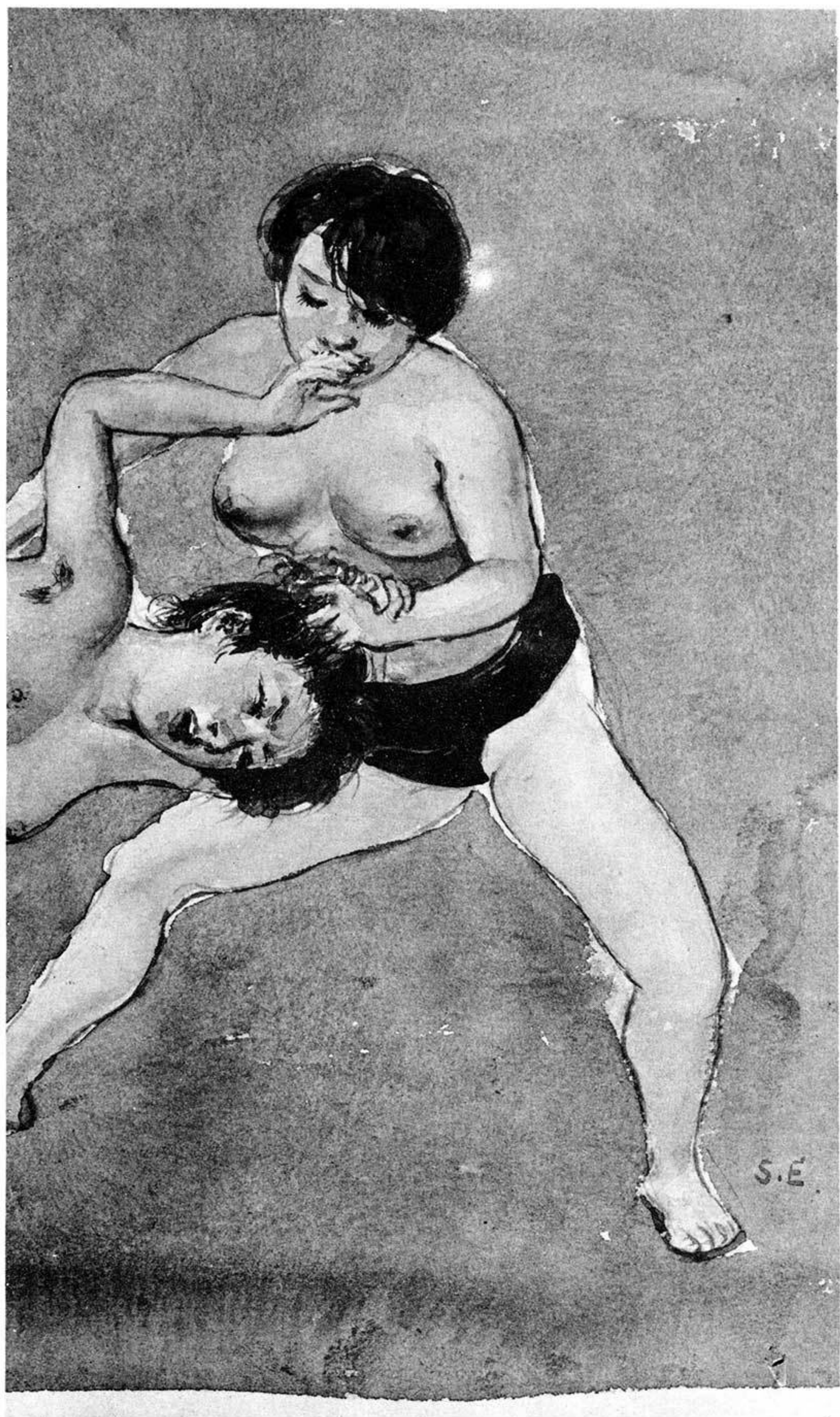
I.D. 13.

女相撲

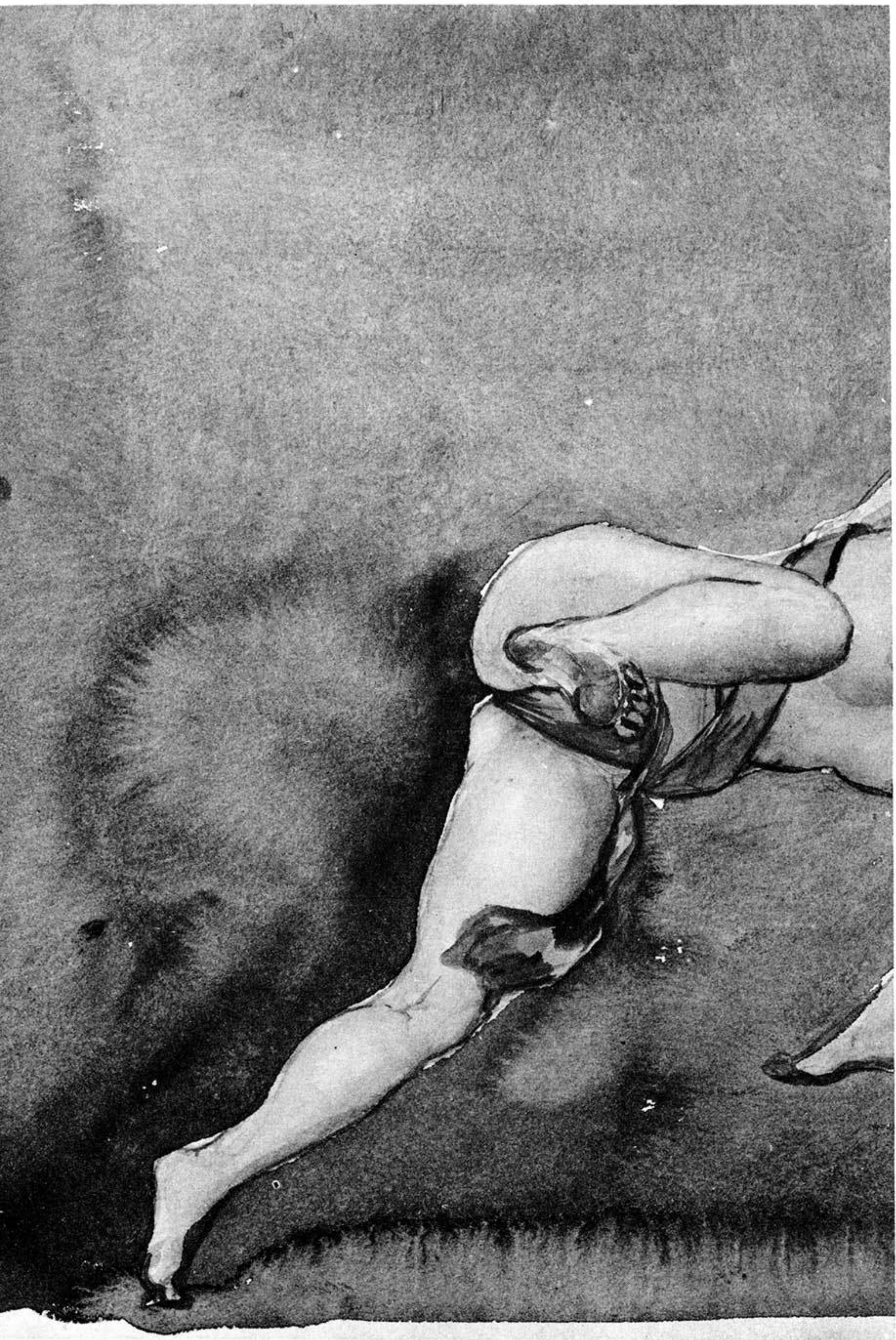
禁じ手五題の内

(雪崎京人提供)

一、相手の頭髪を把んではない。



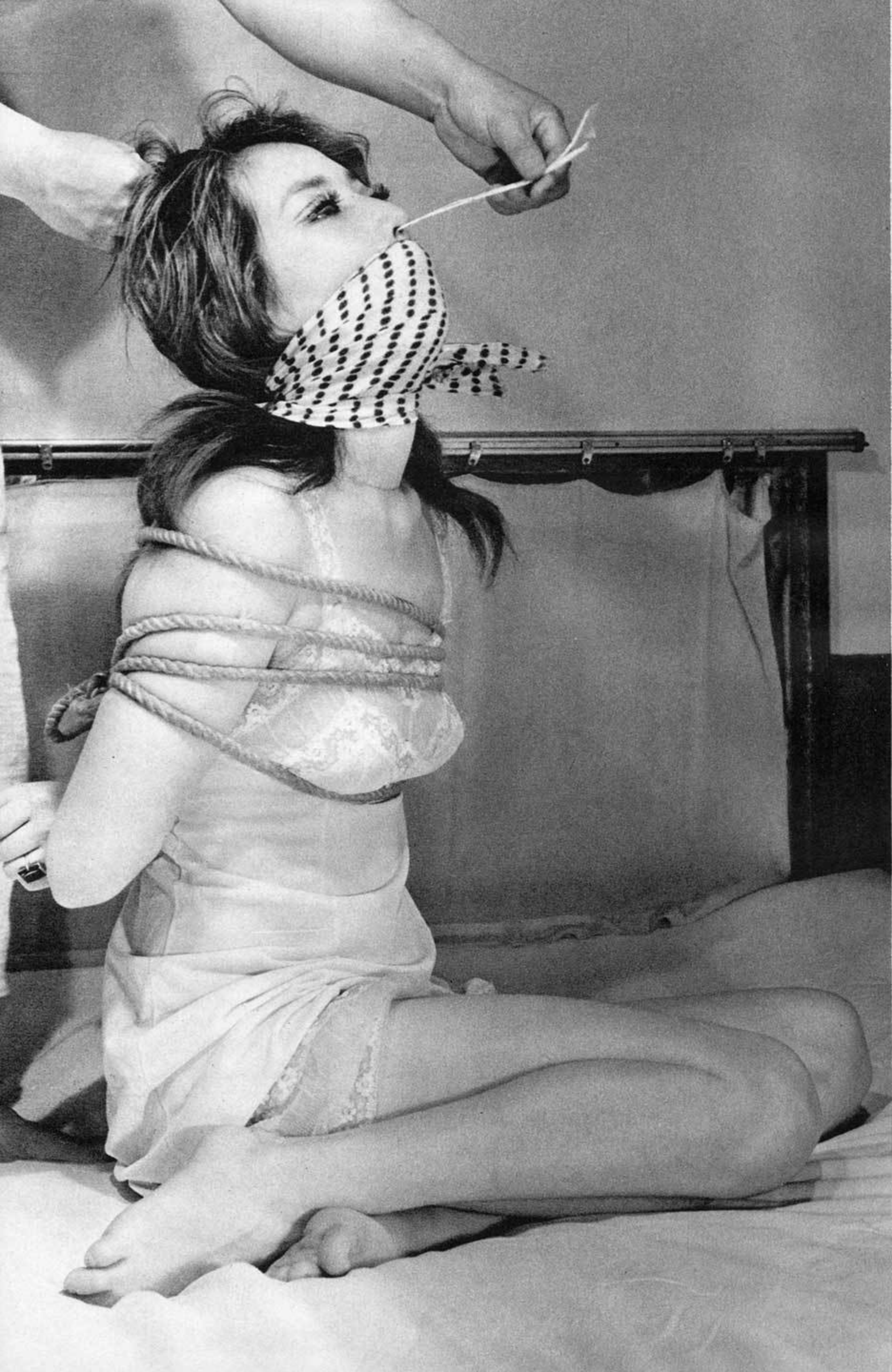
S.E.



若妻の後追い・切腹

四馬孝・画

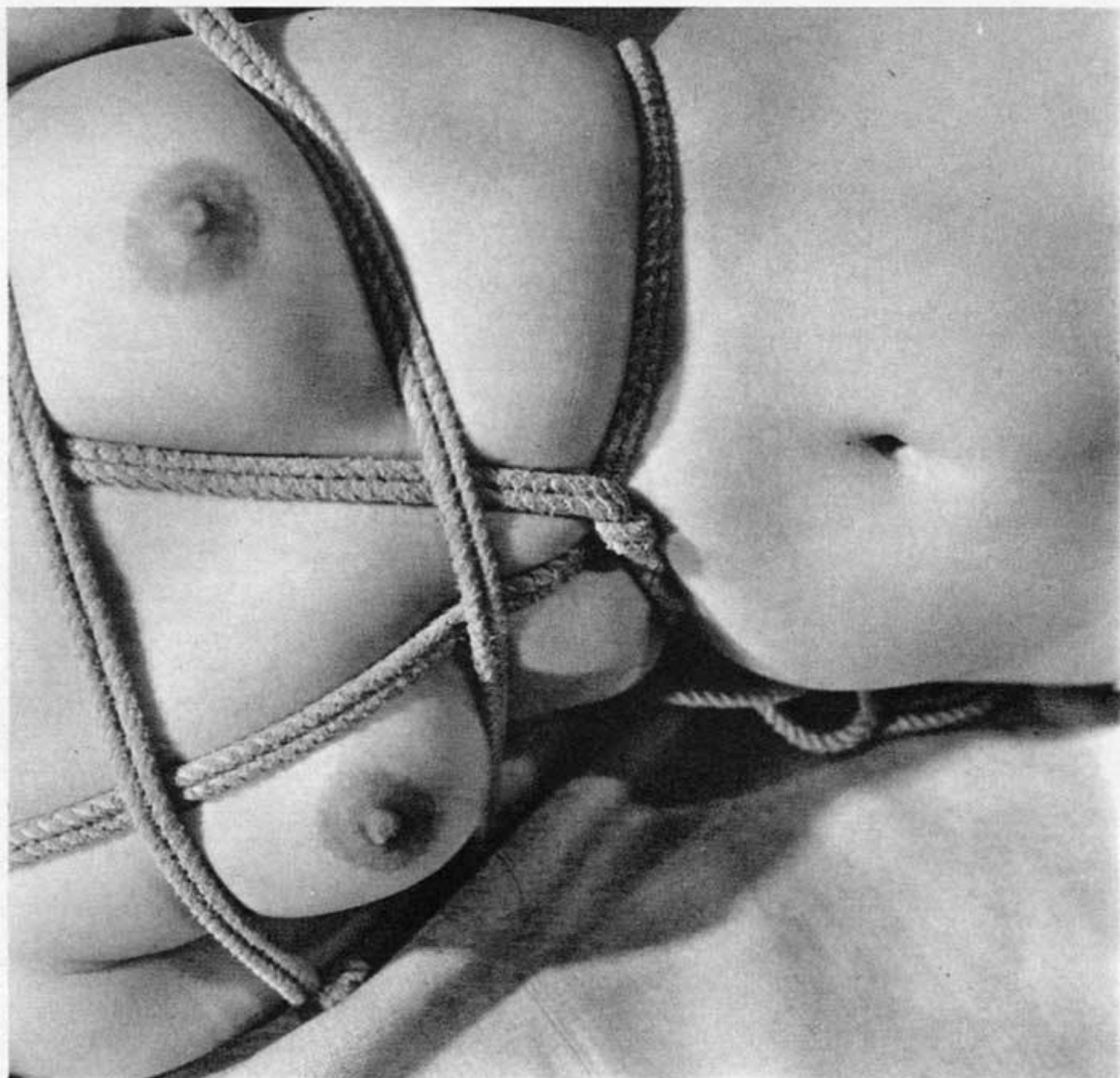


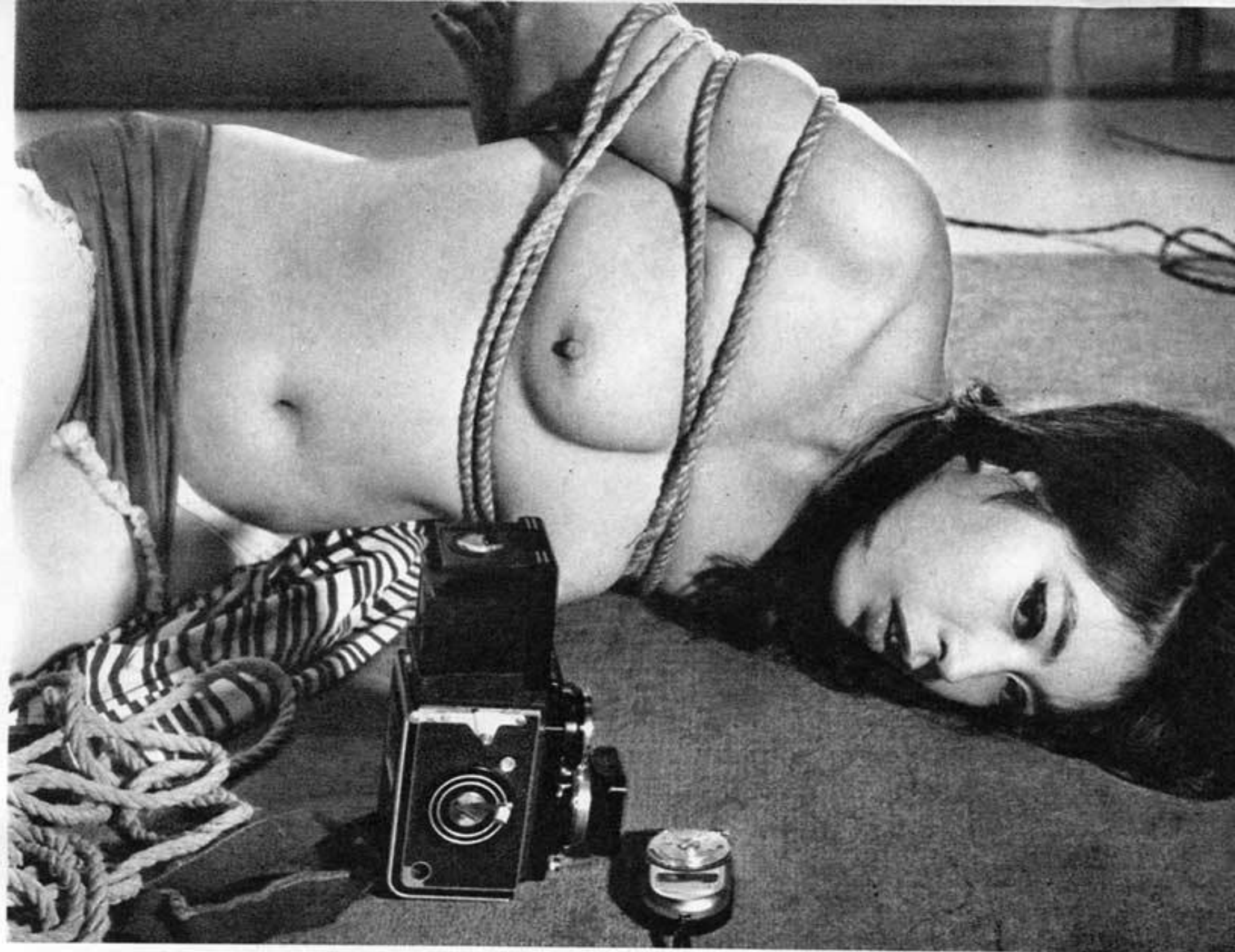


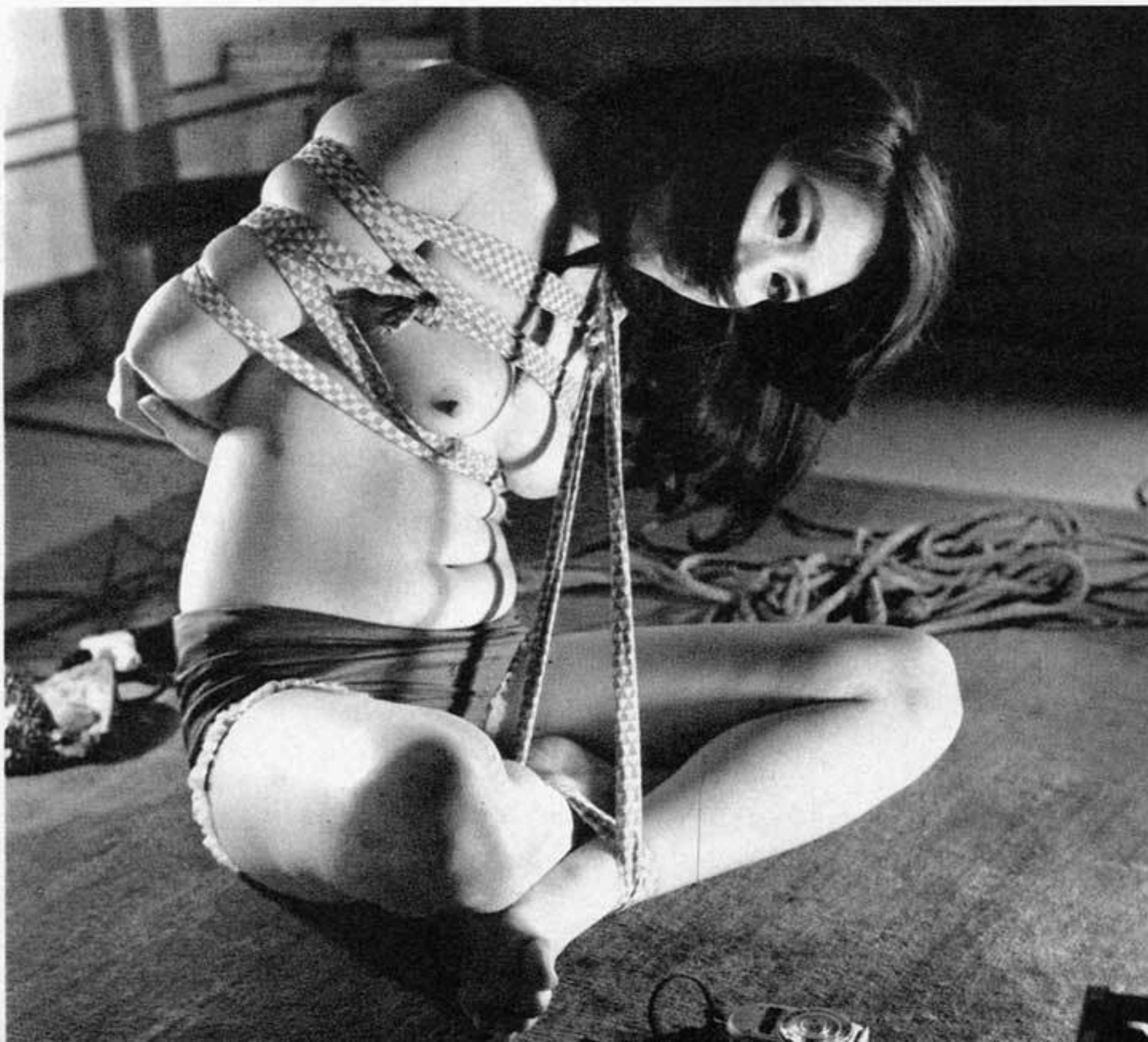




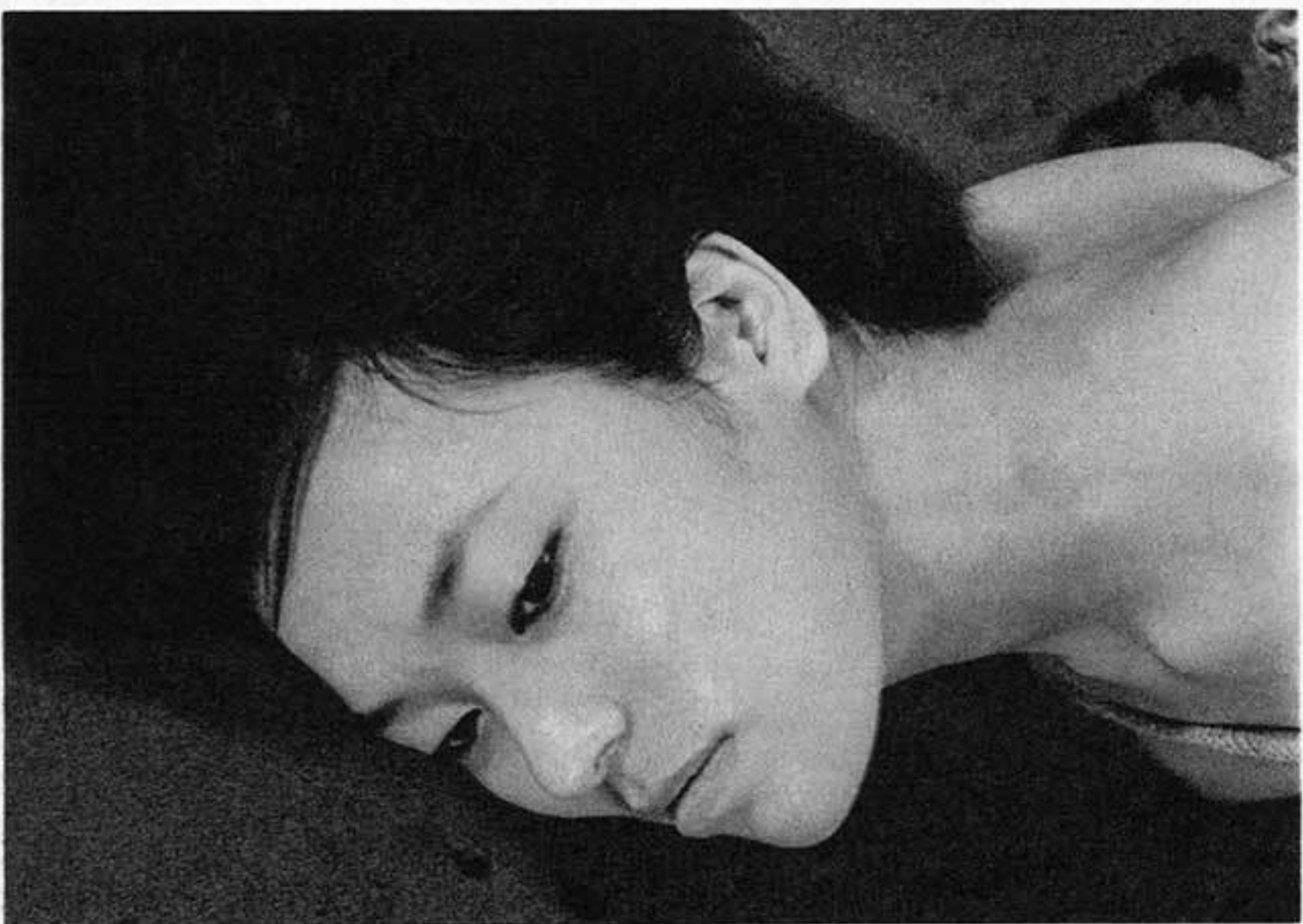


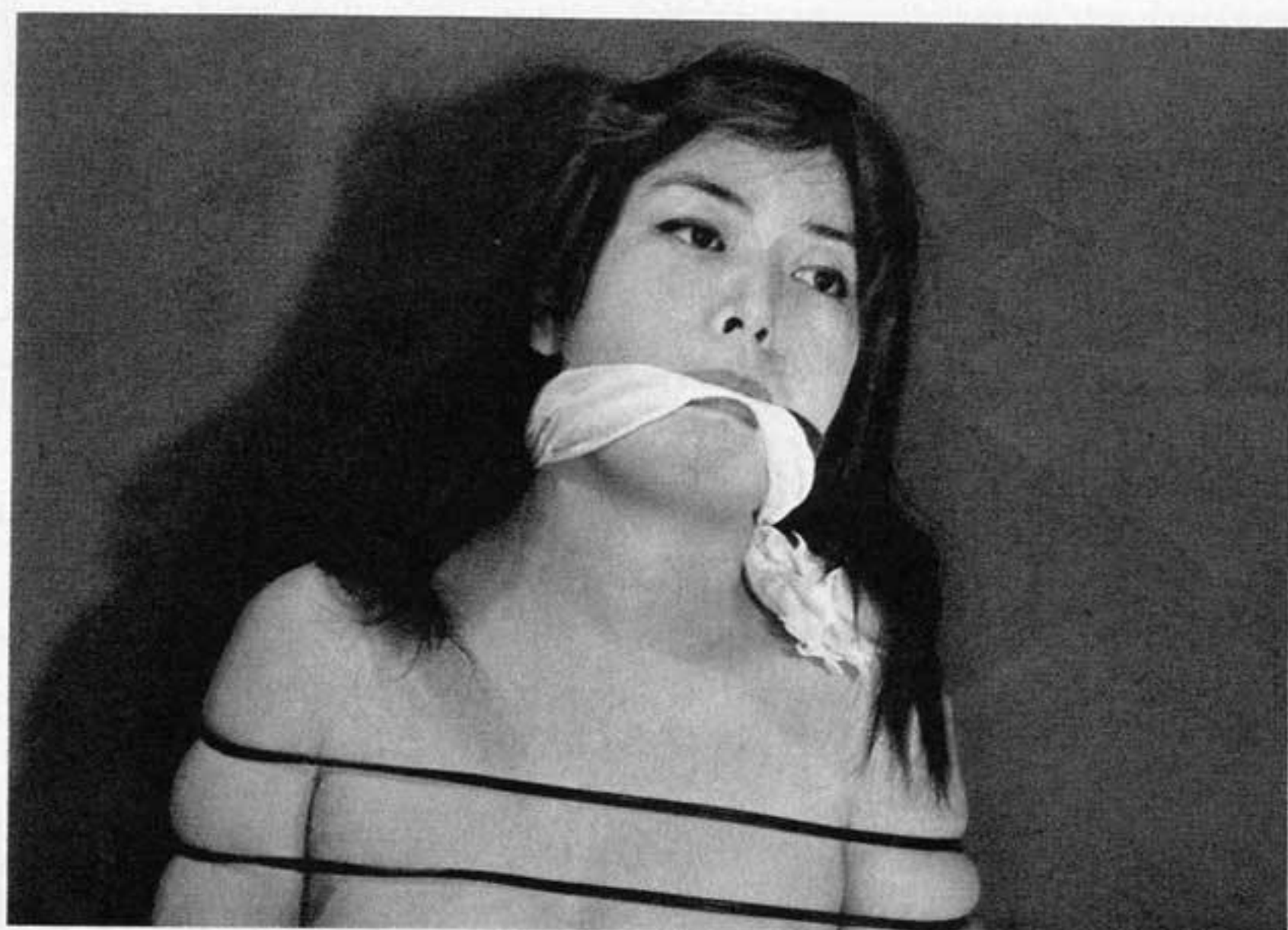


























本誌のことを同人雑誌だと、言う人がよくあります。たしかに從來からも、そういった面がありましたが、最近のようにいろいろと内容に制限を加えざるを得なくなつて、発行部数が激減してきますと、益々そういった感を深くします。

書店にて聞いたところに依りますと、新しい月号が出ると、待っていたとばかり買う人が半分、内容をくりかえし見て、気にいったら買う人が三割、という割合だそうで、固定読者が非常に多いというのを物語っています。

従つて現在の部数がマニヤ雑誌としての固定読者層から推測して最低の線ではないかと考えられます。少くとも、現在の発行部数ぐらゐの同人があつて、確実に落ちていて編集ができれば、どんなに

楽しいだろうかと、空想したりします。

読者からの投稿原稿が非常に多いということ。勿論読者通信もずばぬけて多いということも、他の雑誌には見られない同人雑誌的な傾向ですが、それにも増して、誌上に掲載しない個人的な真面目な通信も、決して少なくないということ。これは、こういう特殊な内容を持つ雑誌のためでしょうか。

本誌が全く開放的な編集方針をとっているということ。いわば八方破れのようなスキだらけなところが、読者にとって身近かに感じられるのでしょうか。安心して一

身上の秘密事項までさらけ出して相談される読者も多いのです。

読者の一人一人が、編集同人になつたようなつもりで、本誌に接して貰えるというところに、魅力もあるし、又反面一つの欠点となつてはいるのですが、本誌のあり方としては、これでいいと思つていきます。それどころか、今後、益々読者の吐息さえ聞えるような親し味のある雑誌にしてゆきたいと考えている位なのです。

幸いに、本誌としては「読者通信」と「奇クサロン」という読者に直結したセクションが非常に好評で、この二つだけは、どんなことがあつても止めてくれるな、否増頁をしてくれ、という要望が多いということ。これは、大変意を強くしているところです。

そのためか、最近では奇クサロンに、といった原稿が比較的多く届いています。私達としても、出来るだけ力のこもつたものにしたいと考え、締切りもギリギリいっぱい遅らせ、新しいものを容れてゆ

きたいと努力しています。

とにかくスキだらけの、八方破れの雑誌なのです。皆様が突然、「今日は——」と云つて顔を出したとしても、一向に不思議ではないといった下町の井戸端会議のような雑誌です。だから浴衣がけでもいいし、フンドシ一丁でも誰も笑う者もいません。一流だとか、大家だとか言つて威張る人もおりません。和氣霽々として機会はほとんどに均等なのです。

胸襟を開いて語り合える共通の広場が、このささやかな小冊子の中に温かく息づいています。決して相手を蔑むことなく、傷つけることなく、相手を尊重すること。を第一義にした紳士淑女の集まりの広場なのです。私はこういった意味で、本誌を同人雑誌として見ることは賛成です。

嘗て、同志的結合という言葉がよく使われたことがあり、たしか読者通信にも散見したように記憶します。本誌がそういった結合の場であるというのではありませんが、従らぬ孤高を誇つて淋しさに耐えているよりは、遠方より来りし友が手を携えて語り合うのも又楽しいではありませんか。

本誌は同人雑誌か

編集子

サロシ楽我記

辻村 隆

(3)

子供にせがまれて陽春の一日、奈良のドリームランドに遊んだ。お伽の国の海賊船の右手に、スリラーシヨック館があるので、子供等がめいめいに遊んでいる間に一寸覗いて見た。子供だましと思つて入ったが仲々――。

とりわけ安達ヶ原の鬼婆の、妊婦逆吊りの場面は凄い。鬼婆の形相、妊婦の姿――それが等身大で仄闇にうかんでいるのだから、思わずウーンと唸った。カメラは準備していったものの、昼間なのでフラッシュは持参しない。残念乍らカメラには納められなかった。その他、さらし首、井戸吊り。向うものでは、フランケンシュタインにドラキュラ、狼男と多士済々、好事家一見の価値ありとお奨めする。

大塚啓子さんを撮る事になって箕田氏と大阪で出逢った時、偶然来合して画家の四馬孝氏とお目に

かかった。四馬氏の美人が大抵瓜実顔で、団令子式の丸ぼちやが少くないですねと云ったら、返事に困っておられた。人皆それぞれ特徴があるが、四馬氏は殊に瓜実顔の美人がお好きらしい。彼のイメーヂの、恋人か愛人が、その様な顔付なのだろうか――談輪風発、いろいろと喋べっているうち、すっかり話にウマが合い、撮影は遂にお流れになってしまった。行きつけの旅館の広い間が塞がっていたのも原因だが、春の一日、同好の士四人でドライブしたのは快かつた。

私の拙作三十九夜物語も、そろそろ終りに近づきつつある。三年有余コッコツと駄作愚作を根よく書き続けて来て、時には思案にくれ、同好異曲でウンザリして、途中で筆を折りかかった時もあったが、編集部の叱咤鞭撻でかろうじて続けさせてもらった。この三年

間可成りの知人を知り、それらの人々と共にカメラを握り、時には夜の巷を彷徨して、ガイドクラブのゆきづりの女性や、チャイナサロンのマゾの女性も撮って来たが三十九夜が終るとカメラ探訪と名付けて、次々と発表して諸賢の御批判を仰ぎたいと思っている。

偶然とはおそろしいものだ。こしばらく音信のなかった竹野ひろ子さんに、事もあろうに、千日前の雑踏するさなかで、バツタリ出くわした。箕田氏と出逢つての帰り、時間も少々あったので、一人でおらりとミナミへ出た。時間は夜の八時頃――大劇の前で「春の踊り」のスクリーンをみるともななく眺め、ゆきかけようとして、その時。大劇の出口から二人連れの男女が出て来て、瞬間パツと顔を見合せてしまった。髪かたちは変れ、まぎれもなき竹野ひろ子さんである。私はハッとしたが、より以上にひろ子さんはドキリとした顔をした。

とも既に夫か――。竹野ひろ子さんにして見れば、私の存在は、彼女にとって、過去唯一の肌を見せた男性だったかも知れない。行きずりを淋しく思ったが、私は振り返る気にもなれなかった。「今晚は――」と云う反応のあった以上、他人の空似ではない。しかし、今更後を追ったとて彼女にどうしようもない私ではないか――。ヌメヌメしたゴムの感触を好んだ彼女――。古川裕子の文に陶醉していた彼女。そして私は、今、彼女が大劇から出て来た時、まぎれもなく、濃緑のレインコートを着ていた事に気付いた。

その日、雨は既に午後三時頃に上っていたが、あながちひろ子さんのつけていたレインコートは、雨のせいばかりでなさそうに思えたが――、それは私の思い過ぎだったろうか――。とあれ、竹野ひろ子さん、相手が恋人？ であるなら、よき半生を過し給え。



「生首フォト」礼讃

剣持逸人

新宮明夫氏の生首フォトに端を発し、水野弘氏、ついで五月号で辻村隆氏の生首フォトを誌上で拝見し、私も思い切って生首フォトを送るふんぎりをつけました。

性来の筆不精で、ついぞ読者通信にもお便りしたことありませんが、私も数年以前より、生首や処刑に凄く興味を覚え、今年より秘かに自宅で、現在同棲中の内縁の妻を対象に、相当撮りだめました。DPEに幸い私の気の許せる友があり、すべて友人に依頼しておりましたが、段々と撮るものに綿密さを加えて行きますので、今度思い切って引伸機を始め、DPE一切の道具をボーナスで買いました。

妻は二十八才で、水商売に出ておりましたが、ふとした事で私と深い仲になり、両親の反対もあって、現在内縁の儘やむなく同棲生

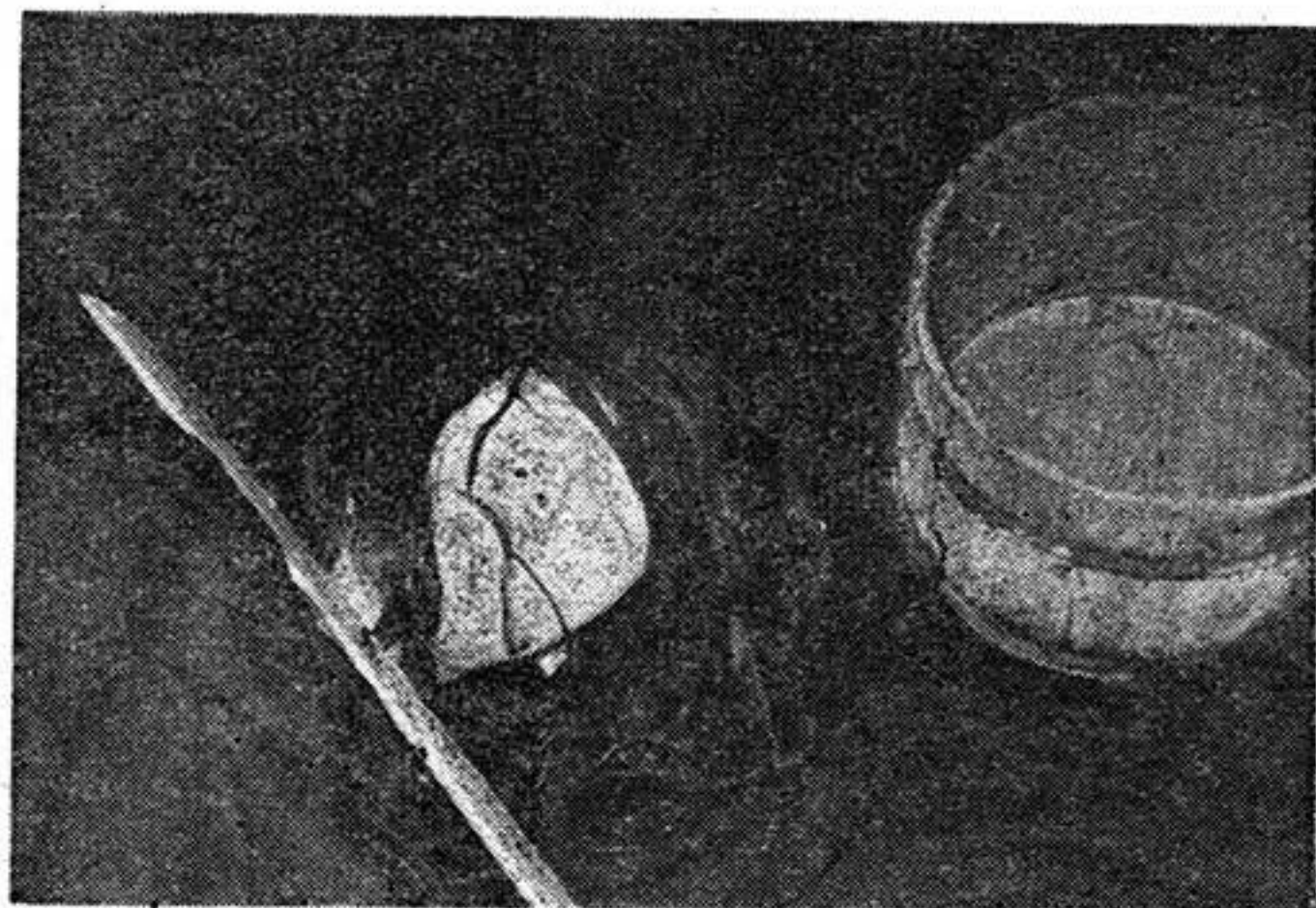
活をつづけております。私が買ってくる奇巧を時々見せますが、以前勤めていた店にも、かなりサジストの客もあって、こうした事に對しては意外に平気で、私でよかったら撮ってもいいと笑って言いました。その点協力的なので、こそそやる必要もなく誠にうってつけです。しかし生首シーンには妻も最初は非常に反対したのですが、一枚撮る度に百円渡す約束で渋々納得させました。妻の髪を洗って、油をつけずバサバサにして、黒幕で首より下をカットし、青いドローランで眼隈をつくらせて、口唇に紅をといて垂らすと、見違える様な凄惨な顔に変貌しました。私も始めて生首を撮るので、期待と疼くような歡びに胸をドキドキさせ、夢中で十数枚許りシャッターを左右前後からきっていました。日曜日など会社の休

みを利用して斬首のさらし台を作成し、又四帖半の中央が、掘りごたつにしてあるので、ここへ妻の体を入れ、むしろを敷いて、そのむしろの中央を首の寸法だけ丸く切りとり、後半に縦目にきりめを入れて首をさし込ませると、まるで、首がたたみに転がったように写ります。そこへ、首桶と大刀を置くと、さながら斬首そっくりに見えます。

同封した生首フォト五葉のうち、貴社で適当と思われるものは、御掲載なされても差支え御座いません。新しいフォトが撮れましたら、次回より生首シリーズとして、順次、お送りしますから取捨選択して下さい。

尚お願いとして、貴社を通じ新宮氏、辻村氏の生首フォト、若しよろしければ御交換下されば、生首マニアとして、私の喜び、これに過ぎるものはないのですが。

生首や処刑の前提条件として、囚衣による緊縛フォトや、引廻しや、晒しのフォトもあります、



これは余りお目にかかる程のものではなく、見直して見て、余りも非常に単純且つ粗雑で、我乍ら拙いものだと思います。

唯、撮る度に妻に支払うマネーが馬鹿にならず、三五ミリ一本とると三、六〇〇円となると安サラーマンの私にとって、少々痛い負担です。何かいい方法はないものでしょうか。



最近の縛り映画展望

東山映史

最近の女縛りの圧巻は、何とい
っても、岸田今日子の「砂の女」
だ。

堀田善衛の原作から勅使原宏が
演出。岸田今日子、岡田英次主演
の独立プロ作品。

砂丘へ昆虫採集に出掛けた高校
の教師が砂丘の砂の中で一人で住
んでいる女のトリコとなる。砂の
上に出るには、縄バシゴがなけれ
ば脱出できない。

彼は何とか女からのがれようと
努力する。女はどうしても離さな
い。それで、ついに女をねじ伏せ

猿ぐつわをかませ、手足をしぼっ
て脱出しようとする。

この猿ぐつわ、手足の縛りが中
々にリアルである。まず口の中に
つめものをして、その上からタオ
ルできつく縛りつける。そして、
手を後手に縛り、足も紐でしばっ
て畳の上どころがしておく。脱出
できないとわかってても、彼女の手
足をほどこいてやらない。

演技派の岸田今日子だけに、そ
の苦痛を訴える目が中々にいい。
そして、ついに小用を訴える彼女
のために、彼は手足をほどこいてや

る。よほどきつく、こたえたのか
彼女は大いに弱っている感じもよ
く出ていた。

松竹作品、井上梅次監督の「犯
罪のメロディ」で、珍らしく桑野
みゆきが縛られる。

恋人をしたって田舎から出てき
た彼女が、恋人のために人質とな
り、捕えられる。そして後手に縛
られる。足まで縛られる。胸許も
二重にきっちり縛られているのが
迫力があつた。

いま顔が山本富士子に似ている
と、お色気映画で売出している松
井康子―牧和子―が、悪の情婦で
出演。裏切りがバレて捕えられる
が、ゴウ問のあとのムチアトなど
を見せて殺され姿を見せていた。
ゴウ問のシーンを見せてほしかっ
た。

お色気作品といえ、大蔵映画
の作品がなかなかいす。

「女の手形」など、外人のグラマ
ー女優を出演させて、大いに色っ
ぱいところを見せているが、女の
顔の上に水をそそぎかける水責め
シーンなどすごい。

「女の決斗」では、女同志のリン
チでひっぱたいたり荒っぽい。

近く東宝と日活で、田村泰次郎
の「肉体の門」が映画化されるの

も楽しみで、東宝は団令子のボル
ネオ・マヤ、日活ははじめ浅丘ル
リ子のマヤだったが、原作を読ん
で「自分の役柄ではない」と、浅
丘ルリ子はおりた。たれがマヤに
なるか、また長襦袢一枚で柱にし
ばりつけられて、ムチ打たれる町
子は、だれがやるのか面白い。

大映の「黒シリーズ」の「黒の
挑戦者」で、縛りでないが、男を
馬にしたてて、その上に女がのり
かけ競馬をやるシーンが、ショッ
キングだった。

時代劇では、女の縛りではない
が東映の「黒い爪」のゴウ問シー
ンが物凄かった。三人の姉妹が殺
され、四人の男が捕えられ、ゴウ
問をうける。サカサ吊りをはじめ
石抱き、ムチ打ちなどのシーンを
見せたがすぎまじいものだった。

洋画もすごいものが多い。「悲
しい奴」は、女をはだかにして、
吊り下げムチ打ちする。その場所
が先祖がこしらえた地下室で、ゴ
ウ問道具がずらりと並んでいる。

手かせ、足かせ、人体引きのば
し機など見るだけでも、血の気の
よだつものばかりだ。

「白い肌に狂う鞭」など洋の東西
を問わず、サジスチックなものが
喜ばれているのだろうか。

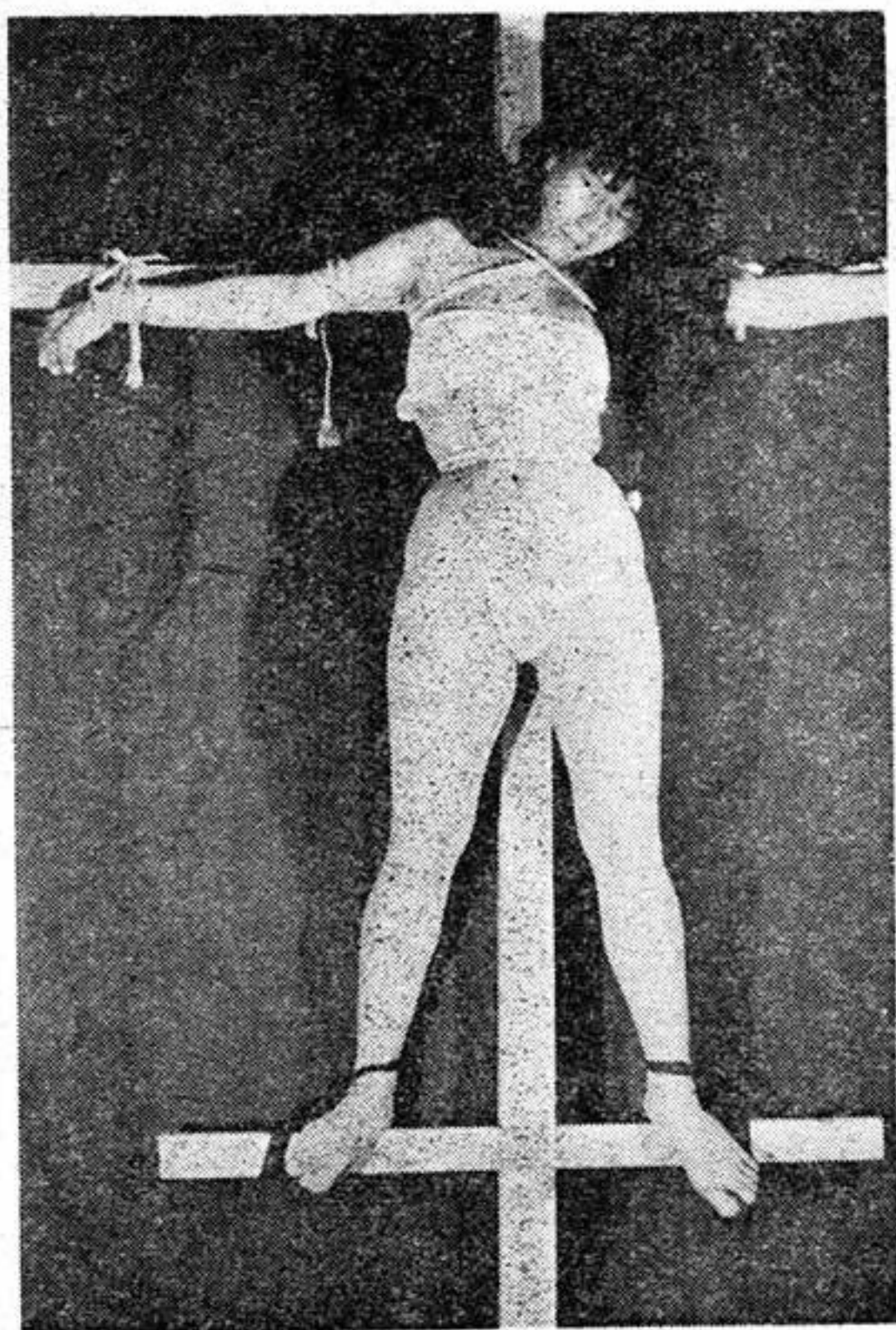
「夫婦のSMプレー写真」

新宮 明 夫

今月は夫婦プレー写真として、磔刑ものを二枚、御覧に入れたいと思います。

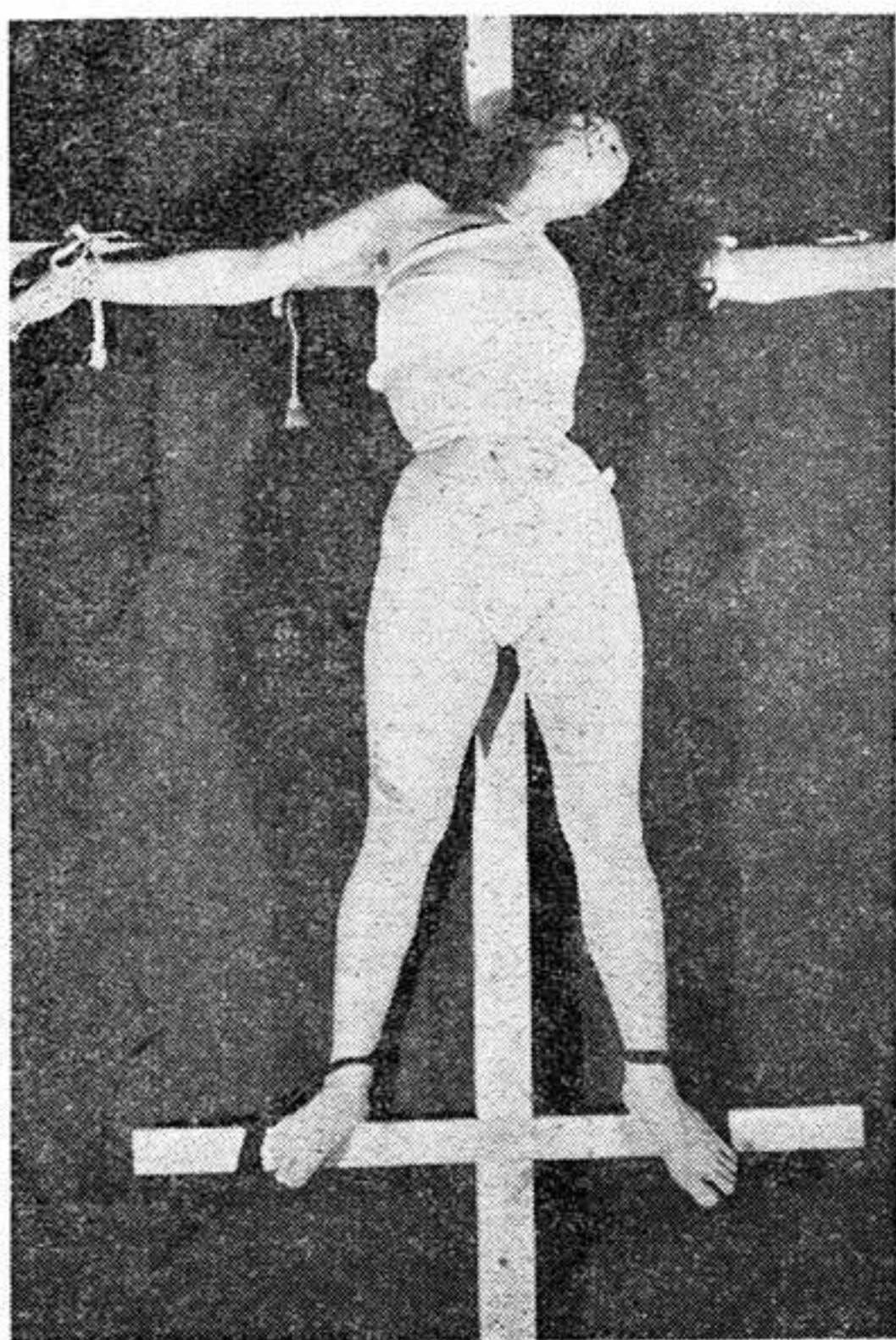
ただし妻は大塚嬢のようにスタイルが良くありませんし、私の技術も至ってまずいので、御批評を仰ぐというのも、おこがましい次第です。

勿論、磔刑をテーマにしてフィルム一本を消費したのですが、前回の斬首ものと同様に妻を全裸にしての撮影ですから、全部をサロンに発表することができません。この二枚は特にサロンに発表して同好諸兄弟の御批判を仰ぐために、着衣させて撮ったものです。



撮影は室内ですから、十字架を設置するのに相当骨を折り、妻を固定するにも苦勞しました。一本のフィルムを写すについては、十字縛り、開股大字縛り、槍での刺突、首筋への止め刺し、死体晒し等を組み入れた簡単なストーリー

を組み、一こま一こまの下絵を画き、それに基いて撮影したのですが、約三時間近くを要し撮影の終わった時には、二人とも完全にグロッキー状態でした。皆様の御意見や御批評を承れば幸甚です。



奇クサロン向原稿募集

○皆さまの共通の広場としてのこのサロンは、どなたでも叩けば開かれる、楽しくて身近かな集いにしたいと思います。マニア通信、短信、文通、呼びかけ

写真、絵など、何んでも結構です。から、どしどしお寄せ下さるようお待ちしております。○採用篇には、編集部保有の特写真あるいは、雑誌を贈呈いたします。奮て御投稿をお願いします。

Mフोट・モデル志望



(喜多利一)

謹啓、Mフोट・モデルに是非採用して頂きたく、この手紙を記しております。如何なる命にも喜んで応じますことを御約束します。

1、女性又は男性を対象とするMモデル。

2、男性ヌードモデル

3、女装モデル

以上全部に応募いたします。何れも私の最も好むものです。勿論顔面の隠蔽を望みませんし、出演

時間はいつでも応じられます。年齢四十二才。職業会社役員。身長一米七十釐。体重七十斤。「夜の社長と女秘書」——そんなテーマで、女のドレイにされる社長。足なめから始まり、なめ方が悪いと、けとばされ、口の中にぬいだばかりのパンティが押し込まれ、顔面にぴったりとすわられる。そのすわったままで、ローソクのローをたらされたり、竹の棒でビシビシ打たれる……。

いつの間にか、社長は秘書のメンスバンドをはかされ、それ一枚の姿である。身動きできぬよう、しばられた社長のメンスバンドのボタンが外され、イルリガートルが入れられる。

油汗でシャツはぬれ、皮バンドでぶたれ、太いローソクが、顔、乳房、臍等に立てられ、内股にローがポタポタとたらされる。

痛さや熱さなど感じない苦しさ(うれしさ)がつづき、いつ果てるとも知れない。

翌朝、秘書の命令で便器をささげているよう云われる。(一米程の台が二つあり、それにまたがついている秘書の前に便器を持っていき、下から見上げながら保持している)

「これが、豚のお前に対する朝食で。温いうちにおたべ!」と、便器をつき出される——。

といったのが、私の好みの一端なのです。相手役はどなたでも、けっこう。年齢、容貌の美醜等問題ではありません。女性が二人でも三人でもけっこうです。

男性ヌード。如何なるポーズにも応じます。自由にとって下さってけっこうです。但し筋肉質ではありません。

閑人漫語

S 生

○臨月の妊婦のあの異常なまでに膨らんだ腹部に対して、強い執着を持っている者は多い。案外そんなことに関心を持っていないと思っている者も、一度妊婦のフोटを見たなら、その異常美に憑かれてしまうというケースがある。

○妊婦マニヤは少なくないが、肝腎の妊婦モデルがおいそれと見つからないのが、ますます妊婦フोटの稀少価値を高めている。幸いにして本誌では、読者の有志が次々と名のりを挙げてくれるので、いささかマニヤの渴をいやしている実情である。素晴らしい妊婦モデルの新登場をマニヤと共に、大いに期待している。

○必ずしも妊婦フोटに限らないが、実物とフोटとの間には大変な距りがあることが多い。例えば、写真で素晴らしいと感心して、さて、実物を鑑賞して案外つまらないことがある。もっとも写真で気に入ったら、実物を見たいというのが人情であるが——。



女装モデル。洋装を好みます。特に下着姿、黒のストッキング、ガーターベルト、メンスバンド、ブラジャー、コルセット、うすいゴムの強いパンティ、ストリップパの衣裳等がすきですし、殆ど持っております。

現在ほしいものは、チャイナ・ドレス、海水着、ハイヒール、かつら（洋髪）等です。女装してはいじめられたり、スカートをまくられ、地下足袋をはき汗くさい労務者は自由にされ数時間せめられ通し（その間ヒイヒイ泣き続け）に

なったことがあります。正に一人を玩具にした犬畜生のプレーでしたが、シュミーズは破れ、パンティははぎとられ、かろうじてついていたのは、ブラジャーのみでした。最もうれしかったのは、終始女性として扱ってくれたことで、今一度と願う気持ちが、まだ多分にあります。

以上で大体お分り願えたと思いますが、やるからには最高のつもりものでない真のプレーが希望です。写真の迫力も全然違うでしょうし、ショーともなれば問題では

ありません。ここに書いたのは、空想ではありません。現実なのです。如何る要求にも応じます。吃驚したり致しません。私より奇抜なアイデアでせめて下さい。地上最高のプレーが希望です。

終りに女性（前記の通り何等注文はないのですが）の好みを参考までに申し上げますと、グラマリーな人、年齢はむしろ三十代で、水商売の方。例えば大塚啓子（ゼツタイです）絹川文代。水本茂美。東浦ひかる。五月亜紀子。愛川悦子の諸嬢、等は素晴らしい。

○実物といえ、文通をしていて回を重ねていると、一度逢ってみたいと思うのも、極めて自然のなりゆきである。然し実際は逢ってみて、文通していたときのイメージがこわされるときの方が多いのではなからうか。

○殊に文通の相手が異性である場合は、陰陽相曳くの理に従って、どうしても逢ってみたいという情の湧くのは当然だろう。或は文通というのを方便に、真の目的がそちらの方にあるという場合もあるだろう。

私の「生首」作品

水野 弘

先般、私のSMプレー女の生首晒し首のフォトを奇クサロンに投稿しましたが、何せ未熟な腕ですので皆様の御期待に副う事が出来ず、残念に思っております。トリックの関係上どうしても黒バックを撮影の際使用しますので印刷にした場合、不鮮明になると思います。黒田寿様、佐出須登様の御意見有難うございました。5月号サ

ロンの楽我記に掲載されました辻村隆様、私の生首フォトについての御意見嬉しく思います。貴方の晒し首はさすがは辻村さんと思わずうなりました。

責め道具の前に晒らされている女の生首、こうした写真でいう「情感」の出た作品は、こうした種類の写真では中々至難だと思えます。

私も今後こうした優れた作品を撮りたいと思っております。今月も「女の生首」フォトを投稿します。同好の諸兄の御批判を賜れば幸いです。



「私の撮ったS子」

〔松 永 景 子〕

奇ク益々御繁栄の程お喜び申し上げます。三年許り前より秘かに奇クを求め、熱烈な愛読者なのですが、同性の方の撮られたフोटがないのは、どうしたことでしょうか。

私は現在S子と二人、東淀川の小さなアパートで同居しております。私達二人の間柄はどう云うものかは、御想像にお任せします。S子は二十一才、私は二十四才二人とも未だに独身で、幸か不幸か男性は知りません。二人とも故郷は愛媛県で、S子は私の高校の後輩で、大阪で働いている私を頼って、去年の九月上阪して参ったのです。お互いの家も近くですが、学生時代から、私達は既に愛情を交換しておりました。S子は私の言うことなら何でも素直にき

いてくれます。

私の不在の時、机の抽出しに蔵っておいた、奇クをS子が読んだのを、私は夕方勤めから帰ってきで知りました。号数の位置が変っていたからです。純情なS子はその夜、何かしらオドオドしていました。私達はどんな秘密でも隠さず話し合っていました。この本のことだけは流石に、S子に云いそびれていたのです。若しこんな本を読んで居ることをS子に知られて、S子に嫌われたらと、云う不安が心の底にあったからかも知れません。

でも、私の秘密を何時までもS子に隠しておくのは、反って変な誤解を招くかも知れないと思いました。私はおそろのおそろ、抽出から雑誌をとり出すと、度胸をすえ

てS子に申しました。

「S子、こんな変った雑誌あるのよ。読んで見ない？ 世の中の色々のウラが分って面白いわ。ねえ……」

S子は顔を真赤にして、もじもじしていました。小さい声で、「おねえさまの留守に、私、内緒でそっと見ましたの、御免なさいネ」

私はその様な素直なS子が、たまらなくいいじらしくて、喰べてしまいたい程好きなのです。

私は急激に心のたかぶるのを覚えました。この可愛いS子を、愛する余り縛りたい衝動にかられ出したのです。私はうわ言の様に思わず呟やいていました。

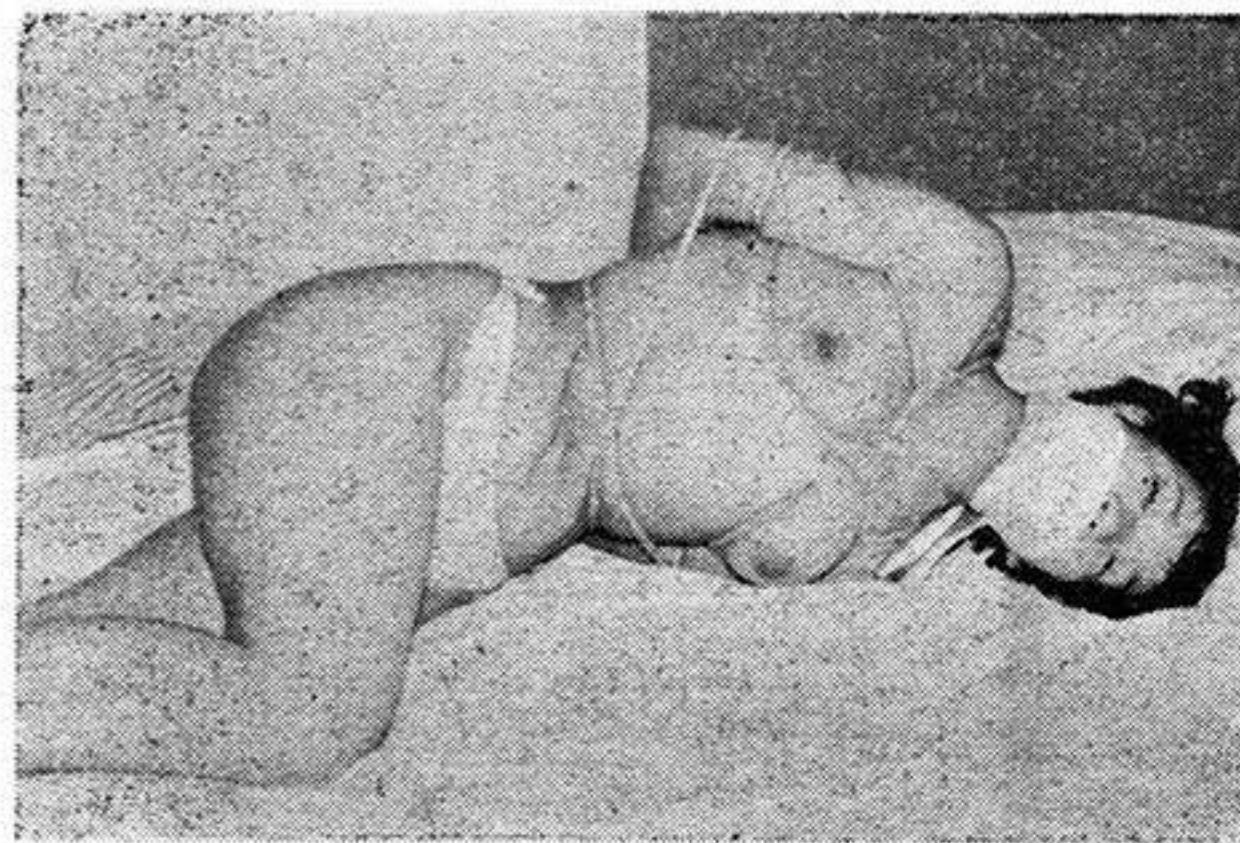
「私、私……S子を縛って、滅茶苦茶に抱きしめて可愛がってあげたくなつてね。ねえ、縛らして——、S子の綺麗な肌をカメラで永久にのこさせて……」

S子はおどおどとして、私の急変ぶりに、ふるえていました。が、かすかにうなづきました。二人でお金を出し合って買ったオリンパスのカメラが、待ち兼ねるように壁にぶら下っており

本日送りましたフィルムのも、最後の六枚はS子を写したものです。が、外に現像する処も知りませんので、どうかよろしくお願いいたします。

S子を説き伏せて裸にしあり合せの縄で後手に縛りましたが、ほんの初歩です。ライトも充分ではありませんし、その夜は突然でしたので、有りあわせの電球を数個つけて、絞りを二・八に解放し、1/30

(私の撮ったS子の像)



で撮りました。フィルムはSSです。密着でもよろしう御座いますから、若しとれていたら御恵送下さいませ。尚それ以外のフィルムは焼付は、最寄りの写真店へ頼みますから結構で御座います。うま

くとれていましたら、これに自信を得て、ライトも買い求め、ゆっくり、色々のポーズを撮って見たいと思います。S子も凄く期待しておりますので、勝手ですが、なるべく早くお願いします。私はど

ちらかと言つと、S子を縛りたい慾望が強いのですが、S子が若し私を縛りたいと言ふのなら、私もS子に縛られて見たい気持があります。唯、私は背は高いのですが体はやせていて、緊縛のモデルと

しては我乍ら、魅力がないと思います。S子は一六二センチ、五六キロで、それに私の眼から見ても美人の部類に属すると思います。S子の心境——それを書きますと、又長々となりますので、今日は、これで失礼致します。

「8ミリ緊縛行」

(第二回)

名古屋 登映治

小生第一回の緊縛フィルム『たうつ女体』早速折返し、懇切なる御批評と共に御返送下さいまして、尚貴誌特写の、奇クにも未発表の緊縛フォト御送付載き感謝しております。

ていましたので、これ幸いと、相当の時間をかけ、僅か三本(一五〇フィート)のフィルムを三回に亘って撮りました。フィルムはFジのASA五〇です。この『縄と女と花』は全部野外で撮影してありますので、絞り八一—一ぐらいに絞りました。

本日この原稿と一緒に送りましたのは、小生の第二回作品『縄と女と花』好、モノクローム、一五〇フィートです。八ミリ同好の方もあると思われますので簡単に内容を説明しますと、

モデルは、結婚前小生と一年半許り同棲しておりました女で、撮影当時二十一才でした。

小生の趣味を承知で、又、彼女自身幾分被虐的な感情も持ち合せ

場所の小生宅裏の花壇で、恰度いい工合にいろいろの花が咲いており、カラーなら随分綺麗なのですが、天然色でなくて残念です。フィルムでも分る通り、隣家との境がブロック塀ですので、覗かれる恐れもなく、近くに高い家もありませんので、この五十坪近い裏庭で、全裸で緊縛も、案外安心

して行えるわけです。母親は義兄宅へ所用をつくって行ってもらい、彼女と二人切りになって始めました。フィルム現像の都合で、ストリップのつける様な、小さいバタフライを着用し、第一目目は股縛りで、花の中をよたよたと歩む姿を主にとり、第二目目は数コマづつとって、花の中にうずくまる女に、縄が徐々にしめつけて行く。まるで魔法の様なフィルムをとり、第三目目の庭の真中の、あんずの樹の太い枝から、両足を一ヶ所で縛った猪吊りにして、彼女の体を力を入れて押し、高い梢から長々と掛けた縄で、左右に大きく流動し、揺れる女体を、パンし乍ら、カメラで追ったのです。画面でも分る通り、可成り手足の縛りが強かったのか、揺れる度に一層しめつけて、彼女は大声を立て、苦しそうな表情をしました。が、カメラは、その苦悶を刻明に

大寫しで捉えている筈です。

筋らしい筋はありませんが、どうしても、小生と彼女と二人だけでとるとなると、小生が画面に入るわけにも行かず、こんなものでしか仕方ありませんでした。

編集部で若し可能でしたら、八ミリのフィルムを反転現像して拡大し、小生のフィルムの数カットを掲載していただければいいと思います。が、無理でしょうか。

現在とりだめたこれらのフィルムを、もう一度編集し直して、ストーリーの一部分として使う予定です。が、その節は改めて御批判願うつもりです。

八ミリ愛好の方おられましたら、奇ク編集部を通じて是非交歓し、奇ク八ミリ愛好会を結成したいと思ふのですが如何でしょうか。

次回には、処刑を主にした八ミリの送るつもりです。どうぞよろしく。

鑑賞用臨月妊婦

瀬沼四郎



芳野眉美氏にならって、偽作羽村京子の日記という形で書いてみる――

×月×日 うちのお風呂が修繕中なので、久しぶりにお風呂屋さんに行ってみる。もう四五日で産まれそうだという若い妊婦と一緒にになった。二十一歳で初産だということだが、まだ少女らしさの抜けていないあどけない顔からは、首から下の実にグロテスクに変容した成熟した女体の有様は、想像もできないことだろう。子供を腹に孕んでいる若い女の赤裸々なハダカの姿などというものは、とてもではないが、世の男性方には見せられるシロモノではないと思う。最近越して来たサラリーマンの奥さんで、美津子さんと言う。若くてスベスベした美しい肌の持ち主だ。

浴場で世間話をしながらゆっくり観察をして、脱衣場にあがってから、他に浴客がほとんどいないのを幸いに、鏡の前でもう一度十分に鑑賞させてもらう。面白がってむしろ誇らしげにポーズをとって見せてくれる彼女に、わたしが特別の嗜好の持ち主であることを覚られまいとして、平氣にふるまうのが苦痛なくらいだった。努め

てふざけているように装おいながら、ふと苦しくなつて目のやり場に困ってしまう。

はち切れんばかりに丸々と大きく膨れ上つて、前方にグツと突出した臨月の妊婦の見事なオナカは、まったくすばらしいの一語に尽きる。すごく大きなマクワウリのようだ。スイカ腹という形容もあるが、西瓜といえば英語ではウォーター・メロン Water-melon、文字通り訳せば「水瓜」である。羊水の中に胎児を浮かべた、「水腹」にとつては「水瓜」の方がふさわしいと思う。ついでに言えば西瓜はウリ科の植物ではないそうだ。

その丸い腹の上に転がすようにして、先の方が真っ黒に色づいて、完全に熟れて柔かくなった大きな熟柿のようなオッパイが二つふるえている。妊娠したために目立って容積を増し、充実して弾力を加えたずっしりと重い乳房だ。美津子さんは、そのかわいらしい顔にも似ず、すばらしい大きな乳房の持ち主だ。わたしはまぶしいような目をして、妊娠している彼女の裸形を眺める。「すごく大きなオナカ！赤ちゃんが二つ入っているみたい！」

「アライやだ！そんなんじゃないわよ！」

と言いながら、自分のオナカの大きさを楽しんでいるみたい。体を動かしていろいろなポーズを鏡にうつして遊んでいる。腹の中の赤ちゃんはひっきりなしに胎動しているらしく、丸い腹がピクピクと動きつづけている。

×月×日 昨日お風呂屋さんで見た、美津子さんの妊娠したハダカの姿について、若い人はやはり体がピチピチしてて美しいな、と思う。臨月のオナカをマクワウリに、妊娠して膨大したオッパイを熟柿にたとえたが、女の体って、ある意味では果物のようなものだと思う。英語でフルーツ Fruit といえは果物の他に、子供、子孫という意味があるが the fruit of the womb (子宮の果実) といえはそのまま子供のことだ。子宮になるこのみが人間の子供だとすると、妊婦のからだはクダモノをならせるせのようなものかも知れない。新鮮な、食欲をそそるクダモノに、女体がたとえられることも決して不思議ではない。女の畑に男が種をまくというような機能の面ばかり見た殺風景な表現よりも、オッパイはリンゴ(熟した柿



女の首級 前川成雄

?) ヒップは桃というような比喻の方がよほどロマンチックで実感的だ。食べてしまいたいほど、かわいいたか、食べられてしまいたいという感じ方もピッタリだと思う。おいしい新鮮な女体、それに実がみのって次の世代へ繁殖するということも自然に思える。

動物の繁殖と、植物のそれとは、一種のアナロジーがあるので、はなかるうか。ところでクダモノというとき、マクワウリ(西瓜)にしても熟柿、リンゴ、美しい白

人間の卵はエビなんかとはちがって、たった一個だし、腹の中で大きくなるまで育てられる。成熟した女性の体重を四十五キロ、新生児の体重を三キロとすれば十五分の一のものをおナカに入れていくわけだ。超強大児ともなれば、五キロぐらいあるとして、十分の一以上になる。自分の肉体が他の生きものの容器になっているという感じは、女性独得のものだ。女は、簡単に孕ませられる動物、いつでも機会さえあれば、孕ませら

れる準備のできた状態にある動物なのだ、ということをも、わたしは感じてしまう。

——京子さんの口調をまねて、成功したか、どうか、読者の判断に任せる外はない。小生としては、この美津子という若く美しい臨月の妊婦を、丸裸の姿でカメラの前に立たせたかったと思うだけである。ヌード・ショウの舞台で、大ぜいの観客の見せ物にならせたかっただけである。

武智鉄二氏が

「谷崎もの」製作

武智カブキ、ヌード能、映画演出、出演と、話題の多い武智鉄二氏が、こんどは長編劇映画をつくることになった。

原作は谷崎潤一郎の大正末期の作品「白日夢」で、約一時間半の現代もの。企画、製作、脚本、監督まで一手に担当する。出演者は谷崎氏が折り紙をつけたという日伊混血児の主演路加奈子のはか未定。テーマはセックス問題を中心としたもので、社会的な制約の中での人間性の崩壊。四分の三は

だかのシーンやベッド・シーンで前衛的な手法もかなり取り入れるという。五月早々クランクインし一カ月でアップする予定。

「白日夢」で路加奈子抜擢

武智鉄二氏独立後の第一作「白日夢」で重要な役にスカウトされた日伊混血児の路加奈子が大いに期待されている。今年二十才の彼女は、本名岩田レナ。イタリヤ人を父に、日本人の母との間に生れた混血児。今まで日本テレビやNETなどのテレビに出演していたが映画の主演をするのは、今度が初めて——。ハダカなんかヘッチャラと大いに張り切っている。



本誌4・5月号の迷評

佐藤耕作

〔4月号〕

梨花さんの素晴らしさが抜群です。人里離れた「物置小屋の責め」は、まだまだ序盤です。責道具は小屋の中に、いくらでも転っています。吊るされた石は、次第に大きく重い石に取り替えられます。肌が汗に光り剥き出しにされた肩で切なく喘ぐ頃には、彼女は吊るされていくでしょう。足は素足の方が良く、左下の白っぽいものはカットすべきでした。

彼女は又、美しい「光と影の双曲線」を見せています。ギッチリと肌に喰い込む縛りしめの中で、彼女は次の責めを待っています。肌に残る縄目の跡が、責めの長さを物語っています。彼女の表情が、

これから続く責めを暗示しています。

「責め絵のある部屋」で美女を苛めるのは私の夢です。近づく私に大塚さんは、只一つ自由な脚をバタつかせて抵抗するでしょうが、それははかない抵抗です。後は壁の責め絵を参考に、ゆっくり責めれば足りるのです。

左頁下段が他の三葉に比し自然で、すっきりと大塚さんの美しさを表しています。「黒光りする那智石」の上に彼女の体を横たえまようが、勿論縄は解かれませんが、「法悦境の縄プレイ」関谷夫人のムッチリした肉体の美しさは出ていますが、迫力に欠けます。

「猿ぐつわ」をかけられた遠藤さんは、とても可愛い。

口絵「オランウータンの檻」に縛られたこの美しい猛獣使に受けた鞭の恨みをオランウータンは忘れているようです。これからどんな残忍な復讐が彼女に加えられるのでしょうか。印刷の故か、肌の美しさや革靴の艶が全く出ていません。

「ドミナとスレイブの部屋」は外国誌の転載でしょうが、美しさが全くありません。

「奇譚三十九夜」物語の第七十七話の奇譚百人一首、興味深く拝見しました。「花と蛇」は一気に読みました。Sの私を充分満足させる小説です。欲を云えば一回分をもっと長くし、挿絵を四馬孝、畔亭数久両氏又はP一七〇P一七四の方に受持って頂きたいのです。「花と蛇」の場面集とも云うべき連続フォト作成の提案をなされた読者通信欄の平岡洋平氏の意見に賛成です。

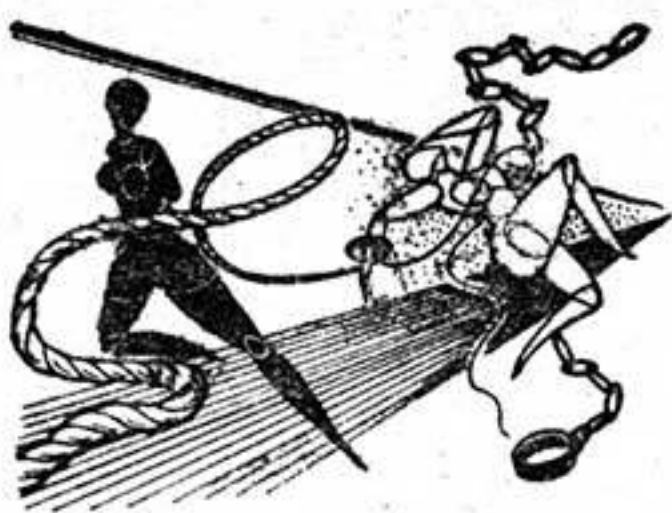
「十三人の女死刑囚」ではデボラの受ける刑がもの凄いのものです。然し結局殺されてしまうのですね。そこが処刑マニアとSとの違いでしょうか、私は捕えた美女を決して殺しません。私の島（サド島と呼んでいます）では、多くの美女が日夜責め苛められています。それが、どんなに残酷なものかは、後日お話しする機会があるかと思っています。

ここで最も重い刑は、死なせないことです。生存と苦痛に必要な機関を生理液と共に瓶詰にして、永久に生かして苦しめるのです。これが私の夢です。

〔5月号〕

表と裏の表紙の素晴らしさ。又新たに責めを開拓した喜びです。グラビヤのZOOはやはり梨花さんです。「森の中の美刑」は、力を入れた爪先が哀感を誘います。顔が陰になったのは惜しい。「廊下にさらす生贄」は久々に会心の作です。典雅な美しさのある格調高い作品です。他は、恐ろしい程、締め上げられた「柔肌のくびれと腰巻」を除いては、平凡で写真仕上げの悪いものばかりです。

四馬孝氏の口絵は「簞笥の鑑応



続

世界残酷物語

より

中屋敷 真

先日、ヤコベッティ監督の「続世界残酷物語」を見たが、一寸面白い場面があったので、書いてみる。他の諸兄も興味を持たれた方があるのではないかと思われるが私には、その中「アメリカ・スリラー小説の表紙写真の撮影風景」が特に感銘が深く非常に参考ともなった。

どぎつい表紙で中身をカバーしようとして、ショッキングな場面

めが愉しみです。そばに竹箒も転っています。

団鬼六の「S小説作法」に共感します。中でも挿絵の件は、本誌の全作品に云えることです。それから「えげつなく責めすぎ」でも出来るだけカットしないで下さ

い。

佐土良志氏の、「花と蛇に期待する」中の一から七迄賛成です。でもやはり美津子も桂子も、容赦なく苛めてほしいのです。

「花と蛇」は、何回もくり返し読みました。一点の非の打ちどころ

様の吸盤付の矢を立て、血のりを撒き散らして衣裳を閉じ、背中の方も同じ様な矢先を立てて、再びチャップをまくと、矢で射抜かれた感じになる。短刀も同じように胸元へグサリといった按配。

胸を斬り裂かれ、青竜刀をつけたままのグラマー。胸から背へ射抜かれて、矢を突き立てたままの美女。巾広い短刀を胸先へ突き立てられた美女、いずれも血まみれのまま(?)控室で悪役の男達と食事と共にしたり、談笑したりしているのも一寸乙である。

いよいよ撮影場面だが、これはコミカルに描写されている。コマ落して写しているの、昔の映画の様にチョコチョコと動く。

以前の殺し屋と斬られ役のモデルが先ず出てくる。カメラ、ライト準備完了。ぐっとのけぞって苦悶の表情を大いに出してパチリ。忽ち元の表情、姿勢に戻って、バ

がありません。カットされたのかも知れませんが、京子の「お艶剃り」のシーンに期待しています。8ミリ撮影された数々の屈辱的な姿を彼女達に解説させたら如何でしょうか。

(4・20)

タバタカメラを片づけるといった具合。曰く「ハレムの惨劇」「ドラキュラは生きていた」「好色ロビンフッド」「モデルと殺人鬼」といったどぎつい題名で、次々に静止した状態のカットで紹介される。この中で最もよかったのは、「好色ロビンフッド」中世風の貴婦人が、宮殿の一室でロビンフッドに首筋を射抜かれて、のけぞっているシーンだった。

終始、小生が妻をモデルにして「斬られる女」のカラーを撮影した当時を思い出して苦笑していたが、同好の諸氏には是非一見をおすすめする。奇クの分譲品も、これ位の設備、表情を出して(出来ればネガカラー・プリントで)撮影して頂きたいと希望する。なお、「花と蛇」の特集号が出版されるそうですが「十三人の女死刑囚」も是非完結次第、発行されるよう切望します。

森田敬三画

肉筆「腰元切腹」評

兵頭庫一

原作者の絶大なる御厚意に依つて、原画（三八×五四糎）を拝見することが出来たので、筆者の好みを通して得た忌憚のない寸評を試みさせて頂く。

この画は色盲でない限り、又女性切腹マニヤである限り、そうして又、和装マニヤである限りに於て、百花繚乱、落花狼藉、正に男冥利に尽きる光景と云えよう。私は今まで様々な女性切腹の姿態を絵に又写真に拝見してきたが、このように率直大胆に描写された作品は嚆矢とする。

タイトルは武士道残酷史——殉死——となっているが、殉死は、多くは強制されたものであるのに対し女性の場合は、原作滝麗子女の「腰元自刃」のサブタイトル通り、殿の御あとを慕いまつるという純情がこもっているだけに哀切極まりない悲愴美が画面に漲っている。

原画を御覧になっていない人の為に色彩の説明をすると畳は草、屏風は黄、障子の棧は薄茶、着物は青竹、帯は黒、扱帯は藤、襦袢は赤の鹿の子絞り、腰巻は朱、簪の玉は赤、櫛は茶、八掛は薄桃といった工合である。人物は滝女史のそれに比して若く見え、いかにも愛らしく描かれている。原作者は滝女史の原画を模したと書いていられるが、成程正面向きは正にその通りであつても、仰臥した方は原作者の創作であつて、それがいかにも自然に描かれているところから、筆者は原作者の筆力に万腔の敬意を捧げるものである。

腰元——武家屋敷に奉公する奥女中——と云えば、紫矢紺の着物に黒縹子の帯を立て矢の字に結んで裾を引いて長廊下を滑るようにすり歩く風情が目につくが、この画の腰元の着物の柄色は、俗にいう青竹色である。それは原作

者の好みかも知れないが、制服という以上色も紫なら紫に統一されていたのではあるまいか？

原画となつた滝女史の画でも同様であるが、前を開いていて帯の結び目が、そのまま背にくっついて残っているのは、どうしたことだろうか。前を開くには、この結び目を解かねば出来ぬ筈である。

この点原作者は原作に忠実であろうとされた為に、態とそれを不問に附されたとして、私は原画の

作者滝女史の説明をお願いしたいと思う。

腰元は長襦袢を着物に重ねている。それは長い着物の裾の間から匹田鹿の子の赤い絞りが覗いてることから分る。それにも拘らず正面向きの女の裾の合せ目にも仰臥した女の乱れた裾からもそれらしいものが見えていないのは何故だろうか？ この点原作者の御説明を得たいものである。

この画だと一人は正面向だが、一人は障子の方向きで腹を切ったことになっている。朋輩同志が仲良く一緒に自害する際こういう坐の占め方は、一寸考えられない。常識から云えば、同じ方向に坐るか、向い合うものと思う。

刀に就いて云えば、正面向きは大刀、仆れている方は小刀のように見えるが、大刀を持つている女の膝の前に置かれた黒鞘は、大刀はおろか





高 原 逸 見

〔雑誌紹介〕

男はみな

女のドレイ

人刀さえ入りかねると思う程の大きさである。これも一寸おかし。正面向きの女は嗜み良くその膝を扱帯でゆわえているが、仰向けの方は、ゆわえるのを忘れたのか、解けてどこかにかくれているのか不明であるが、腸が溢れているから相当深く割腹した為、激痛と劇しい苦悶によってゆわえた扱帯など一向に役立たなかったのである。首肯できる。原作者

は切腹した女の表情にも相当の考慮を払っていて、既に締切れた女の方が、半白眼をして口元から少し血の糸を垂らしている点見事であるが、今丁度刀を腹に突刺した女の表情が、案外おだやかに描かれているのは、どうしてであろうか。生れて初めて味った切腹のショックには、もっとすざまじい、険しい表情と態位の崩れが表現されなければならぬと思う。

仆れた女の髷が形良く保たれている事にも、いささか不自然なところがあるようだ。たとえば櫛が飛び髷ががっくりと崩れている方が効果的であろう。

以上まるで揚足をとるような苛酷とも思われる批評を加えて、折角苦心して創造された森田氏の傑作をこきおろした筆者の非礼を深くお詫びすると同時に、同氏の腰巻に依るエロティシズムなしに描かれる女性切腹画無用論に対し、「腰元切腹」の原画（色彩）を見せて頂いた筆者は、従来の白無垢万能主義の牙城の一角が崩れてゆくのを、まざまざと感じさせられた。

終りに臨み、森田氏が今後とも女性切腹愛好の同志の為に、一層の御活躍あらんことを、切に念願して止まない。


私が最近読んだ雑誌の中に、我が意を得たりという記事があったので、ひろく本誌愛読者の同好の方方に御紹介したいと思う。

（文芸春秋「五月号」阿部真之助「女性化時代」批判）

最近、悪書追放なんてしきりに叫ばれているがこれだって誰が追放するかが問題だ。信用もあり權威もあるコミティーみたいな所がやるのなら話はわかるが、一体どんな御仁が、そういう組織を作るか、だね。ぼくなんか悪書ばかり読んだ一員として、悪書追放なんて必要ないという論だ。もっとも読む方が自分で判断する力のない

人間だと困るがね。ぼくの経験ではいわゆる良書を読むとやたらに感心するだけで、さっぱり批判がでてこない。こいつはとてものかわないと思って身も心もすくんでしまいうらしい。手も足もでないんだ。これが悪書だと「なんだ、馬鹿なことをしてやがる」と思って元気がでるもんだ。悪書を読んで自信つけた方がましだと思ふが、どうだろうね。女だってそうだろう。ほんとに完全無欠の絶世の美人などが現われたら、恐れをなしてこれはちょっと口説く気にならない。少々どこかに欠点のある女だと、こいつはいささか見込みがあるかもしれん、なんてついその気になると同じようなも

んだ。女の話がでたからついでにいつておきたいが、このごろの男はありや一体何だい。女性化時代なんていわれているが、ほんとにみな女の奴隷だね。ぼくのことを恐妻会会長なんて笑うヤツがいるが、今の男ときちや恐妻以前だよ。あわれなもんだ。恐妻というのは女性化しまいと心から思っているから恐れているんであってね、恐れなくなったらもう救いはない。NHKにも若い男が多いが、女に白旗かかげて降参したヤツばかりだ。よく「愛妻か恐妻か」なんていうが愛妻家なんて甘っちょろいもんだ。苦労知らずが愛妻家になるんで、恐妻と愛妻は似て非なるもんだよ。



短信往来

「同名異人の」

中田君へ」

中田 明

五月号の読者通信で同姓同名の貴君の通信文を読ませて貰って、小生いささか気が動揺して、幾度も冷汗をかかされた。この世の中には、何と不思議な事が起る事か。小生は貴君より古い奇巧の愛読者だ。読者通信にも幾度か短信が掲載され、つい最近では「遠藤百合子嬢」へ宛てたMS通信が本文中に顔出ししたりして、注意深い読者なら記憶にも新しい筈である。しかも常に小生はSの立場でペンをとっていたし、現在も尚、そのサジストとしての立場に変わっていない。小生が同名の貴君の短文を読んで、かくも弁明の通信文を奇巧に宛てたかは、一に余りに立場の異なる内容から多くの読者の不審を排除したいが為に他ならない。今回の出来事は、偶然の一致で

あるにしても、貴君が我々読者の仲間入りをしてから約一年の間に、小生は自分の名前を堂々と掲げて立場を謳ってあるのだから、努めて誤解のない様に呼びかけをすべきではなかったか。亦、この事は奇巧編集にたずさわる方の注意勧告、若しくは補筆があつて然るべきものと考え遺憾に思う。何故なら、余程の二重性格者でない限り、半年足らずで、かくも見事に性癖転換はおこるまいし、疑念を抱く読者が多い、事を惧れるからである。今後共小生は貴君のよう側には立てないであろう。春の椿事と呼ぶにふさわしいこの一件は、小生にしては許し難い思いである。出来る事なら故意かそれとも偶然かを会って確かめたい位である。幸い住居は東京らしい。東京は広くて都内二十三区に

住んでるのか都下なのか皆目見当はつかないが、こちらの呼びかけには反応がある事を期待したい。Mとしての被虐を渴望している貴君にとって、この機会に小生に対する陳謝を体刑による処罰を甘受する事によって表明してはどうか。貴君の希む「奴隷とし、君臨出来、処理出来るS男性」としては恰好ではないか。但し、小生は飽くまで、同性同志の顛倒的性慾は持ち合せていないから、貴君の心身に嫌悪して、懲罰は却って過酷になるかも知れない。この一文が掲載され、貴君の目にとまり、早速乍ら読者通信欄へ再投稿したとして五月下旬発売の七月号誌上でなければ返信を見る事にはならないだろう。そこで今から用意しておくがよい。七月号の発売を見るまでもなく、左記の日時、場所に貴君の出頭すべき義務が生じたと銘記すべし。そして奴隷としての飼育、訓練、処罰は後日の奇巧を飾る資料として提供されるであろう事も期待するがよい。

五月三十日（土）午後六時以降
必らず電話すべき事。

（982）七〇八〇番

○待望の臨時増刊号「花と蛇」特集号（定価五〇〇円）が愈々刊行された。これは文字通りファンの方々からの後押しによって、編集部が重い腰を挙げたという恰好になったが、好評を得れば幸い。例によって、余り宣伝はしない。

○五月中旬刊行予定の限定版グラビヤ「豊満と清楚」略号（限二）が、特集号の印刷強行のため、若干遅延している。予約の方々には誠に申し訳ないが、編集はできていながら印刷が遅れているので、今暫くお待ち願いたい。

○本誌もいよいよ今月号から定価三〇〇円に値上げした。内容が充実していきさえすれば、値上げしてもいいという圧倒的な御意見に従って、真の同好者にだけお頒けするという意味あいでは今後発行部数は漸次減らしてゆこうと思う。今月号から、グラビヤを十六頁増頁した。

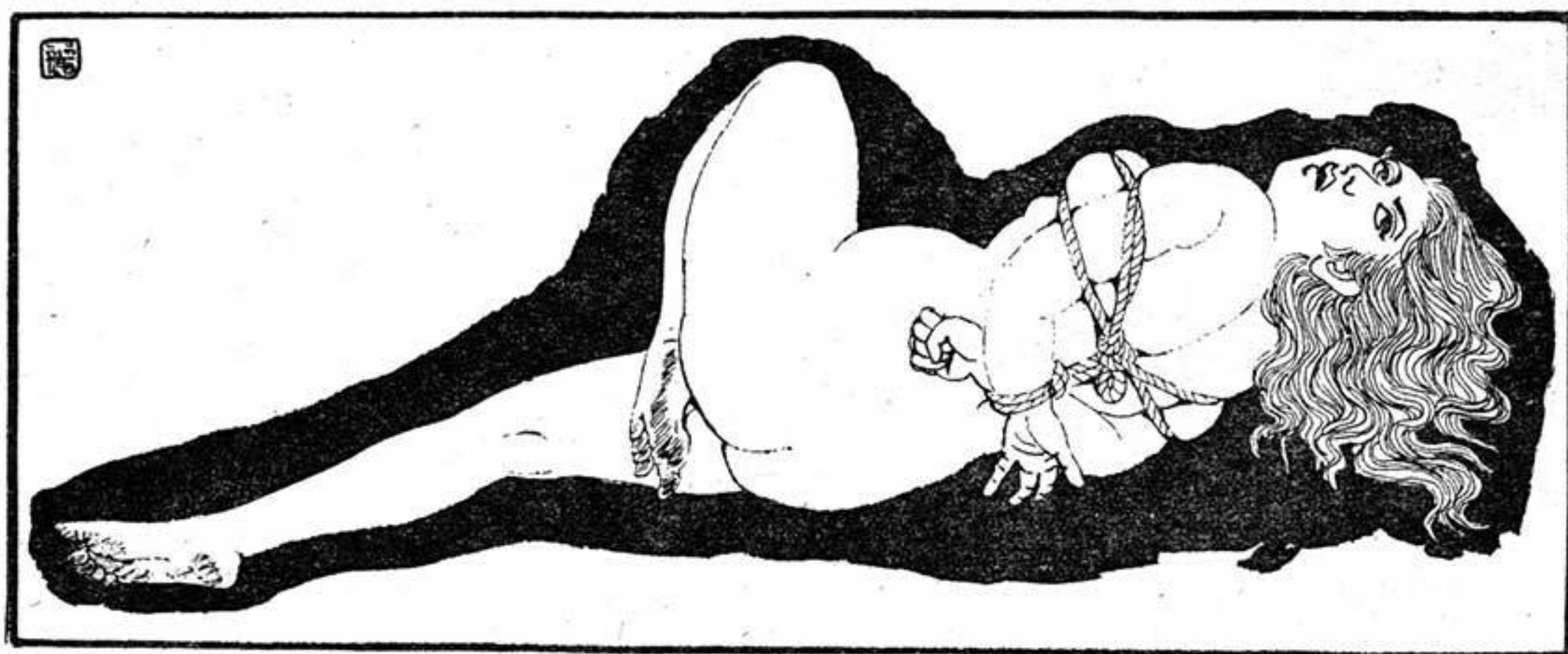


えつぎやくのびじよをおもう

悦虐の美女を懐う

近 藤

一



貴女は、私の心を奪った女、そしてはななく消え去ろうとしている女。

奇譚クラブの誌上でのみ、私は貴女に接した。貴女は、そこで美しく、成熟して行った。女性の持ちうる最も素晴らしい資質、そして、それ故に最も危険な宝と云える悦虐の芽を、貴女は奇譚クラブの誌上で育くみ、見事な花を咲かせてくれた。それは純粹で清浄なマゾヒスティンの姿だった。

貴女のマゾの面の全貌を露わにすることによって、貴女は、貴女という女の人となり徐徐に示してくれた。そして、貴女の女人像の魅力が私を惹きつけて行ったのだ。

凡そ、人が何事かに打込む姿には至上の美があるもの、まして女の肉体が力の限りを尽くしている姿態は、健気と云うに余りある。女が責められるとき、女の外周の醜いものは総て消え去ってしまい、女が精魂を傾注するとき、女の深奥の輝やきが現われる。そして女が被虐にすべてを委ね、悦虐の境を辿るとき、そのひたむきな希求の姿の輝やきに克つ光は無い。

女が純粹に、責められる女になり、被虐を悦ぶときが女の一番美しいときなのだと、私は思う。そして、貴女は、その数少ない美しい

女の一人なのだ。

美しい女は、だが、常に美しく輝やき続けているのではない。何も感じられないときもあり、さらに醜くさを感じるときもある。だからこそ、美しくなりうるのだと云える。

貴女が四六時中、奇譚クラブのカメラの前に被縛の悦虐の姿態を晒し続けているなど、誰も思いはしない。貴女がいかに鍛え抜かれていようと、かよわい女体であってみれば、体力に限界はあるだろう。そして、被虐は貴女の総ての面ではない筈だ。貴女には、好むと好まざるとにかかわらず、社会人としての一面がある。貴女が戸外へ出て大気に触れ、蒼空を仰いで陽光を浴びたいと希うなら、やはり社会人であることを要求されるだろう。

貴女は社会人としてBGであるか、それとも手に職を持つ女性か、あるいはサービスに従う人なのか、私は知らない。無職でもよいし、ヌードモデルという呼称でもよいが、凡そマゾヒスティンが、被虐と全く無関係に、親兄弟の繋がりに依存して生きることが、私は許せない。

悦虐の性は、秘すべきものであっても、自ら忌むべきものでないと、私は思う。貴女が未成年であり、或いは格別の事情があつて親

兄弟の扶養を受けるのであれば、悦虐の性を育てる途の支えは自ら見出すべきである。会社でも工場でも、あるいは女奴隷としての労働でも、貴女が力の限りを打込んで、純なマゾヒズムに悶悦できる勇気を与えてくれる環境が必要なのだ。例えば、貴女は一個の女奴隷として、貴女の所有者に奉仕する。貴女のマゾヒズムの総てを捧げ、心身を以て所有者の歓びに喜悅するために、貴女は生きる。マゾヒスティンが女奴隷の奉仕を続ける生き方は、極めて理想的であり、現実には困難である。多くのマゾヒスティンは、自らの特質を秘し、より良い社会人としての外観を尊ぶし、その現実が、女のマゾヒズムを、瞬時に烈しく美しく燃え立たせるための圧力になっていると云えるだろう。

貴女のマゾヒズムは、終生憊むことのない女奴隷の生き方を希望するだろうか。鞭と縄と、呻きと喘ぎと、涙と脂汗との生き方が、時の流れる限り、夜昼なしに加え続けられることを好むのだろうか。ニューロックの装いで、街を歩き、ショッピングを楽しみ、お茶を喫み、音楽を聴き、絵画に息をのむような普通の女である時を全く嫌うのだろうか。

タイプをうち、算盤をはじき、機械の流れ

を調整することや、あるいは単に電話の応対をし、お茶の接待をするような仕事の中に、何らかの生甲斐を、感じることはないのだろうか。生きるために働らくという時間は、直接マゾヒズムを満たさない理由で、全く無意味なのだろうか。

貴女はより美しくあるために、社会人としての努力を怠ってはいけない。貴女は、普通の人の知らない楽しみを味わうために、普通の人と共通の時を持たなければならない。貴女は、貴女のマゾヒズムをつねに新鮮で烈しいものに保つために、マゾヒズムと直接しない環境でベストを尽くす必要がある。そうすることによって、貴女はマゾヒズムの境地に故郷を見出し、安堵のうちに、心身を悦虐の炎に焼くことができるのだと、私は思う。

社会人としての貴女の動きは、嗜虐の眼から観ると無色と云える。そして貴女には美しい面と無色の面と、それに醜い面が加わる。貴女の醜い面、それは貴女の動物的な欲求の姿だ。それは貴女が人格を剝奪された女奴隷という意味でなく、思考のない、生きているだけの姿という意味である。虫けらや獣さえもやりそうな基本的な動き、食べ、排泄し、洗って、寝て、交わって、等々、それらも、

やはり貴女の生命が続くためには必須のことなのだ。それらが原始のものである限り、人間の進化を遂げた嗜虐の境地では本能的に醜く、恥ずべき姿の筈だ。それ故に、本能的欲求と云われるこれらの動きを、貴女は本能的に秘匿したがるであろう。食べ、そして排泄するような行為は、人間の智慧を動員して、装いを凝らし、あるいは理由づけを工夫し、醜くさを消そうとする努力が繰返し続けられる。そして、貴女のこの醜い一面は、社会人としての貴女からさえ嫌われるのだ。

美しい面があり、それらが微妙に錯綜して貴女を創り、貴女という素敵なマゾヒスティンを支えている。

かつて誌上を飾った、古川裕子という女性は、自らを「マゾヒズムの囚獄に蠢く永遠の女囚」と認め、しかも彼女を妻にと望む人に応えて「私を妻になさることは二人の女と結婚なさることです。一人の私はマゾヒスト古川裕子、もう一人の私はマゾヒストでない古川裕子なのです。」と云った。

辻村氏の麗筆で紹介されたモデル嬢の中で鮮烈な印象を残したのは川端多奈子、坂口利子、伊吹真佐子というような、佳作を多く生んだ女性であった。プライベートな面でなく

とも、彼女たちを包む雰囲気は妖しく美しかった。そして彼女たちの言動からは、時として二重人格とさえ思われるような、明白な二面性が窺われた。彼女たちは平素は普通に生きていた。彼女たちのための檻に鎖で繋がれ、所有者に飼畜されているのではなかった。唯、彼女たちは、責められ虐げられることに憧れ、悦辱のムードに浸ったとき、最も精気に充ち、晴々とした表情を見せていた。

社会生活の中で、生まれ育ったマゾヒスティンの貴女と普通の社会人の貴女が同居していて、それは貴女の二面というより、二人の貴女と云うべきであろう。そしてマゾヒスティンの貴女の方が、必然的に生き活きしているし、貴女の肉体の中で占める割合も徐々に大きく強くなっている筈だ。

私は本物の貴女と一面識もない。奇譚クラブの誌上を通じて知っただけだが、それでいて、私は何回も貴女と夢で逢った。私は貴女の肉声など未知だ。だが、言葉も交わさない貴女を、私は空想の中で縛り、責め虐んだ。

私は貴女を縛る。使い古した細引で、手首でさえ縛しめが皮肉に喰込んでしまうほど締上げ、首に吊る。喉の血管が浮き、貴女の顔は充血して、声音はゼイゼイと堰かれる。高

手小手、腕を縛り、胸を縛り、胴を縛ると、上膊部はハムカソーセージに似て来るし、乳房は突出されて、何事か期待に戦慄する。腹から股を潜り、尻から腰へ連る縄目は、柔肌を痛め裂かれる激痛が女体を哭かせるのだ。腿にもキッチリと縄を喰込ませ、そして、貴女の両足首を短かく鎖で繋ぐ。

縄尻を左手に取り、私は右手に鞭を持つ。女奴隷用に特別誂えの鞭で、鋼線を革で巻上げた、細く撓って強いものだ。鞭は貴女の肩を叩き、背をこじり、ヒップを撻つ。貴女の歩みの遅速に関りはない。縄尻は邪慳に手繰られる。貴女の曳かれる歩みを乱すために、女囚の縛しめを厳しく身に纏い、女奴隷としての鞭撻に身をよじりながら、貴女は処刑場への遙かな道のりを、よろめき続けで追い立てられて行く。素足は砂利や瓦礫に噛まれ、皮が破れて血がにじむだろう。

貴女の刑は死刑、それも最も残虐な方法の死刑なのだ。貴女は、少くとも三年の間、息を引取ることを許されない。そして日夜、拷問に次ぐ拷問、苛責に次ぐ苛責を加えられて苦しみ悶えなければならぬ。

晒し合に、貴女は括りつけられる。被縛の貴女の傍には、貴女を撻ったり突いたりする

ための竹の棒が用意され、新しいものが一日の終りにはささらになって朱に染まるのだ。そして、貴女は拷問や処刑の合間の休養を、この晒し台で得なければならぬ。

貴女に必要なものは、総て拷問であり責苦なのだ。食べること、飲むこと、汚れを洗うこと、排泄すること、運動すること、泣くこと、笑うこと、歌うこと等々、総てが拷問によって得られる筈だし、休息は晒し台の上で与えられるのだ。

貴女の肉体は、伸縮自在が強いられる。マリのように屈曲し、あるいはゴム棒のように引伸ばされ、あるいは、吊下げられて宙に浮く。頑丈な礎柱に大の字型に架けられたり、古風な土蔵の中で石の重圧に脛をひしやげたり、口中一杯に押詰められた猿轡の布に頸がはずれそうになって眼を白黒させたり、重く厚い桎梏の枷に頸と手首を挟まれた不様な姿で廻り者にされるのだ。惨忍な血は、貴女の囚われの美態によって、ますます沸るだろう。貴女は石を投げられ、汚物を浴びせられ流れに沈められる。

しかも、貴女の容色は衰えてはいけぬ。瞳は冴えて、歓びを表わすのに雄弁でなければならぬし、唇は常は何事かを求めて濡れ

待望んで喘いでいるのだ。肌は白く輝や

艶は健康を現わし、程よく脂肪を貯えた下半身は豊かに安定し、四肢の筋肉は鍛えられて伸びやかに弾み、頸はしなやかに、肩はなだらかに、そして胸はたっぷりとして締っていないければいけない。要するに貴女の肉体は、均斉の取れた健康美に日々磨きをかけて行かなければいけないのだ。裂かれても、貫ぬかれても、砕かれても、貴女は翌朝にはもと通りの美しい女体に戻って、新しい責めを受けなければいけないのだ。

私は必らず貴女を犯す。貴女を愛しているからだ。たとえ当初のスケジュールから明らかに除外していても、間違いなく、私は貴女を犯す。私には自分が判る。

貴女が私と出会うとき、貴女は既に美しい人なのだ。貴女にはマゾヒズムがある。貴女は悦辱の境地をひたむきに求める。私は、貴女を美しい人として迎え、そして貴女を美しく装わせ、悶えさせる。貴女の被虐美に私は眼を眩り、貴女の素肌の感触は、私の男性を燃え上らせる。

貴女は強姦と和姦のいずれを望むだろう。唯、私には、貴女を犯す一筋しか途はない。或る若い女性云う。

「私は女奴隷となる日を夢見ています。私をお好きなように責めて下さい。でも私の貞操には触れないで下さい。」と。

可憐な願いに私の心はほのぼのと温まる。

だが、初心の気遅れでなければ、この願いは処刑に値する思い上がりではないか。少くとも、責められたいと希う女に、責め手を選ぶことが許される以上、彼女の幸福は、この上ない筈だ。女奴隷は、身も心も捧げ尽くして奉仕に励み、所有者の歓びを飲びとするものだ。女奴隷の望み通りに責めてやるという所有者の意思に制約を加えようという女の願いは、全くナンセンスなのだ。

「私は彼に逢い、彼の縛しめに身を委ねました。そして自由を失った私の貞操は、彼の獣欲に蹂躪され、誓いを裏切られた私は汚辱にまみれて帰ったのです。」

これは見当違いと云える。根底に女の奉仕がなく、男の奉仕で陶醉しようとする女のエゴイズムが、マゾヒズムまがい装っただけではなからうか。さもなければ、浅墓な世間知らずであり、貴重な資質を大切にしない馬鹿者と云うべきであろう。

「貴方は紳士でしょう。」と女はさりげなく体をかわす。男は紳士でありたいと思う。私も

紳士を志向する一人だ。だが、紳士はインポテンツを意味せず、女を抱かないものでもない。紳士は只、責任を執るものだ。女を玩具にせず、戯れに女を抱かないだけなのだ。紳士は愛する女を、とことんまで愛し抜く。

「夫は私の女の誇りにあらゆる辱しめを加えました。身をよじられるような屈辱の歓喜に私は堅い強い猿轡の下から声を立て、身を悶えたのです。」

そう云った古川裕子の御主人を、妻を一筋に愛し抜いた紳士だと、私は云いたい。

被虐に憧れるある婦人は、責めは凌辱の前戯と云った。古川裕子は、「凌辱の期待と幻想」という忘れ得ぬ手記を発表した。川端多奈子は、彼女を愛したサディストと結ばれ、身を委ねた。伊吹真佐子もサディストの紳士に恋をした。

女奴隷の生活は奉仕に貫かれる。奉仕を中断しないために、女奴隷は主人の身近に居なければならぬ。女奴隷は主人の側近くに置いてほしいと希うことが自然であり、それによって主人の好む時に好みの責めを受けて苦悶に歓喜することができるのだ。

貴女は私と共に住む。

貴女は私と結ばれる。それが法律上も認め

られる結婚を意味するのか、それとも単なる同棲生活を云うのか、貴女には考える自由を与えない。貴女自身の上に不測の事変がない限り、貴女は新しい戸籍を見ることもないのだ。

貴女は、奇譚クラブのカメラの前で要求された以上の演技力を要求される。演技の中は広いのだ。女奴隷、女囚、娼婦、二号、ガールフレンド、婚約者、妻。近所の人からは、奥様と呼ばれ、或いはお手伝いさんと呼ばれなければならない。

貴女はより良い女奴隷となるために、教養を積み、体力を養わなければならない。真善美を尊び、情操を豊かにし、心身を健やかに保つのだ。女奴隷として私への奉仕を怠らぬ一方、主婦として家事万端を切盛るのだ。

貴女は処女でない。それを口実に責めるけれど、私は処女でない貴女に限りない愛しさを感じる。私も、今はもう童貞でない。対等という意味でなく、人の世の流れを経験した者として、貴女の過去には手を触れまい。貴女が恋をしていたことも、貴女が同棲していたことも、私の胸にとび込んで来た貴女の可愛さを少しも損じないのだ。

ありのままの貴女が可愛い。ちょっぴりお

きゃんで、意地っ張りで、涙もろくて、さらっとしている女。

病気はないだろうね。

私は貴女を、殊更に女の誇りを蹂みにじったポーズで縛り上げ、自由を奪われた女を弄び、犯した。貴女の肉体の総てを、私のものにして、次には、貴女の心を完全に支配しよう。何も躊躇うことはない。私の手で縛られ、責められ、総てを奪われて、新しい魂を息吹かせるのだ。私と貴女との子を、貴女自身胎内から産み出す事態を恐れない勇気と決断を持って、貴女は私の許へ来ればよいのだ。

貴女は、私に烈しく苦しい恋を教えた女、切ない恋の美酒に酔わせた女。既に消えた古川裕子、今まさに去ろうとしている川端多奈子、そして坂口利子、伊吹真佐子、高瀬忍。短かく限りある人の世を、宝を抱いて虚しく生きる佳き人びとが、私には悲しく惜まれてならない。

私たちの奇譚クラブは今日も撓みない前進を続けているのに。

× × ×

逃 とう亡 ぼう

……悦虐絵灯笼 その七……

万 田 不 仁

大阪籠城の時、諸国の名高き浪人共各々勢ひ猛に守りたれども、大將秀頼には一度も出馬し給はず、諸人の勇氣も無く自然と勢ひ衰へし如くなれば、大野其外七組の面々皆評議して、信長公の御舎弟有楽斎の長男織田左衛門入道を秀頼公名代として城中諸大將の持口々々を毎日一度宛廻られ、其間には横目衆替り替りに

廻る事止む時無、左衛門始めは諸將の持口にて礼儀正敷せしが、後には市十郎と云十八九歳の遊女に六具を固めさせて、諸士並に騎馬にて召具しければ、軍中の将卒申けるは古今定まれる禁制なるに、今大將の御名代として城中を巡見する人が女を同道致さるる事法外の事也とて諸將嘲り軽んじける……（明良洪範）

★

開きそめた八重桜を手荒く虐げる激しい夜嵐の音の底に明らかに憂々と馬蹄のひびき、そしてこちらへ駆けて来る大勢の足音。

すわと臥所に起直った左衛門の手は枕辺に置いた三尺八寸、則光の太刀にかかる。

忽ち怒号、喊声と共に表門が押破られ、それより早く顔れかけた土塀を乗越えた一隊が庭先へ迫った。

「織田左衛門殿、雲正寺殿へお迎えにまいった。もはや逃れられぬところだ、神妙にせら

れい」

討手の頭らしき武士の大声。

「おお、下郎共推参なり」

逸速く座敷に躍り込んで来た雑兵を真向から一太刀、更に一人の武士に体当りを喰わせ、庭へ飛び下りた左衛門である。しかし、前後から喰ひを生じて打込んで来た六角棒に足を薙ぎ払われ、脆くもどうと倒れるところを得たりと折重なつて高手小手に縛しめをかけられてしまう。

「あははははア、戦ささ中に臆病風に吹かれて逃げ落ちた卑怯未練な入道殿も所詮網の目をのがれる魚ではなかったわい。はははは、お覚悟はよいかナ、六条磔あたりで、お味方の方々の亡霊が待ちかねてござるわ」

嘲けり嗤う頭の黒革おどしの鎧が朧夜の明りに光る。

「ううむ、無念、汝等ごとき葉武者の手に捕らえられるとは」

「ははははは、遊女狂いの腰抜け大将の末路は、こうしたものじゃ、笑うてやれ、笑うてやれ」

「うわツ、はツはツはははア」

「それ、入道殿を裸馬にくくりつけよ」

荒々しく引立てられる土塀の外。樹陰に立

つ逞しい栗毛の背には既に荒縄で無惨に縛られた市十郎が項垂れている。月明りに仄白いその横顔、乱れた黒髪、華車な脚が寝巻きの間から露わに傷々しい。

「おう、市十郎、そなたも」

左衛門の血を吐くばかりの叫びが、生温い夜気を裂いた、

「殿様、殿様、雲正寺様、ああひどいうなされかた、如何あそばしました？」

短檠の淡い灯影に市十郎のなまめかしい媚を含んだ笑みが艶やかな花のようだ。

「ああ、そなたか、また厭な夢を見たぞ」

「ホホホ、あまり気を詰めて御書見をなさったからではございますまいか？」

庭の木立を騒がせ、屋根の甍を踏みつけて駆け過ぎる風神の荒々しい気配は聞えても、春の嵐の中に討手の馬蹄の音も足音も聞えない。唯深い夜の色が戸外に濃くひろがっているに違いない。

——五臓六腑の疲れか。いやいや死にはぐれた士の性根が日に日に腐ってゆく何よりの証だ。埒もない夢とは云え、市十郎共々擒になるなぞ思うても口惜しい、忌々しい……。

「まア、ひどい盗汗、お拭き致しましょう」

左衛門は市十郎に背や胸を拭かせるうち、

こんな重苦しい夢を見た後で、何時もするように自然に、而も蠱惑的に恥じらいの科をつくる市十郎のか細い腰へ手をやり、寝巻きの上からは、ほっそりと見えながら、みっしり肉の緊まった女の体を己れの胸の上に誘うのであった。

★

織田左衛門は、今日は、昨日に増して未練な武士、愛執の闇に惑う武士になり下っていた。遊女上りの市十郎と世を忍び、いつなん時身に迫るか計り難い討手の詮索におびえつつも一日でも長く女の傍に生きていたいと願う心根を断ち切ることが出来ない。然るに大阪落城、豊臣家滅亡の後、徳川家康の豊臣方残党に対する追究、処分は寔に苛酷な程徹底したもので、あちこちで引捕えた残党たちを日に五十人、百人と容赦なく斬首の刑に処していた。思うに家康としては元来方広寺の鐘銘「国家安康」に絡んだりして、無理無体に豊臣家を滅ぼす目的で起した戦さの勝利の後始末は、いっそ酷薄な態度を通して此際豊臣家にゆかりある人々を根絶やしにし、後日の憂いをなくそうと云う凄じい悪鬼羅刹の気組みであつたかも知れない。

左衛門は、だから手厳しい落人改め、召捕

りの噂を耳にする毎に、いずれその身も一坂本の甲冑師の好意で、丹波の廃寺に隠れていゝるその身も徳川方の執拗な詮索の目を逃れおさせるものではないと観念はしていた。それだけにまたようやく落城の年も暮れ、めぐり来った陽春の一日々々が貴く、有難く、そして残党狩りにおののく明日と云う日が恐ろしくてならない。

「市十郎、もっと手強く打て！ 利かぬ、利かぬわ、わしを思うさま打ちのめしてくれ」
—何もかも忘れる程に、と口の中で云う。

遅き日に江山は麗わしく

春風に花草はかんばし

杜甫の詩を刷った屏風の陰で、左衛門は駄々子のように喘ぐ。

「あまり打っては傷になりまする」

「かまわん、魂のしびれるまで打ってくれ」

「は、はい」

一瞬あやしく輝く左衛門の偏執的な目に射すくめられたように棒立ちになった市十郎は氣を取直して鞭をふるう。ぴしッ、ぴしッ、ぴしッ、ぴしッ。褥の上に端座した左衛門のはだかの背に、腰に鞭は鳴る。やがて肉が破れ、血がにじみ出る。左衛門は猶酔い痴れた人のごとく

「打て、打て、打て、もっと打て」

と低くうながして止まぬ。その異常な主人の物狂わしい願いに負けて、否、暗い心の底に蠢めく何物かに衝き動かされて、堪えようもなく唆かされて、黒髪の逆立つばかりに熱中して鞭をふるった市十郎が、ふっと吾れに返り、激しく慟哭しながら畳に俯してしまふまで。

鞭打が終ると、市十郎は左衛門の背や尻の肉の傷ついた箇所を酒で清め、むっと異臭の立つ油薬を丹念に擦りこむ。その仕事の間に呪わしい業に精根を尽くした悲しみと、悲しみの陰に忌わしく蟠まる後暗い悦びに女の体は震えわななくのであった。

★

慶長十四年の夏、公家たちの悪事が発覚し世間を驚かせた。それは、猪熊、飛鳥井、徳大寺、花山院などの諸卿が御陽成帝の寵姫をまじえた女官たちと屋形の奥深く酒池肉林の歓楽を尽くしたと云う事件である。その歓楽に溺れた群の中に織田左衛門がいた。

左衛門は関ヶ原の役で勇名を馳せた織田有楽斎長益の子、有楽斎は信長の弟である。名門の御曹司である左衛門は、夢橋の局と翠帳紅閨の奥に限りない愉悦に耽ったのだった。

桃山風の豪奢と華美の生活を好む一方、殺戮と死の修羅道にさまよう武士階級の血腥い無常な日常を嫌悪せずにはおれない左衛門に夢橋の局は肉の欲びを許す前に、様々な苦痛と苟も武士たる者の忍ぶべからざる恥辱を与えなければ満足しなかった。左衛門は白皙長身の全く贅肉のない、ある時には男性的にも見える局によって、初めて陰湿な、醜惡な、それである。甘美な倒錯図の中の人となったのである。

夢橋の局は、滋藤の弓の折れを使って左衛門を打ちのめした。金紫銅の花器に蓄えた、南蠻の酒に混ぜたいぶかしい水を飲ませた。床しい香をたきこめた白羽二重の寝衣を開いて、それから白絹の湯巻きをくつろげて……
：左衛門はこの世のものならぬ芳香に嘔び、青白い山肌の暗いうねりの陰に潜む薄くれないの花びら、くろぐろとけむる柔草にひたと呼吸を塞がれた……

しかし、そんな夢幻の境に展開する戯れも何時か奉行の知るところとなった。

死罪、流罪、思いのほか厳しい処分が下された。見果てぬ逸楽の夢は、あまりに早く破られた。左衛門は剃髪して、越前の雲正寺に隠れた。彼はそこで禅学の書に親しみ、乱世

に本意なく生きる武士の心の救いを求めようとしたが、爛れた倒錯の遊びの記憶は、既に深々と彼の胸の底に刻印されていた。

破廉恥な所業のほとぼりの消えた頃、左衛門は京都に戻った。そして今度は、どこか夢橋の局の倅に似通った遊女市十郎に心を奪われていった。

★

慶長十九年十二月、徳川家康は茶臼山に本陣を敷き、大阪城を包囲攻撃した。

織田左衛門は、兵一万を率いて籠城軍に加わった。七手組の将の一人に任ぜられた彼は一時越前雲正寺に隠棲したところから雲正寺殿とも呼ばれ、城中で重く見られた。彼は市十郎を男装させて伴なっていた。

大阪冬の陣は、難攻不落の名城に拠る城方が徳川方十八万の大軍とよく闘い、勝敗は予断を許さなかった。家康は搦手攻めを考え、片桐且元に命じて、大砲を淀君の居間へ打込ませた。果して城内の女たちは、いたくおびえ、狼狽した。それに秀頼自身一度も出馬しないことが城兵の士気をにぶらせた。

七手組の部将たちは、秀頼の名代として城内見廻りの役目を左衛門に押しつけた。

この申出は、軍評定の時など、まるで勝敗

に無関心とまで見受けられるくらい冷やかな投げ遣りな態度を時偶窺わせた左衛門の顔にある明るさ、活気を蘇えらせた。

左衛門は金小実の緋おどしの鎧を着、金の鍬型打った兜をかぶり、連銭蘆毛の肥馬に跨って、桐の紋を押立てて諸將の持口を見廻った。その彼の従者の中に必ず市十郎がいた。

市十郎は、ぬばたまの前髪も艶やかに、朱の革具足、金造りの細身の太刀を佩き、紅色の母衣をかけて、白馬に乗って、白い顔をほんのり上気させて左衛門の後に従っていた。

城兵は、初めは市十郎を左衛門の寵童と見た。武將の寢室に美童の侍ることは、戦国の世の一般的な好尚であったから。

しかし、白馬の背に揺れる華やかないでたちの小姓の腰付きが少年のそれであるか女のそれであるか見ぬけぬ程の者はいない。まして女色に飢えを歎つ雑兵の目には、あまりにも悩ましい市十郎の騎乗姿ではあった。

「天晴な武者振りだ。未だ女とは気付かれまい」

「いえ、とうに知れております、みなさまがこわい目で私を……」

「何の大事な、誰も何も云うまい」

「七手組の方々は皆武辺ひと筋の大將たち、

私おそろしゅうございます」

「案ずることはない、考えても見よ、わしは秀頼公の名代さえ勤める男だ。これしきの我儘は大目に見てくれていい筈じゃ、そんなことより、組討遊びの新趣向でも思案したがよいぞ」

「まあー」

籠城の夜半の戯れに左衛門は市十郎を巴のような勇婦になぞらえて、伽の楽しみに新鮮な刺戟を増していた。居間の金砂子に花鳥を描いた屏風の陰で、小具足をつけ鮮かに化粧した瑞々しい若衆姿の市十郎に組敷かれ、首を掻かれようとするまでの演技を女が指図通り脂濃い所作で行なうと、彼は満悦して次の痴戯に移るのだった。白綾の紅裏付けた具足下に包まれた市十郎の白く滑らかな体に触れるまでに、左衛門の中年の立派な顔は、女の小さな足の下に踏まれ、圧され、更らに大きく開いた両足の、太腿の間に歪んだりした。彼は市十郎の体臭を濃くする為めに暫く湯浴みを禁じたりした。

そんな左衛門だったが、見廻りの時、番卒の居睡りなど見掛けると、直ぐさま長い鞭で手荒く打据えて些かも仮借しなかった。雑兵を犬猫を叩くように打ちのめす彼の剣幕に、



大きな瞳を見張って驚いている市十郎の手へ彼は鞭を握らせた。

「横着者を打ってやれ、ぶちのめせ！」

それは異常なまでの怒りだった。青ざめてためらう市十郎の鞭を持った手に彼は己れの左手を添えた。

「打て！ 打つのだ、懈怠の輩は懲らさねばならぬ」

目を固くつむって市十郎は鞭を上げる。びしッ。

「そうだ、続けて打て、打て！」

びしッ、びしッ、びしッ、命ずるが儘に鞭をふり下している市十郎の目が漸く妖しく輝き、頬が紅潮して来るのを左衛門は見逃さなかった。

★

十二月十九日、徳川方と和睦。二十四日から大阪城の惣濠の埋立工事が始まり、着工後一カ月で惣濠はもとより二の丸の濠まで埋め尽くされた。さしもの名城もこれでは裸同然となった。左衛門は、城内の桜の花の蕾がほころぶ頃、ひそかに市十郎を古い懇意の坂本の甲冑師春田茂人の許へ遣った。

女の美しい体を城の運命と共に滅ぼしたくなかったからである。

彼には豊臣家の先ゆきが解っていた。己れの愛執の因である市十郎を手放したのは、討死の前の心の乱れを除く心算だった。彼は別に城を枕に討死することに、何の心の氣負いも悲愴感も湧かなかった。豊臣家の為め、また自分たちの武士道の終りを飾るために死花を咲かせようと云う人々、真田佐衛門佐、毛利豊前、長曾我部盛親、明石掃部等の心構えを理解はしても、それに同ずる氣持はない。彼は極めて空虚な、自棄的なこれまでの生き方の終末を、それでも豊臣家の金城湯池に定めていたのであったが……。

市十郎が去って、桜の盛りを左衛門は快々と過した。掌中の珠玉を吾れから失なつた悔に人知れず悶えた。彼は今更にうろたえ、寂しさに途惑った。

——未練な、女々しい。

彼の胸のうちにも疼く戦国武士の雄心が叱りつける。

——判官義経は静御前を愛し、旭將軍義仲も巴御前を戦場に召しつれたが、死に際し、伴を許さなかった。その上両将とも名高い良将だった。然るに汝は……。

ええいつ、うるさい、左衛門はひとり己れを責める、もう一人の武刃者めく己れを罵った。城を包む春霞が彼の頭を重くさせ、その薄紅を微かに注いだような霞の棚曳く底に市十郎の白い憂わし気な顔、丹花の唇がまざまざと見えるよう。春の日永は暖かく、そしてあくまでも懶く、彼の精気をなし崩しに奪っていた。

かりそめの平穏和平が破れて、また戦さが始まった。夏の陣である。

元和元年四月二十八日、泉州樫井の合戦。寄手の浅野勢と大野、織田の城方兵が激しく戦った、その混戦のさ中に左衛門は行方知れずになった。

「織田左衛門様御討死」

の報せは塙直之の討死の報と同時に城内に伝えられた。

★

大阪城が落ち、徳川方は豊臣の残党狩に取りかかった。右大臣秀頼は城内繃倉で自刃した。にも拘らず世間には秀頼生存説がまことしやかに流れていた。秀頼ばかりでなく、真田幸村も後藤基次も明石掃部も薩摩落ちしたと云う。噂は噂を生んで、落城後、葭の中にひそんで鉄砲を以て家康を狙撃しようとして果

さず、捕らわれ、六条磔で斬首された長曾我部盛親さえ生きていると云う始末、徳川方の落人追究は一段と厳しくなった。

丹波の廢寺に隠れた左衛門は、その頃、すっかり死時をなくした武將の弱々しい、臆した姿で、昼はうつつの恐れをまぎらわす為めに禅学の書を読み、夜は市九郎の鞭に打たれ、酒に酔い痴れて、己れをはぐらかした日常に埋もれていた。

折々夢に見る樫井の戦、鉈を描いた旗をひらひらさせて寄手の真只中へ馬を駆った塙直之の華々しい武者振りが重苦しい夢魔の形となって彼を苦しめた。ある夜は、またうすものをしどけなく纏うた艶冶な夢橋の局が茫と現れて、彼の胸の上に、喉の上に柔々と而も重たく蔽いかぶさり何やら語りかけるのだった。

満開の八重桜が土塀の上の空気を澱ませ、春風が青白く削げた左衛門の頬を撫でる。

「やがて大赦がある。すれば市十郎、晴れて京洛の春を楽しむことも出来よう、何としても生きのびようぞ」

自墮落な倒錯遊戯にゆるび、腐っていく虚ろな心に、ふっと明るい日のさし込んだような時、彼は市十郎をいとし氣に眺めて云っ

た。武將の一人として、名門の子として討死の場所から逃亡したうしろめたさも、市十郎を溺愛し、更らに市十郎によって己れの暗い欲望——若い女に責めぬかれ辱かしめられる愉悅を味わうている今の生き方も二つながら彼の胸を塞いでいた。彼はしんから虚無にも快楽にも徹し切れない人間だった。

「詮議はいよいよきびしゅうございます、くれぐれも御用心を」

心利いた小者を一人連れて訪れた春田茂人は暗い顔で云った。

「私は鞭を手にしますと夜叉になりまする」
闇で市十郎が囁いた。

「おう、それでよい。お前が夢中になり、夜叉のように鞭をふるうてくれれば、一層わしの体にこたえる」

「それでもあまり浅間しいこと……勿体ないこと……」

「いや、打たれば打たれる程よい、心がしびれ、煩惱も妄執も、その時だけは消え失せてしまう」

外はまた山風が立ったらしい。風癖の日が続いている。左衛門は幼少の時分から風が嫌いだった。成人し、戦さに出ても風の吹きすさぶ夜は容易に睡れなかった。風の音の中に

肅々と前進して来る敵の気配がありありと目に浮かんた。戦闘の恐怖が彼の身を犇々と押包む。そんな不眠の夜が明けると、彼は狂ったように愛馬の鬣に顔を伏せて、太刀をかざして敵陣へ躍り込むのだった。戦さの後で武勇を讃えられると、彼は黙って陰った笑みを浮かべた。

市十郎の鞭打は全く巧みになっていた。左衛門の背から尻、腿、ふくらはぎ、丹念に打つ。傷あとに油薬のしみる心良さ。

「もっとわしを責めてくれ、踏みにつてくれ」

「どこまでも狂うた殿様、私はもう厭でございます、恥ずかしいことばかり……」

「未だ正気がぬけぬからじや、飲め！」

朱塗りの経机の下から左衛門は南蠻酒の小瓶を取出して、市十郎に突きつける。

「この赤黒い酒がいい、直ぐに酔いが回る、お前はほんものの夜叉姫になるわ」

目を閉じて盃を干す市十郎の喉が白い魚の腹のようにひくひくする。

市十郎の足が俯せの左衛門の体を踏みはじめ。踏むほどに淡紅色の湯巻きの裾が乱れ妖しい、美しい舞を舞うように双手を挙げ、ひろげて調子を取りながら左衛門を踏みにじ

る。左衛門の後頭、頸、背筋、尻、それは女には、限りなく無明の闇へ続く奇怪な九十九折の迷路のように思えた。

「花に慣れ来し野の宮の、花に慣れ来し野の宮の、秋より後はいかならん。

折しもあれ物の淋しき秋暮れて、なほ萎り行く袖の露、身を碎くなる夕まぐれ……」

ふと、市十郎の口より出る『野宮』のひとふし。市十郎は褥に俯し愉悅にひたっている左衛門の体を離れ、畳の上に舞う。廃寺を打ちせめぐような春嵐の中に、市十郎の謡を囁す冴えた鼓の音がカンカンとひびく。

「市十郎……」

半身を起して、酒と痴情に濁った目を見開いた左衛門が渴いた声で呼んだ。

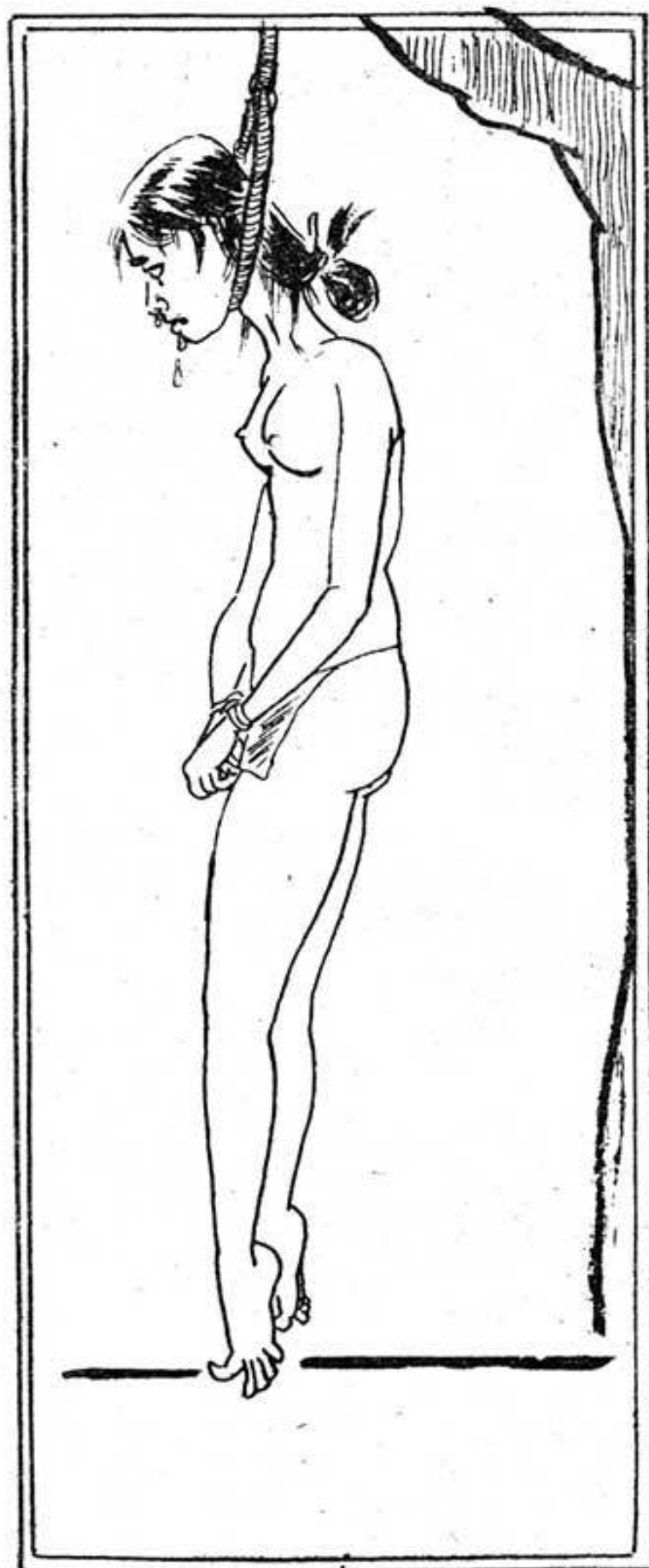
しかし、市十郎の姿は次第に彼の目の前から茫々と霞んで遠ざかっていく……。

「市十郎、市十郎、これ、どこへゆく、わしを捨ててどこへゆくのか？」

「会者定離の慣らいもとよりも、驚くべしや夢の世と、程なく遅れ給いけり……」

★

病み狂い、痩せ衰えた左衛門が曾て大阪籠城の前に住んだ五条辺にさまよい出て捕らわれたのは、その年の秋の末のことであった。



映画にあらわれた

処刑シーン

黒田 寿

映画に登場した女死刑囚で最も印象的だったのは、もう五年にもなるが「私は死にたく

ない」のシーズン・ヘイワードであることは云うまでもないだろう。当時まだ若さの残っ

ていた彼女が（失礼）ガス室内でもがき苦しみ、鼻孔をピクピクとふるわせたあげく、縛りつけられた手首がぐんなりとなって絶命するまでやるのだから嬉しい。以来まだこれに匹敵するものがないのは、全世界映画界の怠慢である。

「マリリー・アントワネット」ではミシェル・モルガンがギロチンに従容とのぼってゆく。あとは台下にさっと血汐が滴るところで終り、彼女の首は見る事ができなかった。

フランス革命では数十万人が首を斬られたと云うから、若く美しい女性も五千人以上は死んだことだろう。果して彼女らはあの様に雄々しく死んだのか、私としては泣き叫ぶかよわい女性の方が好ましい。その時代に生れていたら多数の生首コレクションを持っていたのだが。

ところで、そのモルガンは、「パリのジャンヌ」ではドイツ軍に反抗し、最後に銃殺される感心な（処刑マニヤには）娘になるが、場面はあらわれず銃声だけとはつまらない。しかも止めの一発を後頭部に射ちこむ筈なのに、どうしたことが聞えてこなかった。或は最も確実な止めとし、首をかき斬ったのかもしれない。勿論晒し首となるわけだ。

銃殺と云えば「遠い道」ではいきなり女スパイが刑場に立ち、冷雨ふるなかバツタリと倒れるシーンから始まった。この調子ではさぞや何人も死ぬのだろうと期待したが、主演のドーン・アダムスは折角捕って、絞首刑か銃殺かと楽しませたのも束の間、独軍将校の同情（余計な話だよ、全く）を買って、ままと逃げてしまう。同じスパイ映画で主演女優が仲間の二人と共に機銃でバタバタと片付けられるものがあつたが、残念なことに彼女は美人とは云い難かつた。

歴史ものではしばしば首を刎ねられそうになる場面がでてくるが、ヒロインたちは落ちついたもので、怖れることなく刃の下に首をさしのべる。だが当り前の話で、必ず助かることになっているから世話はない。たまには助けの手がおくれて、血しぶきと共に首がころがりおちるのを見たいものだが……。

「アッチラ」でソフィヤ・ローレンがオッパイを鮮血に染めて死んでゆくが、首はとられずにすんだ。尚この映画ではファースト・シーンで両手吊りになった美女の胸に矢がつき刺さる。

火あぶりは割にあるが、タイトルに名も出ないその他の多勢組が遠景で焼かれる程度。

バーゲマンの「ジャンヌ・ダルク」も少しばかり火につつまれ、煙にむせるだけで、あとは人形となるのだから問題外。ハリツケもまたしかり。

テリー・ムーアの「私は何故死なねばならぬのか（死刑になって）」は、電気イスに縛りつけられた美女の、絶命に至るまでの一分間の回想である。両脚をひろげて縛られ、ストッキングは足首までずりおとされて、むきだしになったふくらはぎに、電極のついた海綿をあてられる。いよいよ鉄の帽子をかぶせられた時、彼女の脳中に去来するものは何であらう。巧みな計略の末、あの世に送ったライバルの断末魔の姿。死刑を宣告した裁判官の顔。そして待ちぬいた減刑の知らせがとどき、無罪となって自由な世界へと帰ってゆく。ここまで想像が及んで彼女が思わずニコリほほえんだ時、非情のボタンが押され彼女の回想も願望も一瞬にして終りを告げる。

間もなく鉄の帽子の下からはもやもやとうすい煙がたちのぼり、哀れな彼女は二度三度と強直をおこしたのち動かなくなる。その身体も次第に褐色に変じ、やがて炭火し、遂には灰となって消えてしまう……但しこの映画日本にはこなかったし私は見ていない。従っ

て後半は私の夢であります。（失礼）

「悪魔の島」のメリー・マーフィは死刑になることは間違いない。映画のなかでも「お前のかわいい頸にロープが喰いこむ姿が目にかぶ」と云われる位。護送車で刑場におくられる場面で終るので、以後は前と同様想像となる。

多分彼女は泣きわめきながら絞首台にひきあげられ（こうでなくては面白くない）この世のものと思われぬ悲鳴をのこし吊り下る。そののちも長い間ジタバタもがきながら死んでゆくだろう。とにかく恐怖と苦悶のあまり死体をあらためてみたら子宮がはみでていた女性もあつたという。（実話である。一九三〇年のエディス・トンプソン）

「ノートルダム」のせむし男では、ジイナ・ロロブリジタが絞首刑を宣告される。原作ではそのまま執行され、もがき苦しむつつ死んでゆくのだが、この映画では一度は助けだされ、結局は背中矢をうけて絶命。首にロープをまかれズルズルと引きづられる。一応は見ごたえがあつたが、宣告通りこの死体を絞首台に吊してもらいたかつた。それでも恋人と結ばれる米国版よりははるかにまさる。

十年ほど前流行した「飛びだす映画」でギ

ロチンに首をさしこんだ人形がおかれてあり、見物人がその前に立った時、斧が落下して、首がコロコロとこころがるわけ。斬口に赤インクでも入れておいて、お客の方に噴きだす様にしたら尚面白かったろう。人形館が火事になり、アントワネットやジャンヌが火につつまれ焼けおちる方が興味があった。

「過去を持つ愛情」では、フランソアーズ・アルヌールが夫殺しとなる。彼女はおそらくギロチンにかけられることだろう。こんな想像は実にたのしい。

その他「世界の夜の歴史」にもギロチン死刑があるし、「禁じられた世界」では僧院とおぼしきところで、今まさに美女が絞首刑になろうというスチールがあった。首にはロープがかかっているし、黒覆面の刑吏がその一端を握り、一方では祈りがあげられている。まさか助かったりはしないだろう。また獄舎の窓から逃げようとした女囚が、おヒップがつかえて出られずに苦心しているスチールもある。発見されたら当然死刑になるわけだ。もう一枚はオッパイに銃口をおしつけている場面だから嬉しい。早く上映してもらいたいもの。

この辺で西部にとべば、「私刑される女」

の題名が気に入った。しかしよく考えてみれば、私刑されるであって、されたではない。原題も過去形でないから、助かるには決っている。予想通りヒロインは後手に縛られ、裸馬にのせられて大木の横木の下に引かれ、首にロープがまかれる。

「十三人の女死刑囚」だったら、いとも簡単に吊してしまい楽しませてくれるのだが、この映画ではここで救いの手があらわれる。ただこれが恋人でなくライバルの女性なのがミソで、救出に失敗して二人仲良くぶら下れば申し分ないのだが、万事めでたく（こちとらにはつまらなく）ザ・エンド。

「早射ち女拳銃」は短篇だが、スチールをみると女同志の格闘もあるし、主演でない方の女優が数人の男に捕まり、首にロープをまかれるものがあった。悪女役なら吊られたかも知れない。但しこの映画は一日違いで見そこなった。

「死の谷」では強盗団の一員ヴァージニア・メイヨが、刑吏たちと射ち合って、無数の銃弾を浴びて蜂の巣と化す。捕まれば当然絞首刑だから、彼女の死体は町にはこぼれて晒されたのか、それとも首だけを獄門に梃けて許したのか。いずれにせよ、彼女ほど「壮烈

な最期」をとげた女優はでない。

・ 惨刑では「エロデ大王」のシルビヤ・ロペスが石打ちにあう。主演でも殺されるのが欧州映画の有難さで、白衣を着たまま、赤髪を長く肩から乳房までたらしめた美女が、ギザギザの石をたたきつけられ、顔もわからぬ程にされてしまう。私なら顔は狙わず、最後に首をかき斬るのが……。

以上外国映画からあげましたが、どなたか日本映画を引き受けてくれませんか。山本富士子の女死刑囚など考えただけで、ゾクゾクするのですが……。

ところで山口淑子即ち李香蘭が実際に死刑になりかけた話を知っていますか？ 終戦時中国軍に捕われ、日本人という事が明らかにされていなかったもので、漢奸として銃殺を宣告されたのだそうです。銃殺といっても、その後死体を吊したり、首を斬って晒したりしたのですから、あまり有難い話ではありません。いまや幸福な家庭人となった彼女、さすがの私も、助かってよかったと思っております。いや、ホントです。

(終)

妖

異

女

斗

美

八

景

佐藤健児

はしがき

私は、かつての「本誌」に「女腹切八景」が続きもので出され、胸を躍らせながら次号の発売を待った経験がある。

そこで、近頃の女斗美、女生首ブームから「女斗美八景」を書いてみた。拙文でよく描写されていないが採用になれば、次のような計画で第四景以下をお送りしたい。

第四景 女の決斗
第五景 月姫討死
第六景 新編笠松峠

第七景 アマゾン女軍始末記

第八景 静御前の最期

配役は読者のイメージを助けるつもりで附記したが、さしさわりがあれば、除いて結構です。尚、次号の「妖異女斗美八景」は、

第三景 徴側、徴式の叛乱

第一景 討たれお百

配役 お百……小畑絹子

深雪……北沢典子

「すりやあその勝負に妾が勝ったら、死刑はおとりやめになるのですか？」

「さよう、死一等はたしかに減ぜられる」

「まさか、お瞞しになるのじゃないでしょうね。向うに男の助太刀をつけるとか、そんなことなら、おことわりでござんすよ」

「そんなことはない。お上のなさることだ。尋常の仇討であることは、深雪にもいい含めである。返り討ちになればそれまで。そうでなければ、大罪人に対する仇討など許されるはずがない」

「それなら相手になりますさ」

お百の胸はなぜか怪しく躍った。

佐竹家乗っ取りの隠謀が露われて、一網打

尽にされたのは文政二年秋のことであった。過去の数々の罪業からも、姉妃のお百の死罪は、免れようもなかったのだが、ここに異例の事件が持ち上った。

というのは、お百の手にかかって果てた佐竹藩の家老茅野三右エ門の娘深雪というものが、父の仇討ちを願ひ出たのである。その届出はお百の捕縛以前に出されて居り、それには仇の名をお百とは書かれていなかったが、それは殿様の愛妾であることを憚ったのであり、またそうであると睨んだからこそ、彼女は身の危険を顧みず、お百附きの侍女となつて、その身辺を探つたのであつて、法的に違反するものではないが、仇討ちとあれば万一お百が勝つた場合、それでは死刑というわけには行かない。そのことを危ぶる者もあつて、許可は難航したが、深雪の武芸上手を信用するものもあり、一方にはお百の無類の容色を惜しむものもあつて、遂に未曾有の女仇討となつたのである。

場所は城下外れの桔梗ヶ原と呼ぶ草原。そこに竹矢来をこしらえて物々しい固め。しかし、討つも美少女、討たるも美女という滅多に見られない真剣勝負を逃すまいと、外は黒山のような人ばかり。時刻至つて、合図の

太鼓と共に、東西のとばりを払つてあらわれた二人の美女。

片や、天下にかくれもない妖婦姉妃のお百。当年二十二才の妖艶な肢体を、半分が白、半分が紫という粋な着物につつま、キリリと締め上げた黒帯には、細身の一刀をたばさんでいる。祇園の遊女の出だけあつて、その美貌はまぶしい許りだが、長の牢住いに、やややつれを見せて、顎や肩先がホッソリと光り、乱れ髪が白いうなじにかかつているのも、かえつて凄艶さを増している。

「こんな別嬪が仇持ちとは……」

と見物人の間にため息がもれる。しかし、こなたの茅野深雪も、典型的な秋田美人。年は十八。お百とは対照的に、まだ成熟し切らぬ女体に、純白の装束をまとい、鉢巻も甲斐々々しく、一尺八寸程の一刀を右手にピタリと体をきめたさまは、流石に武家の娘らしい気品に満ち、勇しいとも美しいともたえようがない。

検使への礼が終ると、秋風をさしはさんで対峙した二人。まず深雪が涼しい声で、「賊婦姉妃のお百、よく聞きや。先に多くの人を殺した身で、お家横領の大罪を重ねたばかりか、わが父茅野三右エ門を、よくもだま

し討ちにしやつたな。今日こそは、この深雪が、父を始め多くの人の無念を、この一刀に霽してくれるから、覚悟しや」

と名乗りかければ、不敵のお百は、せせら笑い、

「そちこそ、卑怯な手段を用いて、我等一味を滅ぼせし人非人、仇呼ばわりは片腹いたし。おやじ同様、お百の刀の錆にしてくれるから、性根をすえてかかつてきや」

とキラリと刀を抜く。そして、そのまま構えもせず、

「エイヤッ」

と、はなから激しく斬り込んでいった。お百はもともと遊女の身、本格的に武芸を学んだわけではないが、小娘の時から、人を殺し危急の場を斬り抜けて、実戦の経験を知っているから度胸はある。武士の娘とはいえ、乳臭い深雪など何程のことあらんという気だし、まして自分の腰元として、虫も殺さぬ顔をして近づきながら、隠謀をあばいた憎い女と思うから、深雪さえ殺せれば、後はどうともなれという捨身の突撃。その勢に機先を制せられたか、深雪は後へ後へと退るばかりだから、事情を知る家中の者は気が気ではない。



り。そして返るにも、横へ動くにも、少しも乱れることのない太刀さばきに、

「これは……」

とお百、始めて不気味さを感じたが、既に騎虎の勢

「くそっ！」

と更に二度、三度烈しく斬りかかって見たが、ヒラリ、ヒラリと交す深雪の体の軽さ。

力あまったお百が思わず泳ぐ隙、今度は猛然と鋭い反撃が来た。第一刀は腰へ、第二刀は肩へ、そして第三刀は足へ。

「あ、アアッ」

夢中で受け流してとびのいたが、お百は既に全身汗びっしょり。

（しまった！）

こんな手剛い相手とも知らず始めに全力を使い果した失敗に、もう遅い。息つく間も与えず、ヒタヒタと迫ってくる相手の太刀先。

「えーい、何で、こんな小娘如きに！」

今は死者狂いになったお百。髪ふり乱して

凄じい形相で、無二、無三に刀をふるう。頼むは相手と、おのれの体力の差ばかり。と知ってか知らずか、その刀をガッキと深雪が受けとめたので、得たりとばかり鏝ぜり合いにかけて非力の乙女を押し伏せようとする。その死力に思わず深雪の小手も退って、お百の太刀先が、その髪にふれたので、

（アッ殺られる！）

と誰もが思わず目を瞑った一瞬、

「とうっ！」

深雪の口から発した烈帛の気合、押し返すと見せて、咄嗟に我から後へ倒れざま、サッと横に払った一刀。深雪にしても決死の技であったが、最後の全力を外されて、前のめりになったお百には、交せようもなかった。

「ワーッ」

という絶叫と共に、したたか脇腹を斬られて一瞬棒立ちになったが、右半身の白い着物の下の方が見る見る紅に染って

「ムムッ……」

絞るようにうめくと、白い咽喉をのけ反らせて、ドッと仰向けに打ち倒れてしまった。

「やった！」

「見事!!」

目を開いて見て、始めはどちらが勝ったか

しかし、我から仇討ちを願いだした程の深雪とて腕に覚えはあったのこと、むしろ、相手が競って来ることを予め見抜いていたかのよう、逆らうことなく柳に風と受け流すばかり。

分らなかった見物人も、スイッと立ち上った深雪の颯爽たる姿を見ると、思わず賞讃の声を上げる。それは毒婦が倒れた喜びというよりも、あまりにも鮮やかな乙女の剣技を讃える声であった。

深雪はそれでもなお油断なく、地上にのたうつ敵の女体に剣を向けていたが、もはや、刀を握る力のないのを見届けると、懐紙をとり出して、おのれの刀の血糊を押し拭い、パタンと鞘におさめると、その代りに乳の下にたばさんだ懐剣をキラリと引き抜いて、ツカツカと歩み寄り、断末魔にあえぐお百の豊かな胸のあたりを膝頭でしっかとふんまえ、左手で、その襟をぐいと引き上げると、右手の懐剣をなまめかしい手付で、ピタリと雪白の咽元へおしあてた。

「どうじゃお百、悪業の報い、思い知ったか。亡き父への手向け。そなたの首を深雪が申し受けまする」
「アレー助けてー」

さしも胆太い妖婦も、今は脳神乱れて、哀れな悲鳴を上げるばかり。

「父上の霊も御照覧あれ、エイッ」
右手に力をこめて、そのままグッと突き下せば、鋭い刃先はプツリとしなやかなお百の

頸筋を貫いたから、なんでたまろう、

「うーん」

と一声、さすが悪運強かった姐妃のお百も、孝女節婦の手に最後の止めを刺されて、二十二才を一期に息絶え、その豊艶な死体を衆目の前に曝してしまった。

勝った深雪は、しばらく激斗にあえぐ胸の鼓動をおし鎮めながら、美しい仇の死顔を眺めていたが、やがて大の字になっているその死骸にうちまたがり、左手で顎をおし上げ、右手の懐剣をその下へさし入れると、鮮かな手口でクイクイとお百の首を掻き斬ってゆく。そして纖手一閃、最後にバサッと鈍い音と共に胴を離れた、お百の首が地上に転る。

かくて深雪の仇討は、見事に成就したのだが、流石に乱れ髪を噛みしめたまま瞑目している。凄艶な美女の生首に、見物人は暫くは固唾をのむだけであったが、やがてその血したたる仇の生首を高く掲げて、

「茅野深雪、首尾よく仇お百を討ちとりましてございまする」

と呼ぶ深雪の涼しい声を耳にすると、再びどっと賞讃の声上がるのであった。

更にお百の首級は、深雪の手で検使の役人

の前に供えられる。役人は扇子を開いて、深雪の働きを讃えてから

「そなたの働きで毒婦は滅びたが、仇討は仇討、罪人は罪人じゃ。首級はそなたのものだが、彼女の胴殻は当藩で預かり、悪の見せしめに磔に致すから、そのよう心得よ」

命令一下、お百の胴体は磔になって城下にさらされた。首を斬られて磔になったのは、お百が始めてで、女人の仇討ちと共に後世の語り草になったのである。(第一景終り)

第二景 現代女仇討

配役 岩田志津……岩下 志麻

岡野マリ……岡田茉莉子

若い警官河原輝男は、麻薬事件の捜査を命ぜられて、暗躍しているうちに、悪人一味の岡野マリという女の美貌にひかれ、遂にはその素晴らしい肉体のとりことなって、警察を裏切った挙句、結局はマリの手で無惨な殺され方をしてしまった。

河原の許婚者で婦人警官であった岩田志津は、この事実をつきとめると、おのれの手で愛人の仇き討をしようと決心し、和服の袖に懐剣をしのばせて、マリのアパートを訪れてドアをノックする。

そうとはつゆ知らぬマリは、これも白綸子の寝巻というあだ姿で、寝ぼけ眼をこすってドアを開ける。

スーッと身体を部屋の中に滑らせた志津はキッとマリを見すえて、

「お前の毒手にかかって最後を遂げた河原輝男の妻、志津。夫への手向けにお前の首を貰うから覚悟をおし」

とキラリ懐剣の鞘を払えば、さしも胆太いマリも驚愕のあまり

「あ、あの河原の……」

としばしば身体をわななかせていたが、助けを呼ぼうにも、人はいないし、絶体絶命。

しかしよく見ると、まだ少女臭く、華奢な身体の相手と知って、今度は捨身に居直って自分も抽出しから短刀をとり出すと、

「フン、小娘の分際で、今どき仇討ちなんて笑わせるでないよ。妾の首が取れるものならとってごらん。こちらこそ、河原同様なぶり殺しにしてくれるから」

と、やにわにひきぬいた白刃をかざして斬ってかかる。かくして人知れぬ深夜の آپトの一室で、美人同士の斬り合いが開始された。初めは不意をつかれた上に、年増の相手のポリウムに圧倒されて危く見えた志津だっ

たが、最初の揉み合いから逃れると、もともと武芸の心得もあり、毎日訓練を受けている婦人警官の彼女にバーのマダムが敵し得る筈はない。その鋭い切先に、たちまち手や肩などに傷を負わされたマリは、すっかり戦斗力を失って、右へ左へと逃げまわるばかり。逃しはせじと追いつがる志津だが、流石にあせっているのか、椅子につまづいたり、床に足を滑らせたり、しかも組みつくと、相手のまだ弾力ある肉体に反撃されて下になったり、しばらく妖艶な格闘が続いたが、最後に力一杯つき放されたはずみに、寝台の端にしたたか背を打ったのがマリの運のつき。

「ウーン」

と、うめいたきり起き得ないでいる所を、エタリとその襟がみをつかんで投げるようにベッドの上に押し倒した志津は、すかさずその下腹のあたりに馬乗りになってしまった。

「アレッ」

と、マリも必死のあがきに手足をばたつかせたが、皮肉にも豪華な羽根蒲団はスッポリと彼女の体重をつつんでしまって身動きが出来ない。志津は悠々と左手でマリの右手をとって胸の上に押しつけると、右手の皎々たる懐剣をふりかざして、

「さあ妖婦！ 覚悟をおし」

と、止めをくれようとする。さすがのマリも、死を前にしては、見苦しい程にわなないて、

「助けて！ 命だけは助けて！！ わたしが悪かった、どんなにしてもあやまるから命だけは助けて頂戴！！」

と、金切声で哀願する。志津もこう組みしいて見ると、丈なす黒髪に掩われた雪をあざむく美貌や、はだけて襟からのぞかれるきめ細かい玉の肌に

（これ程の美女を……）

と心鈍ったが

（いやいや、こういう女こそ、外面如菩薩、内面如夜叉、どんな男もだまされてしまうのだ。目を瞑って、ここで討ち取ってしまったねば……）

といみじくも自分に言い聞かせて、

「ようくお聞き。お前の生命を助けても、輝男は戻って来ないわ。輝男もあなたと同じように助かりたかったでしょう。今となっては夫の受けた同じ苦しみを貴女に与えるだけが、せめてものわたしの慰めです。さあ、この恨の刃をお受けなさい」

静かに引導を言い渡すと、右手にグッと力

をこめて、マリのプリプリとゴムマリのように弾んでいる左乳房の下へ、グサリと白刃を突きおろす。女ながらも手練の一刀は、あやまたずマリの心の臓をブツツリと貫いたからなんでもたまるう。

「キャッー」

と帛を裂く悲鳴と共に、しなやかな彼女の身体が、一旦弓のように反ったが、やがて手足をブルブルとけいれんさせたと思うと、

「ウーン」

と一声、深くうめいたまま、ガックリとこときれてしまった。

（討った仇を―）

グイと懐剣を一振りして完全に相手を仕止めたと見た志津は、引き抜いた血の刀をふこうともせず、暫らくはそのままの姿勢で、激斗の喘ぎを鎮めていたが、やがて我に返ると、天女の眠りにも似たマリの死顔をシゲシゲと眺めて、

（憎い仇と思ったが、こうやって討ち取って見るとほんとに美しい女。輝男さんが、とりこになったのも無理ないわ）

細く長い二本の指で、仇の女のすべすべした顎をまさぐりつつ、その首を斬ろうか斬るまいか、ときをいっししていたが、

（惜しいけれど、わたしの初一念を通して、この首を輝男さんのお墓に供えなくちゃ）

キッと表情をひきしめると、馬のりになったままの姿勢で、血糊のついた懐剣を今度は逆手に持ちかえると、その鋭い刃先を深くくびれたマリの顎の下へさし入れた。そして「マリさん、お首頂戴しますよ」

とはっきり呼びかけて、左手の掌で顎を押し上げるようにすると、右手に力を入れて懐剣の柄を左右に動かしながら、ジョキジョキと女の首を掻き切り始めた。見る間にドクドクと鮮血が噴出して、白い志津の左手やマリの白い寝衣、シーツ等を紅に染めてゆく。

やがて、ガツツと骨を断った音がしたと思うと、切断が終ったのか、ゴロリとマリの首が横にかしぎ、同時にホーッと太い息をついた志津は、紅潮した額や頬の汗を袂でおしぬぐう。左手で豊かな黒髪を掴んで、一旦その生首を持ち上げて見たが、

（おお重い―）

片手では無理と知って、馬乗りを外して、寝台を降り、今度は右手を顎の下にそえてグイと持ち上げると、

「輝男さん、お喜びなさい。憎いマリをとうとう妾の手で首にしましたよ」

言いながら、それを部屋の中央にある、螢光灯の光に掲げて照し見るのであった。

たおやかな美女が、青白い光の下に、これ又美女の死首に見入っている姿は凄いと、美しくいとも喻えようがない。

やがて我に返った志津は、バス・ルームに入ってマリの首をすっかり洗い清めると、彼女の新しい下着をひっぱり出して、それにおしつみ、小脇にかかえると、闇の戸外にいくこともなく立ち去ったのである。

（第二景終り）

本誌既刊号在庫について

本誌の既刊号は、別項の本誌既刊号在庫一覧に掲げてあります通り、在庫しておりますが、残存部数が僅少ですので、お早い目に御注文願います。売切れになりました分の補充は残念ながら出来かねます。限定版第一弾から第四弾まで全部売切れ、サデイズム特集号第一集から第四集まで全部売切れです。「悦虐写真と悦虐小説特集号」定価三〇〇円（現在は割引き中止）第五集は売切れですが、第一集から第四集まで在庫しております。貴重な文献ですから、売切れにならない中に、是非お求め下さるようお願いします。

〔モデルの手記〕

野 晒 し

大 塚 啓 子

一、午後、夜

ペンの方をすっかり御無沙汰してしまいました。でも私のつたない二篇「いけにえの幸福」、「冥府の広場」によせて下さった皆様

のあたたかいおことばを、私は大へんうれしく思っております。そして私の空想はふたたび縄目の下で、みすばらしいつばさをひろげるのでございます。

あるいはそれが、皆様の激励に支えられた

編集部の方がたの、私に対する縄目があれ以来めっきりきびしくなりましたことが、私の貧しい脳髓からしぼり出した空想であって見れば、今こうして活字にして見ますのも、私の義務に近いものかも知れません。



奴隷の手記にふさわしく、私はこの一文を
 高手小手の姿で原稿にうつしてお見せしたく
 いろいろと工夫して見ました。まず、縛られ
 たときに口述し、編集部の方に筆記していた
 だくという方法ですが、高手小手の女の能弁
 というのも、おかしいものに思われます。次
 に後ろ手にマジック・インクを持って、さし
 出された紙に書くという方法。これは縛って
 下さった方と向かい合いになって縄目に陶酔
 している状態ですから、たえだえの乱れた文
 字の、文字通り羅列となりましょうし、枚数
 も従ってかなり多くなって、あるいはマニア
 の方のコレクションの末席に加えていただけ
 るかも知れないとも考えましたが、縛られて
 いる私はよいとして、というより縄目で両手
 がしびれて書きにくく長い時間がかかる程、
 私は本望なのですが、紙をおささえになる編
 集部の方がたの忍耐が大へんと思われま
 す。
 でももし、そんな高手小手の女の筆蹟が欲
 しいとお思いになる奇特な方がおられました
 ら、私はきびしく縛られて、このつたない一
 文を、もう一度びんせんにマジックで書いて
 見たく思っておりますから、編集部と交渉下
 さいませ。

そういう次第で、私は今この一文を、ある

借り切ったアパートの一室——といっても事
 実上は獄舎ですが——で、きびしい足枷と、
 普通の手錠という状態で書いております。編
 集部とのお約束で、この一文を書き上げたら
 錠をはずしていただけるのです。
 錠をはめて下さったAさんが、部屋を出ら
 れるときに

「大塚さんのペンじゃ三日はかかるな。水と
 尿瓶は用意しておいて上げたけれど、浣腸の
 方は充分やってきたんだろうね」

と念をおされました。私は少女のように赤
 面致しました。自分からいい出したことな
 ら、やがてやってくるひどい空腹と、手錠を
 はめられた私の手のペンのレースがはじまり
 ます。こう書いておりますうちに、チャリ
 チャリと鳴る手錠の音色にふと惹き入れられ
 て、そのレースに私は負けて見たい、しかも
 大差をつけられて負けて見たいという誘惑に
 おそわれるのでございます。

それに私が今、身にまわっております布
 も、想像していただけると思いますが、春先
 にしては異常なこの高温が続いている中はよ
 いとして、急に寒くなったらという恐怖とな
 り、このレースで絶望的な立場の私に二重の
 ハンディとして、からだを責める足枷よりも

むごく私の心を責めて参ります。

いよいよスタートの号砲が鳴ります。私は
 ライバルの空腹と同時にスタートするかわり
 に、畳の上に横たわって悶えて見ます。

「無鉄砲な約束だったわ」

それにAさんに手錠をかけられたときは、
 きついと思いませんでした。時間が経って
 見ると、手錠のかけ方が少しきつかったこと
 がわかります。もう一穴ゆるくはめて貰うん
 だったと思いながら、錠を手首に沿って少し
 ずらせて見ます。元の位置には、もうかなり
 な食い込み跡がついています。

でも手錠のきついせいで、陶酔がやってく
 るのが早いようです。もう今夜はこれだけ書
 くのがせい一ぱい。私はこれから、私を
 激励して下さい読者の方がたが、一人ひと
 りドアのすきまから風のように部屋におはい
 りになり、私をふみにじり鞭打たれる想像の
 中でねむりにつきます。省線電車が鉄橋を渡
 るらしい、カタカタッ、カタカタッという、
 叩くような響きがかすかに聞えて参ります。

二、朝

夜が明けます。毛布一枚でぐっすりねむっ

たところを見ますと、夜はそんなに冷えこまなかったようです。でもさすがに夜明けとあって、私は少し寒さを覚えて急いでペンを取ります。手首の痛みはかなりひどくなっております。両手と手錠を上にして、お腹を圧迫する姿勢で寝たせいで、昨夜の夢はかなり恐ろしいものでございました。

絞首刑にかけられる前日、山の中の一軒家で静養を許され——支離滅裂ですが——私は窓辺にもたれておりました。軒の上に紅色の桜や黄金色の花が雲のように、太陽の光りが一面にひろがる青空をバックに浮いて見えます。明日の処刑のことを思い、何とか助かりたいと考えていた私は、おかしいことですが今自分は夢を見ているのだと気づきます。夢には色彩がないと聞かされていたけど、ちゃんとあのように紅、黄、青と三色とも見えるわ、などとおかしなことを考えたりしておりました。するとどこからやってきたのか、一

羽の傷ついた小鳥が、その軒先にやってまいりました。そして力がつきたのか、パタリと庭におちてしまい、私の方を見てあがくのです。私は助けようと思って起き上ろうとしました。そのとき桜の木かげから、見るも恐ろしい黒人があらわれ、その小鳥をつかむと一

口にたべてしまいました。今度は私の番です。私は夢中で逃げようとし、そのとき手錠と足枷に気づきました。そしてグッショリと汗にぬれて目をさましたのでございます。

外からのぞきこまれないために、緑色の濃いカーテンがひいてありますので、その両はしから僅かに陽光が洩れてくるばかりで、どの程度夜が明けたのか、はっきりといたしません。電灯の間抜けたような光線が、よけい空腹にこたえます。原稿を書き上げるまで、かけることを禁じられている机の上の電話が、私をあざわらっております。

昨晚腰かけた椅子まで、からだをくねらせて行く気力もうなく、これだけをねそべってやっと書きました。午後までふたたび、空想に悶える肉塊にかえろうと怠惰に考えて見ます。

三、午後

手首の痛み、空腹の責めはもうかなりひどく、足枷と喝き（机の上の水を飲もうとすれば、木に登るいもむしのような努力が要ります）が、責め手にまわります。

早く書かねばなりません。しかし編集部ととりきめをする前まで、よいアイデアに思え

たものが、今は皆つまらなく思えます。虫歯のときに勉強するようなものでしょうか？もうこうしてはおられません。ガムシヤラに書いて見ます。読むに耐えない手記になりましたら、お宥し下さいませ。

四、ハリツケのとき

昨夜の夢の黒人と小鳥を思い出し、それからあの、眼かくしをされてハリツケられたとき（五月号のグラビア写真です）、私がくらやみでさぐっていた空想をたぐって見ます。私は以前、冥府でハリツケにされる空想にひたっております。

冥府は「絶命する心配がない」、「拷問道具が山程ある」という二つの理由で、空想の処刑場としては最高の場所でした。簡単な無神（仏？）論さえあればよいのです。でも普通の有神論など持っていては、マゾ・モデルはやれません。

冥府に匹敵する処刑場はやはり「昔」でしょう。昔は人の命が犬よりも、あるときは野菜よりも軽く見られました。切り捨てごめん悪代官が鑑賞のために女を責める時代でございました。冥府の空想と違うのは、死という要素がはいるので、空想が少し違った形をと

るという点でしょう。

さて現実の私も、モデルとして鑑賞のために、もう数年間責められておりますが、責め手は悪代官でなく、責められる私を賞めて下さる方がたです。その幸福感から私は——ハリツケ台の上で考えたことでございますが——悪代官の責めよりもむごかった『野晒し』にかかってもよいと空想するのです。

社会が戦後、豊かで平和になるのに、ほとんど比例したようにサド、マゾの夢が発生しましたことは、読者の皆様の方がよく御存じでしょう。サド、マゾは文明社会でないと美しい花は開かないものと思います。だから貧富の差のはげしかった昔の農村の、庄屋の一人息子などすることもなく、ほしのままにサドの夢を現代の読者の皆さんのようにひろげていたと思うのです。

そういう詩人は、親の命令——となり村の庄屋の娘など貰う気になれず、今の私のように、いやしい身分の娘をひそかに愛して、というより責めて見たく思ったに違いありません。ところが昔のいやしい娘に、マゾの夢が理解できるはずがありません。はげしいギャップのために、当然庄屋の息子の愛情がさめてきて、彼は食うに困ったり、親の治療費の

ためならどんなことでも我慢する女を、金で買って折檻したに違いありません。庄屋の息子の愛情は本当に私から、その女に移ってしまします。

そのときになって私ははじめて、男女の愛情の秘密をさとするのです。その寒村でサド、マゾの理解者が一人から二人になったわけです。しかし愛人の愛情を呼びもどす方法は只一つ、それは愛人が責めている女よりも、はげしい拷問を受けている自分の姿を、彼に見せる以外にないのです。

私は野荒しを決心します。策謀はつきつぎとのびて行きます。満月の夜をえらぼう。二人連れで酔って歩いている男たちの面前で畠を荒らそう。一人だけだと許してくれる恐れがある。腰巻きは、できるだけ濃い紅を。もうこうなれば明日闘う牛の姿を思い浮かべながら、真紅の布を撰んでいる闘牛士の心境に近いと申せましょう。

自信に充ちた足どりで、私はある晩、大きくふくらんだ瓜を二つ盗みます。私をねじ伏せた男たちが、昂奮をかみ殺して叫びます。「オーイ、野荒しをつかまえたぞー」「大塚のお啓が野荒しをやったぞー」声は近い山や遠い山からこだまとなってか

えってきます。身分のいやしい私には、姓などありませんから、大塚在のお啓としておきます。

「許してッ、許してッ、もうしませんから」そのセリフも、からだをねじて逃げようとするポーズも、本心は牛を昂奮させようとしている闘牛士のそれです。ワラワラと走り出てきた村民の一人から、その闘牛役の男の一人の手に細引きがわたります。キリキリと縛られて行く私の肩に、腰にかつらの枝がさく裂します。

「ふてえアマだ。虫も殺さぬ顔しやがって」「目にもの見せてやるだ」「何をぐずぐずしてるだ。早くふん縛るがえだ」

断末魔の苦悶の中で、私は群衆の中に、一つの顔を必死でさがし求めます。あった！それは庄屋の息子の伊助の双眸です。あわれみをたたえて私を見下しています。理解はしてくれないが、まだ私を愛してくれている。私の苦悶がふいと天国に浮かび上がります。「ウッ、ヒイッ」

「何サ、瓜一つくらいで、どうしてこんなひどいことをするの。ヒイッ、もう許して、アアッ」

腰巻き一つの私を引き立てて行進が始まります。後ろで老人たちの声が聞こえます。

「若けえ娘っ子の野晒しは、わしは覚えがねえだ」

「おらはあるだ。おらが、七つのときじゃった。お妙という娘じゃったが、親の看病で目がくらんでなあ。可哀想に野晒しにされて二日目の晩に息を引き取っただ」

私は慄然とします。たった瓜二つと甘く考えていたのですが、若い娘にとって野晒しが死刑を意味することに気づかなかったのです。その私の恐怖に、もう一人の老人の聲が追い討ちをかけます。

「わしも、そのお妙の顔を覚えてるだ。そのお妙も、このお啓よりべっぴんじゃなかっただ。お啓は今晚一晚もつかどうかわからねえだ。せめてわしたちだけでも、責めなあ手加減してやるべえ。なんまんだー、なんまんだー」

私の計算は完全に狂っていたのです。私は気を失なって夜露のおりた野道に倒れてしまいます。たくましい肩にせおわれ、私は近くの墓地の入口に晒されます。頭から水がかけられ、いよいよリンチです。

その様子は現代でいえば何に一番近いでしょう。ロープにはがいじめになったレスラーを大ぜいの敵方が反則でいためつけている光景が一番近いでしょうか。しかもレスラーのきたえ上げたからだとは、比較にならないか弱い女のからだで、農具という凶器をとり上げるレフリーもおらず、反則はカウント三どころか、三昼夜にわたって公認なのです。ギョロリとした二つの目玉が近づいては、たえがたい苦痛を残して、次の目玉と交替します。同じ村の人たちと思っつき合っていた人たちの正体です。私はここまで書いて、ふと昨夜の夢の黒人の目玉を連想します。黒人は村民であり、暗黒の中世の象徴だったんだと気づきます。

血まみれになってのたうちまわりながら、私のおぼろな感覚が、ふと引き潮を感じたのは

「もういい加減にするだ。一日より二日、二日より三日、見物させてもらう方がええだ」という冷酷な計算からでした。

見張りが二人残ります。

伊助が歩み寄って私を抱きしめます。私の目は彼の帯刀にとまります。

「伊助様、おねがい。その力でうちを刺し殺

して欲しい。あんたの手にかかりたい」

「それはならぬ。たとえその見苦しい姿なりとも、もう一日生きのびてくれ」

「まあ、むごいことを。こんなあられもない姿でのたうちまわっても、美しいと見て下さりますか」

伊助の顔がしずかにうなずきます。

「嬉しいッ」

私のほほを、とめどもなく涙が流れます。

「それよりも啓、わしは明日は闘うぞ」

「伊助様、それだけはやめて。こちらに野荒しの非があること、二人とも命がなくなります。伊助様はもう一日私を眺めて、処刑のさまを語り伝えて欲しい。そうすれば二人とも生きられたも同じ」

理解したしるしに、伊助のほほに涙が光ります。キッと向きなおって下男を呼びます。

「与兵衛」

「ヘイ」

「そちはすぐ家へ帰って、三々九度の用意をしてきてくれ。そして又八をおこして、となり村の石屋へ行かせて、一番よい墓石を注文させてくれ。棺は寝棺がよい」

与兵衛の姿が消えます。伊助の聲がさらにとびます。

「お前らも遠慮しては、どうか」

「へい」

気おされた見張り二人もいなくなります。

伊助の手が私の縄をところとします。

「アッ、伊助様、それは解かないで欲しい」

「逃げるわけではない」

「そうじゃないの。縛られたままのうちは捧

げたい。ものわりの悪かったお詫びに」

「……」

静かなときが続きます。

「明日は村人は少しは気おされよう。そなた

が息を引き取るのは、あさっての晩と思う」

「おねがい。あさっては村人に頼んで、うち

に白い着物を着せてハリツケにして欲しい

の」

「なぜじゃ」

「今日と明日、高手小手のうちは捧げたら、

あさってはハリツケのうちは捧げたい」

「……」

伊助がうなずきます。

「その白い着物は少し破って、右の乳だけ晒

して欲しい」

「……」

「白い布で眼かくしも」

「なぜじゃ」

「伊助様のおかげで生きのびる一日。伊助様のお姿を見るよりも、眼かくしされた女の姿を伊助様に見せて上げたい」

「……」

「猿ぐつわは要らぬ。うちの泣き声を聞いて……」

はげしい口づけに絶句しながら、私はもう一つ言い残すことに気づきます。あえぎあえぎ

「もう一つお願い。今はこうして水入らずのさし向かい。これから夜明けまで責めて」

「よし」

伊助はスタスタと、近くの茂みへ歩いて行きます。そこから木を切る音、けずる音が聞こえて来ます。

(おわり)

これだけ書いて私は昨夜の夢の小鳥が私の方を見てあがいた理由に思いあたります。私がこのハリツケ台の上で空想したことは、つたないかも知れませんが、何一つ無理や不自然なところはないと思うのです。おこり得るいやおこり得たことを述べただけだと思うのです。日本の野晒し史をしらべることなど私にはできませんし、又しらべ方すら見当もつきませんが、埋もれてしまった数多い資料の

中には、このお啓のような女が必らず、一人より多いかも知れないくらい、いたに違いないと思うのです。そのお啓が夢の小鳥となつて私の方を向いてあがいたように思われてならないのです。私は今、前に合わされた自分の両手を後ろ手に思いなし、金属の手錠を細引きに変え、大塚のお啓をしのんでおります。文章の都合でべっぴんだなどと書きましたが、御不満な方は私より美貌のお啓を想像してやって下さいませ。

私の手首の痛みとはげしい空腹に気づきます。もうかれこれ夜の九時ごろでしょうか。天星社はもうしまっておりまます。私が許されるのは明日の十一時ごろになるでしょう。手錠、足枷をかけられてから四十五時間目、昨日の朝食をとってから五十二時間目にあたるわけです。天星社のために一こと申しておきますが、これは、私がいい出したことなのです。野晒しのお啓を実感して見たくて、こうして手錠、足枷をして貰い、食料もない獄舎に監禁していただいたのです。これから私はいもむしのように這って行って、机の上の水さしの水の残りを飲みほし、大塚在のお啓の裸身をせめても愛撫してやろうと思います。皆様おやすみなさいませ。

新連載サディズム小説

心 傷 た む 遍 歴

西 条 操

第二章 そのかみのこと (二)

(想い出を訪ねて)

「黙って二日も戻って来ないなんて、いけないじゃないの。心配したわ。それに、イヴェットだって可哀想じゃない？」

やっと帰って来たクロードディアを呼びつけて、ミシュリーヌは精一杯のきびしさで叱った。二つ年上の女中クロードディアは、年下の女主人に叱られてふくれて居た。

「おっしゃることは、それだけですの？ 七

年間もお勤めして、この位の勝手がさせて頂けないのなら、わたしお暇を頂戴しますわ」
安楽椅子にもたれたミシュリーヌの前に立ったまま、クロードディアは忌々しげに云った。

「そう。じゃ、残念だけど仕方ないわね。けど、これから、どうするつもりなの？」

「御心配には及びませんわ」

「そう。じゃ、少いけど退職金みたいなもの準備させとくわ。荷物を始末したらそう云ってね、渡すから」

クロードディアの顔に口惜しげな表情が走っ

た。

「それは、それは。ありがとう存じます。けど、うまくおやりになったのね。たった四年で莫大な財産をお貰いになったんですものねえ」

「まあ、何と云うことを云うの!!」

ミシュリーヌは、眉を上げて顔を引き締めた。

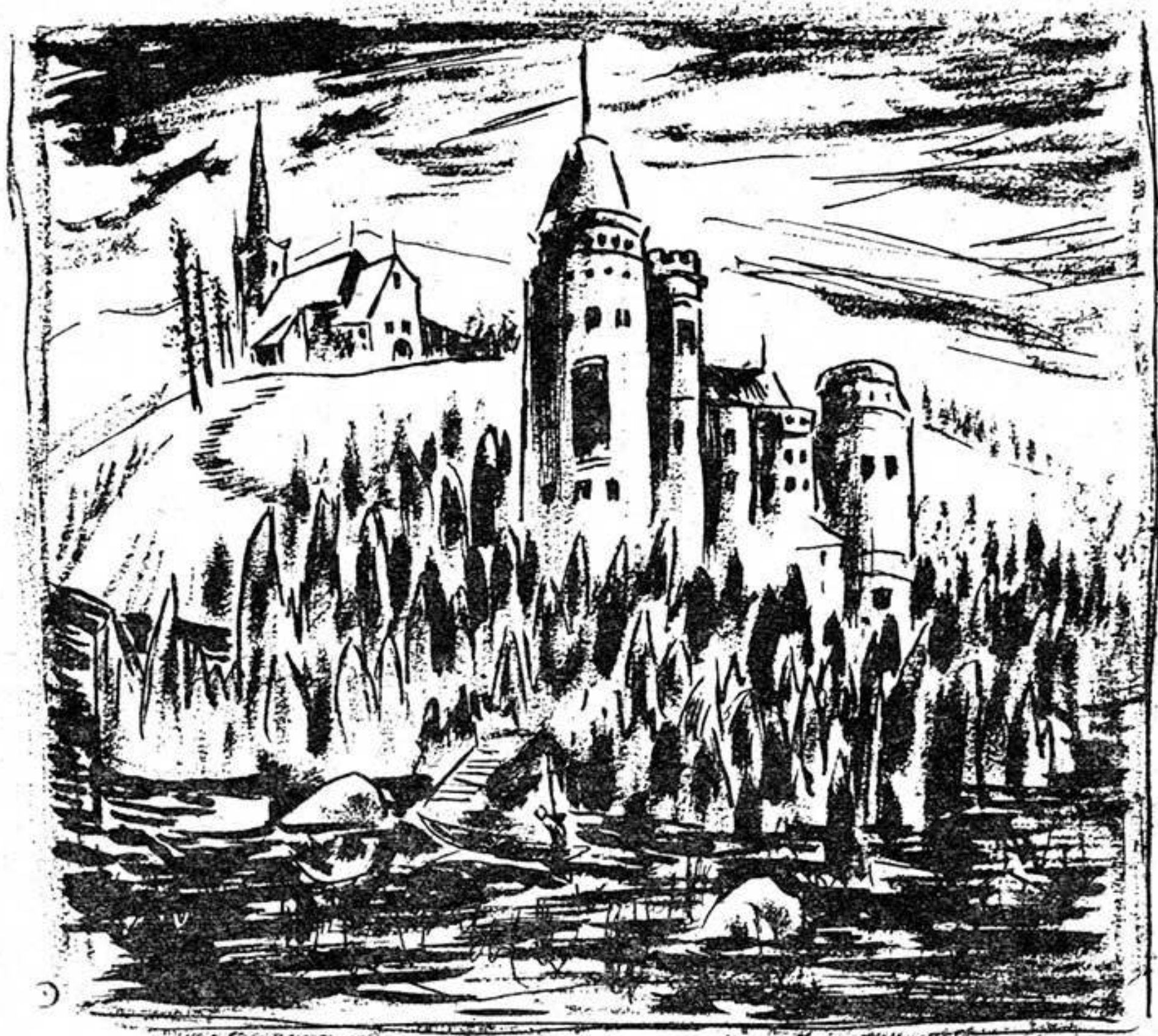
「ホ、ホホ。私だけじゃありませんわ。御近所の方々、皆そうおっしゃってられますの」
ミシュリーヌの頬が怒りに紅潮した。

「皆さん、おっしゃってられますわ。奥様が

若過ぎたので、伯爵様もお命をお縮めになつたんだって、それからね。あたし、あなたよ

う？」

驚きはやがて屈辱に変わり、ミシュリーヌ



り三年も早くから伯爵様にお仕え申し上げておりましたのよ。教えて差し上げますけど、あなたがお見えになるまで、お情けを頂戴したこともございますの。どう？ びっくりなさった様ですわね」

引き緊まった四肢を持つクロードイアは、赤い唇から白い齒をこぼして誇らかにそう云う、ミシュリーヌは驚いて眼を丸くした。

「それ、ほんとに嘘と思われるなら、それでもいいですわ。その頃の御日記は、焼いておしまいになったし。けど、此の四年間というものの、あたしがどんなに口惜しいと思ってたか。よっぽどお暇を頂こうかと思ったんですけど、旦那様がお気の毒でございましてねえ。何分、奥様は未だほんのネンネでいらっしゃるし」

「お黙りッ」

ミシュリーヌは、ふくよかなこぶしを愛らしく握り締めて叫んだ。

「ハイ、ハイ。ホ、ホ、ホ。けどねえ、其の綺麗なネンネが、なんとまあ赤ちゃんを産んで、その赤ちゃんを始末して何喰わぬ顔で伯爵夫人に納まってしまったんですものねえ」

ミシュリーヌは愕きに息を呑んで絶句してしまった。

「ホ、ホ、ホ。びっくりなさった様ですのね。お隠しになっても駄目、あたし知ってましたもの。しかし、云いふらす様なはしたない真似はしておりませんから御心配なく。では」

背をまっすぐ立てて出て行くクロードイアを、ミシュリーヌは呆然として見送った。

「四年間我慢して来たことを云ってしまっ

気がせいせいしましたわ。いつか又お会いする時には……」

扉に手をかけて振り返ったクロードディアは大きな張りのある眸をあげてキラリと光らせた。

「今度どこかでお逢いする時には、少くとも対等の口を利ける様になつてゐるつもりですわ。出来ることなら、あなたを立たせたままで話するわ。四年間、あたしがそうされて居た様にね。おてんとう様はお見通しですわ。そういつまでも、うまいことが出来ると思つてたら大間違いだわ」

クロードディアは憎々しげに云い捨てて去つた。情けを受けた伯爵を、ミシュリーヌにあとから来てさらわれ、遺言にも思つた程のこととはして貰えなかつたクロードディアは、的はずれの憎悪をミシュリーヌに抱いて居るのだつた。

「シャルル。あれ、ほんとなの？」

驚愕と怒りから漸く氣を取り直したミシュリーヌは、ややあつて胸の谷間のロケットを開き、亡き良人の小さな遺影に訊ねた。

「いいわ、ほんとだつて。済んだことだし、あなたはもう天国にいらっしゃるんですもの。でも、びっくりするじゃありません？」

仕様のない方ねえ。けど、いいわ。許したげる」

微笑んだミシュリーヌは、窓に倚り、秋晴れの空を見上げた。そして、彼女の心は決まつた。

「あなた。シャルル。暫くお暇を下さいね。昔、私を愛するとおっしゃって下さった殿方達に、一度だけ逢つて来たいの。それに、ジュヌビエールのこともありますし。きっと戻つて来ますわ。そして、ここで暮しますわ。これ、好きだった山芙蓉の花よ。サンプロン峠で採つて来たの。今頃珍しいでしょ。では、行つて参ります」

コモ湖から流れ出するマジョレ川の上流、その川岸の奥津城に立ち、ミシュリーヌは花を捧げて暫しの別れを亡き夫に告げた。

山深きコモ湖畔に数年間を暮した彼女には、行く町々の戦争の跡と変わり様が、眼を見張る驚きだつた。車窓に眺めるリビエラ海岸。嘗ては華やかだつた其の町々、サン・モンテカルロ、ニース、カンヌ。それらの姿は初冬のせいばかりとは云えぬ寂れ方だつた。マルセイユの裏街。漸く探し得たジョルジュ・ダントンには、嘗ての希望に燃えた若き医師のおもかげは既になかつた。太り肥えて

うさん臭げに不愛想な妻。

「アフリカへ行つてたんだ。戦争が終つてもずっとモロッコに居たよ。つい、三カ月ばかり前、帰つて来た所なんだ。すっかり眼をやられてねえ。しかし、アフリカと云つたつて思ったよりそうひどい所じゃないぜ」

黒眼鏡をかけたジョルジュは、震えの来る手で欠けたグラスをすすめるのだった。

タンジール、ラバト、カサブランカ……。

それらの町々の名を、ミシュリーヌは、恰かも地の果ての如き想いで聞いた。

アルルの郊外。ミシュリーヌは、ダリユー家の墓地に両親を訪れた。

「私、独りぼっちになつたの。ジュヌビエールが元氣に大きくなつて逢えます様に。そして、何とか一緒に暮せる様にして頂戴。お願い。では、又参りますわね」

額ずいて、呟き祈つて彼女の願いも約束も、遂に果たされることはなかつたのだつたが……。

ツローンの町外れ。アラン・ベネディクトは平和な微笑を湛え、神に仕える身だつた。「よく訪ねて来て下さつた。ありがとう」鼻先から眼鏡を押し上げて、アランは物静かに云つた。

「あなたは昔のままに美しい。少しも変って居ない」

言葉を切ったアランは、一旦伏せた眼をゆつくりと上げて

「私は、あなたとの子供が欲しかった。心から欲しかった。今でも。しかし、あなたは……。けれど、これでいいのだ。すべては神のお思召しなのだから」

鳩の群れが羽ばたき、子供達が駆け集まってきた、彼の長衣の裾にまわりつく。

「ミシュリーヌ。見て下さい。これが私の子供達。おお、よしよし。お祈りは済ませたかい？」

ミシュリーヌは鐘の鳴り響く教会堂をあとにして去った。

「神のお許しあらば、又お会いしましょう。神よ、此の美しい女性に御加護を垂れ給え」

十字を切ったアランは云った。そう、ミシュリーヌはそれから十数年后、再び彼に逢った。変り果てた姿ではあったが……。

パリ。静かな住宅街の一角。

シュバリエ邸の客間で、ミシュリーヌは、シュバリエ老夫人の棘ある応待振りに困惑して居た。明らかに好意を持って居ないのだ。「エミールはね、あなたがクープドリュエ

伯爵様と結婚なさると、すぐに志願して空軍

へ行きましたの。丁度戦争になって。パリの

街を御覧になって？ あなたがのんびり暮し

てる間、私達ほんとに苦労したのよ。エミールは、ほら、あそこに居ますわ。額縁に入っ

てね。ナチスの飛行機を三十五台も射ち落と

したのよ。私のエミールは、やっぱり偉い

わ。けど……けど……勲章なんか要らないか

ら、生きて帰って欲しかったの。危い空軍な

んかに入らないでくれって、あれ程頼んだ

のに、あの子はもう何だか思い詰めてしまっ

て……。ああ、おそくなって漸く出来た、た

った一人の息子だったのに……」

お茶の一杯も出されないまま、ミシュリー

ヌはしおしおと退散した。額の写真のエミールは空軍士官の制服姿で、昔に変らぬはにか

みの色を浮べて居た。

同じくパリ。サンジェルマン街の裏通り。

水や肉等が表玄関から持ち込まれると云った

構えだが、それでもいっぱし小綺麗なレスト

ラン。昔に変らぬお人好しのファビアン・ロ

ワイエは、そのレストランの亭主だった。

「踊らないか？ ね、踊ろうよ」

有頂天に喜んだファビアンは、そう云って

レコードをかけた。普段着のまま立ち上って

カップルを組む男女の数组。

「昔を思い出すなあ」

「そうね」

ステップを踏みつつミシュリーヌは、あたりを見回わした。粗末なテーブルには、しみ

のあるテーブルクロス、ざらざらの床には

所々に泥さえ落ちて、レコードは時々きし

む。

「すっかり変ってしまったよ、全く。しかし

君だけは相変わらず綺麗だ。ミシュリーヌ」

「そう。嬉しいわ」

うらぶれたレストランの客間は、いつしか

シャンデリア煌めく大広間に変わり、指揮者

の振り上げるタクトと共に妙なる楽の音が：

……。そして、膝までのスカートは純白の裳裾

曳くローブとなって床を摺る。

幻は消えていにしえに去り、ミシュリーヌ

は軽く吐息をついて云った。

「ね、少し休ませて。疲れたわ」

ファビアンはトランプを持ち出して来た。

「ね、憶えてるだろう？ ド・ジブレ侯爵の

邸で舞踏会の時に僕のやった手品。種、分っ

たかい。分らないだろ。もう一度やって見る

よ」

野菜を担いだ八百屋の小僧が騒々しく入っ

て来て、ファビアンは舌打ちして座を離れた。そして、ミシュリーヌは、そのままそつと立ち去った。

ソルボンヌ大学の研究室。新進の文学者ロシュフォー・ラフォレは、ソルボンヌ大学の助教授だった。哲学者風の容貌の彼は、デスクに積み上げた書物の山越しに、ミシュリーヌと静かに語るだった。

「あなたのお子さんが……もし、あればの話ですねが……お子さんが大きくなったら、是非ソルボンヌへお入れなさい。その頃には僕だって教授になってますよ」

そして彼は、執筆中の博士論文について、情熱を傾けて語り続けるのだった。

パリ法院。鉄柵に囲まれた広い前庭を横切って入ったパリ法院の建物の中は、重々しく暗かった。求める室を探しあぐねたミシュリーヌは、重々しい扉から出て来た制服の婦人を捉えて廊下で訊ねた。

「ああ、クードミル判事の調べ室はここです。しかし、私用なら隣りの扉から執務室へ入って下さいな」

制服の婦人はそう教えて、隠れる様に横でうつむいて居た若い女を促がして連れ去った。女の両手首に光った金属を見て、ミシュ

リーヌははっとした。うなだれて居たのも道理、女は囚人なのだ。両手の手錠から延びる革ロープを制服の婦人が短く握り、妙な色と仕立ての服だと思ったのは囚衣。女囚は短い袖に手錠を精一杯に隠そうとして居るのだが、隠し切れない哀れさだった。胸ふさがる思いで扉を押すと、ジュリアン・クードミル予審判事が紫煙をくゆらせて居た。

「ともかく忙しくてね。事件はふえる一方だし、手が足りないんだ」

ジュリアンは首筋を叩き乍らこぼした。

「今の女かい？ 暮しに困って盗みを働いたんだよ。何？ 可哀想だから赦してやれって？ そうは行かないよ。人情は人情、法は法だからね。昼飯かい？ おごってくれるんなら一緒に行くよ」

食事を共にし乍らミシュリーヌは、彼の左手が動かず左眼も義眼であることに気付いた。戦争による負傷なのだ。

「ポールも戦死したよ。リュシアン・ティリエも。いい奴だったがなあ」

「そうお。お気の毒ねえ。エミールもよ」
彼等の若々しい面影を臉に浮べて、ミシュリーヌは暗然とした。

「ね、先刻の女のひと、どの位の罪になるの

？」

「そうだね。事情は可哀想だが、常習だからなあ。先ず一年か一年半かな」

「まあ。たったそれっぽっちのお金を盗んだだけで一年も!! ひどいわ、可哀想よ。私、お金を弁償して上げるから、何とか出来ないこと？」

「ハ、ハ、ハ。詰らないことを云うもんじゃない。綺麗な顔にしわが寄るよ。余計な心配すると」

「だって子供も居るんでしょ？ あなた、可哀想に思わないの？」

「そんなことにいちいち思い患らってちゃ、法官は勤まらないよ。それでなくとも今の社会は乱れてるんだ。秩序は維持しなくちゃね。なあに、あの女だって、まじめにやろうと思えば出来るんだ。一年程ぶち込まれりゃ懲りるよ。そりや、苦しくて辛らいよ。しかし、何だかだと云うけどさ、結局の所、刑罰と云うものは報復と憎悪の制度化さ」

若い癖にジュリアンは割り切って居た。

「ま、君なんかには縁もゆかりもないことだよ。ね。さあ、もう行かなきゃ。午後は五人も調べなくちゃいけないんだ。ちょいちょい来て御馳走してくれ給え。予審判事の給料は安

いんでね」

ルアーブルの港町。これも戦争で片脚を失ったビエール・ジョルダン、それでも大いに張り切つて精出して居た。港を控えた此の町での建築業は景気がいいらしい。気さくなビエールと昔を語り海を眺めて、ミシュリーヌは暫く滞在した。貞淑な妻コンスタンスとの間に、彼は二人の子供を儲けて居た。

アミアン。山手の住宅街にリシュエール家を訪れたミシュリーヌは、リシュエール老夫人の異様な態度にうろたえた。

「ええ、ええ。フランソワは居りますよ。何してるんでしょねえ、折角いらして下さったと云うのに。部屋へ御案内しますわ」

案内されたフランソワの室は乱雑に取り散らかされ埃さえ積もつて居て、誰も居る気配はなかった。

「さあ、フランソワや。ミシュリーヌさんが訪ねて来て下さったのよ。嬉しいだろうねえ。あの子ったら、ほんとに未だ内気の坊やでしてね、困るんですよ」

見付けた写真のフランソワは、未だ十代のあどけなさ、昔に変わらぬ大きな眼でミシュリーヌをじっと見詰めて居た。今にもまばたきして、恥かしげに伏せてしまひそうなまなざし

しだった。女中があわただしく帰つて来て、老夫人をあやす様にして連れ出して行った。「どうも失礼しました。ちょっと用足しに出て居たものですから、息子さんが亡くなられてから少しここが……」

女中は自分の頭を指さして肩をすくめた。

「いつもじゃありませんのよ。息子さんにながりのある人や物を御覧になると、未だ生きて居るとお思ひになるらしいんですの。噂によると、何でも恋人に裏切られて自殺なさったんだそうですのよ。あら、私がそう云ったんで、おっしゃらないで下さいましね」

ミシュリーヌは暗然として辞し去った。門の所で若い女性と出会った。同い年ぐらいか。

「あなた、ミシュリーヌさんじゃありませんか？」

「はあ。そうですけど」

「やはり、そうだったのね。何しにいらしたの？ 私、フランソワの妹のイボンヌよ」

ミシュリーヌは漸く思ひ出して、その理智的な顔を眺めつつ手を差し出した。

「何しにいらしたの？ 母がお会いしましたかしら？」

イボンヌは握手を拒んでにべもなかった。

「フランソワはあなたのお陰で自殺なんかする破目になったのよ。そりゃね、あなたから見れば彼の勝手だと云うかも知れないけど、私達にとってはそうなの。兄が……兄が可哀想だったわ、若くて死んでしまつて。もう、来ないで頂戴」

頬をピシヤリと打たれた様な心地で、ミシュリーヌはアミアンの街をしばしまよい、尋ね回つて見付けたフランソワの奥津城に花束を手向けて、長い祈りを捧げたのだった。

ミシュリーヌは、傷心の胸を抱いて南下した。ジュヌビエールの消息は行方は杳として掴めなかったし、探して訪ずれる男達も未だ残つて居た。しかし、味わつた幻滅と失望は心を空しくするものがあつた。少女期から乙女にかけて住み育つた伯父母の邸は、そのかみの俤をも留めないまでに改築されて、ホテルのネオンを輝かせて居た。挫けたジョルジュ、小成に甘んじるファビアン、冷たい心になつたジュリアン。とりわけ、自分のために自ら死を選んで果てたフランソワを想うと、ミシュリーヌの胸は痛むのだった。彼女はニースで降りた。

一年の間にリビエラ海岸はかなり復興して居た。夏も終りとはいへ、彼女は明るい南国

の陽を浴びたかったのだ。それに、ニースにはモーリス・ブラッスールが居ると云うことだった。昼と夜が逆様になった、けばけばしいキャバレー「フェデリコ」モーリスはそこを支配人をして居た。ミシュリーヌは少し酒を飲み、僅かな金をルーレットに賭けて遊んだ。苦味走った顔に鋭い眼付きのモーリス。言葉や態度の端々に其の生活振りが覗われて彼とは語り合う気もなかった。ジャズ風の音楽は彼女には騒音にも等しかったが、それでもミシュリーヌはモーリスと二、三曲踊った。又しても胸にひろがる空虚さが心にしみる。明日、すぐに帰ろう、シャルルの眠るコモ湖畔へ……。

「何考えてる？ ミシュリーヌ。君は美しいなあ。優雅だ。現在では数少い貴重品だよ。フ、フ、フ。心配するな、誘惑はしないぜ」
モーリスは、彼女の背を抱く腕に力をこめた。

「今じゃもう、世界が違ふからな。君が降りて来るには及ばんし、俺が這い戻るつもりもないさ。ま、ともかく、よく来てくれたよ」
「ちよっと腕をゆるめて下さらない？ 苦しいの」
「済まん。所で、いいこと教えてやろうか。

いや、悪いことかも知れんな。ジェラルルの居所さ。ジェラルル・トリフォール。え？」
ミシュリーヌの頬に赤みが差し、ステップが乱れた。

「フ、フ、フ。やっぱり知らなかったんだな。知りたいと見えら。無理もねえやね、子供まで出来た仲だものな。おっと、そう吃驚しなさんな。俺だけはちゃんと見通してたぜ。心配しなくても誰にも云ってやしねえ」
ミシュリーヌの息が喘ぎ唇が開いた。

「初めての男でもなあ、女にとっちゃ忘れられるもんじゃねえやな。それが女心ってものよ。教えてやる代りに、どうのこうのなんてケチなこたあ云わねえぜ。ジェラルルの奴はコモ湖の岸に住んでらあ。クープドリュエ伯爵のお館とは丁度湖の向う岸同志だあな」
「そうだったの？」
「行つてやるんだな。色男も近頃はシケてらあな」

紅潮したミシュリーヌの顔が思わずしかむ程に、ジャズが一きわ高く雑音と不協和音をまき散らし、そして漸く少しは低まる。
「モーリス。あなた知らないかしら？ 家具屋のアンドリュウ・メルシェさんのこと。どこへ行ったのかしらねえ。誰に訊ねても知ら

ないのよ」

「ジュヌビエーブの里親か。可愛い子だったな。そいつは今となりや知り度かろうて。しかし、生憎と俺も知らねえんだ。所で、クープドリュエの爺さん、相当残して逝つただろ？ 少し回してくれないか……」

突然あたりが騒々しくなった。

「失敗った!!」

モーリスはミシュリーヌを突き飛ばして飛んで行つたが、既におそかった。ルーレット台は警官達によって押えられて居た。イカサマがばれたのだ。手錠をかまされたモーリスが引き立てられて、ミシュリーヌのそばを通つた。

「おい、ミシュリーヌ。おめえのお陰だぞ。おめえさえ来てなきゃ、俺様がちゃんと手を打てたんだ。ま、いいや。そんなこと今更云つたて始まらねえ。達者で暮せよな」

バーのカウンターの所でイブニング姿の二人の女性が、同じくイブニングドレスの二人の女の腕をそれぞれ攬んでねじ上げて居た。眺めて齒ぎしりするモーリスを警官が小突いた。

ミシュリーヌは翌朝ニースを発った。

(続く)

ラ・ムール・デスクラヴァージュ

(続)

三 原 寛

五月号で、私がヨーロッパ崇拜のフランス混血娘の慰み物にされ、遂にはイタリア婦人に奴隷として譲り渡された経緯を誌数の関係で極く大ざっぱに書いてみたのですが、今度は実際に私がどの様な扱いを受けたかを、出来るだけ詳しく一つ一つの場面を思い浮かべ乍ら記録してみたいと思います。

ただ私は文章を書くのが仕事ではないので何分にも描写が稚拙で、うまく当時の事が再現出来るかどうか不安です。最初に出会ったのが、バーのキャシェ(レジ)をしていたフランスとベトナムのメティス(混血)でアンヌ・マリイという名の大柄で野性的な感じの

女で、彼女と初めての出会いから、遂には彼女の犬として飼ひ馴され、揚句の果は、彼女の排泄物迄を随喜の涙にむせび乍ら飲ませられ食べさせられるに至る迄の経過については五月号に割に詳しく述べましたので、省略します。

とに角、彼女はメティスである事から劣等感をそのまま裏返した様な極端な優越感を東洋人に対して抱いていて、最初は私との交際も極度に恥として、ただ無害で金になるという理由だけで接して来たのです。ですから、彼女の家に同じバーのホステスが遊びに来合せた時等、この男はアミではなくて、こういう

種類の人間だという事をかなり際どい事迄話して、決して恋人なんかではないのだという事を強調するらしく、私には現地語で判りませんでした。随分恥しい思いをしました。

そんな時は殊更に彼女等が談笑しているテーブルの下や椅子の下等を床を這いずり廻って拭き掃除をやらされたり、一寸でもミスがあると平手打ちを喰ったりしました。

ある時は、例の通りフランス語のレッスンで彼女の部屋をノックすると、パンツ一つのフランス人の男が出て来て、私を見て何か誤解したらしく彼女に大声で喰ってかかりまし

た。彼女は私のレッスンをうっかりして、アミを引っ張り込んでいたのです。

私が彼女にフランス語のレッスンを受けている事を彼女が説明して、漸く納得し、そこは如才のないフランス人ですから、ガウンを引っ掛けて来て「まあ、お入り」という事になったのですが、彼女の方は今日はレッスンは取止めるから帰ってくれというし、逆に男の方が氣をつかって（当時はもうフランス人の勢力は弱く、フランス人は寧ろ日本人に対しては一目おいている風でしたので）しきりにとりなすので、どきまぎして口籠っている、彼女は急に氣が変わったらしく、入れてくれました。

私がおずおずと隅の方に腰を下すと、「この日本人はオカシな奴よ、あたしの前では犬の真似をするんだから……」といい出すのです。そして「大丈夫、未だフランス語は全然だから、何を話しても判らないわよ」というのです。「今、犬に対する命令を仕込んでる処だから、やらせてみるわ」というので、目を丸くしている男の前で「お手」「お廻り」「お坐り」「ちんちん」等片端からやらされた揚句、吠えさせられるに至って流石に変わった奴だと氣がついて、その男も吹き出したの

です。

それから滅茶苦茶でした。二人ですっかり私をバカにしてしまい、男の方には多少の嫉妬も手伝ってか散々私を責め苦しめました。まず裸にさせられ、私の体は隅々迄仔細に点検を受けたのです。私を二人で足で床の上を転がしては、踏みつけて

みたり散々なぶられたのです。それからベッドにふんぞり返った彼女の前で男に鞭打ちを受けたのですが、一打一打に無意識にぎゃーと絶叫してのたうち廻る程、生れて初めての強烈な鞭を味わわれました。

へとへとになった処を今度は二人で交る交る馬にして乗り廻すのです。その時はもう私はいつも彼女にやられている時のマゾの屈辱感も何もなくただもう落ちる処迄落ちてしまえというやけ気味の氣持でした。二人で私を



乗り潰す競争で、その時は彼女の方が残酷で、一米七〇糎の私よりもハイヒールをはくと高く、腰だけは細くくびれて胸とお臀は異常な発達で盛り上っている彼女の凄いボリュームが、ずしんと乗った丈で背骨が折れそう、這う等という事はひざの骨が本当に割れそうな位で漸くお許しが出た時は崩折れた体が床にめり込みそうにへたへたと腹這いになったまま全く動く氣力がありませんでした。にんまり笑った彼女に、私は足の裏をつき



つけ舐めさせられているうちに、不思議にもじーんと頭をしびれさせて来てしまったのです。女性の尿の味は彼女に教えられたのですが、口にした瞬間、麻薬患者が麻薬を得た様に体中がぼうっとなつて陶酔感に浸るのです。彼女にとっては面倒だからトイレ代りに使用しているに過ぎないのでしょうが私にとってはこれがどうしても忘れられぬものとなり、お蔭で内地へ帰ってからは、一口のそれ

が欲しいばかりにトルコ風呂へ行って、マッサージも入浴もしないでいいからとスペシャル料を払ってただ手を合せて乞い願う等、恥しい苦勞を重ねています。

横道にそれましたが、驚いてみている男に「これはお情で飲ませてやってるのよ、どうせ私にはどっちでも同じなんだけど、トイレに流してしまう位なら、こういつに飲ませ

てやると、どんな事でもいう事を聞くのよ。それに食べるわよ」と、信じようとしないうちに私の最低な所をみせてやりたいらしく、「さあ、いつもの様をお願いしてご覧」との命令です。

もうその頃は女性の排泄物に関しては人前も恥も外聞も構えない程のマニアに仕込まれていましたので、床にひれ伏して乞食の様に願うのです。この口一杯に拡がる濃厚な

チョコレートのような味も私にとってはどうにもならない程恋い焦れた味なのです。これを見てフランス人の男は、もう堪らぬ位笑い転げ「こいつは食費が要らないから、その分もお前が貰って二人分のぜいたくが出来るじゃないか」等とお腹を抱えました。こうして散々嘲弄されてやっと帰されたのです。

彼女の好んでやった遊びで、私をうつ伏せにして両足を開いてベッドの脚に縛りつけるのです。そうして、ベッドに腰を下した彼女が、バレーボールの空気入れで私のお腹に空気を入れます。少し入れて行くと腸が一杯に張って来て、それが段々胃を圧迫し始めるともう眼から涙が出る程苦しくなります。空気入れを抜くと丁度おならの様な音が長く続いて空気が放出されるので、これが面白いといつて何度も繰返してやるのです。

眼かくしをした私をムチで追い廻してみたり、こうして彼女からは全く人間以下の玩弄物として利用するだけ利用された揚句に、大使館の秘書のイタリー婦人に譲り渡され、最初のうちは、日本人に対する認識が全くなくヨーロッパ人より一段下の現地人の召使や何かと同程度にみられて全くの奴隷扱いをされました。

十三人の女死刑囚

その八 (大決戦の巻)

佐 出 須 登

1

お富士は自分の部下一〇〇人の顔をみた。

いずれも決死のまなざしである。額に白鉢巻を、そして腰には純白のふんどしをキリリと締めた姿は、いずれも漆黒の髪と瞳をもって、朝日の光にてらされて美しく輝いていた。彼女らはこれより欧米軍一〇〇人を相手に決戦をいどむのだ。

「必ず勝ちましょうね、でも、いよいよの時は腹を切るわ」

良重がやや興奮気味にいう。

「腹を切るよりも、めいめい首をとられない様に用心するのよ」

お富士がにっこりほえみながら、皆にいう。武器は飛道具こそないが、太刀、短刀、槍に薙刀とそろっている。嵐の前の静かさは果していつまで続くのか。

これら東軍に対し西軍も自分の陣地についていた。陣地といっても、棒坑に細長い板を打ちつけた粗末なベンチがあるだけ。二、三

人がそれに腰をおろしたが、仲間のクローが冷い声を浴びせる。まるで他人事のように。

「それは獄門台よ。あんた達のとってきた生首をそこに並べるの。向うにも同じものがある筈よ、あんた達の生首をのせるのが」

あわてて飛びあがる哀れな女たち。その髪はブロンドをはじめブラウン、ブルネットなど種々雑多だが、東軍とは容易に見分けはつくだろう。武器は小銃、拳銃、弓などがみられ、この点優勢とみられていた。ユニホーム

はビキニ・パンティ。

いよいよ試合開始。さすがに魂をぬかれた様な女たちの先頭を、クローとナタリーが進んでゆく。無意識のうちに歩を進めると、やがて東軍の姿が見えてきた。

クローが小銃をとるや一発ぶっぱなす。なんと狙いもしないのに、先頭の一人のおへソに命中した。続いて放つナタリーの一弾は、これまた次なる女の左乳房に花を咲かせた。

ようやく皆がわれに返り、バラバラと敵を求めて散らばっていく。もうさっきの場所には二人が横たわっているだけ。

クローが走りより、まだ苦しげにもがいている今日子の首すじに、はっしと短刀をふりおろす。さっと血しぶき散って首は七分通り断ち斬られ、二度目で地上にころがった。

「クロチルド、一番首」

高らかにひびく声。ナタリーが続いてかけつけ、心臓部に命中弾をうけて即死している容子から、鮮やかな手つきで首をかきおとした。

「ナタリー、二番首」

この様に最初の勝どきはまず西軍にあがったが、無理もないというべきか。飛道具のない不利をどう戦うか。戦闘開始五分にして早

くも二人を失う、しかし東軍の意気は少しもおとろえなかった。

2

この様に両軍とも血迷ってくるにつれ、戦いの方も、それに比例してすさまじくなってくる。お富士が薙刀をふるって、バージニヤの両脚を横なぐりにたたき斬り、すぐさま踏みこんで首を刎ねれば、幸代も負けずに大刀を握りしめ、エバア、ヒルデを右に左に、バサリ、バサリと斬っておとす。小百合またフイリスと組み合ってゴロゴロころがっていたが、遂にねじふせて首をとる。だが喜美子はようやくマーガレットを仕止めながら、背後から銃撃をうけて、ピアに漁夫の利を得られてしまった。

英子にいたっては、キャサリンを組み伏せ止めを刺す寸前に、背後にまわったデビーに首を奪われた。規子と由里子は、それぞれモナ、マーサと組打ちの最中、キムとアンのため敵味方もろ共、槍で芋刺しにされる仕末。敵に討たれた味方の首を奮戦して奪いとり、それもかまわず獄門台に並べるさわぎ。武器の差にもかかわらず東軍はよくがんばった。しかし……

あけみが短刀でつつかける前にアンの銃が

火を吐く。下腹を射たれてよろめきながら、せめて一矢を酬いんと短刀逆手に飛びかかったが、二発目を乳房にうけて絶命、空しく敵の前に斃れる。昌代と香子はフランソアーズの投じた手榴弾で、下半身に重傷をうけ、あとはいうまでもなく首と胴とが別々になってしまふ。恵子もミレーヌのかくしもった拳銃で、心臓に一発ぶちこまれ無念の涙をのんでゆく。銃声がひびくたびに、東軍の一人の生命が失なわれてゆくのだ。

西軍にあって、めざましい働きをしてるのは、クローとナタリーを含む一隊だった。十人ことごとくが銃をもち、東軍十五人と戦ったのだが、試合は全く一方的で二十分とかからぬうちに東軍は全滅し、哀れ首をとられてしまった。その死体にはいずれも弾痕がのこっている。これに対し短刀のみではいかに精神力をもっても勝利はむずかしく、僅かにケイ、グレース、ナディアを倒したにとどまった。しかも、これらの生首は西軍の手に奪い返されている。

チェミは、背に傷つきたいずみを負って帰ろうとしたが無理だった。止むを得ずとある草むらの窪地にねかし、上を草でおおいかくす。『あとで必ずくるからね』と心を残しな

がら一時ひきあげて、夜になってから再び帰ってきた。「いずみ、いずみ」と二度呼んだが返事はない。月の光に照らされてスラリとした二本の足がのぞいている。完全にかくした筈なのにと、不安にかられ傍にかけよる。

あわれいずみは首をとられていた。しかもその腹部には、数個の槍傷がついている。恐らくなぶり殺しにあったのだろう。首の斬口から流れでる血汐は、まだ凝固せずあたたかかった。

呆然と立ちすくむチエミの背に突然一本の矢が突立った。バラバラと数人が彼女をとりかこむ。「しまった」がつくりと膝をつくのけたおし、ふくよかな腹部を槍でもってズブリ、ズブリと突き刺す。「いずみと同じ、同じ死に方だわ」これがチエミの最後の意識だった。やがて西軍のクロー、ナタリーたちは、二つの生首を槍の先に刺し、肩にかつぎながら去っていった。いずみとチエミの二人の親友は、首になっても隣同志に並ぶのであった。しかも胴体の方も四本の足を一つにまとめて逆吊りにされている。

西軍ではオードリイが、悲惨な最期をとげた。彼女は崖の上から偶然ころがってきた岩のため、あわれにも下敷になったのだ。胸部

も腹部もペチャンコにされ、僅かに首と四肢の先がはみでただけ。首は幸代の手によってネジ切られてしまった。

不運だったのはジョーンで、手榴弾を発火させぐるぐるまわしながらいざ投げんとした時、どうしたことが、手からポロリと自分の前におとししてしまった。はっとした瞬間、炸裂し、下腹を吹きとばされる。「こんなバカな」と口惜し涙をのみながら死んだ。首が味方のメイの手で収容されたのを、せめてものこととして。

やがて夜がきた。斬りたての首をぶら下げながらクローが帰ろうとした時、背後に足音が聞えてきた。敵か味方か？

「あんた、いったいどっちなの。暗くてわからないわ」

「そっちから先にいってよ、敵だったら首をもらうから」

「では一、二の三で同時にいうのよ」

「いいわ、いち……ウァッ！ずるい！」

味方でも何でもかまっていられない。合図の前に脇腹深く短刀をつつこみ、まんまと首をあげる。月の光にすかしてよくみると、それは味方のシャーリーの顔だった。

「ごめんね、わたしは安全第一主義者なの」

クローが冷く死顔にむかって話しかける。

3

こうして第一日を終って自軍に引きあげた数は、西軍の四十五人に対し東軍は十三人にすぎなかった。いたるところにころがっているおびただしい首なし死体。血汐は河の如く流れている。そのうち東軍のものと思われる白ふんどし……血汐で紅に染まっている……のその大半は銃創をうけていた。武器さえ同じなら、生き残りの数は逆になっていたろうに――。

「武器がすべてではないわ、最善をつくしましょう」

単身よく八人を討ちとったお富士が、主将として皆を引きたてる。三組にわかれてゲリラ戦を行なうこととし、幸代と良重が、それぞれの班長となった。この二人はお富士に次ぐ成績をあげていた。

一方西軍の陣には実に百近くの生首がズラリと並び、その前に捕われの身となった美智子と千鶴が坐っていた。主将格のクローが進みでて二人に死刑を宣する。彼女は十三個という、両軍を通じ随一の首を得たのだ。次点のナタリーは十個で、この二人で総数の四分の一以上を占めている。

かがり火がたかれ、その中に両手でもって宙吊りになった美智子の姿が、うかびあがった。遠くから弓でたわむれに殺すのだが、たった一矢で殺すようなことはしなかった。ツルをゆるめた弓で射るのだ。矢はその乳房や下腹に命中するのだが、深くは刺さらず下におちる。何本も何本も、入れかわり立ちかわり射られているうち、彼女の身体は真赤に染まった。息絶えるまで約五十本も射られたろうか。

千鶴の如きは、大きな車の輪に大の字に結びつけられ、ゴロゴロころがしながら槍で刺したり、弓で射たり、果ては石をぶつつけられるなど、さんざんなぶりものになった。あげくの果ては左右の脚をせいいっぱいに開いて、それぞれロープを結びつけ、二班に分れてつな引きのように引っぱった。二本の木を曲げての股裂き、二頭の馬を使つての股裂きの話はあるが、これはそれ以上の刑である。まさかこんな目にあおうとは思わなかった彼女は、泣きわめきながら許しを乞うたが、ついに地上におびただしい鮮血と共に内臓を散らして死んでいった。

「ひとつ、ふたつ」

西軍の獄門台は殆ど満員となった。声をそ

ろえてその数をかぞえる血に狂った女たち。並んでいる生首のなかには自軍のものも何人か混じっているのだが、そんなことに気をとめるものはいない。

4

良重、徹子、道代それに由美の四人組は、ひそかに敵中にしのびこんだ。とある洞穴の前で一人の女が石に腰をおろし、首をたれているのが見つかった。うたたねでもしてるのか。良重がそっとしのびより、後から大刀をふりかざす。しかもこの時、けはいに気づいたのか、彼女はついと首をもたげる。まさに斬ってくれといわんばかりの恰好。とたんに刃が風を切って、首はものの見事にふっとんだ。血しぶきは三メートルも噴きあがる。

「マリサだったわ」

良重は無造作に、その首を拾い、投げずてる。今さら一つばかりといわんばかりに。

この時洞穴の奥からダナが姿をあらわし、この光景をみて一瞬立ちすくみ、あわてて逃げ帰ろうとしたが、その意志を果したのは首だけだった。徹子がすばやく一撃をくれたのだ。胴体はその場に倒れ、生首がコロコロと奥にころがっていく。

「マリサが見張りで、ダナが交代ね。すると

ほかにもいる筈だわ」

四人が入っていくと、中には四人の女が戦につかれてぐっすり眠っていた。

「サンドラ、クラウド、マリ、メリーね。気の毒だけどこのままあの世に行ってもらいましょう」

道代と由美が、斧をふりおろすと、サンドラ、クラウドの首が簡単にころがった。胴体が反射的にピクンと動いただけ、その顔には何の苦悶の表情もない。

「眠りながら死ぬなんて幸せね、わたしもこんな風に死にたいわ」

道代が首を拾いながらいう。ほかの二人はまだ気づかない。由美が槍でマリリーの腹をズブリと地面にまで深々と刺し止める。悲鳴をあげてもがいたがどうにもならず、間もなくその首は胴をはなれる。

いくらなんでもこれでは目をさます。しかしメリーが起きあがった時は、味方はすべて首をとられており万事休すであった。かくて十五分後、メリーは洞穴の外の木の枝から、絞首死体となって吊り下った。たまには絞首刑にして見ようと、四人の意見が一致した結果である。

スーザンが、この別動隊に連絡に来たが、

時間的にまことに不運だった。良重が背後からロープをヒョイと首にまき、木の枝を通して他の三人が引きあげる。あまり簡単なので悲鳴をもあげ得ず、絞首刑となって死んでしまった。

5

かくて四人は無傷のまま七人を討ちとり、意気を大いにあげたのもつかの間、二十余人にかこまれてしまった。一個の手榴弾が投げこまれる。これを見つけた恵子は、自分の生命をすてても他の三人を守らんとその上に自分の身体を投げかけて、一瞬後にみじんに砕けてしまった。首と四肢がそれぞれ別々の方向にふつとび、胴体は影も形もない。

再びとんできた一発を良重が投げ返えし、三人の敵を倒したが、徹子は拾う寸前に炸裂したため右腕を吹きとばされ、道代は破片を喉にうけてもがきつつ絶息した。勝負はついに明らかとなる。

「良重、負けたら、どうするといった」
徹子の声に、良重は力強く答え



る。

「腹を切るといったわ」

スラリと短刀をぬきはなつや、両脚をふんばって立ち、左下腹に思い切りつつこみ、一気に右側までかっさばいた。すばらしい切れ味。どっと血汐と共に内臓までがあらわれてくる。一度引きぬいた刃を左乳房にあてたところで前にのめった。柄が地面にあたった反動で心臓が突き破られた。こうして良重の大きな身体は、もうピクリとも動かない。

「見事だったわ、良重」

これが徹子の最後の言葉だった。ナタリーがおそいかかり、間もなくその短刀からは血汐が点々としたった。横ざまにころがった徹子の身体には首がなかった。

この結果、西軍は十人を失ったが、四つの生首を追加し、三十五対九となった。恐れることなしと東軍陣地に押しよせたが、すでに人影はなく、ただ自軍選手の生首だけであった。その合計は五十六！

「きつとどこかにもぐっちゃったのよ。気をつけないと、とりかえしつかなくなるわ」

大詰めを前にし激斗は惨、また惨。

6

この間、デボラとエレオノラの二人は戦いに加わろうとせず、敵がくればいさぎよく首をさしだそうとしていたが、試合は味方が優勢だった。二人の前をジャクリーヌが通る。

「ジャクリーヌ。わたし達の首をあげるわ。あなたが敵から奪い取ったことにしなさい。手柄にな

るわ」

「まさか、そんなことできないわ。どうしたっていうの」

二人はそれにかまわず、お互いに向きあって坐ると、それぞれ逆手にもった短刀で相手の喉をグサリと刺しちがいた。

ジャクリーヌは驚いてかけよった。エレオノラは見事に食道、気管、それに右の頸動脈を断ち切られてことされている。だがデボラは僅かに急所をそれていた。声はたてないが、肩がこきざみにふるえて、手まねで介錯を請うている。

こうなつてはジャクリーヌも止むを得ず、意を決して大刀をふりあげ、涙と共にうちおろす匂うがごときデボラの首。続いて血しぶきと共にエレオノラの首も前にころがる。

二つの美しい生首を前にしてジャクリーヌはしばらく考えた。この二人はこれ程まで戦いを拒否したのだ。自分もそのあとを追おうかと。その時クロールが姿をあらわす。

「どうしたの」

「これこれのわけよ。わたしも死にたくなっ

たわ」

「そう、おのぞみなら銃殺にしてあげる」

クロールはゆっくりと四五口径の大型拳銃をひきぬいた。十七才の少女の本能が働いて、思わず逃げだそうとしたジャクリーヌは、エレオノラの死体につまずいてどっと倒れる。

クロールが追いせまって拳銃をつきつけた。ジャクリーヌは急いで起きあがると、けなげにも後傷をうけまいとして向き直り、足をひらいてしっかりとふんばり、つぶらな目を静か



にとじた。

クロールはゆっくり進みでると、銃口をジャクリーヌのかたい、腕を伏せた様なみずみずしい左の乳房にぐいとおしつける。殆ど銃身の半分がめりこみ、処女の身体が一瞬ピクンとふるえる。そのわばった顔をみながら、クロールはゆっくり引鉄を引いた。

にぶい音と共にジャクリーヌの乳房がぱっとはぜ散り、身体ははじきとばされる様にどっと倒れた。拳銃といっても四五口径となれば相当の威力がある。

クロールは高らかに笑うと、何なく処女の首をかき斬った。まさに血に狂った姿である。彼女にとっては敵も味方もない、ただ殺すことだけが楽しみなのだろう。首をとっただけでは気がすまぬのか、下腹をズタズタに引き裂き、内臓をえぐりとりて喜んで

あわれ若く美しい女たち、次々と身首を異にして、果して生き残るのは何人か。見わたす限り死体と生首の山である。

お富士、幸代、小百合、晴子の四人組は西軍の数人が一列に並んでやってくるのを発見し、二手に別れて、これを迎えた。

後にまわったお富士は、一番最後を歩いてゐるドロレスに対し、薙刀でさっと半円を画く。何の苦もなく首はポロリ、胴体は尚も二、三步あるいてからバツタリ倒れる。続いて晴子がパトリシャにとびかかり首を絞める。声もあげ得ずあっけなく死体となった。

一方前にまわった幸代と小百合は、イベツトめがけて矢を切つて放つ。ふたつの乳房にグサリと命中し、テリーがあわてて抱きとめたが完全な即死。そのテリーも二人に追いまわされ、救いを求めて背後をふり返った時、目にうつったのは、血しぶきと共に高くあがったザビーネの首であり、お富士と晴子の姿だった。

逃げるテリーの右の首すじへ小百合が一刀を浴びせる。さっと鮮血が噴きでるところ一瞬おくれで晴子が、前方から左の首すじに斬りこむ。両側から斜めに斬りこまれ、首は三角の斬口をのこし前にころがった。

最後にミッチイは四人を相手とすることとなり、死物ぐるいの奮戦をくりひろげた。短

刀片手に猛然とつっこむ。お富士が辛くも身をかわす、危しとみた幸代が背後から斬りかかるのを、すばやくふりむいて横なぐりにうちふる。幸代は身体を後にころがるように投げだして、首がふっとばされるのをまぬかれた。四対六を四対一としながら、のこる一人がなかなかの強敵だった。

晴子が後から組みついて「わたしごと槍について」と叫ぶ。たじろくところ小百合が脇腹をえぐる。もはやこうなつては氣力もつきはて、幸代の胸を狙つての一撃もかわすことができなかった。最後にお富士が、その首を鮮やかに刎ねあげる。

「骨を折らせたわね。でも実によく戦ったわ。敵ながらあっぱれよ」

お富士が高々とかけながら、敬意を表する。かくして差は二十六対九とちぢまる。

8

その二十六人が四人をとりかこんだ。

「いよいよ最後ね、いさぎよくしましよう。でも、せめて、あの一角は切り破つてやりたいわ」

お富士の合図で、四人はいっせいに斬りこんだ。たちまち四つの組が出来あがり死斗がくりひろげられる。お富士がまず、このかこ

みを斬り破った。愛用の薙刀をふるい、二人の首を刎ね、一人を胴切りとし、一人を肩から十分に斬り下げ、更に両脚を薙いだもの二人。幸代も大刀を真向からふりかざし、見事クリスチナを唐竹割にしたのをはじめ四人を討ちとった。小百合も槍をかまえてまっしぐら、三人を突き伏せあの世に送りこむ。しかし晴子は二人を倒しただけで、大勢に押し伏せられ無念の最後をとげてしまった。しかし予想だにせぬ大戦果。

一挙に比率は三対十一とせまったが、お富士は十数力所の傷をうけ、右の乳房はザックリと、殆どみぞおちまでそがれ、左の脇腹にも重傷を負っている。小百合も両脚を傷つけて、もはやこれ以上は動けそうもない。一人幸代のみ、軽傷ですんでいるが疲労は、その極に達している。

「もういいわ、十分に戦ったもの。ここで死ぬから介錯たのむわ」

お富士は幸代をふりかえると、静かに坐り直し、短刀逆手に、左脇腹にズブリと突き刺す。かたずをのんで見守る十四人の敵。お富士は苦痛をこらえながらジリジリと右側へ切り裂いていった。腹圧のため腸がはみでそうになるのをおさえ、完全に横一文字にかっさ

ばく。幸代が後にまわるのを刺し、引きぬいた刃を次に臍の真下に突き刺すや、全力をこめて真下に切り裂いた。美しい下腹に鮮やかな血の十字架が画かれる。

再び引きぬいた短刀を静かに前におき、後をふりむいてニッコリ笑う。

「幸代、もういいわ」

次の瞬間、かっという頸骨のひびきと共に、鮮血がはげしくほどばした。お富士の首は見事に皮一枚を残して切りはなされ、自らの首を抱くような恰好で胴体は前にのめりに倒れた。鮮やかな切腹、見事な介錯である。

「小百合、どうするの？」

「わたしも死ぬわ、だけど、わたしは弱虫だから、早く片付けてね」

十六才の少女小百合は、逆手にもった短刀を、みずみずしい乳房に押しあてて。「さつ」と血汐のほとばしるのを見た幸代は、さかさず大刀を斜め下方に斬り下げる。首は見事に、斬れすぎる位にふっとんだ。

9

幸代は敵の方をふりかえり、大声で呼ばわった。

「だれか、わたしの首をとるものはいないの

！ もう一度お手合わせするわ」

一発の銃声がこれに応えた。はじきとばされる様にどっと倒れる。その右の乳房から鮮血がドクドクとほとばしりでる。十分に用心しながら近ずいてゆくのは、クロー、ナタリー、ピア、デビーの面々。

まずピアが大刀をふりかぶり、地上に横たわる幸代の首をめがけて斬りつける。あわれ一卷の終りと見られた瞬間、幸代は地上をころがって身をかわすや、起きあがりざま必死の一撃を切り返す。ピアは辛うじてこれかわしたが、続くロッサナは脇腹から斜め上方に深々と斬りこまれ、朽木を倒すが如くドタリとこころがった。

「まだくたばらないの！」

ナタリーが、右の肩口から十分に斬りつける。幸代は、それにかまわず横なぐりに一刀をふるうち、ロンダの首が高々と刎ねあがった。折り重なる様に、その死体と共に再びくずれおちる。

その首すじめがけてシルビアが斧をふりおろそうとしたが、幸代はころがって、これかわすやさっと短刀をふりまわす。見事にシルビアの喉にきまり、また一人が生命をおとす。目も見えず、耳も聞えぬだろうに鬼気せ

まる奮戦であった。

最後の気力をふりしぼり、三度立ちあがろうとする幸代の、右腕をキムが、左腕をアンがバサリ、バサリと切っておとす。更に背後からミレーヌが槍で十分に突き通す。

「幸代、お見事よ。敵だったのが残念ね」

静かに近よったのはクローである。幸代は無言のまま目をつぶった。短刀を頸のくびれにおしあてぐいと引くと、あたりいちめんに紅色を散らし、幸代の首はクローの手に移っていた。

興奮はまだおさまらない。首を失った死体に対しても乱刃が及びせられ、手も足も斬りはなし、ふくよかな腹部もズタズタにされ、肉体が殆ど、あとをとどめぬまでにしてしまふ。

「だめよ、勇敢に戦った相手に失礼だわ、そんなことをしちゃ」

「だれ、しおらしいことというのは、どうせ獄門に梟けるものよ。あなたも、その仲間になりたいの」

ナタリーは幸代の生首を宙にほうり投げ、クローがこれをうけとめた。以下順々に手から手と、ボールの様に投げ渡されている。斬口からはまだ血汐が滴りおちているというの

に。

最後に高々と空に舞い上がり、落ちてくるところを、クロウが槍をかまえて見事斬口のところズブリと刺しとめた。パチパチと拍手の音が聞える。

「さあ、勝ったわ。あと五人ね」

西軍も残りは僅か八人になってしまった。めいめいが槍をもっており、その四本には生首が、他の四本には内臓が焼とりの様に刺されていた。

10

ところで彼女たちは何故こんな死斗をつづけているのだろう。実は彼女たちは死刑を宣告されており、その助命の条件が相手方の生首であったのだ。二百人も今や残るは両軍合計十三人。これより個人別の戦と変更になった。即ち新たに生首二つをとらなくては助命されない。今迄の味方も今度は敵となり、見物人にとって興味は倍加した。もはやどんな親友でも油断はできぬのだ。

フランソアーズは傷ついていた。それも腹部であり、助かる見込みはない。彼女は仲良しのミレーヌを呼ぶと、自分の首を打ってくれと頼んだ。こころよく承知したミレーヌは、大刀をふりあげ狙いをつける。その時フラン

ソアーズが膝の間に短刀をかくし持っているのが目に入った。何をするのだろう、腹でも切ろうというのか？

「斬る時には、一、二の三と声をかけてからにしてね」

ミレーヌは直感があつた。首を斬ってくれなどいって、実は油断をみすましてあの短刀でズブリとやるつもりなのだろう。その手は喰うものか……

「いいわ、心をおちつけなさい。痛くないようにうまく斬るから」

そのまま声をかけることなく大刀をふりおろす。はっとしたフランソアーズは、短刀逆手にスックと立ち上がり、背後をふりむいたが、この時すでに首は胴体をはなれていた。フラソアーズ必死の作戦は失敗、ミレーヌはその生首をつかむと、胴体をふんづけながら高くかかげた。

「そんな甘い手にひっかかると思うの」
だが、その背後に陽子の姿が……

陽子とミレーヌの戦いもすごかった。無理もない、二百人の大半が首と胴別々の悲運に合い、優勝が間近にせまっているのだ。しかも準決勝、決勝といえども負けたら首をとら

れ、すべてが終ってしまうのだ。ミレーヌがさっと突きだした短刀は、陽子の肩先を傷つけたが、それに屈せずまっしぐらに突っつけた陽子の刃は、見事ミレーヌの右乳房の直下を、肋骨のすき間をぐりぬけて、ふかふかと突き刺さった。「皮を斬らして肉を斬る」というわけ。よろめくところを組み敷いた陽子は、刃をミレーヌの喉にあて一気にかき斬ろうとするが、一方では必死にその腕をおさえている。

「往生際の悪いひとね、いい加減にしてあきらめるのよ」

「いやよ、あんたなんかに負けてたまるもんですか。いまにはねかえすから」

「何をいうのよ、楽に死にたかったら、おとなしくして」

陽子は引導をわたすと、喉に刃先をあて力をこめて突きおろす。ミレーヌはこの瞬間、何を思ったのか、すべての力をぬいた。当然刃は柄までも突き通り、ミレーヌは四肢をふるわせて激しくもがいた。

「負けたわ、あの世であなたのくるのを待ってるわ」

ミレーヌは最後の言葉をこの世に残し、強く咳こむと口からどっと鮮血を吐いて絶命し

た。してやったりと、短刀を握り直した陽子はゴシゴシと首をかき斬ってゆく。ブロンドのミレーヌと、フランソアーズの生首を両手に持った陽子は、にっこりとほえんだ。早くも助命の条件を果たしたのだ。「両手に花」ならぬ「両手に生首」の美しくさ。

だが陽子の微笑はたちまち凍りついてしまった。ひそかに後にまわっていたアンが、大刀で肩口を深々と斬りつけたのだ。「はっ」としてアンと相対したが、傷はあまりにも深く、殆どおへソのあたりまで割りつけられている。唇がむずむず動いたが言葉にはならない。続くアンの一刀は胴にきれいに決った。豚ならばロースの十キロがとこ、えぐられた様なもの。そのままおむけに、二つの死体の中間にどっと倒れた。両手にはまだ生首を持っていたまま。三度目の大刀で陽子の首は、あつけなく地上をころがった。

「フフフ、これでは一石二鳥ね。こんなことってあるかしら。ありがとう、陽子」

三つの生首をかかえて、アンは声高く笑った。まさに世の中は一寸先は暗闇である。陽子は得意の絶頂から、あっという間に生命を失ったのだ。

アンの笑い声が終らぬうち、背後から音もなく一本の槍がのびてきて、彼女の身体を背から腹まで、胸の厚さだけをのこして、きれいに刺し貫ぬいた。「わあっ」と悲痛な叫びをあげて、両手に抱いていた三つの首をおとし、傷口をおさえたが、その指の間から真赤な血潮が激しく噴きだしてくる。前方に突きでている鋭い穂先は、三十センチもあるだろうか、ああ万事休す。

「くやしい、これではもうダメだ」

アンは全身の気力がとび去るのを感じたのを最後とし、すべての意識を失ってゆく。ぐいと槍を引きぬくと、身体は三つの死体の上におり重なる様にたおれる。

「うまくいったわ。ぬれ手で粟とは、このことね。うしろに油断は禁物よ」

姿をあらわしたのは美代子であった。おちている短刀を拾うと、いざアンの首をとるためかがみこむ。

11

世の中というものは、そんなにうまくゆくものではない。アンの髪の毛をつかみながら美代子は用心のため背後をふりむいた。そのとたん、風を切って飛来した一本の矢は、彼

女の雪白の喉を、矢じりが突きぬけるほどふかぶかと貫ぬいた。

「キャアーわたしもやられた。これじゃ、私たちごっこだわ！」

美代子もまた、自分の討ちとった死体の上に、自分の身体を横たえることになった。

「してやったり」とばかり、にっこりほえみながらあらわれる。一度に五つの生首をせしめた幸運の女性。それはキムであった。

キムはこの生首を、どうやって運ぶかで苦労した。生首というものは一つだけでもかなり重いものである。腰のまわりに四つ、槍の穂先に一つ刺してみたが歩けそうもない。考えた結果、槍の両端に髪の毛をもって結びつけ、柄の中央を肩にかついで、ちょうど水泡みの様な恰好ではぶことにした。三つと二つでバランスがとれず、重さも相等でキムは大汗をかいたが、その苦労は間もなく解決した。首を運ぶ必要がなくなったのだ。即ちキムは首を運ばれる方にまわったのである。

キムは刑吏のところに帰る途中、クローとナタリーに出合ってしまった。どちらも一回戦の殊勲者で殺しにはなれている。しかも首をはこぶため弓矢をおいてきたので、武器は

首を下げて、二つづつあげるから、わたしを見のがして、お願いよ」

「気の毒ね、キム。やはり死んでもらうわ。」

「覚悟しなさい」

「そっくりおいてゆくわ、助けて」

「だめよ、五つより六つの方がよいもの。わかるでしょう」

もはやいたしかたない。キムはさっと槍をかまえる。とたんに五つの生首がゴロゴゴロンところがった。それより早くとびかかるクロチルド。

ふたつの女体が砂煙をあげてもつれあう。一対一なら勝味はあっても、敵はもう一人おるのだ。キムは上になったが、ナタリーの手斧は、その喉に深く喰いこんだ。

「きれいなブロードね。獄門台に梟ける時はきれいに洗ってからにしてあげる。有難く思いなさい」

「あーあ、どうも話がうますぎると思ったわ……くやしい」

「では、悪いけど……」

ナタリーが柄を握った手を、ちよっとひねると、頸骨がガクリと

音をたてて、キムの意識は一瞬にして消え去った。クローはその死体の下になったまま大きく息をついだ。ナタリーが笑いながらいう。

「危なかったわね、でも今ならあなたの首も簡単にとれるわ」

「驚かさないでよ、ありがとう」

「まず首を打ちましょう」

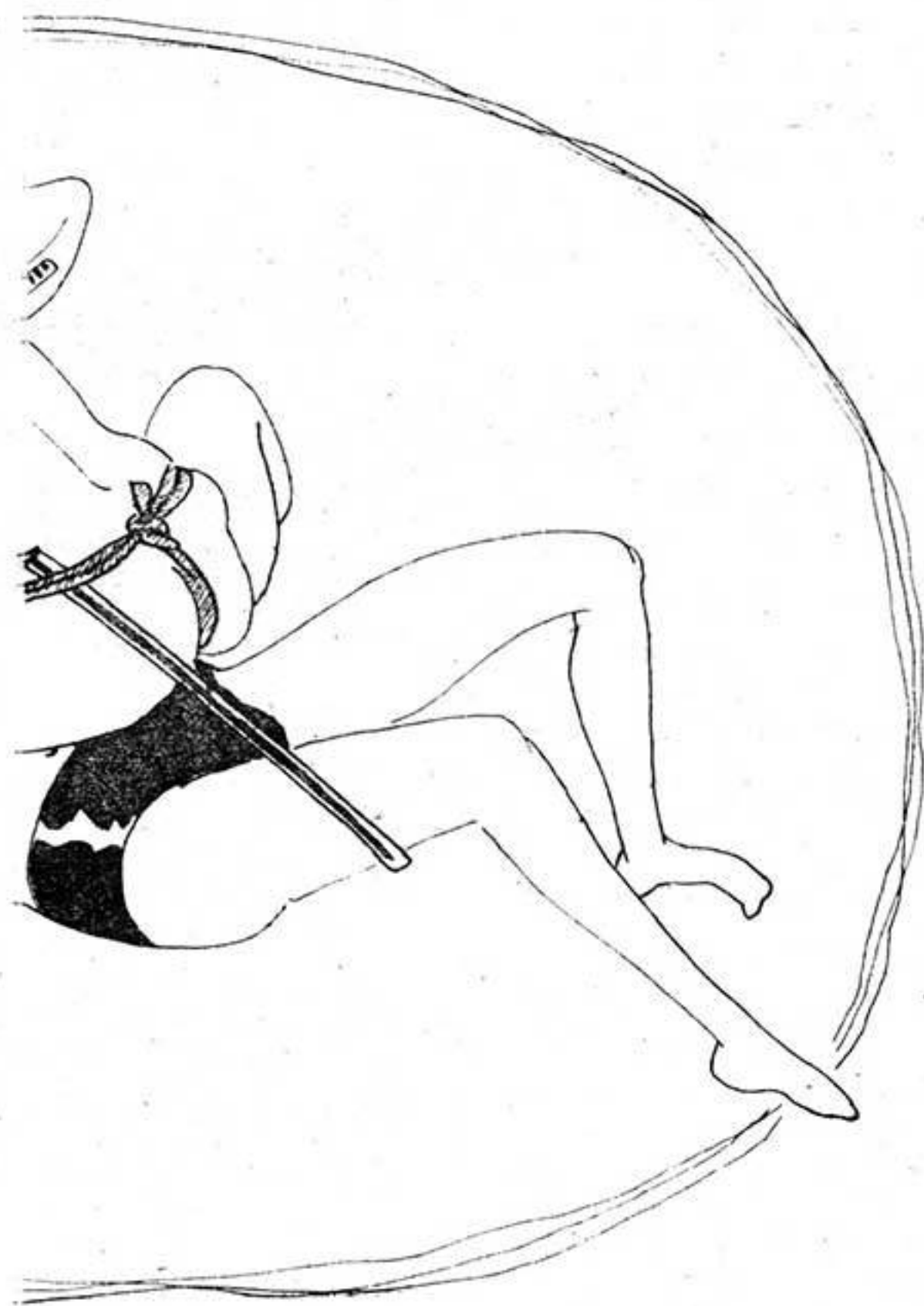
クローが血まみれになりながら起きあがると、キムの死体が、バサリとひっくりかえっ

た。ナタリーが何なくその首を刎ねる。こうして六つになった生首は、一本のロープを最初の首の口から喉の斬口へ通し、以下順々に口から喉へと通していった。二人がかりでズルズルと引きづる様にして、はこばれてゆく美女たちの首。その無念さはいかばかりであろう。

刑吏のところに着いてみると、新らしい獄門台が出来ていた。今度のは一つの台に一人づつである。次々と切りたての生首を洗ってはのせてゆく。六つ目を、ナタリーが並べ、
「これで終りね」とふりかえった時、クローは返事のかわりに短刀を、その脇腹に刺しこみ、ぐいとえぐった。

刑吏の意図を読みこんだ先制攻撃である。
「不覚——」
ナタリーは後悔したがもうおそい。たちまちねじふせられ、馬のりとなられてしまう。

「どお、さっきあなたがいった様に、わたしの首をとっとけば、こんな事にならずにすんだのよ。わたしはあの時に計画したの、きつ



と助かるのは一人だけだわ。獄門台を見ればわかるもの、十二人分立ってるわ」

ナタリーは、苦しい息の下から答える。

「そんなにうまくいくかしら、死神が、あなたの傍についてるわ。もう長くはないぞってね」

「とにかくわたしの勝は認めるのね。首を運んでくれてありがとう。悪く思わないでね、さよならナタリー」

どっと噴きだす血汐と共に、ナタリーの首はあっけなくころがった。

12

一方泉水の傍では二組の激戦が行なわれていた。和子とピア、エイ子とデビーである。どちらも今の戦いに勝ったあと、相手方の勝者と戦わなくては首二つにならぬ。下手すると向うの方が片附いて、こちらは二人並べて串刺しにされるかも知れない。そうかといって現在の戦いに負けたらそれっきり、四人共気が気でなかった。

和子とピアはどちらもサーベルを使ってい



る。元来は突くものだが、和子は大上段にふりかぶると、思いきり強く打ちおろした。予想外の攻撃にピアはあわてて受けとめたが、運のつきかそのサーベルは根本から折れとんだ。『しめた！』とばかり突き出す和子の一刀は右乳下に十分に決まった。ピアは無念の叫びをあげ、残った柄を投げつけたが、これをかわした和子は更に下腹を刺し、よろめくところ左乳房を突きとめた。

ぱったり倒れた身体をふみつけ、ズブリと

喉にとどめを刺す。ピアは四肢をピクピクふるわせもがいていたが、間もなく全身をピンと強直させて息絶えた。

デビーはただ一発だけ残っている拳銃を持っていた。いよいよという時まで使うまいと短刀同志で戦っていたが、和子の勝ったのを見ては止むを得ない。祈りをこめた一弾が岸のほとりで、両脚を大きくひらいてふんばっているエイ子めがけて発射される。

エイ子のムッチリした下腹に、ぱっと赤い花が咲き、タラタラと鮮血が流れる。とみるまに朽木を倒す様にバシヤーンと、水しぶきをあげて泉水の中にころがった。デビーがその上におどりかかった一瞬後、デビーの手にはエイ子の首がにぎられていた。

和子がかけるや、泉水の中のデビーにとびかかる。やがて二人は組み合ったまま、深みへ深みへと進んでゆく。どちらも水には自信があったのだ。

二人の身体は水底に沈んだ。間もなく水面に赤いものが浮きあがってくる。その輪の中にポツカリとデビーが首をだす。その手にあるのは今度は和子の生首だった。続いて和子の死体が、四肢を力なくのばしたまま浮いてくる。首のあるべき場所からは尚も鮮血が激しく噴きだして、泉水の表面を美しく染めていた。

デビーが岸にはいあがりかけた時、ひようと鋭い音をたてて一本の矢が飛び来り、かわしもならぬデビーの、ふくよかな腹部のくぼみに羽根もかくれるほど突き立った。「ギャア」と無念の悲鳴をのこし、デビーは和子の生首をつかんだまま、岸近くの水面にあおむけにのけぞった。弓矢を手立っているのは今迄すこしも姿を見せなかった寿子にほかならぬ。しかもデビーとは顔見知り……。

「あなただったの、ひとつだけなら、くれてもよかったのに」

「ところがひとつではだめなのよ。しかも、助かるのはひとりだけだわ、きつと」

「うらむわ、あなたを。いやだ、いやだ、死にたくない……ああっ！ たす……」

デビーの最後の言葉は、空しく途中で終わった。即ちその瞬間、首は胴をはなれたのだ。

まんまとデビーを討ちとった寿子は、その生首をぶら下げ、早くも蒼ざめた唇に自分の唇をおしつけた。別れを惜しんでいるのだから、しばらくしてから離れた時、彼女の唇は鮮血に染まっていた。

脚でもって死体をけとばすと、泉水の中にすべりおち、そのまま水をかきわけて浮いてゆく。おへソに一本の矢を、羽根もかくれるほどに突立てながら。プカプカと自分の討った和子の死体に引きよせられる様に。まるいまっかな斬口からは、尚も鮮血が噴きだして水面を美しく染めていた。

13

とうとう勝ちのこった二人の美女。殆ど同時に相手を発見し、ハッタとにらみあう。獄門台が十二人分であることは、双方とも、すでに承知している。片やクロウことクロチルド。一回戦以来何人の敵を倒したとか。一方はたった今、はじめて一人を討ただけ。黒い瞳、漆黒の髪の日本文性寿子である。いずれも短刀逆手に握りしめ、目を血走らせて相手の隙をうかがう。いよいよ決勝戦の開始。周囲にちらばる首なし死体、その数は実に百九十八。

「覚悟はいい？ クロー」

「それはこっちでいうことよ。寿子。おとなしく、その首をよこしなさい」

「ごめんこうむるわ、ひとつしかないもの。まだ五十年は使えるわ」

「ケチケチしないで！」

クロウが猛然と突っかかる。二本の刀がカッとふれあって、ぱっと火花が散った。再度の飛びこみは、惜しくも出足が伴わず、その上転がっていた死体につまずいて、バツタリと前のめりに倒れる。「しめた」とばかり突きだす寿子の刃。クロウは地上をころがって一度は辛くもかわしたが……。

「味なまねするのね、これではどう」

続く二度目の刃は、胸もとにふかぶかと突き刺さり、美しい血汐の花を咲かせた。

寿子はいよいよクロウの上に馬のりとなり、必死にはねかえそうとするのをおさえ、刃をジリジリとクロウの首根に近づけてゆく。ああ勝利まであと一歩。「ザックリ」と十分な手ごたえと共に、寿子の刃はクロウの頸に深く喰いこんだ。だがその瞬間、天なるかな命なるかな、クロウがなかば以上意識を失いながら突きだした刃は、寿子の喉、気管を鮮やかに断ち切った。

「ああ、もうだめだ。首をかきおとされる」

クロウの最後の意識だった。
「しまった！ 何という不覚。ここまでできながら、首をとられる！」

寿子の最後の意識だった。すでに目はくらみ、激痛さえも急激にうすれてゆく。だがその右手は恐るべき一念をこめて、クロウの頸を十分に右側まで斬りはらっていい。血しぶきあげて地上をころがったクロウの首を、彼女は果して認め得たろうか。

首を失ったクロウの右手が、断末魔の痙攣をおこす。それと共に寿子の頸骨の継ぎ目に刺さっていた短刀も、ピクリと強く急激に動いた。「がくっ」とにぶい音と共に、寿子の首が、ポロリとクロウの首のあったところどころがった。さながら人形の首が、のりの継ぎ目からはがれるよりもろく、ポロリと……

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、真実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙を御使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

かくてすべての試合は終り、あとには空しいさびしさが残っているのみ。新らしい獄門台はいつのまにか十三本になっていた。どちらから数えても七番目、中央のひとときわ高いそれに梟けられているのはクロウの生首にはかならぬ。

一方従来のもののなかには、特に見事に作られたものがひとつあり、それにはいちはやく敗れ去ったとはいえ、鮮やかな切腹を見せたお富士の生首が、梟けられ注目をひいていた。

(終)

(追記)

どうも私には、日本女性に殺しにくい様です。次回は本物のサドの「ジュリエットの遍歴(悪徳の栄え)」ならぬ「クロチルドの遍歴(殺人の栄え)」を投稿してお別れいたします。

但しあまりご期待なさらぬよう。

佐出

「奇譚三十九夜」物語

△第三十七夜▽

辻村 隆

桜も散って、野山は新緑——。その緑を縫って、式台のマイカーが走ります。いわずと知れた退屈男達が分乗しているのです。

伊勢路から志摩の半島へ——鳥羽の海は陽光に映えて、真珠採る筏の群列が、湾のあちこちに点在しているのも風情があります。

夕陽が水平線の彼方に、赫々と海面を染める頃、人々は賢島のK荘のロビーに、旅の疲れを癒やしていたのです。

週末の一泊のカー旅行は、流石に彼等にも些さかこたえた様です。とりわけ車を運転した、ドクター氏、ワイン氏の二人は、気疲れもあって、明日の行程にうんざりし、二人共、電話で、お抱え運転手を呼び寄せることにしました。さざえ、あわび、鯛の生造り、もずく、伊勢エビの残酷焼きとふんだんな海の幸と、旨酒に、やがて人々はすっかり元氣を取り戻しました。

泊り込む気のゆるみが、いつまでも人々をとりとめもない雑談に走らせ、今宵の本筋に入ったのは、既に時計が午後十時を指すころでした。

ドクター氏がこころ持ち物憂げに煙草を揉み消すと、改まって一同の静まるのを待ちました。はだけた彼の丹前に、稍々もすれば酒の酔いが、そこはかたなく醗酵している様に見られます。

第八十六話 隆鼻術異聞

「古いユニバーサル映画にボリスカーロフの『大鴉』という映画がありました。最近テレビのショックという番組でベラ・ルゴシ、ボリスカーロフによって『黒い鴉』という題名で、テレビ向きに再映されておりました。拷問を好む、異様な整形外科医が、悪徳

と邪悪に憑かれて、脱走犯の顔を醜怪につくり変え、邪恋の相手を殺させ様とするストーリーですが、若し整形外科医が、邪悪な心、異常な性癖を対象に向って働らきかけた時、どういう結末を生み出すか、これはそんなお話です——」

人には生ある限り、美しくなりたいと希う願望は誰しも持ち合せているものだ。だからしてR美容整形研究所も、逐次発展の一途を辿っていたとしても、寧ろそれは当然といわねばならない。整形の結果が成功すると彼等は無料で我れ勝ちにP・Rしてくれる。それが有名人であればある程研究所にとっては都合よかった。R博士はその老練熟達の医師だったから、綿密周到に施術し、整形をうけた殆んどは、整形前よりは美しくなり満足して出ていった。眼瞼、隆鼻、植毛、隆乳を始め、小じわとり、眼元のはつれ、やぶにらみ、口唇のゆがみ、耳朶の歪み等多種多様であったが、世の中には斯くも容貌に不満を抱くものが多いものと驚く程、次々と研究所の門を潜っては晴れやかに出ていった。

当然施術者は多忙に追われ、助手の医者が独立開業の為、ここを止めてから、R美容整形研究所は、それこそ深刻な人手不足に悩まされた。

医師斡旋者や、新聞募集広告、果ては大学へのコネを使ってまで、医師の求人に躍起となったが、特殊な皮膚科の整形分野だけに、思わしい人がいなかった。

テレビの普及と共に、歌手も容貌を要求される。少々声が悪くとも、下手であっても、歌手が美人の場合、ひっぱりだこである。しかし、容貌が七、八人前或いはそれ以下であると、唄が鶯を顔負け

させる美声であり、素晴らしく上手であっても敬遠され勝ちである。

テレビの（バイバイミュージック）で発掘されたハイティーン歌手、椿真砂もこのR研究所で、一重瞼を二重にしてから、ぐっと眼元に魅力がまし、最近メキメキと人気が出て来た。一旦マスコミの組上にのせてもらうと、もう自分の意志通りには動けない。真砂は次々と人気番組に登場し、早くも個人リサイタルを真剣に考える程自分のレパトリーも殖えて来ている。人気の出るにつれて奢り、虚栄と嬌慢に真砂も押れていった。

彼女は既に整歯をして、前歯四本は整然と並んで真珠の如く輝やっていたし、残るは念願の隆鼻術であった。鼻を高くするということより、どちらかというところ、あぐらを組んで形の悪い鼻孔を、何とかスラリとさせたかったのである。多忙なスケジュールの合間を割いて真砂は前以て、R美容整形研究所に、予約しておいた。所長も有名知名人士の予約で手一杯であるが、外ならぬ人気躍進の椿真砂の頼みであれば、勿論否み様もない。忙がしさに悲鳴をあげていた時、まるで棚ぼた式に、技術の勝れた医師が向うから頼み込んで来たのである。

男は萩三郎と言った。新聞の募集広告を見て、ふと通りすがりに表を通ったので、立寄る気になったのだという。履歴書は手許にもっていないが、腕を見て欲しいと、萩三郎と称する男は平然と言ったのけた。気に入らなければよせといわん許りである。

態度は傲慢に近いが、人手不足で汲々としていたから、所長は軽い嫌悪をこらえて、取り敢えず施術を試みさせることにした。

試みに患者は、細長い三白眼の切れ眼を、豊かな黒い眸に整形し

ようと通っていた、二十六才のホステスである。

R所長は、傍らに佇立して、萩三郎の手際を凝視していた。既に数回施術を済ませていたが、彼の患者に対する処置は、殆んど満点に近かった。いうなれば非の打ちどころがなかったのである。

「よろしい。早速にでも手伝って頂きましょう。ところでゲルの御要望は——」

「幾らでも——先生の勤務評定次第で結構です。こちらから特別に望みはありません」

R所長は、その恬淡振りに、些さか飽氣にとられた。この世智辛世の中に、これは又何という男だろう。所長は彼を、医師に有り勝ちな変屈な変り者と軽く考えて内心ホクホクしていたのである。

萩三郎は無口だがテキパキと活動した。老齡の所長は、数日の間に、すっかり彼を信用してしまった。患者は医師の技術の巧拙を己れの身で、じかに敏感に感じとるものである。萩三郎の整形術が並々ならぬものであることを、患者は勿論、看護婦も一様に認めてしまった。

椿真砂が、リハーサルの合間を抜けて此所を訪れた時にも、R所長は躊躇なく萩三郎を真砂に振り向けた。

椿真砂は最初、不安と不満の交錯した顔で、ブスツとしていたが顔馴染のプレが、そっと何事か真砂の耳許で囁やくと、始めて彼女は硬わばった顔の緊張を解いた。

施術台に横たわって、真砂は眼前に立ちはだかった若い医師の、大半がマスクで蔽われた無表情な顔をじっと振り仰いだ。

彼は無言で椿真砂の、可愛らしい鼻先を二本の指で摘み上げた。その指先は、柔らかな鼻ッ先をシンコ細工の様にこね上げ、ひねり

廻した。

「昔はパラフィンの注入ですが、現在はプラスチック、合成樹脂等の精巧なものを使用しますから、一旦鼻陵を形成すると、殆んど滅多に変型することはありません。ここに鼻型のモデルがあります。どれでも自由に選んで下さい。尚施術は簡単ですが、固定するまでに数日かかりますから、公演があれば休んで頂きます。コストは所長に相談して下さい」

萩三郎は必要なことだけいうと、寂然と椿真砂の鼻に眼を落していた。

「どうやら俺の目的はこの女によって達せられそうだ——フフ、何も知らないで、この女は鼻が五ミリ許り高くなるのに夢中だ……」
 椿真砂はこの公演があと三日で終るので、病氣と称して、一週間休養をとる事にした。スケジュールは狂うだろうが、この儘マスクミに踊らされ、芸能プロのいう儘になっていると、いつになっても隆鼻術は行なえそうにないと思った。

× × ×

四日目——、椿真砂の顔の半面は真白なホータイに包まれて、静かに休養室で仰臥していた。隆鼻術は萩三郎の手で、定石通り簡単に行なわれた。しかしこの時、鼻陵の麻醉した彼女の鼻孔に細いメスが振われ、鼻障子が貫通されていた事を、彼女は夢にも気付いてはいなかった。

麻醉がさめた時、椿真砂は鼻孔に鋭い痛みを覚えたが、勿論隆鼻術による結果だと思っていた。呼吸の時、チクチクと痛み、呼吸が鼻腔をくすぐる不快感にとらわれたが、それもすべて施術のためと信じて疑がわなかった。

萩三郎が冷めたい笑みを浮べて休養室に入ってきたのは三日目であつた。

「ホータイを外します。これで完成ですよ」

彼は近寄ると、真砂のホータイを静かにはずし出した。すっかり外し終ると、彼はそつと真砂の鼻先を押え、鼻骨の異常の有無をたしかめ終り、鼻孔を覗き込んだ。

「如何ですか——どうぞ鏡を——」

萩三郎は鏡を、ベッドに起き上った真砂の顔に向けた。彼女の顔の中心に、造化の妙を誇る、形よい鼻が、スナナリと見事に充実していた。

「有難う——先生。ほんとに生れ変わった様ですわ。嬉しいですよ……」

真砂は生き生きと眼を輝やかせ、一年前とはすっかり変わった、自分の美貌に、しげしげと見入っていた。冷めたい、ぞつとする様な凄じい笑みが、萩三郎の口辺にただよったのを、真砂は鏡に見入っていたので全然気付かなかった。

「よろしいね。ではもう一度ちょっと……」

萩三郎は彼女の鼻を再び柔かく摘み上げた。真砂は彼のなすが儘にそつと眼を閉じて、やや仰向け加減に、丸まっちいおとがいを上げた。三郎はポケットより燦然と輝やく黄金の環をとり出し、極小の鍵を抜きとると、その環はパクリと二つに割れた。彼は巧妙に彼女の鼻障子の孔に環を通して、カチリと嵌めた。嵌まった黄金の環は、彼の鍵がなければ、絶対開かなかった。

「眼を開いて——、フフフ……、どうです、よく似合いますよ。黄金の鼻環をぶら下げて、大衆の面前で唄いますかね……」

「えっ？」

真砂の顔に、再び突き出された鏡面には、金色の反射をきらめかせて、黄金の環が鼻孔にぶら下っていたのである。

「こ、これは一体——どうしたと言うのです。先生は、私の鼻に何をなされたのです。いやですッ。外して下さい：早く、さ、早く」
「いやッ、外さない。君はその儘鼻環をはめておくのだ。ボクの手にある、この小さな鍵が、ただ一つ環を外す力を持っている——」
「何の恨みで……この私に——。訴えます。所長さん呼びますよ。第一、こんな暴力をふるうなんて以ての外ですよ。早く外して……」

「ハハ、外しても君の鼻障子の穴は一生埋まりはしない。ボクは君の鼻に、穴をあける為、ここへ動めたのだ。目的を達した今、ボクはここから消えてなくなるつもりだ。ボクの学歴も住所も、何もかもここへ届けてあるのは嘘っぱちだ。ボクの正体は誰も知らない。ボクはこの鍵をもってここから消える。君は鼻環を自分で外す事は絶対に出来ないのだ。焼き切るとしても、それもいい。君の鼻に穴のあいた事は、ボクによって芸能関係へ放送されるよ。君さえ、ボクの要求を素直にきけば、ボク以外誰もその事は知らない。どうするかね——」

椿真砂は無上の喜びから一転、恐怖と羞恥の奈落へつき落されてしまった。

「どうしろと仰有るのです。こんな非道い事を、何故私になさるのです。恨みますわ……」

真砂は鼻環をゆらめかせ乍ら、ホロホロと泣いた。

「免も角理由は、君の住居、そうホテル住いだっただね。このマスク

をしてホテルまで送ろう——。話はそれからだよ——いいね……」

椿真砂は涙で濡れた眼で、渋々うなづいた。ここで押し問答をしていても始まらない。

萩三郎は手早く支度をととのえ、二度とここへ戻らぬつもりで、所長から前借りの形で、幾許かの金をうけとると懐ろにねじ込み、椿真砂を送りがてら所用があつて帰るからと告げてここを出た。

蒼褪めた真砂のマスク姿に、所長は、技術の失敗だと、突嗟に思ったが、責任回避の気が先走り、萩三郎が所長の耳許で「心配いりません。私に任して下さい」と言う囁やきに、や々と安堵の顔に戻って、二人を見送った。

前途に何が待ち受けているのか、二人をのせたパブリカは、明るい昼下りのペーブルメントを、何処へともなく走り去って行った。

ヒソと誰にも知られず、報道陣にも気付かれず二人はホテルに帰



りついていた。

「さあ、貴方の仰有る通り致しました。この忌わしい鼻環を外して下さいッ——」

真砂はマスクを外すと、鼻下にキラキラとぶら下っている金色の環を、伏眼でにらんで、屈辱に震える声で叫んだ。

「フフ、要求はこれからですよ——。先ずその着ているものを脱いでいただく。すっかりネ……」

真砂は怒りにブルブルと体を震わせて、蒼褪めていたが、思いついた様に、粗々しく、纏っていたものを剥ぎとって、ベッドに放り投げた。若々しい、豊醇な肉体が惜しみなく彼の眼前に露呈された。

「よしよし、素直でいいお嬢さんだ。次はロープをとり出して

下さい。それで貴女を後手に縛り上げるんだから……いやかね？」
鋭どい萩三郎の眼が、ネトリと吸いつく様に真砂の眼に絡んで来た。掌でこれ見よがしに小さい鍵をもて遊んでいる。

「私を縛る？……一体どうなさるつもりなんです。この上未だ侮辱

するつもりですの——ええいいわ、私もう一層のこと、舌を噛んで死んでやるから……」

「面白いですネ。全裸の美女、椿真砂が、鼻下に黄金環をはめ込んで自殺していたなんて、実にショッキングで愉快ですよ。兎も角、ボクは忙がしいのだ。あと四時間したら、飛行機でここを飛立つ予定なんだ。ぐずぐずしないで、さあ出した出した……」

真砂はシクシク泣き乍ら、魂のない土偶人形のように、言われる儘にロッカーをゴソゴソ掻き廻していたが、真新しい、二条の白いロープを引きずり出すと、覚悟した様に彼の前へ差出した。

萩三郎はそれを黙って受取ると、彼女の後ろに廻り、素早く両手をぐいと握り上げ、両腕を深く交叉させて縄を掛けた。背でぐいと引き上げ肩を通して胸にかけ、二の腕で引絞り、スラスラと手際よく縛り上げたのである。

乳房は縄目に圧迫されて、ポックリと二個の球の如く突出し、処女らしく乳頭は桃色に色づいて、くびれた胴はややねじれ、可愛い臍窩が、いきものの様に妖しく歪んでうごめいていた。

萩三郎は、真砂の、その緊縛の美の構成にしばし見とれていた。めくるまく眩惑にとり憑かれた——。

割れる様な場内一杯の拍手に迎えられて人気歌手椿真砂は舞台正面のアーチから登場する。その姿はシルエットになって浮かび上り楽団の伴奏が、一きわ高いドラムを掻きならすと、アーチの正面から、真砂は徐々に階段を下ってくる——。スポットの五彩が真砂の体を照らし出した時、場内は一樣にざわめき、そして叫喚が潮騒の様に湧き上ってくる——。

何故なれば、ドレスにくるまれている筈の彼女のいつも見馴れた

姿は、白い肌もあらわなむき出しであり、しかも、形よく菱形に犇々と後手に縛しめられ、尚観衆の度胆をぬいたのは、彼女のその端麗な鼻下に、燦然とかがやく黄金の鼻環がはめられていたからである。司会者が現われ口上を述べると、真砂の鼻環にサンプラチナの細い鎖をはめ、鎖の突端を引っ張って、一同に手を挙げた。

真砂はくびれた顎をつき出し、緊縛の裸の体をヨタヨタと、高いハイヒールでかろうじて加減とり乍ら、司会者に鼻鎖を引っ張られて、エプロンステージを一周し、観客の弥次と驚声に応えて、泣き笑いの媚笑を送っている。

むっちりとした後ろに突き出した豊かな臀部を、執拗にライトは追う……。

幻影はさめて——萩三郎は、その場に椿真砂の、悲憤と屈辱にまみれた、緊縛のあらわれない姿を凝視していた。

萩三郎は、シオルダーバッグのファースナーを開くと、サンプラチナの細い鎖をとり出した。茄子環を真砂の鼻環にカチリとはめ、まるで自分が司会者にでもなった如く、胸を張って、鎖の端を握りしめ、歩一步步き出した。鼻孔は拡大され、鼻障子に環は喰い込んで、口辺は引き絞られて、前列の歯がむき出された。「あッうー」と呻いて、真砂は二三步よたよたと前へのめる。ベッドの仕切りカーテンのレールの前で三郎は足を止め、鎖をレールに投げ上げてレールを越してチャラリと受けた。マントルピースのブロンズ竜の置き物をとり上げて鎖につなぐ、ブロンズ竜の重味で、真砂の鼻孔はつんと上をむき、うっすらと鼻毛が覗けて、吊り上る。痛みで彼女の頬にポロポロと大粒の涙が伝った。萩三郎はゆっくりと煙草に火をつけて、紫煙を真砂の大きく拡大した鼻孔に口を近づけて吹き

込んだ。煙にむせて、激しくせき込むと、吊り上った鼻はピクピクとうごめいて、その度毎に環は皮肉に喰い込み、真砂の苦痛は増大する許りである。

「もう許して……うーん、非道いわ……許して……」

見得も体裁もなく真砂は哀号の声をふり絞って泣いた。そこには嬌慢も見栄もすっかり影をひそめ、ありきたりの一人の少女に還元した真砂のありのままの姿があった。

萩三郎は真砂を一人の娘に蹴落し、屈辱を存分に味わしめたあと縛った儘で、鎖を外し、ポケットの鍵をとり出して、カチリと黄金の環を外してやった。

ほっとした安堵の吐息が真砂から洩れた。バッグから携帯用の小さい曲針と、細い獣糸をとり出し、三郎は、真砂の顔を自分の股に動けぬ様挟みつけた。

片手で鼻先を摘むと、馴れた手付で、曲針が鼻の粘膜を穿って、一方の鼻孔から尖端が覗いた。二針、三針で鼻障子の穿孔された個所は縫われた。

真砂は失心しそうな極度の疼痛をこらえてじっとしていた。彼のやる事を理解したからであろうか――。

簡単な縫合は終り、三郎はスプレー式の薬液を、両の鼻孔から撒布し、おちていたマスクをはめた。そして静かにロープをといてやると、微かな満足の笑みを浮べ、床々しく一礼して部屋を出ていった。

八十日間の有給休暇は終った。俺は今夜の飛行機で飛び帰ると、再び、あの大学の微臭い研究室に閉じ籠ることだろう。真砂、恨まないくれ、君は知らないだろうが、俺の妹は、君の出張公演会のあ

の日、物凄い雑踏に踏みつぶされ、鼻稜に一生消えぬ傷跡をつけられたのだ。それは君の罪でないかも知れない。しかし俺は何らかの形で君の鼻に復讐したかったのだ。俺はむしろあの不細工な鼻を形よく整形してやった。鼻孔の穿孔は、俺のせめてもの鼻に対する復讐なのだ――。

俺は妹の鼻に、整形外科の俺の知識の全力を傾注して整形してみせるつもりだ。うまくゆくかどうか――、あのへちやげた鼻に、俺は自信はもてないのだ。俺は君の隆鼻術の日を秘かに探知し、それに併せて、大学に有給休暇をとった。タイミングもよかった。しかし椿真砂よ――、君の鼻は元通りに縫合しておいた。俺の灰色の人生に唯一度――、俺は鼻責めの醍醐味を十分に満喫したよ。さらば椿真砂よ――。俺は永久に君の眼前から姿を消す事だろう。ブラウン管を通じて、俺は君のその鼻に誇りをかざし、秘かに緊縛と、鼻責めの愛著を、静かに心の奥に抱きしめて、君の唄をきき、君のおまかげを偲ぶ事だろう……

萩三郎の消えたあと、椿真砂は放心したように佇立していた。ズキズキと鼻孔が痛む。

床に一片の紙が落ちていた。そっと拾い上げて眼を落す。

（永久に左様なら――。安心し給え僕は二度と現われない。愛すべき真砂よ、元気で……）

ドクター氏の話は終わりました。椿真砂はその後愈々張切ってステージにテレビに活躍していますが、その嬌慢さは消えて、淑やかになり、関係者のうけもいいそうです――。と付け加えました。続いてゴルフ氏が次いで話を始めました。夜は流石に更けて、波音

が、耳を澄ますと手にとる様に聞えるのです。

第八十七話 悪虐大魔王

「血で血を洗った戦国時代の、武将の中には随分残酷無惨な連中も多かった様です。信長を筆頭に、松永弾正、島津義久、武田勝頼、豊臣秀吉——すべて、覇者とならん為には、数多の殺りくや犠牲を平然と踏破して行く人間でなければ、生き残れなかったのかも知れません。秀吉が天下をとって、世の中が暫しの間安定した頃、人々が生臭い血の匂いを忘れかけた頃、大殺戮者、関白秀次の行状は、それだけに市井の眼をひそめさせた様でした。語り伝えられ、人口に膾炙された残酷談でしょうが、もう一度改めて、私流にその行状を話してみたいと思います……」

こう前置して、ゴルフ氏は語り始めました。

× × ×

「ささ（酒）をもて——」

秀次は瘡性に怒鳴った。一瞬、彼を取巻く女達は身を固くした。

彼に酒が廻り出すと、彼の体内に潜む、嗜虐の血が狂い出すからだ。侍女のおそろおそろ差出した燗酒を一口呑むなり、

「ぬるい！」

と叫ぶや否や、秀次はいきなり侍女の顔めがけて、盃ごとパッと投げつけた。呀っと押えた侍女の面上に、タラタラと血が滴り落ちた。まるで沸騰した様な熱い燗酒が届くと、彼は、舌も唇も焼けつきそうな、その熱酒を、さも旨そうにフウフウ吹き乍ら呑んで、膳部の煮物を口に運んだ。

「カチリ」と異様な響きが秀次の口から洩れた。モグモグさせてい

た彼の口中から、小さい石ころが一つ転がり出した。

「膳番頭を呼べッ！」

ひたいに青筋を立て、瘡癥に震える声で叫んで、彼は膳を足蹴にして引っくり返していた。

膳番頭の荒木右近が、顔色蒼褪めて、膝を擦って平服した。

「己れッ、その方はわしに石を喰わす気か。不埒者奴！ 庭へ廻れッ！」

秀次は佩刀を驚掴みにして、蒼白い顔面に不気味なひきつった笑いを見せた。家臣一同、恐々として見ているが、止めて止まる秀次ではない。諫言すると自分の命が危ないから、唯、ハラハラして見守る許りであった。

「これッ、女共！、此奴を禪一本にむいて、縛り上げろ。手加減を加えると容赦はしないぞ——それッ！」

言われて、女達はいなどの様に飛び上って、バラバラと数名が庭に降りた。

「殿のおいつけでございます。お許しなされませ——」

女達は顔を背けながら、荒木右近を裸にし、寄ってたかって、高小手手に縛り上げた。

秀次は女達の縛る様子をニヤリニヤリと、凄い笑みを浮べて眺めていた。

庭に雁字搦目に縛られて転がった右近のそばへ、秀次はツカツカと近寄っていった。いきなり、右近の眼前の砂利を手に一握み握ると、

「口を開け！」と命じ、右近がいわれる儘に、精一杯の口を開くと、いきなり手の砂利を、右近の口中へねじ込んだのである。

眼を白黒させて、モグモグとする右近に、

「どうじゃ旨いか——。わしに砂利を喰わせる上は、そちも好物の筈じゃ。わしの眼の前で早々に喰って見せい——。何を愚図々々致す。早く啖えッ！」

眼を血走らせて、秀次は右近をにらんでいた。彼は今日の膳部に粗忽があったに違いないと観念して、ポロポロ涙をこぼし乍ら、僅かづつその砂を噛み乍ら咀嚼して行った。

「旨いか——。それも一杯馳走だ。喰え！」

秀次は更に一掴みした砂利を口中へ押し込んだ。

「こ、これは余りに御無体な……」

右近は恨めしように主君を振り仰いだ。

「何が無体だ——。何だ、その眼は……、そちはわしに逆らうのか——」

言うなり秀次の刀の鞘は地に落ちて、白刃が、いきなり右近の片眼をぐさりと刺した。

シュッと吹き出す鮮血が、右近の顔面を真赤に染め、逞ましい胸に散在した。血まみれの顔を挙げて、右近は片眼でハッタと秀次をにらんだ。そして口中の砂利をパッと吐いた。

「一粒の小石で、よくも斯くなるむごいことを、主君と想えばこそ我慢に我慢を重ねたるに——。今こそこちらから主従の縁を切ってくれるわ。犬畜生の、人間の皮をかぶった獣を主君に持ったのが我が身のあやまち——冥府から呪ってやるわ、ハッハッハッ……」

右近は血にのたうち廻って、言いたいだけの事を言った。

「よくもほざいた。この口でかッ！」

全身に怒りを発した秀次は、刀をとり直すと、右近のもとどりを

片手で掴み、彼の頬をぐさりと突き通した。貫通させるともとどりを離し、刃を唇の方へ力をこめて引っ張った。

右近の唇は耳まで裂けて、だらりと垂れ下った。尚も怒りのいえぬ秀次は、既に息絶えんとする右近の体を蹴倒し、グサリと鼻っ柱に刃を突き立てて座に戻った。

残虐極まる一個の屍体を、その場に放置させた儘、秀次は酒宴をつづけた。

豊臣秀次——。若冠二十六才の若さで関白の地位にあり、聚楽第での栄耀栄華、世の何ものをも恐れぬこの駄々子、京の人はいつの頃からか殺生はんとか、殺生関白とか呼ぶ様になっていた。

太閤秀吉の姉智子の長男と生れ、純情な若武者として、九州、小田原の征伐にも秀吉に随い、可成りの武功を現わしていた。

天正十九年——秀吉の養子となり、我も人も、秀吉の後継ときめていたのに、淀君に秀頼が生れてから、太閤の愛は秀頼に移り、老年のひたむきな愛情を、只管に淀と秀頼に打込む養父に、秀次は次第にうとんぜられ、それが彼を孤独と絶望に追いやった。彼の心の鬱憤はその吐け口を求めて、家臣や侍女に八ツ当りだし、些細な事で家臣を斬り、腰元を惨殺すると、一度血を見た野獣は、やがて毎月血を見ずには納まらなくなって来た。

嗜虐的な性情が、判然と頭角を現わし、それが酒乱を呼んで、巷の人々が殺生はんと噂する頃には、秀次は手のつけられぬ嗜虐鬼に変貌していた。愛慾と荒淫に爛れ、地獄絵に彩どられる、凄惨眼を蔽う、日々の連続だった。

膳番頭荒木右近の、無惨な屍体を肴に、煙の立ち昇る様な熱酒を強たかにあふった秀次は、愛妾のおまんの方を従えて、よろよろと

櫓の上に昇った。

春の夜空に、彼は犬のようにクンクンと鼻をうごめかした。

「おまん、女の匂いがある。灯りを見せい」

「まあ上様とした事が……私には一向に匂いませぬが——」

「いや、たしかに女の匂いだ。それも妊み女の匂いじゃ……ガン灯を照らせ——」

櫓詰めの家臣が、ガン灯で辺りを照らし出した。そのあたりの視野に、馬場を横切ろうとする一人の女の姿が照らし出された。

静かな夜を裂いて、ダーンと火銃が秀次の手から火を吐き、パツと光閃が走った。

女はバタリと倒れた。直ちに城門が開かれて、数人の侍女が慌ただしく、その女を城内へ担ぎ込んだ。

櫓から降りて来た秀次は、庭先に投げ出されている女に、じろりと眼をやった。

女の足首から血が流れていて、驚愕に失心したのか、女はピクリとも動かなかった。

女の腹の辺りを眺めて、秀次は不気味な喜悦を顔面にただよわせていた。

「女共、支度せい——料理じゃ……」

戦々競々たる侍女達は、大急ぎで、庭先に真白な大俎を運んで来て、惨殺された荒木右近の屍体から、数間許り離れた処に据えた。

あかあかとボンボリがとまり、妊み女は、数人の腰元に抱えられて、その大俎の上に仰向けにのせられた。心得た様に腰元達は、女の手足を大俎の四方の釘に縛りつけた。一人の侍女が冷水を含んで、女の面上に吹きかけた。

正気になった女は、あさましい自分の姿に、狂った如く号泣し、悶えた。

秀次は典医の久庵を引きつれて、庭先へ降り立った。久庵は又かと、寒け立った肌をすくめ乍ら、おどおどと秀次に随った。

数分後には、残酷無比な解剖をしなければならぬ彼は、つくづく医者という仕事が無くなった。医は仁術の筈なのに、ここでは虐殺の手伝いに過ぎなかった。人を生かす為ならまだしも、嫌といえど殺されるのが必定とあらば、久庵も嫌々殺生を続けなければならなかった。

久庵は震える妊み女に近附いた。

「おお、気の毒よ喃。ささ、この薬をのみなされ。すぐラクになる程に……」

「久庵——その儘で致すのじゃ。何を愚図々々致しておる——」

久庵はせめてもの情にと、妊み女に毒薬をのませ、命を絶ってかと思つたが、今は絶体絶命、仕方なく半泣きの態で支度にとりかかった。

悲鳴——叫喚——。生きた妊み女の腹を裂く、この世乍らの地獄図に、侍女等は一樣に袂で顔を蔽い、中には恐怖の余り失心する女もあった。

「フッフ、拾君（秀頼の幼名）奴が、あの様に……。淀奴、吠え面かくな……」

ぶつぶつ呟き乍ら、秀次は、久庵の一挙手、一投足を、満足げに見続けた。

血の海の大俎の上に、既に人体を整えた胎児が採り出されていた。ドロリと大腸が流れ出て、血の匂いは庭に充満している。

既に恐怖に醜く引きつった妊み女の息は絶えていた。

「此奴が——此の拾君奴が……」

秀次は胎児を、刃の切尖で突きさすと、血のしたたるのを避け様ともせず、夜空に二度三度振り廻して哄笑した。最後迄、平然と眺めていたのは、愛妾おまんの方だけであった。

その夜から数日して、秀次は大阪城の秀吉の許に伺候した。京童の噂では、秀次が近頃、しきりに妊み女を捕えて来ては、膾のよう斬り刻むというので、京は戦々競々とし、身持女は勿論のこと、おぼこ娘も人妻も、秀次の行く処、滅多に姿を見せぬという、黒い奇怪な噂を、忍者が秀吉の耳に入れたのである。

秀次を久し振りに引見した秀吉は、彼の容貌がすっかり変り果てているのに驚いた。

嘗っての純情な童顔はすっかり影を潜め、荒淫と嗜虐から、彼の頬はそげた様にげっそりと落ち、眼の周囲がくろぐろと染まっていた。眼は酒乱に血走り、兇悪極まる顔に変貌していた。その日は、それとなくたしなめ、秀吉は表面は彼をやさしくいたわった。

久しく味わえなかった養父の慈言に、秀次は眼に涙すら浮べ、後継を頼むと声をかけられて、改悛の気になって秀吉に誓うと、大阪城をあとにしたのであるが……。彼が去ったあと、秀吉は直ちに忍者を呼んで、秘かに何か策を授けていた。

駕籠に揺られ、秀次は養父との会見を、甘く懐かしい想いで回想していた時、突然供先きが騒がしくなり、疾風の如く三十前後の男が、秀次の駕籠わきに駆けよったかと思うと、颯っ一突き、白刃を駕籠中目掛けて突き刺した。

危ふく体を避けて、駕籠の扉を開いて立出でた秀次は、既に雁字

搦目に縛り上げられた、髪も着物もバラバラに乱れた男をそこに見た。

男は数日前、殺された妊み女の亭主であった。

六平太というその男は、惚れ抜いた女と、やっと思い叶って新世帯を持ち、甘い生活が続けるうち、恋女房が身持ちになり、女房の産気づくのを待ちかねていた矢先、女房は産婆からの帰り途、秀次に射たれて、見るも無惨な、大狙の露と消えたのであった。

「わしの女房を返せ——。元通りにして返せ……」

六平太は半狂乱になって叫んでいた。

「城内へ引曳ってこいッ！」

秀次は冷やかに、家臣に命じて駕籠に消えた。聚楽の城内へ戻ると、六平太は庭先へ、荷物の様に転がされていた。

秀吉の前で、改悛を誓った秀次であったが、眼前に獲物を見ると、早くも彼の血は沸き立って来た。関白大魔王は、おまんの方に舌のただれる様な熱酒をつがせて、六平太を蒼白い顔でにらみつけていた。

傍らのおまんの方が、秀次の気を誘う様に、大きな赤い唇を思い切り開いて、

「ホホ、上様——思い掛けぬ獲物でござります。こうなされては如何……」

淫婦は、秀次の耳にヒタと唇をよせて、何か囁やいた。秀次の顔は好奇心に紅潮した。

「よしっ、この男を裸にして、両股を拡げて、逆吊りせい」

侍女等は命令一下、六平太の処へ駆けよった。忽ち禪一本にされた彼は、両脚を開かされて太い竹に足首を縛られ、竹の中央に太繩

をかけて、松の梢から逆さに吊り下げられた。

手の縄を解かれると、逆さに宙に泳いでいる恰好で、夢中でもがいたが、両足共ビクともしない。地上数尺に吊られては、例え足の縄が解けても、真逆様に落下するだけであつたから、どちらにしても六平太の命は助かりそうになつた。

嗜虐に歪んだおまんの赤い唇が、ニタニタと喜悅に綻ろびていた。

「短銃——」

秀次は叫んで、侍女の差出す南蠻渡りの、短銃を握った。

彼の手許から火を吹いて、第一発は六平太の股の付け根を撃つた。肉塊が飛び散って、ドクドクと血漿が溢れて、逆吊りの六平太の腹から胸、そして首筋へと伝った。

腰元達は、誰一人として正視していなかった。独りおまんの方だけが、大口を開いて、ケラケラ哄笑した。

第二発目は臍の辺りを裂いて、臓物がダラリと流れた。至近距離から撃つから、皮膚のはじけ方は非道く、秀次にさっと血しぶきが振りかかった。それでも六平太は未だ死ななかつた。呪いと怨みを両眼にハタとこめて、彼の両手は虚空にむなしくあがき、徐々に手が垂れた。第三発は胸の辺りを血に染めて皮肉を破り、止めの第四発は、彼の顔の正面で炸裂して、その顔を粉々に砕き去った。

見るも無慙な六平太の屍体をその儘にして、彼は庭先から昇るとおまん相手に、悠々と熱酒をたのしんで、侍女の前も憚らず、おまを抱きよせてふざけ始めた。

この一部始終を、庭の植込みの蔭から覗いていた、黒い影を、秀次始め、誰一人として、気付かなかつた。

秀次の狂った行状は、嗜虐を好むおまんの方の煽情で、再び続けられていった。

彼は鯉くが好きだったので、絶えぬよう料理番に、鯉を飼わせていた。

その鯉が、或る日何者かに盗まれ、それが近習の大塚軍之丞であることが、おまんの方の腰元から、おまんに告げられ、寝物語で、彼女は秀次に——。

実は、大塚軍之丞の妻の産後、乳の出が悪く、急に鯉が手に入らないところから、悪いと知りつつ、一匹だけ持ち帰り、いずれ、どこかで鯉を買って来て、返すつもりでいたのだが、鯉を持出す処を運悪く、おまんの方の腰元に見つかってしまったのだった。

秀次はこれを聞くやいなや、待て暫しなく、閨から起き出すと、白羽二重の寝衣の儘で、怒り出した。

「軍之丞を直ちに呼びよせろ！」

夜中に火急の用事と聞いて、非番の軍之丞は、恐ろしい予感に震えて、匆々に罷り出た。

「軍之丞、わしの鯉を盗んだであろう——」

「ハッ、実は妻が……」

「ええい言訳はきかぬ。それッ女共、此の不埒者奴を裸にして、柱に縛りつけい——」

腰元達は軍之丞の体をよってたかつて押えつけ、禪一本の裸にして、庭前の廊下の太い柱に縛りつけた。

「わしが、先日、一同に訊ねた時、何故そちは黙っておった。わしをたばかるつもりだったのか——」

「ハ、ハイ、鯉はいずれ返すつもりでございました故——」

「フーム、それで鯉は戻したか——」

「それが未だ……」

「うぬッ、くどくどしい。そちはこの口でわしをたばかったな——舌を出せ……。そちの二枚舌を——」

軍之丞は観念して、いわれる通り舌を出した。秀次は刀の小柄を抜きとると、いきなりグサリと、舌を上から下へと貫通した。

小柄が邪魔をして、舌を引っ込めもならず、口中一杯にタラタラと血潮を垂らして、軍之丞は無慙に呻いた。

「わしの大切な鯉をよくもむぎむぎと——。ええい、そちを鯉代りに料理してくれるわ」

秀次は刃を抜くと、颯々と振り上げて、軍之丞の胃袋の辺りから臍へかけてズーツと斬り下げた。パクリと開いた腹に手を差し込むと、ズルズルと腸を掴み出すなり、軍之丞の顔めがけて、バシリと音のする程投げつけた。

秀次の手で立腹切られた軍之丞は、生腥い空気の中で、取片附けもならず曝されていた。おまんの方が近寄ると、白痴めいた笑いを浮べて、秀次に何か囁やきかけた。彼は快よげにうなずくと、

「よし、直ちに軍之丞の女房を引き立てて参れ。大切なわしの鯉を喰った憎い女子じゃ」

血は血を呼んで、止まる処を知らず、惨劇は引続き起る気配にあった。

軍之丞の内儀は、いかめしい警護の下に、荒縄で後手に犂々と縛り上げられて、庭先に引立てられて来た。生れて間もない嬰兒が、武骨な武士の片手に抱かれていた。

産後のやつれた顔を一層蒼くさせて、内儀は庭先に引き据えられ

ていた。夜中の風は内儀のうすもの一枚の肌に冷めたかった。

血走った眼に、既に酒乱の様相歴然と、秀次はおまんの方を従がえて庭先に現われた。

「そちか、わしの大切な鯉を喰った奴は？」

「はい、あの……いいえ——」

内儀は恐怖にしどろもどろに応えて、フト秀次の立つ縁の横の柱を見ると、無惨に斬りさいなまれた夫が、縛りつけられた儘こと切れて曝されている。内儀は動顫して、思わず縄尻をとられた儘かけよろうとした。

傍らで乳呑児が、火のつく様に泣き出した。

「ええい、うるさい餓鬼奴——」

秀次は言うなり早く、槍をとって、庭に転がされた乳呑児の脳天から尻へ串刺しにしまった。嬰兒は一声も立てず息絶えた。

内儀はすっかり気が狂っていた。

「夫を帰せ——ややを帰せ——鬼奴……畜生奴……帰せ……帰せ——」と泣き喚いた。

「わめけわめけ。そちはこれから、鯉のように料理してやる——」

おまんは又耳打ちした。この女は、次々と秀次に悪魔の呪いを吹き込んでいく様であった。侍女が数人、内儀を取り押え、二人の女が、秀次の命令で、内儀の上唇と下唇に手をかけて、口を一杯にこじ開かせた。

侍女達も、身の安全を考えれば、残酷なことに協力せざるを得なかったのだ。逆らえば、忽ち秀次の刃の飛ぶことを、彼女達は等しく知っており、又そんな光景をいやという程見せつけられてきていた。

顎と顎が押し広げられた口中に、秀次は己れの手を差し込むと、内儀の舌を引っ張り出し、おまんの方の差出す釘抜で、舌を力任せに引抜いた。地獄のえんま大王すら呆気にとられる暴虐振りである。血が口中に溢れ、唇を伝って凄惨に流れた。髪振りみだした内儀は、人間としての極限の呪咀をこめた眼で、ハッタと秀次をにらんだ。

「その眼は何じゃ、その眼は——」

狂った様に秀次は、内儀の眼に人さし指を突込み、無理矢理に双方の眼をえぐり出してしまった。

「ケッケッケッ」

野獣にも似た叫び声を挙げて、秀次は尚も刃で、内儀のよく張った乳房をないだ。そがれた跡に、血潮の華が胸一杯に咲き乱れた。

「この女の両脚を持って——」

逆さにぶら下げられた内儀に一曳刃は躍って、ズバリと体は唐竹割にされていた。

血糊でぬるつく刀を放り出して、秀次は血まみれの手を拭おうともせず、焼けつく様な熱酒を、大盃で傾けていた。

翌日、三つの菰が不浄門から出て、重石をつけて濠に沈められていた。

× × ×

秀次の行状は急激に嵩じ、今では、人を殺さねば、夜も碌々寝つかれなかった。完全に恐ろしい殺人淫楽者になっていたのである。何事もない夜は、眼に見えて焦々していた。そんな夜のお伽の女は、それこそ身の縮まる思いであった。フト間違うと、何をしてくすか分らないからである。唯おまんの方だけは、平然と、この恐

ろしい淫虐魔を操縦していた。

殺生閼白の名は、愈々京に喧伝され、街を恐怖のどん底につき落していた。唯我独尊の秀次にとって、この世にこわいのは、養父の太閤だけであったが、酒乱に狂った頭には、それすらも忘却しがちになり果てていた。

秀次の暴挙は日夜続いていた。

三条大橋で、盲人が唐竹割に斬られ、その娘が心臓をえぐられていた。うっかり盲の悲しさで、秀次の袂に触れただけである。

重臣の木村重茲との密談中、茶菓を捧げてきた腰元は、淀君からの廻し者だと邪推され、梁にぶら下げられて、顰り殺しにされた。

彼の行列に土下座せず、家に逃げ込んだという理由で、掛茶屋の娘が荒馬にくくしつけられて踏みにじられた。

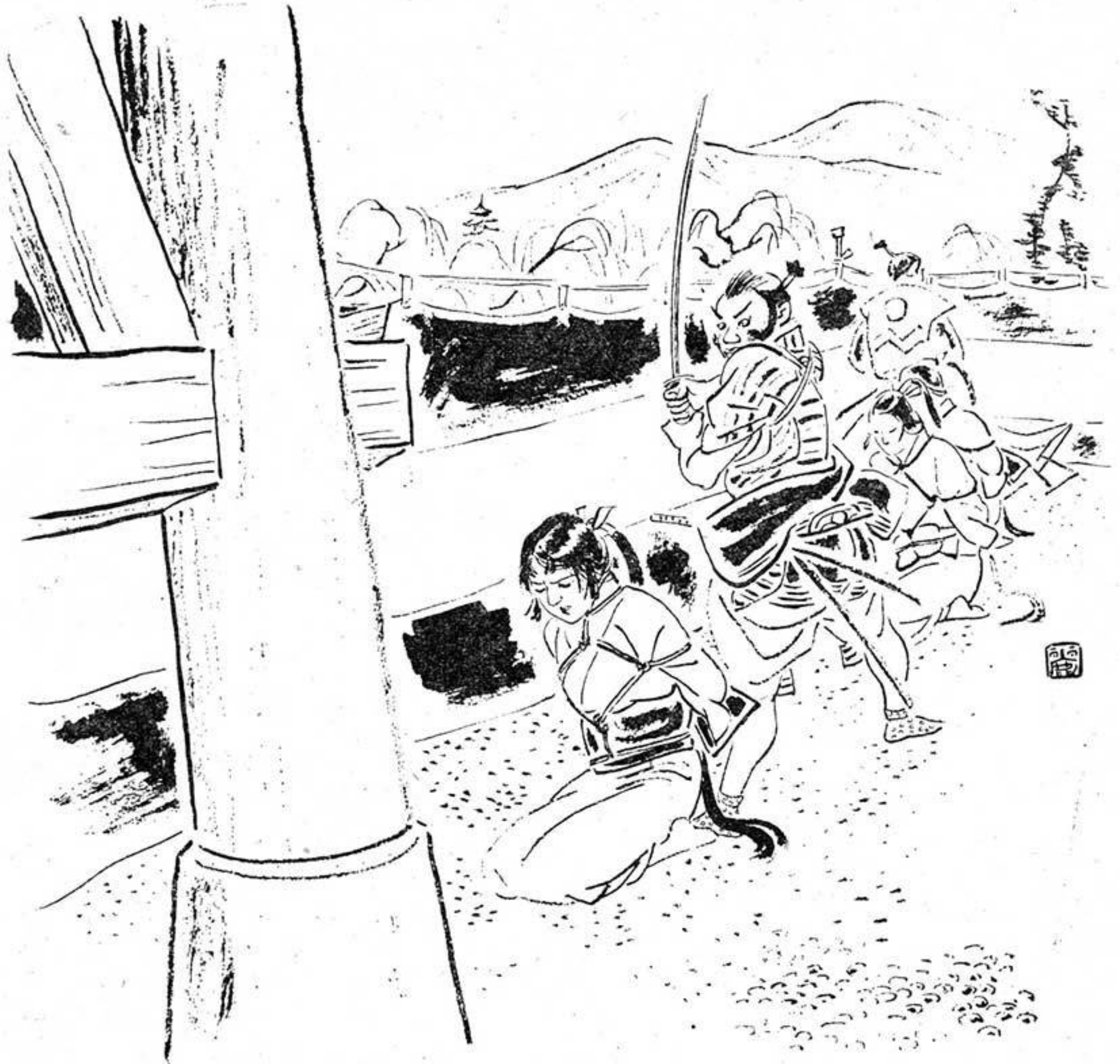
吉野の花見で、眼触りという理由で、数人の巡礼が、狂刃に倒れ、桜花を鮮血に染めた。

殺生禁制の比叡山で狩を催し、僧侶に肉を啖わせて、拒むと片っ端から斬り捨てた。

秀次は縦横無尽、荒れ放題に荒れて、今では殺生不感症になり、新手な刺激を求めては、彼の嗜虐を充たしていた。しかしこの行状の殆んどが、忍者の秘かな活動で、太閤秀吉の許に逐一知らされていた。

秀次の重臣、木村常陸介重茲は、彼の将来を案じて、幾度か諫言したが、素面の時は神妙に聞いていても、一旦酒が入ると、重茲すら手をつけかねる暴君に豹変した。

秀次の殺人淫楽の原因が、奈辺にあるかを重茲も心得ているだけに心痛するが仕方がない。秀吉が最早秀次に見切りをつけ、秀頼を



嫡子として、彼を廃嫡するという企みを知った時、重茲は秀次の為に大陰謀を企て、京の盗賊の元兇、石川五衛門を使って、太閤を暗殺しようとして失敗した。

秀次の廃嫡が一般にも知れ渡ると、彼は愈々、自暴自棄になって血に狂った。自分の邪推から、自業自得。秀次は追々と、自からの掘る墓穴を大きくしていった。カタストロフは眼前に迫りつつあった。しかし、秀次の乱行、殺人淫楽、嗜虐、荒淫に拍車をかけたのは、おまんの方の力が大いに働いていたのである。

素姓の賤しい植木屋の娘であったのが、秀次が狩を催した或る日、酒席に出て、巧みに秀次を籠絡してしまった。この人並外れて大きい口のおまんには、性来、サジスチックな、多情の血が流れていたものと思われる。

秀次には、その頃正室の外既に嗣子仙千代の母に当る、おわこの方、透きとほる様に美しいおすぎの方という二人の妻妾があったが、おまんの方の性情が、秀次にピッタリと来たのか、二人をさしおいて俄然のし上って来たのであった。

嗜虐を好む男と女が、氣を合わせて行かう行為は、全く淫楽の極致に違いなかった。彼等

は刺激を求めて、若い小姓と腰元を呼びよせ、酒攻めにした上、眼前で愛情の交歓を強要した。おまんはこうした、爛れ切った痴態を考え出すのに、悪魔的な智慧を次々と絞り出して、嗜虐と淫楽を貪ぼる秀次の寵を一身に集めるべく努力していた。

おまんの一顰一笑で、失なわれた人命の、幾許かは計り知れなかった。

唯、おまんのいい処は、同性の側妾達を陥し入れる様な事は絶対しない事であった。むしろ反対に、秀次の愛寵の衰えかけた女があると、彼女は大きな口で憚かることなく、その女を呼び寄せ、秀次にうまく取り入ってやるのであった。

秀次もおまんにだけは不思議にいいなりになった。そのため、寵の衰えかけた女は、おまんを姉の様に慕い、いつしか彼女は、数多の側妾の上に君臨する様になっていたが、その割に憎まれることなく、皆から頼られていた。秀次の妻妾は、記録によると三十八人であるが、気まぐれを入れるとその数は膨大なものであったろう。年長者はおいまの四十三才を最高に、最年少者はおみやの十三才——それらの女が、一度秀次に仕えたと、この荒々しい殺人淫楽の暴君を真底から愛していたという。所詮被虐的な女は、こうした精力的な暴君に、反って魂を奪われてしまうものであろうか——。

二十六才の若さとはいえ、四十人に近い妻妾を愛するのは忙がい。酒乱と荒淫で、彼は衰弱の一途を辿る一方だったが、おまんの逸樂的な行動に、彼は朦朧たる頭脳を酒でまぎらわせ、衰えた体を無理に振立たせ様としていたが、その姿は最早痛々しかった。どの道、破滅の末期的症状が近づいていた。

既に秀吉の腹はきまっていた。忍者の活動で、秀次の乱行は仔細に秀吉の耳に入っていた。

正式に問罪使が派遣され、一挙一動を厳しく詰問された時、荒淫と殺人淫楽と嗜虐で、濁り切った秀次の頭脳は碌々何一つとして申開きが出来なかった。

太閤に対し、毛頭二心なき誓紙を書く事によって、一応その場は済ませたものの、京の街のどうこうたる非難と、人心安定の為にも秀吉は断罪を下さざるを得なかった。

永禄四年七月——暑い日盛りの日であったが、遂に秀吉より呼出しがあった。

八方破れの秀次は、既に覚悟をしていた。百鬼夜行の彼の行状の果て、因縁的な結末が、秀次を悪あがきさせなかった一因でもあった。彼の殺した数々の亡霊が、夜となく昼となく、秀次の周辺につきまとい、怨嗟と、恨みの声が、耳鳴りの様に秀次にきこえ、彼はひねもす悩まされ続けていた。因果応報の当然の酬いでもあった。罪なくして、唯、彼の淫楽と嗜虐心を充す為、惨殺された人間の、生霊は浮ばれる筈もなかったに違いない。

その日秀次は、衣類一切を新らしく着換え、僅か二十余人の家臣を引連れて、聚楽第を発し、大阪城へ出向いていった。

秀吉は既に、秀次の顔を見るのも汚らしい程、彼に嫌悪の情を抱いていたので、急に会うのが厭になり、旨を含めた使者に、京街道を走らせた。

秀次の一行が、藤の森にさしかかった時、上使の一団と出会った。

上使の長、増田長盛が馬から降りると、腰をかがめ、太閤が会わ

ない趣きを告げ、直ちに高野山へのぼる様に伝えた。

「何？ 殿下には、わしを高野山へ参れと申されるのか——」

秀次の頬に自嘲が浮び、一筋涙が糸を引いた。今や太閤の命令は養子であった秀次にとっても至上命令であった。

剃髪——黒染の衣——京童の怨嗟嘲笑——茨の行路——そして高野山へ……。

数日にして、余りにも飽氣ない没落だった。秀次は名も道意憚門と改め、昨日に変わる念仏三昧の身になった。次々と浮ぶ亡霊を一人成仏させる気で、彼は経文を唱えたが、心はともすれば、聚落に残した、数多の妻妾達の行末に思いをはせた。供の家臣も一樣に新発智となって、明け暮れ秀次の身の廻りの世話をしたが、昨日に変わる女人禁制の高野山に、絶えて女の姿はなかった。

深山に夜が訪れると、彼は苦悶した。虐殺した数知れぬ亡霊が、彼を取巻いて苦しみ、空閨の絶えがたい淋しさが、絶望の奈落へ曳きずり込んだ。

僅か数日で、秀次は見る影もなく痩せさらばえ、今は唯、息をする一個の物体に過ぎなくなっていた。

三日目に福島正則が上使として現われ、秀次に切腹を申し渡した。生氣のない彼の頬がポツと一瞬赤らみ、彼は黙って頭を下げた。

夜毎の地獄の苛責よりは、せめて武士らしく、最後の華を切腹で飾った方が、どれだけましだか知れないと、秀次は業から放たれた肩の荷の降りた気持だった。

主従最後の水盃を交し、家臣不破万作はじめ二十三名は、この暴君の為、潔きよく秀次に先立って殉死した。

嗜虐の魔王、秀次に仕えて、彼等は如何に辛酸をなめた事か。しかし家臣は過去のすべてを、愛憎の彼方に流し去って、従容として、秀次の介錯で、次々と倒れていった。

最後に秀次は、ひとり、絹の白装束に着かえると、数多の血を吸った愛刀、獅子正宗を静かに白紙で巻き始めた。

パツと血しぶきがはね上って、秀次はグンと踏ん張った。

△諸人の怨みよ消えてくれ——わしは莫迦な反逆児だった。聚楽の女達よ、さらば……▽

腹に刺した刃を引抜いて、更に秀次は返す刀で胸をつらぬいた。自からを虐殺した秀次は、朱に染まった胸を押え、最後の死の笑みを浮べて、介錯の雀部淡路守を、やわらかな眼差しで見上げた。

× × ×

旬日ならずして、一代の反逆児、関白秀次の首が、京の三条河原に曝された。京童はこの首を見んものと押しかけた。

血縁を殺された者は、怨みの形相も物凄く、首に向って石を投げ、唾を吐きかけた。

太閤の公平無私は褒めたたえられたが、秀次の愛妾三十八人を始め、幼児、姫に到るまで、すっかり虐殺したことは、秀吉の大きい黒星だった。

秀次の切腹、曝首は当然の酬いではあるが、拐わかされ、強制的に淫楽の犠牲となった愛妾、子供には何の罪もないというのが、京童の輿論であった。

太閤は関白に輪をかけた殺生な人だ——という噂は、津々浦々まで知れ亘った。

秀次を高野山に追放するや、秀吉は電光石火に、次の手段に移っ

た。

追手を聚楽に向けて、妻妾、子供、腰元に到るまで、一網打尽に捕えたのである。

目も綾な、四十数人の美女、幼童が、牛の曳く荷車に、後手に厳重に縛られて珠数つなぎにされて引立てられていった。

牛の歩みは遅々として進まず、京の街を縛られた美女の群れが、悲しくも亦、悩ましく、美しい地獄絵巻を繰り広げて、三条河原へと続いていった。京の人々は秀次の、余りにも多い愛妾に吃驚し、羨望し、その美女が処刑されるときいて、京の街中は騒然とした。

三条河原は、美女の群れを遠巻きする群衆で埋まった。

その中で、上使の合図と共に、情容赦もなく引き出されたのは、秀次の遺児六人であった。何れも幼君、雅姫で、唯声を挙げて泣き叫ぶだけである。非情な首斬人によって、六人の幼ない魂は、グサグサと簡単に刺し殺されて昇天した。

正視しかねて見物は、首斬役人を鬼畜の如くのしり、秀吉の残酷さを憎んだ。

小さい体が無惨にも踏みにじられて、地上に粗々しく捨てられるのを、見物の女達の中には声を挙げて号泣するものもあった。

ついで妻妾の処刑が始まった。最初に秀次の正室、一の御台の方が、荒縄で痛々しく後手に縛り上げられて、ズルズルと引き曳り出された。三十二才の朧たけた美しい姿は、静かに瞑目した儘、一番に首を刎ねられた。

次でおつまの方といって、十六才の稚ない母。梅花一輪、嵐に果敢なく散る如く、かぼそい首に刃が飛んで、首が落ちた。

次はおかめの方といって稚姫の母で、三十三才とはいいい乍ら、ふ

くよかな容姿は窈窕としていた。神妙に首を差し出しうたれる。それについて仙千代の母おわこの方——。柳腰の美少女の、痛々しげな、肉に喰いこむ荒縄は、人の世のうたた流転の悲しさを、人々の胸に焼きつけた。鮮血が飛んで、綾なうちかけが妖しく躍った。

次につづく三人も、夫々幼君の生母達であった。若く美しく、何れも十八、九才の花のかんばせが、無慙な刃の前に、首を落されていった。

八番目が例のおまんの方。この妖婦だけはどうか考えても斬首に値する女だ。三十数人の妻妾を押えて、愛寵一番の彼女だったが、近親の順で、正室、生母の次に廻された。

放恣な享楽と嗜虐的な多淫に走り過ぎてか、おまんの方には子供はなかった。

刃がおまんの白いうなじに飛んでくる瞬間まで、彼女は大きな口を一杯にあけ、真赤な唇を歪めて、艶笑していた。後手縛りの荒縄がこの女にふさわしく見えた。狂い咲きのあざみ一輪、ポタリと落ちて、豊かな黒髪が、生ある如く地面にゆるゆると拡がって、それは蛇の如く、おまんの顔を包み込んでいった。狂艶二十三才の幕切れにふさわしかった。

愛妾は次々に斬首されていったが、何れも従容として、悲鳴も絶叫も哀願もなかった。

静寂の三条河原で、次々と恐ろしい集団殺戮が行なわれているのが嘘の様な、夏空だった。実に妖しいは女心——。残酷無類、嗜虐をほしきままにした稀代の殺人淫魔秀次を、共有する女体の身になってみれば、何れ劣らずひたむきな愛情を彼に捧げていたのだ。不運を嘆かず、泉下の秀次の許にはべれる事を、死の間際にも

願っている女心は、普通の常識では諒解に苦しむ心理状態である。

現に十五番目に首を刎ねられたおいよの方は、十五才の春を迎えた許りで、秀次に懇望され、遙々奥州から聚楽に辿りついて三日目――、哀れ、花の蕾も開かぬうちに斬られてしまった。

最年少のおみやの方は十三才のいたいけな少女であった。十七番目に引出された時、人々はその余りの痛々しさに、胸をしめつけられた。本妻、一の御台の方の先夫の娘であったのを、秀次の倒錯趣味と、おまんの方の入れ智恵で、まるで人形でも囀る気で愛翫したのであった。母を愛し、その義理の娘に当るおみやをも愛したのだから、さながら畜生道の様であった。

最後に殺された、おいまという端した女は、自から志願した変り種であった。

年は四十三才で、誠に不器量――、秀次の倒錯的な面はこんなところへも現われて、酔余の冗談にからかったのが、醜女の深情で、挙句は、秀次とおまんの方の、いい囀りものであった。この女も嗜虐的な面があって、大女で力があるから、秀次の命令一下、一番にとんで行って、残酷な殺しに大いに協力したのである。

眼のさめる様な美人揃いの中に交って、数多の妻妾達と死を共にするのが、おいまの最大の幸福であり、無上の光栄であったのかも知れない。捕えに來た役人が、彼女を放って行こうとした時、自から名乗り出て、しかも最も非道い縛りを要求したのも彼女であった。きらびやかな打掛けの妻妾にくらべ、彼女の衣類は貧しかったので、自からそれを剥ぎ、うすもの一枚になって、それだけが自慢の豊かな体を憶面もなく曝し、乞うて雁字搦目に縛って貰った。牛車の上で、おいまの強烈な捕縛が、見る人の眼をそば立てたのが、

彼女にとって何よりの喜悦だったらしい。

一番しんがりに、ヨタヨタと押し出され、首にまで掛けられた荒縄で、中腰になって歩み乍ら、色の黒い醜女の首は、幕切れのようにポトリと落ちた。

群衆も呆氣にとられ、今更乍ら、殺生関白の惡趣味に、妙な感心をする者もいた。

哀れむべし――、大量の美女の殺戮は終った。生首は累々として転がり、血漿は地を蔽って、凄惨の極致が茲にあった。

かくまで多くの美女を虐殺したにもかかわらず、檢使奉行石田三成は、顔色一つ変えず、平然とこの殺戮を見ていた。

石田三成に対する、京の人々の憎しみは、やがて関ヶ原に尾を曳いたのを、彼はその時知り得たであろうか――。

これらの大量の、落花狼藉の、痛ましくも、あでやかな残骸は刑場の横に掘った大穴へ、次々と投げ込まれて行った。

四つの手足を無難作にとって、輩下はまるで荷物か何かの様に投げ込み、放り込んでいった。地獄の鬼にも等しい非人の所業に、心ある京の人は、そっと合掌して、彼女達の瞑福を祈っていた。

正午から午后四時までの、ざっと四時間余りに、これ程の若い女達を、一度に死刑にしたのは、歴史上でも稀有であった。

総てを終った頃から、三条河原には、鬼哭愁々たる風が吹き渡り西の空にポツリと見えた黒雲は、忽ち京の空を蔽って暗澹となり終せていった。

秀次の巻添えで刑死した、三十八名の若い女の死を悼まぬ京の人はなかった。

秀次の首を最初に、ズラリと並んだ四十数個の生首の曝しは、悲

壮というか、壮観というか、例え様もなく、三条河原は血腥ぐさい空気に蔽われて消えなかった。

これらの首が一個所に集めて埋められ、その上に一つの塚が建てられた。

「関白悪虐塚——文録四年七月十四日之建」

塚にはそう銘記されてあったが、人々はこれを畜生塚と称えて、当時、香華がたえなかったという。

浮かばれずして斬首された亡霊が、河原をさ迷うて、鬼火の点滅するその辺りは、さながら賽の碯の如く言い触らされて、京では最

も恐ろしい怖い場所として、夜更けてその辺りを、人っ子一人通るものもなかったと言ひ伝えられている。

塚は大洪水で押し流され、これを悼んだ一人の僧が、ここに庵を設け、有志の人々の手で一寺が建立された。

京の、現在の瑞泉寺辺りの地下に、今も尚秀次以下、若き妻妾の魂が、永遠に眠っているかも知れない——。

「どうも血腥ぐさい話になりました恐縮です。安らかな志摩の旅の宿で、こんな物語はふさわしくありませんね——」

◎読者の皆様へのお願い

○投稿原稿に限らず読者通信においても、すべてタテ書きにして下さるよう、かねがねお願いしているのですが未だヨコ書きの原稿が混っていて処理に困っております。殊に読者通信は便箋でもノートでも、すべてそのまま書き直さず印刷所へまわしていただきますから余りくずさず、必ずタテ書きでお願いします。用紙は問いません。

○代理部の注文品は、すべて略号にてご希望品をお書き願います。品名はお書きにならないとも結構です。略号をお書きにならないときは、対照に手間どり、どうしても発送が遅れがちになりますし、同名のものなどがあって誤送の原因になりますから、よろしくお願い致します。

○切手をご送付になると、紙に貼ってこられる方が非常に多いのですが、切手類は絶対に紙に貼らないように、また、一枚一枚切り離さないようお願い致します。一度紙に貼って剝したものや、べったりと紙に貼りつけた切手類はお受取りいたしかねますからご諒願致します。目録請求のために十円切手一枚を同封される際も、便箋に貼りつけられるのは、一体どうした原因なのでしょいか。

○郵便物の局留受取りご希望の方で、封筒の裏に仮空の住所を書かれたりする方がございますが、誤送の原因となりますから、何々郵便局留、受取人氏名、というぐあいにお書き願います。

○発送人の個人名発送をご希望の方はお申出次第、ご希望に応じます。但し第三種便の別名発送はいたしかねます。

ゴルフ氏は誰にともなく弁解めいた口調でそう付け加えて、冷えた盃の酒を含みました。

中天の月は、皎々と波穏やかな海面に、銀波を撒き散らして、外界は無限の静寂をたたえて静まりかえっていました。

大時計がボンと唯一つ、余韻を引いて午前一時を打ちました。

退屈男達は顔をほてらし、海の幸に満腹し、やがてめいめいの個室へと消えて行きました。汐の香たっぷりの妓を呼ぶ者——仲居にささやく者。しかしそれらは最早三十九夜物語の埒外に過ぎないのです。

(完)

強精飲食直接採集法

とやまかつひこ氏

〔愛好家の記録〕より

芳 野 眉 美

そこで、とやま式採集法を調べたら、次の通り。右報告します。

A 香 水

「オフィスNO1のすみ子さんが、これはまた、オイロケのないベンピで困っているという」

チャンスである。医師を友人にもつ手前、調剤してもらうことにする。



「とてもよく効く下剤だけど、なお欲をいえば、一度検便して、症状に合った薬をつくってもらうのがいい」。

ヘリクツは上手な方が得だというお話。

「妙な顔をしていた彼女、だが、ベンピの苦しきにはこりたのか、しぶしぶながら承知した」

とノートにはある。

「持って出るのが嫌なら、ペーパーにとって

いくらからあげが好きだからといって、ケムシやムカデ、ナメクジ、カマキリ、赤トンボと、てあたり次第にからあげにして、強精食だ、回春剤だとだされても、つつしんで御辞退申し上げることにしている。珍品だ珍重な栄養剤だともったいつけたって、ゲテモノの展覧会じゃないの。酒は酒で、マタタビ酒ときた。猫とまちがえていやがる。

私はやっぱり美女の神酒のほうがいい。

中へ置いておき給え、あとはぼくが……」

だって。

どうだろうこの態度。

「ペーパーの上に鎮座します、すみ子さんの得がたいものを前にしたかずにこの、はげしい胸の高鳴りを、ご想像願いたいものである」

奥様の「ねりウニ」を食卓に飾る話があったはず。どこまで想像していいかしら。

始めから、刺激の強い話になった。

(不浄なる聖物、より「ベンピ」)

「女中さんが、男のようなポーズで、男性用の朝顔に向けて、金色の雨を勢よくほとばしらせている」

鬼怒川温泉はAホテル、

「うまいもんだね」

とやま氏、その女中さんに話しかけた。

「いつも、そうやってするの」

見ていただけてもずうずうしいのに、これはまた輪をかけてずうずうしい。

「人目がなければ、大の方までこうして片づけるという」

忙しいと、人間何を考えるかわかったものじゃない、というお話。

「ふとん係りの若い衆さんが、毎日掃除して

いるのだもの。用をたしたら(たのむわ)って声をかけておくの」

だそうです。

「若い衆は、どんな気持で彼女たちのあと始末をするのであろう。しかし、かづひこにとってうらやましきは、その若い衆」

その気持、わかる。

大量の貴重な香水が鎮座ましましているのだから。

(ぼくはジュースにあこがれる、より「あと始末」)

やさしいお話にいきましょう。

B 鼻

「風邪は他人にうつすと、当人は治るといいい伝えがある。君の風邪をぼくにうつしたらいい」

というわけで、形の良い鼻をグスグスいわせて、紙を取り出す彼女の手をおさえ、とやま氏、紙のかわりに唇を差し出した。

「チン、彼女は、かづひこのいう通りにしてハナをかんだ」

とある。彼女、トルコのコウちゃん。

「それから四日目。みごとに風邪の徴候があらわれてきた」

十日近くもブラブラする結果になった。

「この風邪は、治すのを惜しく思う」

美しいお話。

(私は犬のように歩く、より、「もらったカゼ」)

「彼女は、何回も繰り返して丁寧にハナをかんだ。そして、行儀悪くも、その紙をソツと足元へ捨てたはずはないか」

目立って美しい女性だけにぞくりときた。

車内での出来事。下車駅につくと、狙ったエモノをつかんで駅前の喫茶店へ飛び込んだ。

「いつものことながら、それはズシリとした感じをかづひこに与える」

名文です。

トイレで贈り物を開いた。

「今夜のそれは、ものすごいものだった。あの美人がこんなすごいものと、疑問を持つほどの醜悪さを漂わせていて、さすがのかづひこも、タジタジとなった」

やはり、可愛い鼻に口をつけて、吸ってやるぐらいにしておくほうがいいんですよ。

ところがです。それがそれ、マニヤの崇高なところ。

「しかし、そのものはたしかに醜悪だが、美女のものとはハッキリしている。しかも、醜

悪なモノによけい美しさを感じる、業病のよ
うなものをもつかつひこだ。一度はひるんで
も捨てる気持はさらに起らない」

修身の教科書にのせたい気持。

（醜惡ななかの美しさ、より「醜惡の味」）

鼻の次はお隣の口といきましょう。

C おくび

「顔をそむける余地もなく、またせっかくの
ごちそうを逃げるテはないので、その芳香を
おもいきり吸い込み、味わってしまう」

とあるのは、若夫人タイプのおくび。ラッ
シュで身うごきできないおかげ。

「口臭とギョーザの混った臭い。美しいひと
のはいたものは、とにかくおいしい」

仙境に入らないとこの気持はわからない。

「うまい、うまい。このにおいは、彼女の体
内でもしだされたものなのだ」

美女と顔と顔のへだたりは、約三十糎だっ
たそうです。ハイ。

たまにこういうことがないと、ラッシュに
もまれて会社に行く気がしなくなるよね。

（私は、この醜惡さを愛する、より、「おく
び」）

D つば

「美しいプラスチックの容器が用意され、
ママさんたちの美しい唇からはきだされた酒
が、みるみるこれにためられていく」

新酒のききざけで、一流どころのバアの女
主人十四五人、平均年令三十五才。

「容器の中を覗き込んだら、誰が吐いたのや
ら、ツバキのかたまりまで浮いている。これ
は、すばらしい最上の美酒、ちょっと、手に
はいらない、ドレイの呑みものだ」

よかったね。

「スキをみて、その中味を、そっと味わって
みたが、十五人の美人の唇の味をそのまま
たえるかのように、その美酒はトロリとかず
ひこの舌にのり、魂の飛ぶおもいだった」

よかったね。

キスすればさ、誰だってつばを飲み込むも
のだけど、いちいちキスしていたら、はった
をされるからね。

（私は醜惡さを愛する、より「ききざけ」）

こういう場合もある。

「かずひこの隣には、S夫人が座っていた。
体臭と息づかいで、かなり酔いのまわってい
るのがわかるのだ。小皿にヤミ汁を盛りわけ

てくれた」

ヤミ汁とは、各自持よりの材料を手あたり
次第に投げ込み、これを煮てナベを囲み、強
い洋酒で夕食会を催すこと、あかりといえ
ばせいぜい、ナベの下火くらのもの。

美しきS夫人、

「まったくヤミ汁って面白いわね。これじゃ
タンを入れてもわからないじゃない」

そうです。まぜればまぜるほど、料理の味
もよくなるでしょう。食塩など必要はない。

（かぎりなく甘美なるもの、より、「ヤミ
汁」）

E かわ

肩にいきましょう。

「久しぶりに会ったK子夫人は、豊満な肩を
グイとつき出してみせる。こんなにヤケちゃ
った」

美しい線を描く、まるい肩から背中をつき
出すようにして、皮をむけと云う。

これからが最高なんです。

「ムキおわって、世間話のお相手をしながら
美しいヒトの背中中の肌の断片を集めたコーヒ
ー茶碗の中から、一ひらつまみ上げて、すば
やく口へ」

たべちゃった。

「あいかわらずね。見ていた彼女は平然たるもの。そんなもの、おいしいの?」

K子夫人、年令三十そこそこ。旧友の二度目の夫人。

「どちらかというと、Sタイプの麗人で、実は一度、プレイを楽しませてもらったことがある」

とは、どういうこと。

「そんなもの、おいしいの? このセリフ、ずっと以前のプレイのときにも、笑いながら云われたっけ」

まさか、K子夫人の神酒をいただいたわけじゃないでしょうね。気になる。ウン。

(わがな美なるもの、より「かわ」)

F 毛

ぐっと下がって……

「わたし、いまはいったけど、でも、いいでしょう。汗を流してらっしゃい」

と云うのは、出資者の池田夫人。邸の一角に豪華な温泉式の風呂を、こしらえたのである。一風呂あびろ、というわけ。

「フト気がいたら、湯の中に一本のヘアーがただよっているのを発見した。うぶ毛のよ

うに細いヘアーだ」

よくあることです。

「思わず、いとしくなって、このヘアーを口に含んでしまった」

その程度なら許せます。

(わが唇は喜びにふるえる、より「ヘアー」)

G 綿

「Gという脱脂綿メーカーから、新発売の携帯用生理綿のPRについて相談をうけた」

宣伝関係の企画が、とやま氏の本職の由。

「百人分以上の、生理綿の山をデスクに積みあげて、オフィスに現れる女性に、片はから進呈することにした」

うれしかったでしょう。

モデル嬢、雑誌記者、BG等、女性とみれば進呈した。毎日が楽しくて仕方がない。

「これあげる。ただし、たのみがあるんだ。

調査をたのまれてるのでね。使ったあとの感想をきかせてほしい。ついでに、面倒でも医学的な統計もとっているんでね、使用済みのヤツを返してほしいんだ」

これは冗談。ところが、使用済みのヤツを丁寧に箱に入れて、デパートの包装紙でくるんで、

「いつかの、おたのみになったもの」

雑誌の渉外係のお嬢さん。よかったね。

「ズシリと、妙に手に重いS嬢からのプレゼントを、ボンヤリと眺めていたことだった」

冗談からプレゼント。医学には弱いよ。

(わが身を灼く屈辱感、より「医学統計」)

H 紙

「自動水洗式だから、使用后、直ちに彼女自身で水を流すわけにはいかない。息をこらして待つことしばし」

とあるのは、和服に新日本髪という正月スタイルのよく似合うスラリとした女性が、そわそわとトイレに消えたからである。

「やや上気して一そう美しい女性が静かに出てゆく。待ってましたとばかり、そのあとに入る。あるある、美わしの花びらが」

そこまで。

自動水洗装置が働き出した。

残念でした。

(醜悪ななかの美しさ、より「残念な話」)

「かずひこのオフィスは、高台で見晴しはよい代りに、断水の程度はひどい。バケツで流しているが、ときには、その水にも不自由をしてしまう」

そこでだ。

「わざと彼女の使用直後、水の不足のときをねらって、あとを使用する口実をつくる。二十才の麗人の、お使いあとへ入る楽しさときどき味わっている」

いくら恥かしくても、水の無いのはしょうがない。

水道局も粹だね。

（かぎりなく甘美なるもの、より、「水キキン」）

I パンティ

「あるとき、おそろおそろ彼女の机の引き出しをあけてみたら、パンティの古いのが、奥のほうに丸めてつつこんであった。思わず、それを盗み出して、自宅に持ち帰った」

彼女、ビルの交換手。

「あくる日、彼女の様子をうかがったが、モノがモノだけに、彼女のそしらぬ様子が、かづひこを安心させた」

但し、十年前の話。念の為。

「十年たって、久し振りに会って、そのときのパンティの染まで、かづひこは思い出したのだった」

とある。

なつかしかったでしょう。

（マゾ氏街をゆく、より「置きみやげ」）

J 神 酒

1

ダンチ族の植物づくりのお話。

「腐らせたシモゴエを水に薄めて与えると、すばらしく育ち、美しい花を咲かせる」とあり、

「ウチには、ヒミツの肥料があるんです」

Q氏が云いかけると、

「アナタ、おやめなさいよ」

Q氏夫人が慌てて止めた。あやしい。

「けっきょく、家内のヤツのをツボにためて置くようにしてるんですがね」

水洗も苦勞するね。

「問題のツボを開けてみたくなるのは、おくさんが、あまりにも美しすぎるひとであるからだ」

とあり、とやま氏、見せてくれと云ったらしい。

「おくさんの猛反対に遇つて、残念ながら話だけで、ホンモノには、お目にかかれなかった」

残念でした。

「チャンスがあれば、そのツボの中味を、少しでももらいたいものと思っている」

その後、いただいたかしら。

（私は犬のように歩く、より、「こやしの話」）

2

「文子さんは、イヤらしい客の席に出すビールの中に、そっと液体を混ぜて知らん顔でテーブルにのせるという」

いやらしい客とは、ケチで、人使いが荒くて、スグにからだにさわりたがる客をいうそう。わかりる。

仲居さんたちの仕返しのお話。

「相手の出方によって、料理の中へ、キタナイものを、ソツと入れるのだという。毛、フケ、鼻くそ、耳の垢、ツメのアカ、つばき、歯くそなど」

こんなのはまだやさしい方なんだそう。

「男にのませる文子さんというひとは、色の白い、スラリとした文字通りの美人」

考えることは同じだね。

「文子さんを呼んで、思いきり彼女をおこらせ、そのビールのごちそうにありつこうか、と真剣に考えてしまった」

とある。

(ぼくはジュースにあこがれる、より「仕返し」)

3

会社の厚生施設のひとつとして、江の島に海の家を借りにいったとやま氏、家主の美ぼうの若夫人に案内してもらった。

「海水へ足をつっ込んで、冷えたのか、かの女がもよおしたらしいのは、それから、じきのことだった。」

——困ったわ。

事態は切迫したらしい

何が起るかわかったものじゃない。

「とどのつまり、松林のおくで、用を足してくるから、見張っていて」

ということになった。

それからどうしたって。

終って、夫人とわかれてから、とやま氏さっそく松林に入っていく。

「さがすほどのこともなく、アッタ、アッタ。初対面ながら、美しいひとの面影をおもいださせる。われをわすれて、草の上にすわり、その女性が、おいていってくれたものに惹きつけられて幸福感に酔いしれた」

初対面の美女だから、なおさら幸福感がわきあがったものでしょう。

仙境と知れ。

(わが唇は喜びにふるえる、より「草むらにて」)

4

「お茶、といっても、日本茶でも紅茶でもない。どこを探しても売っていない。かずひこだけのヒミツのお茶だ」

とあり、

「過日、社用で三泊の旅に出たとき、むこうではぜったい手に入らないことを予想して、特にたのみこんで……」

特にたのみこんで、ですよ。

誰かしら。

「……マホー瓶一杯をわけてもらい、よろこんで自動車の座席においた」

お茶をのみのみドライブとしゃれた。

「他の人にはいえぬお茶。神秘的力でかずひこを惹きつけるお茶。かずひこはこの一滴にイノチをかけている」

とやま氏の告白。

運転手に、

「お茶を一杯」

と云われて、狼狽する。

(不浄なる聖物、より「お茶」)

5

「クリスマスケーキには洋酒がしみこませてある。それは、味をよりよくするためだ。吾々は、さらに、そのケーキの味をよくしたい」と思い、二人組をくだいた。」

吾々とは、とやま氏と同好の友人、二人組とは、知り合いのBG。場所は友人のアパート。

BGの返事、

「でもなんだかヘンネ。食べるお菓子に、上からひっかけるなんて。フケツじゃない」

泣かせるねえ、この言葉。

「マニアのノート」の中で、この言葉が最大の圧感だと思います。

二人のBG、なかなかウンと云わない。がそこはそれ、好奇心には負けるものだ。

ケーキの箱を片手にトイレに消える。

よかったね。やがて、

「してきたわ、ヤーナカンジ」
だって。

二人でどうやってひっかけたんだろう。

「約束の通り、ケーキは頭から美しい露にシトドぬれて、すばらしい香りを放っている」
名文です。

(私はこの醜悪さを愛する、より「クリスマスケーキ」)

連載傑作S小説

花 と 蛇

(第十三回)

団 鬼 六

遂に京子も

ズベ公達の喊声とやくざ達の哄笑で、地下室の中にはムツとする熱気が充満する。

死ぬより辛い恥しい状態を淫獣のような人間達の目に、はつきりとさらけ出してしまった美津子の号泣が、姉の京子の耳に突き通すように入ってくるのだ。

——美津子、がまんするのよ——

京子は、胸の中で祈るようにいい、我が身を襲ってくる生理の苦しさを、キリキリ歯を噛みしめて耐えるのだった。

「全く健康的な色ね」

「どう、お嬢さん、すっとしたでしょう」

「もっと出したっていいのよ。便器は大きいのだから」

ズベ公達は、さかんに美津子をからかっている。

銀子は、ニヤニヤして、紅生姜のように真っ赤になった顔を肩にすりつけて泣きじゃくっている美津子の両頬に手をかけ、正面に見える。

「ふふふ、お嬢さん、お顔をよく見せて」

美津子は、固く眼を閉じ、小さく開いた口

から可愛い舌をのぞかせて、切なげにあえぎつつけている。

「すばらしかったわよ。全部撮影したげたから、フィルムが出来上り次第、貴女にも見せてあげるわね」

銀子はそういい、竹田と石山に後始末をするようにいう。イガ栗頭の二人の不良少年はまぶしいものでも見るように、美津子のあられもない肢態をぼんやり見つめていたが、銀子につつかれて、はっと正気にもどり、便器を台の下へおろし、厚い布をとり出す。

少年が美少女の後始末をやり始めようとす

ると、朱美が、ちょっと待った、と割って入る。

「これから、このお嬢さんのお行儀も、しつけないきゃならないのだからね」

と屈辱にあえぎつつける美津子に向って

「お嬢さん、黙ったまま、男の子に始末させようというのはお行儀が悪いよ。感謝の気持ちを現わさなくちゃいけない。何から何までお世話をかけて申訳ございません、とそれ位の事をいわなくちゃいけない。そして、始末してもらったら、有難うございます、と、いって、お礼にキッスをしてあげるんだよ」

ズベ公達は、どっと笑った。

美津子は、銀子にかかえられた顔をひきつけて嗚咽する。

「さあ、いわないか！」

朱美に、どやしつけられて、美津子は、唇をわなわな震わせつつ

「な、何から何まで、お、お、お世話をかけて——申し、申し訳で、ございません」

そういって、たまたまなくなったように美津子は号泣する。

美津子に眼くばせを受けた竹田と石山は、いそいそとして、後始末を始め出した。

「ああ——」

美津子は、息が止まるような屈辱に全身を硬直させる。

「さあ、すんだよ。次は、どうするのだったかね。お嬢さん」

朱美が美津子の縄に締めあげられている乳房をピチャピチャたたいていう。

「あ、有難うご、ございます——」

美津子があえぎあえぎいうと、

「次は、お礼の熱いキッスを、このお二人にしてさし上げるんだよ」

朱美は、調子づいたようにいうのだった。

「おっと、そいつは俺が引受けるぜ。このお嬢さんには、貸しがあるんだからな」

川田が、美津子の顔を押しさえている銀子とかわり、美津子の上気した美しい顔を両手ではさみこむようにする。

川田は、先程、美津子の唇を吸おうとして不覚にも唇を噛み切られている。その埋合わせを今つけようと、美津子の顔の上へかぶさっていくのだった。

美津子の隣の台の上で、下腹を突きあげてくるような苦しさで戦っている京子は、それに気づくや狂ったように首を振って叫ぶ。

「——鬼！悪魔！妹まで、よくも妹まで——ああ——」

京子は再び激しくこみあげて来た生理的苦痛に顔をゆがめる。自分の操を暴力で奪った悪鬼のような男が、次に妹の美津子にまで毒牙を向けた事を知って、京子は逆上するのである。

「——か、川田さん——貴方は、それでも人間なの。ねえ、人間なの！」

キリキリ歯を噛みながら、叫びつつける京子だったが、

「うるさいよっ」

銀子が大声をあげ京子の頬を平手打した。

「美津子の事なんか、すこしも、心配しなくてもいいよ。それより、妹に負けないよう、しっかり排泄しなきゃ駄目じゃないの」

ズベ公達はどっと笑うのだった。

美津子の方は、浣腸、そして排泄という魂

も凍るような羞恥責めにあい、放心したようになっている。もう川田のしようとする事に抵抗する気力もなく、いやらしく突き出してくる川田の唇に、自分の唇を合わせてしまうのだった。

「まだ、おねんねだね。もっと楽な気分でキッスはするものよ」

朱美が、川田に唇を合わされている美津子の一瞬、狼狽した表情を見つけて横からそう

いった。

「ううーう」

川田に唇を塞がれて、美津子は悲しげにうめく。

「キッスてのはね。舌を相手の口の中へ入れて、よく吸って頂き、自分も相手の舌をよく吸ってあげるのよ。わかった。お嬢さん」

次に銀子がそんな事をいって、執拗な川田の接吻を受けつつけている美津子の大きな白桃のような尻を指ではじくのだった。

やっと川田が美津子の顔から離れる。美津子は、全くの放心状態で、美しい顔をぐった横に伏せてしまうのだった。

ぜ。みっちり仕込むと立派に商売ものとして通用するよ」
川田は、満足げにそういい、改めて、しみじみ美津子の落花微塵の肢態を眺めるのである



った。

「じゃ、お嬢さん。お姉さんの方の排泄が終ったら、その台から降りしてあげるからね。もう少し待っていな」
朱美はそういって、京子の方へ残忍な視線を向けた。

「ううーああー、ううーああー」

京子は額にべっとり油汗をにじませて、痛烈にこみあがって来る便意を歯を喰いしばって耐えている。

京子に五十CCの浣腸をした吉沢が、舌打ちするように悶えつづける京子に浴びせた。

「強情な阿女だ。てめ

えに痛みつけられた俺達が、御親切にも排泄の世話までしてやろうといってるんじゃないかねえか。何時まで時間をかけやがる気だ」

まあ、お待ちよ、と悦子が笑って

「辛抱して時間をかけりゃかけるほど、沢山出るというじゃないか。この京子姐さん、それを心得ているから、どうせ排泄するなら思いきり沢山出して、皆んなに見て頂こうというハラなのさ」

なるほど、と吉沢と川田は顔を見合わせて笑うのだった。

吉沢はニヤニヤしながら、京子の苦悶する表情を眺めている。

「ふふふ、京子姐さん、いくらでも待ってやるぜ。がまんすればするほど、浣腸の値打はあるという事だ。ただし、お前さんの体から出たものは、山崎のへっぽこ探偵に小包にして送らなきゃならないのだからな。なるべく固いめのやつを頼むぜ」

ああーと京子は白い首筋を大きくのけぞらせて嫌嫌をするように首を振る。如何に耐えたところで、彼等に許される筈はないのだ。だが、そんな姿を憎みてもあまりある吉沢や川田達に目撃されねばならぬ口惜しさと辱しさ——それに、悪魔達は、京子の排泄したものを山崎に送るというおぞましい計画をたてている。京子は、屈辱の極にあえぎつつづけるのだった。

「いいかい。お前さんの排泄係は吉沢の兄貴

だ。いよいよという時は、吉沢兄貴にお願いして、力一杯排泄するんだぜ」

川田が京子の熱気を帯びている頬を指でついて笑った。

ズベ公達は京子の縛りつけられている台の上へ頬づえをつくように寄りたかり、

「空手二段の京子姐さんの排便で、すさまじいだろうね」

「そりゃそうさ。お小用の時だって、すごいものだったじゃないの。立ったまま足を開いてさ」

ズベ公達は、キャッキャッと楽しげに笑い合っている。

「け、けだもの！ 鬼っ」

京子はたまらなくなつて叫び、突き上げてくるような下腹の苦しみを息を止めてこらえる。

「ふん。京子姐御、そんなざまになつても、大層大きな口をきくじゃねえか。けだものは俺の事かい」

吉沢が京子の顔を上からのぞきこむようにしている。森田組の中では、吉沢が一番腕の立つ幹部として知られていたのだが、それが静子夫人を救出しようとして、この家へもぐりこんだ、この京子の空手の一撃で他愛もな

くのされてしまったのだ。親分に対しても面目を失い、男として恥をかいだわけであり、それだけに京子に対する憎しみは大きいものであったが、京子にしても、今、一足で脱出出来るというところを、この吉沢に裏門を固められた結果、奮戦空しく捕われの身となつてしまったのである。この吉沢さえ居なければ脱出に成功していたのだと思うと、京子にとっては、川田の次に憎くてたまらない男である。そんな男の手で浣腸を施され、その男の手で排泄の始末をされるなど、京子は胸のはりさけるばかりの口惜しさであった。

「そのけだものが、どんなに恐ろしいか骨身にこたえさせてやるぜ。だが、さぞ口惜しいだろうな。憎いけだものに浣腸され、嫌でも排泄させられる気持ってのは」

「——死んだって、死んだって、そ、そんな事を——ううっ——するものか——」

京子は、齒ぎしりしながら、うめくようにいう。

「そうかい。それなら、こっちにも考えがあるぜ」

吉沢は含み笑いしながら川田の方を見る。

「川田兄貴、どうやらこの姐さん、五十CCの浣腸じゃ不足らしいぜ。もう一回、五十C

Cを入れてあげようじゃねえか」

川田はニタリとして、よかろう、とうなづく。先程、京子の体内に五十CCのグリセリンを注入して空になっているガラス製浣腸器は、悦子の手によって再び五十CCの石鹼水を吸い上げたのだ。

京子はそれに気づくと、一瞬、血の気を失って、ひきつったような顔になる。もう限界に至り、最後の気力だけで耐えつづけている身に、更に五十CCの石鹼水を追加しようと鬼共はしているのだ。

「——待って、待ってっ、お願いです、も、もうこれ以上——ああ——」

京子は、逆上して身悶える。

吉沢は悦子から浣腸器を受けとると、
「なんでい。どうとも好きなようにして頂戴と啖呵をきっておきながら、もう泣声をあげるのかい。空手二段の鉄火娘も案外だらしねえな」

とせせら笑いながら近ずいて行く。

銀子が楽しそうに京子の顔を見ていった。

「ふふふ、何度もいうようだけど、あんたの体から出たものは、山崎に送らなきゃならぬのだからね。恋しい山崎さんの事を頭に浮かべながら、しっかり排泄するのよ。わかつたわね」

たわね」

遂に京子は憎い男、吉沢のために二度目の浣腸を受けたのだ。

合計、百CCを注入された京子は、体中に脂汗をにじませて苦悶する。だが、耐えられる道理はない。

「——お、お願い——ああ——」

京子が大きく首をのけぞらし、うめくようにいうと、吉沢がそんな京子に顔を近づけて「へっへへ、もう駄目かい」

京子は、美しい眉を寄せて、切なげにうなずく。

吉沢が便器を当てがおうとすると、銀子が手を出してそれを制し、

「ちゃんと自分でいわせなきゃ駄目だよ。赤ん坊じゃないのだからね」

と、次に京子のあえぎつづけている顔を両手ではさむようにしている。

「吉沢の兄貴に生意気な口をきいた事を謝って、便器の使用をお願いするんだよ」

つづいて、朱美が、

「妹の美津子の方が、ずっと素直だよ。妹に對して恥しいと思わないのかい」

京子は、もう限界を通りすぎ、腹の中を錐でえぐられるような苦しさ、もう見栄も体

裁もないといった、せっぱつまった気持であった。

「——吉、吉沢さん——もう決って、生意気な——口は、き、ききません——ですから——あっ、うう——」

京子は眼をつりあげ、齒を噛み鳴らして、押寄せてくる激痛と戦い、言葉をつづける。

「——ですから——お願いです、便器を——便器を——使わせて——」

吉沢は満足げにうなづいて、便器を持つ。「ちょっと待ちな。今、カメラを近づけるから」

撮影機がぐっと近ずいて来る。

京子は、もう何がどうなっているのか判断がつかぬ程、生理的欲求だけが先に立って血走った気分である。

「早く、早く、ああ——」

吉沢が、おっとっと、といって便器を当てがったのと、ほとんど同時に京子の排泄が始まった。

土牢の中

「さ、入るんだ」

静子夫人が閉じこめられている隣の牢屋に京子と美津子は、ズベ公達の手で押しこまれ

る。

四坪ばかりの牢屋の中には、森田組の男達の手で二本の丸木が打ちこまれてあった。その丸木に京子と美津子は、それぞれ立縛りにされて、向かい合った形にされる。

「明日からは、姉の方も妹の方も別々のところで、みっちり芸当を仕込むのだから、今夜は特別に二人一緒にいたいとおいたげるわ。つもる話を語り合うがいいわ」

朱美は、丸木を背にかちり立縛りにした二人の美女を、楽しそうに見くらべながらいう。

浣腸、そして排泄という羞恥地獄にのたうち、この牢屋まで引き立てられて来た美しい姉妹は、半ば失神状態で、丸木を背負ったまま、ぐったりになっている。

「ふふふ、二人とも、どうしたの。元気がないわね」

銀子は、京子と美津子の横に伏せている美しい顔を、のぞきこむように見て笑うのだった。

そこへ、悦子が、どう似合うでしょ、といって、美津子のセーラ服をちゃっかり着こんで入って来た。

「どう、夕霧女学校の生徒に見えるだろ」

「駄目だね。あそこは美人ばかり揃っているので有名な学校だよ。そんなブタみたいな女学生がいるもんか」

銀子と朱美が声を出して大笑いする。

悦子は、フンと口をとがらし、馬鹿にされたうっぷんを小さくすすりあげている美津子に向けるのだった。

「あんたのこのセーラ服や下着類はあたいが頂戴したからね。安心して、立派なヌード・スターになるがいいわ。あんたのような美人は、ヌードでいるのが一番美しく見えるものなのよ」

美津子は、悦子のそうした残忍な言葉に透き通るように白い肉体を小刻みに震わせ、鳴咽する。

「だけど、夕霧女学校のナンバーワンの美人が裸のままとは、ちょっと可哀そうね」

悦子は、セーラ服を貰ったお返しをしてあげるというながら、美津子の頬を指でつき、「ねえ、お嬢さん、褌がいい？ それとも、バタフライにする？」

美津子は、がっくり首を落し、一きわ激しく泣きじゃくるのだった。

「最初は、バタフライがいいよ。それから色褌、その次に股縄ってわけね。一步一步、階

段を上るように仕込んであげるわ」

銀子が含ま笑いしながらいうと、朱美が、「このお嬢さんにぴったりのバタフライがあるわよ。どう、これ」

スラックスのポケットから、オレンジ色のハート型になった小さなバタフライを取り出した。白兔の毛でふちどられているが、透き通るように薄いナイロン製のバタフライであった。

「まあ、素敵じゃないの。きっと、よく似合うわよ」

銀子が笑いながら、早速、とりつけるように朱美にいう。

「ふふふ、お嬢さん。バタフライなんて、学校じゃ教わらなかったらう。女学生のくせにバタフライなんかはかせてもらえるなんて、貴女、ほんとに幸せよ」

などと朱美はいい、悦子と二人で、それを美津子の腰にとりつけようとするのだった。

美津子は、真っ赤な顔を激しく振り、陶器のように白い肉体を硬化させる。

「駄目よ。そんなに足に力を入れちゃあ」

二人のズベ公は、笑い合いながら、美津子の腰にそれを強引に取りつけた。

「おや、ぴったりじゃないの。うわあ、とて

も可愛いいわ」

ハート型の小さいバタフライをはかされて屈辱にむせんでいる美津子を取巻くズベ公達は、はやし立てる。

「どう、お嬢さん、始めてバタフライをつけた気分は？ 一日も早く舞台に立ちたく思うでしょう」

銀子は、美津子の腰を固くしめあげているバタフライに眼を落しながら、口をゆがめているのだった。

「京子姐さんの方は、どうするの」

美津子のセーラ服を着ている悦子は、そのへんをくるくる踊るようにして、京子の傍へ寄り、がっくり首を落して、すすりあげている京子の顔をのぞきこんでいった。

「京子の方は、そのままにしておきな。明日の朝、社



長と親分が仕上げる事になっているんだ。だからさ、今夜は妹に、よく見させておいてやろうよ」

朱美がチューインガムを口にほりこみながらいう。銀子もニヤリとして、美津子のあごに手をかけて、ぐいと顔をこじあげ、

「ふふふふ、お嬢さん。あんたのお姉さんはね。葉桜団と森田組へ泥をひっかけた罰として、明日、顔から下は全部剃り取られる事になっているのよ。だから、今夜は、お姉さんのありのままのヌードを、よく見ておいてあげる事ね」

そういうと、他のズベ公達はどっと笑い、

「京子姐さんの、そうされたヌードを早く見たいものだわ」と賑やかに大声をあげ合っていた。

立縛りにした美しい姉妹をズベ公達は、そんな調子で、なぶ

りつづけ、ようやく、牢格子の外へ出て行く。

「——お姉さんっ」

四囲が静まると、美津子は、泣きはらした眼を姉の京子に向け、声をかけた。

「——美っちゃんっ」

京子も、涙にうるんだ瞳をあげ、美津子を見る。互いに眼と鼻の近くに置かれてある姉妹だが、非情な麻縄で立木に緊縛されている悲しさ、相容る事すら出来ないのだ。二人の美女は、ただ号泣するだけで、という言葉もない。

「——美っちゃん、許して。私が、私が馬鹿だったのよ」

京子は、肩を震わせ、やっと、妹にいうのだった。

「——お姉さん、一体、私達、どうなるの」

美津子は、すすりあげながら京子を見る。がっちり柱に縛りつけられている姉に視線を向けた美津子は、見てはならないものを見たようにすぐに眼を伏せてしまうのであった。そして、我身の恥しさに消え入るように嗚咽する。姉とはいえ、屈辱的なバタフライ一枚をはかされた肌身を、その正面にさらしている事は、やはり恥しい。

美しい姉妹は、互に視線をそらし合いながら、我身の不運をなげき、今後の恐怖におののくのであった。

「美っちゃん、望みを捨てちゃいけない。きつと、誰かが私達を救い出してくれるわ。貴女の身体だけは、姉さん、死んでも守りぬくつもりよ。だから、だから、負けちゃ駄目よ。生き抜くのよ」

京子は、必死な思いをこめて、妹にいうのだった。

調教師来る

二階の居間で、田代と森田は朝食を終え、煙草をくゆらせていたが、ノックの音。川田であった。

「昨夜は愉快でしたね、社長」

川田は、愛想笑いしながら、田代に差出された煙草を口にする。それへ、ライターの火をつけてやりながら田代はいう。

「ぼちぼち本格的に御婦人方を仕込まなきゃならないが、しっかり頼むぜ。何時までも、遊んではかりはおられんからな」

「へえ。今日あたりから、本腰を入れます。そのため、浅草の鬼源もコーチとして呼んであるのですよ」

鬼源とは、鬼村源一が本名で、花街近くのお座敷ショウに出す女の調教師で、つまり、花電車なるものを考えついた男であり、花街の玄人筋の女達からも、毒蛇のように恐れられていた人間だ。

「へい、ごめんなすって——」

黒眼鏡をかけた四十二三の男が、川田のうしろからのっさり入って来て、田代と森田に挨拶した。

「へえ、あんたが、あの有名な浅草の鬼源さんかい」

森田が盃を鬼源に渡し、酒を注いでやる。

鬼源は、杯を押し頂くようにして、いやらしく口をとがらせて飲むと、

「へい、鬼村と申します。この川田さんとは古い友人なんでさあ、すごくいい玉が入ったから、みっちり仕込んでくれとの通知があったんで——」

「そうかい。そいつは御苦労だったな。いい商品に仕込み上げてくれりゃ、礼はたんまりはずむぜ」

森田は、鬼源の注ぐ杯を一気にあふって、そういった。

「ところで、女連中は、パン助あがりですか」

鬼源が、そんな事をいうので、田代も森田も吹き出した。

「おいおい、冗談じゃねえぜ。女達は、素人も素人、一番年増の静子ってのは、遠山財閥の令夫人なんだぜ。それによ。映画女優の山川富士子ばりの美人なんだ」

森田に、そういわれて、鬼源は、眼をパチパチさせた。

「とにかく、商品を鬼源さんに一応お見せしようじゃないか。ここへ、静子夫人と京子を連れて来てくれんか。川田」

と、森田がいう。

承知しました、と川田は立上り、廊下へ出て行く。

鬼源が田代や森田に杯をさされて、ペコペコしていると、間もなく、賑やかな話声が廊下の方でし、静子夫人と京子を葉桜団員が引き立てて来たようである。

「入ってもいいですかい」

と銀子の声、ドアが開いて、生まれたままの素肌の本繩をかけられている静子夫人と京子が、ズベ公達に縄尻を取られ、引き立てられて来たのだ。

「よっぽど、歩きにくいらしいので、股繩は外してやりましたよ」

銀子は、静子夫人の尻を足で押すようにし部屋へ入って来る。京子は、朱美に縄尻をとられ、同じように尻を突かれるようにして、静子夫人のあとにつづくのだった。

柔軟な乳白色の素肌をくの字に曲げて、引きたてられて来た静子夫人は、床の間の左の柱を背負わされた形で、ひしひしと縄がかけられ、立縛りにされ、京子は右側の柱に立縛りにされる。二人の美女は、身も心も疲れ果てたように、がっくり首を落し、両肢を固く閉じ合わせているのだった。

鬼源は、啞然としたように唾をのみこんで床の間の緊縛美女を見つめている。

「どうでい。鬼源さん、いい玉だろう」

川田が鬼源の肩をたたくようにしている。

鬼源は、出歯をむき出して、

「こんな別嬪さんがたを俺に仕込めというのですかい。いっときますがね。わっしがこれまで手がけてた女ってのは、パン助以下の阿女ですよ。こんな、まぶしいような美人じゃ手がすくんでしまいまさあ」

それを聞くと、川田が笑いながら、
「鬼源ともあろう者が、弱気を出すことはねえよ。そりゃこの奥さんは、もとはといえは遠山財閥の令夫人だし、このお嬢さんは、山

崎探偵事務所の美人秘書だよ。だが、今は、この森田組の大切な商売物になってるんだ。

遠慮する事はねえよ。パン助を仕込み上げるより手荒にあつかったって、かまわねえ。一日も早くショーへ出せるよう、ピッチをあげてほしいんだ」

「じゃ、俺流の手荒な方法でかまわねえのですね」

「勿論だとも。このお二人も、その覚悟は充分出来てるんだ。なあ、そうだろう」

川田は、立縛りにされている静子夫人と京子の美しい頬を指でつつく。静子夫人も京子も、その瞬間、美しい柳眉を上げ、憤怒にこもった瞳を川田に向けるのだったが、どうしようもないよう再び首を垂れてしまうのだった。

川田は、ニヤニヤしながら、二人の美女に對していう。

「じゃ、今夜から、本格的な稽古を鬼源さんにつけてもらうからな。俺は助手というわけさ。二人とも一生懸命にやるんだぜ。お前達が熱心に励んで、客達を喜ばせてくれるようになりゃ、美津子や桂子まで、ショーに出す気はねえのだからな」

川田は、そういって、鬼源に、何か、あん

たより、この女達にいう事はねえかい、と肩をつく。鬼源は出歯をむき出して、二人の美女の前に立った。

「俺も調教師として、社長や親分方に見込まれて、ここへ来たんだ。お前さん方の身元は俺にや関係ねえ。手加減はせず、こつてりと絞りあげるから、そのつもりでいなきゃ駄目だぜ。ただ形だけで、ショーのスターになっちゃいけねえ。身も心も、ショーのスターになり切ってしまうのだ。俺は、そのように、お前さん方を仕込むつもりだからな」

鬼源は、そういう、次に、田代と森田の方を向いて、

「だけど、旦那、全くすばらしい女を手に入れたもんじゃありませんか。顔は、映画女優なみだし、体は一流のストリッパーなみだ。こういう御婦人方を仕込めるなんて、全く、夢のような気分ですよ」

鬼源がそういうと、田代も森田も満足げにうなづき、

「この別嬪さん方を商品にするまでには、ずいぶんと手数がかかったからな。ところで、どういう風に、この別嬪さん達を仕込みあげるつもりなんだ。一人一人に芸を仕込むよりこの二人をコンビにして、何か面白い事をさ

せりゃ、いいと思うんだがー」

森田がそういうと、鬼源と川田はニヤリとして顔を見合わせ、川田がいう。

「勿論ですよ。卵やバナナなんかの小道具を使う事も教えこみますが、結局は、この二人コンビにして、というより、夫婦のようにしてー」

川田と鬼源が、調子づいて説明し始めたことを聞く田代と森田は、顔中しわだらけにして笑う。ズベ公達もキャッキャッ大声で笑い合うのだった。

川田と鬼源の悪魔の考えるような計画が、柱を背負わされている静子夫人と京子の耳にも、おぞましく入って来る。両手の自由がきくなら、耳をおさえてしまいたい二人であった。鬼畜に等しい川田達の言葉が耳に入るのを防ぐよう静子夫人と京子は、激しく首を振り出す。それを見た川田は、口をゆがめて、「ふふふ、何も今から、そんなに喜んで興奮しなくてもいいよ。稽古は今夜からだ。それまで、いろいろと準備しなくちゃならないからな」

そういうながら、川田は、ズベ公達に命じて、夫人と京子の足首に縄をかけ、がっちり、柱に固定させてしまう。

それを見て、鬼源は、ポケットから、小さい巻尺をとり出し、まず、京子の方へ近づいて来た。

一体、何をする気なのかと、京子は新たな恐怖におびえた眼を見開く。横から、川田が京子にいった。

「何もそうびくつく事はないやな。今いった通り、夫婦ごっこするとなりや男勝りの鉄火娘の方が、さしづめ、旦那の役どころだ。だけど、そのままじゃ恰好がつかねえ。鬼源さんが今夜の練習に間に合うように小道具を作って下さるというわけさ。だからよ。ちょっと、サイズを計らせてもらうぜ」

川田がそういう終らぬうちに、鬼源は、京子の肢もとへ身をかがめてしまった。

「あつ、な、なにをするの！やめてっ」

京子は真っ赤な顔になって、逆上したように叫ぶ。だが、鬼源は、極めて事務的に、しかも、綿密に、計り終え、手帳に書きこみながら立上るのだった。

京子は、がっくりと深く首を落し、耳たぶまで真っ赤にして、気が狂いそうな屈辱にすすりあげている。

「奥さんの方のサイズも必要だそうだ」

川田は、ニヤニヤして、静子夫人の動揺し

た表情をうかがっている。

鬼源が、巻尺を手にして、猫背の体を運んでくると、静子夫人は、切長の美しい瞳に涙をにじませ、嫌嫌をするように顔を振るのだった。

「——やめてっ、お願いです、嫌、嫌、ああ

——」
鬼源の小さな体が足もとに沈むと、静子夫人は、歯ぎしりして、嗚咽し、体を硬化させる。

ようやく、鬼源が計り終えて、メモした手帳を川田に見せると、川田は、含み笑ひし、

「よし、これでわかった。今夜までに、二人にぴったりの小道具を、作ってもらってやるぜ。楽しみにしてな」

静子夫人と京子は、もう顔もあげ得ず、よよと泣きじゃくるだけだった。

(続く)

臨時増刊 花と蛇

小説、絵画、写真▽特集号

四馬孝画「花と蛇」各章クライマックス・シーン巻頭口絵十六葉
グラビヤ・フォト「花と蛇」各場面描写特別撮影写真三十六頁
長篇サディズム小説「花と蛇」第十五回完結まで一挙登載

愈々堂々完成 (乞直接お申込) 定価一部五〇〇円 略号(花)

内 容

第一グラビヤ

【花と蛇】幻想 新作写真集

本誌写真部 特 写

柱に縛られた美体……………玉田美佐子
厳しき縛しめに喘ぐ……………玉田美佐子
浣腸器による責めの幻想……………大塚 啓子
美貌醜弄(鼻責めの幻想)……………大塚 啓子

禪裸女緊縛の幻想……………大塚 啓子
両手首くさり吊りの美女の幻想……………大塚 啓子
美女手吊り晒し悶々の幻想……………大塚 啓子
ガラスシリンドラーと裸女責め幻想……………玉田美佐子
柔肌と麻縄の織りなす幻想……………玉田美佐子

△花と蛇▽画集 四馬孝・画

- 一、静子夫人捕わる
- 二、静子夫人と桂子の対面
- 三、静子夫人に迫る魔手
- 四、川田の悪どい企らみ
- 五、桂子と静子夫人のオシメ責め
- 六、令夫人に対する浣腸の洗礼
- 七、深窓の美女夫人の晒しもの
- 八、あぐら縛りの特別席
- 九、カメラに向けられる苦悶する美貌
- 十、京子探偵への惨忍な報復
- 十一、田代と森田にいたぶられる静子夫人
- 十二、美人探偵京子頑張る

満天下Sファンの血を沸かせた団鬼六作の傑作サディズム長篇小説「花と蛇」は、皆様の声援により、ここに全篇一挙掲載の特集号として、堂々完成いたしました。冒頭に掲げました巻頭口絵、グラビヤ写真の外に、豊富なオフセット写真を加えて、文字通りS派垂涎の特集号をお贈りします。未見の方は一刻も早く直ぐお申込みを——。

十三、静子と京子の後手吊り
 十四、捕われた美津子の姿
 十五、京子と妹の美津子
 十六、受難の静子令夫人

私のアルバム

私の緊縛フォト・コレクション

私の可愛いペット……………梨花悠紀子

明眸のいましめ……………大井小夜子

美女の柱しぼり……………絹川 文代

二女連縛 美しき羞らい……………大塚 啓子
 絹川 文代

着衣剝奪と緊縛シーン……………竹野ひろ子

算盤責めのお仕置……………大塚 啓子

乱れ裾緊縛絵模様……………愛川 悦子

荒縄と竹竿の責め……………絹川 文代

扉 淫蛇に襲われる美女 四馬孝・画

第一章 発 端…静子令夫人―誘拐され

た令夫人―送られた着衣―ズベ公
 の本拠

第二章 陥 穽…二度目の嫌がらせ―運

転手の正体―地獄の結婚式

第三章 美人探偵…落花紛々―美人探偵京

子―浣腸地獄図

第四章 浣腸図…浣腸強制―屈伏

第五章 救 援 者…羞恥地獄―觀念の座

―京子の活躍

第六章 救援の失敗…逆転―颯りもの

第七章 好 餌…京子の屈伏―淫獣の餌

第八章 悪魔の哄笑…毒牙は迫る―新鮮な

生贄―悪魔の笑い―遂に美津子も

第九章 地下室…悪鬼の饗宴―美津子の
 おとり

第十章 飜 弄…屈辱と羞恥―身代りに

立つ夫人

第十一章 蛇の執念…裸踊り―おしめを使う

夫人―屈辱の挨拶

第十二章 姉妹危し…屈辱の猿ぐつわ―浣腸

競演

第十三章 調教師…遂に京子も―土牢の中

―調教師来る

第十四章 美津子受難…二人の美女―調教師

―狂乱の美津子

第十五章 結 末…美津子の屈伏―二つの

肉塊―絶対絶命―美しい童女―ス
 ター誕生

第二 グラビヤ

花と蛇 グラフィック・ファンタジー

責めに悶える女体の幻想 大塚 啓子

浣腸器の恐怖につかれた幻想 大塚 啓子

玉簾越しの女体非情の幻想……………玉田美佐子

両手首両足首連縛の幻想……………玉田美佐子

苛められ尽した女体の幻想……………大塚 啓子

羞恥さらし責めの幻想……………大塚 啓子

柔肌に喰い込む縄の幻想……………大塚 啓子

着衣剝奪と浣腸に悶える幻想……………大塚 啓子

光と影による浣腸器の幻想……………大塚 啓子

輝美といましめに泣く幻想……………大塚 啓子

怨嗟と愁嘆、苦痛と忍耐……………大塚 啓子

足吊りに至る過程の幻想……………大塚 啓子

女体緊縛アルバム

美女姉妹仲よく縛られる……………絹川 文代

手吊にもだえる八態……………桜井 葉子

美しき捕われの餌物……………絹川 文代

雨中泥まみれの折檻……………大塚 啓子

伸びやかな四肢と縄目……………絹川 文代

緊縛女体の優美ポーズ……………熱海 容子

柱じばり女体悦虐模様……………絹川 文代

縄に憑かれた陶醉境……………梨花悠紀子

ショート・パンツ哀感……………絹川 文代

カメラに全身を晒して……………絹川 文代

レインコートのかがやき……………絹川 文代

紺色の囚衣をまといて……………？

【長篇SM小説】

宇宙のどこかで

△或る混血老婦人の話▽

佐 治 麻 造

ある混血老婦人の話 (二十四)

車は三時間余り走って、田舎の警察署に着いた。

婦人警官達がエヴァ達の衣類を脱がせて隅から隅迄きびしく調べた。監獄の婦人看守の制服によく似た婦人警官の制服を眺めてエヴァは顔を蒼くして震えおののいた。再び衣服を着ける事を許されたエヴァは夢かと喜んだが、後手錠のまま独房に突き入れられ、重い鉄格子の錠の音を耳にして再び床に坐って暗然と声を呑んだ。

署の中ではFBI達が本部と連絡をとり、署長に後始末の指示を与え、そして協議を繰返した。直ちに二名の脱獄囚をニューアーク市の本部に護送せよと云うのだ。

「鉄道はどこを走ってる?」

「一番近い駅で二〇〇軒離れてます。」

地図を睨んでFBI達は困惑した。

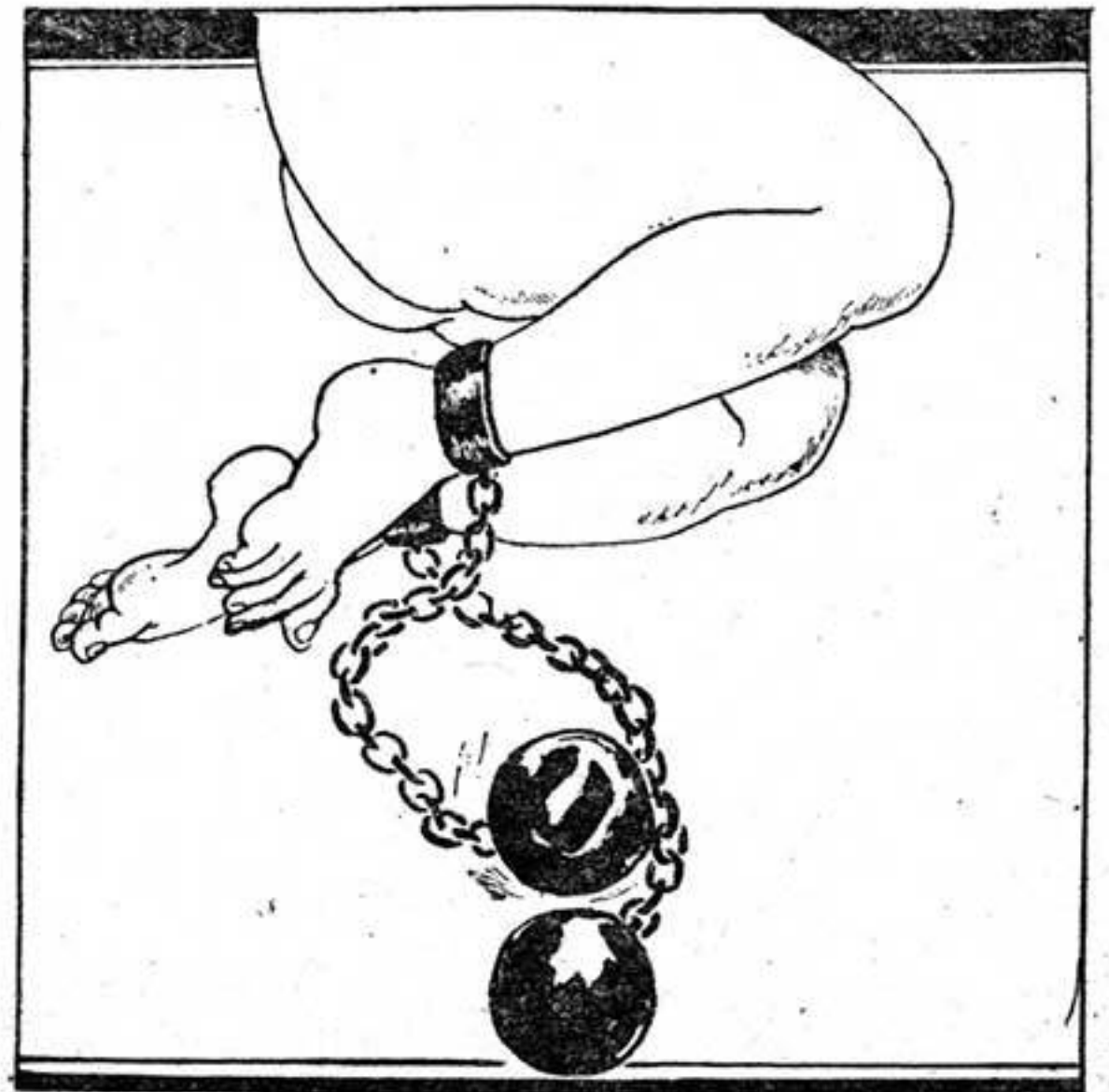
「凄く遠回りになるじゃないか。そうすると自動車しか手はないが、途中泊らにゃならんぞ。それに奴等が奪還しに来るおそれが多分にあるからな。」

「未だ知りませんでしょう。」

「いや、もう本部が新聞にかぎつかれたらしいぜ。」

「軽飛行機は使えないのかい。」

FBI達は、その警察署から二名の婦人警官を借りて直ちに自動



車で出発する事にきめた。

「やれやれ、こき使いやがるなあ。」

「脱獄したんだから懲役囚として取扱えばいいんじゃないのか？
何故被疑者扱いにしないけりゃいけないんだい？」

「規則だよ。規則々々……」

シルヴィアとエヴァは曳き出されて、お互いの腕を組んで後手錠を嵌め直された。

「あんたとは、よく縁があるのね。」

エヴァの左腕と組まされた右腕を動かし乍ら、シルヴィアが唇を曲げて云った。

「お黙り!!」

革鞆を肩に掛けた婦人警官が叱りつけて頬を打った。

「ちくしょう!! 私ほね、どうせもう死刑になる身なんだからね、
気に障る事すると何するか知れたもんじゃないわよ。」

シルヴィアが口惜しそうに喚いた。

「おいエヴァ。お前、矢張り射ってるじゃないか。おとなしそうな
風してるが嘘ついて駄目だぞ。」

FBIの男がエヴァをきめつけた。エヴァの右手から火薬反応が
検出されたのだ。

「……ハ、ハイ……それは……射ったことは射ちましたけど……空に向けて
夢中で射ったんですの。本当なんです。」

エヴァは泣き声で訴えたが、FBIは鼻で笑った。

「ともかく射った事は射ってるんだからな。抵抗しなかったとは云
わせないぞ。さ、早く行こうぜ。」

とFBIの男はソフトのつばを指先で押し下げた。

両側を二人の婦人警官に挟まれて四人の女が坐ると席は窮屈だったが、女囚達が僅かでも身じろぎすると婦人警官は鋭く睨みつけるのだった。出発して暫くすると日が暮れた。六人のFBI、二人の婦人警官、そして二名の女囚は、小さな町のホテルに入って行った。ニュースは既に此の町にも届いていて、人々はシルヴィアとエヴァの姿を好奇の眼で迎え、そして階段を曳かれて昇る姿を眉をひそめて恐ろしげに見送るのだった。廊下で組んだ腕を解かれたシルヴィアとエヴァは、隣り合った室に連れて入られた。それぞれ一名宛の婦人警官も一緒に入る。

「ミス・ナンシー・パーキンス。大丈夫ですね。」

エヴァの室に入って来たFBIの男が、室中を調べ乍ら云った。

「此の女囚はおとなしい様ですね。御心配なく。メアリーさんの方はしたたか者らしいですわね。あっちの方を注意してね。」

「戒具は規定に拘わらないで充分に使用して構いませんよ。じゃ気をつけて……。私達は向いと両隣の室ですから。」

「ありがとう。」

先刻シルヴィアと組んだ腕を解く時に、片手だけ外したままの手錠をしっかりと握ったナンシーはFBIの男を眼で見送ると、エヴァの方に向き直って前手錠を改めてがっちり嵌めた。

「そこに坐りなさい。」

室の中央に持ち出された椅子に腰を下ろしたエヴァの両足首にも、別の手錠が固く嵌められた。

「食事迄をそうして休むといいわ。」

婦人警官ナンシーは、両手両足を縛しめられたエヴァから眼を離さないで服を着替え、そして椅子に腰を下ろすと煙草に火をつけ

た。

「水を吞ませて下さらない？」

エヴァが哀願すると、ナンシーはコップに水を注いで、立って来てエヴァに与えた。手錠の両手でコップを抱く様に持って、息を詰らせ乍ら飲み干すエヴァを、立ったまま見下ろしていたナンシーは、ひったくる様にコップを取り上げると椅子に戻った。もう一杯欲しかったが、エヴァは悲しく我慢して再び深くうなだれた。FBI達が時々扉から覗き込んで婦人警官に声を掛けて行き、隣室からは薄手の壁を通して時々激しい平手打ちの音が聞え、やがてボーイが食事を運んで来て、所々に傷のあるテーブルの上において出て行った。扉から覗いたFBIの男がナンシーに誘われて、自分の食事の盆を持って来てテーブルに坐った。エヴァの盆を床の上に置いた彼等はエヴァを監視し乍ら食事を初めた。

「いろいろと大変だったですわね。」

「いやあ、何しろ何年振りかの脱獄事件なんで、長官じきじきのお声がかりでね、ちょっとばかり苦労させられましたよ。」

男はそう云ってエヴァをじろりと睨み、フォークの肉片を口にほり込んだ。

「こんな田舎ホテルの料理は、お口に合わないんじゃないですか？」

「いやいや、ともかく腹が空きましたよ。もう八時過ぎか」

と男は腕時計を見て云って、又もエヴァに視線を飛ばせる。

「隣の室じゃ、メアリーさんが手古摺ってるらしいわねえ。」

「ええ、あの女には心が疲れますよ。喚くので嵌口具を嵌めてやっただんですがね、灰皿を投げつけようとしたりするんで、我々が二人程一緒に居るんですよ。今夜は交替で寝ずの番をしなきゃならんで

す。」

「本当に馬鹿々々しいわねえ。」

「全く!! 今日、射ち殺しときゃよかったと思いますよ。いや、冗談ですがね。」

FBIの男は肩をすくめて、口のあたりを薄汚れたナフキンで拭いた。

「けど、FBIの方々って本当に素敵ですわ。ちゃんと探して捕えてしまふんですもの。」

「いやあ、長びいてしまってお恥かしいですよ。」

会話が途切れ、エヴァは手錠の両手をそっと挙げて髪を撫でつけた。FBIの男と婦人警官の眼が光った。

「私、来春退職して結婚するんですの。」

エヴァの両手が腿の上におかれるのを見て、ナンシーが呟いた。
「ほう!! それはおめでとう。」

「ええ、ありがとう。そしてニューアークに住むんですの。私、大都会に住んだ事ありませんし、ニューアークは初めてですよ。素晴らしい街なんですってねえ。私、こうしてニューアークへ出張出来て喜んですの。どんな所ですか？ さぞ綺麗なんでしょうねえ。」

素敵なものが何でもあって……。」

「冗談じゃないですよ。てんで詰りませんよ。こちらの方が、どんなに素晴らしいか。静かで空気は澄んでるし。しかしまあ、御主人と御一緒ならどこでもいいですよ。ハ、ハ、ハ。ま、早く可愛い赤ちゃんを産んで、幸福に暮して下さいよ。」

「ええ、ありがとう。写真ごらんになって下さる？」

ナンシーは胸に吊るしたロケットをガウンの下乳房の間から取

出してパチンと蓋をあけ、許婚の写真を男に見せて幸福そうに微笑した。

熱いものがエヴァの胸にこみ上げ、両眼に涙が滲んで来た。婦人警官のナンシーが、愛する夫と家庭を持ち、朝な夕なに笑顔で送り迎えし、そしてやがて愛らしい赤児を其の胸に抱いて平和に満ち足りた年月を過して行く光景がエヴァの眼前にありありと映った。ナンシーの子がエヴァの心の中で健やかに愛らしく育ち成長し立派な青年になって行き、その幻はいつしかエヴァ自身の愛児の面影に重なって行った。そして此の自分は其の間の永い永い年月を牢獄の鉄鎖に繋がれて過さねばならないのだ。

「……あの戦争さえなかったなら……」

耐え切れない嗚咽がエヴァの体を震わせ、涙が膝の両手の手錠に滴り落ちた。

「さ、泣かないで、お食べなさいな。」

ナンシーが立ち上って来て手錠を外して呉れた。二人の男女に監視され、しゃくり上げ乍ら皿に向ったエヴァは、お腹が空いて居るのに拘わらず食事が咽喉を通らなかった。

「もう、いいの?」

「……ハイ……」

ナンシーが手錠を取り上げるのを見て、エヴァは両手を揃えて差出し乍ら顔をそむけた。

エヴァの足錠をついでに調べたナンシーは、FBIの男に監視を頼んで浴室に消えた。

下着だけで出て来たナンシーは、男の背後で身を繕うと腰を下ろして煙草に火をつけた。

「煙草は美容に悪いそうだぜ。」

桃色に上気したナンシーの頬を見乍ら男が云う。

「だって私、もっと痩せたいのよ。結婚したらやめるわ。」

「そうかい。ではと……。俺はもう行くぜ」

と男は新聞をテーブルに放り出して立ち上った。

「あら、もう少し待っててよ。此のひとを風呂に入れてやるのよ。」

「へーえ? そうかい。」

男は再び腰を下ろした。

「だって、何だが可哀想なんだもの。」

ナンシーはエヴァに身を屈めて手錠と足錠をはずして呉れた。健康な若い娘の体臭が匂った。

「おとなしくしないと駄目よ。いい?」

「ハイ。」

ドレスを脱ぎ乍らエヴァは眼頭を押えた。室を横切って浴室に向ったエヴァは、ぴったり寄り添って男の眼から遮る様にして呉れるナスシーの心ずかいが身に沁みだ。浴室の扉を開け放って立ったナンシーの監視を受け乍ら、エヴァは今日一日の激動に打ちのめされた体を心ゆく迄温い湯に浸したのだった。

「こんな風にお湯に入れるのも、これで最後かも知れないわ。」

そう思うと豊かな石鹸の泡が一しお眼に沁みる様だった。パンテイーとブラジャーだけをつけたエヴァが、おずおずと浴室を出ようとすると、扉の所に立ちはだかった居たナンシーが、きびしい顔をしてエヴァの右手を掴んだ。

エヴァはハッとしたが、すぐ諦めて両手を差出した。護送される女囚の身には詮方ない事だった。

「もう出て行ってもいいわ。」

エヴァに手錠を嵌め終えたナンシーが云うと、男がゆっくりと立去る気配がした。

「じゃ気をつけて。おやすみ、ナンシー。」

「此の室の鍵、持って呉れてるわね？」

「ああ、持ってるよ。」

男の声が閉めかけられた扉の外から聞え、扉の錠がカチッと鳴った。ナンシーは室内をあちこち念入りに調べて回り、其の間エヴァは室の中央で立たされて居た。ダブルベッドの脇には、エヴァが着る事を許して貰えなかったホテル備品の婦人用寝衣がたたんであった。

「これでよしと……。じゃ、寝ましょうよ。」

エヴァを促して先にベッドに上らせ、自分は壁際と反対側になる様にしたナンシーはガウンを脱いで天井の灯を消し、革靴からもう一組の手錠と革バンドを取り出して持ち、二組の手錠をカチャカチャ云わせ乍らベッドに上って来た。横になったエヴァの傍に坐ったナンシーはエヴァの両足首に手錠を掛けた。

「ちょっと体を起して……」

スタンドの灯で、金具の光る黒い革バンドを見たエヴァは、肘をベッドについてナンシーを見上げて哀願した。

「それは勘忍して……。おとなしく寝ますから……。」

「あら、そんなにきつく締めはしないのに。腰バンドがそんなに嫌なの？」

「ハイ。腕が動かせないと、とても寝苦しいのですわ。お慈悲ですから……。」

エヴァは十近く年下のナンシーに涙声で憫れみを乞うた。

「そう。じゃ赦したげるわ。」

ナンシーは腰バンドをベッドの下に落して

「けど、どうせ又監獄で年がら年中嵌められてる様になるんでしょ？ もっと重い腰枷を。ま、だから今は赦してあげるわ。けど、両手を動かしちゃ駄目よ。お腹の上においてじっとしてるのよ。」

ナンシーはそう云い渡して、もう一組の手錠を取り上げた。さっき嵌められた鉄環の喰い込むエヴァの右足首に、更にもう一個の鉄環が音を立てて嵌まった。片方の環を自分の左足首に静かに嵌めたナンシーは、横眼でエヴァの両手を調べ乍ら、エヴァの右側に寄り添うて横になり、毛布を掻き寄せてエヴァの肩や胸を包んで呉れた。

「……ずい分、きびしいんですのね。」

睨を閉じたエヴァは呟いた。つい二週間程前迄は監獄の鎖に繋がれて居た身ではあったが、束の間の自由を味わった今ではみじめな心地だった。

「普通の婦人被疑者なら手錠で片手宛繋ぐだけよ。けど、お前は脱獄犯なんだからね。」

隣室で、押しつぶした様な唸り声と金属が触れ合う音が聞え、又しても激しい平手打ちの音が続けざまに響き、叱りつける女の声が聞えてそして静かになった。表通りを音もなく走り去るヘッド・ライトの光が窓から射し込んで天井のしみを照らして掃いて行った。

「刑はどの位重くなるかしら？」

エヴァはポツリと呟いた。体は綿の様に疲れて居たが、頭は熱っぽくそして冷く冴えて眠れなかった。

「さあねえ。私、よく知らないわ。けど、お前は自分で逃げた訳じゃない様ね。」

「そうなんですの。同じ鎖に繋ぎ合わされてたものですから、無理矢理一緒に引張られたんですわ。あの家からも逃げ出して自首したと思ったんですけど、嚇かされたりして……。ほんとなんです。」

「そうお。けどそんなこと私に云ったって仕方ないわ。お調べの時に云いなさいよ。しかしあの家に行く迄に捕まえて貰う機会はあると思うわ。」

ナンシーにびしやりと云われて、エヴァは黙って唇を噛んだ。

「けど、あの一味と一緒に居たんだったら、あんたの御亭主がいくら放送しても無駄だったわね。逆効果だったと思うわ。」

エヴァの体がびくりと震えた。

「彼が……放送を!!」

「そうよ。知らなかったの? 一刻も早く自首する様になって、彼が何回も放送したし新聞にも出てたじゃないの。刑を終える迄待つてゐるから早く自首しろって……。私達、聞いて泣いちゃったわ。聞いてなかったのねえ。」

深い感動がエヴァの全身をおののかせた。

シルヴィアは嘘をついたのだ。

矢張り彼はエヴァを待つて居て呉れたのだ。三十年の長い年月をひたすら待つて呉れるつもりなのだ。

エヴァは堪らなくなつて矢庭に身をもがいて起き直り、激しく身を揉んで嗚咽した。

「三十年では済まなくなつたのよ。三十年でも長いのに、その上に又……」

顔に押し当てた両手の指に熱い涙を滴らせて、エヴァは身も世もなく泣いた。驚いたナンシーが起き直つて肩に掛けた手を振り離れたエヴァは心ゆく迄泣き続けたのだった。

或る混血老婦人の話 (二十五)

泣き疲れたエヴァはいつしか深い眠りに落ちて行つた。喜びと和らぎに心の深みをしつとりと包まれた安らかな眠りだった。

——仄暖いジャプー国の大和路の秋の夕暮れを、エヴァは夫と愛児の三人で歩いて居た。愛児は既に立派な青年になつて居たが、夫の姿は若い頃のままで、エヴァ自身も娘時代の装いだった。青年が夫そのままの面影で、しきりとエヴァを母と呼んで話し掛ける——エヴァの夢は、ナンシーのきびしい声で破られた。

「お起き!!」

既にナンシーは身支度を終えて制服をキリリと着て居た。

「ずい分よく寝たわね。起すの可哀想な位。足の鍵を取る時、ベッドから落ちそうな程、脚を引張つただけで覚めなかったわね。」

エヴァの両手足から手錠をはずしてやり乍らナンシーが云つた。

「済みません。お手数かけて……」

感謝の言葉がエヴァの口から自然に洩れた。夢と現実とは余りにも差があったが、何年もの間、エヴァの心にのしかかつて居た漠然とした不安と焦りは、今はもう温く溶け去つて居たのだった。与えられた朝食が拝みたい程おいしかった。朝の身仕度を、監視され急ぎ立てられ乍ら終えたエヴァは、ハイヒールをはいて立ち上つた。

「顔を洗つたり、髪にブラシを当てたり、そして又こんなドレスや靴を身につけたり出来るのも、あと一日か二日なんだわ。」

エヴァは物悲しく考え乍ら両腕を背に回して手錠を待つのだ。

た。革靴を肩に掛けたナンシーに腕を掴まれて廊下に出ると、丁度隣室から連れ出されたシルヴィアが廊下の中央で喚いて居た。

「あれで食事のつもりかい？ もっとおいしいものを食べさせてくれたらどうなの。」

シルヴィアの眼は少し落ちくぼんでキラキラ光り、頬は赤く脹れて居る様だった。後手錠の身をもがくシルヴィアの両腕をFBIの男と婦人警官メアリーとが抱いて押えて居る。

「…お金は持ってるんだから、飛び切りの料理を食べさせてよ。私のお金、どうしたの？ 五千ドルはあった筈よ。ちくしょう!!」

堪りかねたメアリーが、又もシルヴィアの頬を打った。昨夜寝て居ないらしいメアリーの眼も血走って居た。

「お黙り!! 又、嵌口具を嵌めて欲しいの?」

「ちくしょう!!」

シルヴィアが喚き乍ら矢庭に吐きつけた唾を、危うくかわして避けたメアリーは血相変えて肩の鞆から嵌口具を取り出した。男達がシルヴィアの頭を押えつけ、メアリーは怒りに燃えて嵌口具の何条もの革バンドの尾錠を力任せに締め上げた。唸り乍らシルヴィアは、今度は両脚を振り回し初めたが、男達の手で引き摺られて拉し去られて階段を降りて行った。聞き伝えて集まった人々はシルヴィアの有様に驚いて後退りし乍ら見送った。続いて曳かれるエヴァは、人々の視線に晒されて益々深くうなだれた。

「あの女の方は、おとなしいじゃないの。」

「あれはな、昔ジャプー・ローズと云って評判だった女だよ。可哀想にな。」

パイプをくゆらせ乍ら中年の男が、エヴァを見詰めて囁いた。人

々がガヤガヤ云うのを後に、二人の女囚は自動車に押し込まれた。今日は別々の車だった。窓外を走り去る広い野や田畑や林、そして時々通り抜ける村や町の家並や商店の飾りつけ、その様なものはエヴァには既に無縁のものだった。鉄格子と鉄鎖の許す範囲しか動けない世界に又も戻るのだ。諦めては居るものの、切ないやるせないさが、エヴァの胸をひしひしと締めつけた。小さな町のレストランの前で停めた車の中で昼食を与えられた時、エヴァは手錠をはずして貰えたが、シルヴィアの方はサンドイッチをメアリーの手で口に押し込まれて食べさせられて居た。

「トイレは?」

ナンシーの問いにエヴァは首を振った。車を出て人々に見られるのが堪らなかつたのだ。

夕方近くなると、両腕がだるくて堪らなくなったエヴァは喘いでもだえた。せめて五分間でも前で嵌めて欲しかった。無駄とは知りつつもエヴァは、手錠の鎖をガチガチ云わせて引張って見た。

「辛い? も少しの辛抱よ。それだけは仕方ないわ、可哀想だけど…」

其の夜、泊ったホテルでは、メアリーとナンシーが交替した。

「あんたは本当におとなしいわね。」

メアリーはそうは云ったものの、風呂には入れてくれず、又エヴァがいくら哀願しても腰バンドは赦してはくれないで、エヴァの手錠をカチリとバンドの前の金具に結合したのだった。

「私はね、昨夜が昨夜だから、今夜はぐっすり寝たいのよ。だから用心しとかなくちゃ。いくらおとなしいからって、お前は脱獄囚なんだからね。」

エヴァの両眼に涙が滲んだが、拭う術はもはやなかった。

心配されて居たシルヴィア奪還の気配もなく、三日目のひる過ぎ二台の車は、ニューアーク市の雑踏の中に滑り込んだ。新聞社の車は何台もあとを追い、そして追い越し乍らカメラをしっごく向けるのだった。

FBIの薄暗い地下室で

「今度は逃げたりしないで、おとなしく刑を受けなさいや駄目よ。辛いだろうけど、仕方ないわね。分った？」

来春、許婚と結婚する婦人警官ナンシーは、そう云って女囚エヴァの後手錠をはずし、FBIの婦人係官にエヴァの身柄を引き渡したのだった。

或る混血老婦人の話 (二十六)

FBIでの取調べはきびしかったが、エヴァの方は簡単に済んだ。毎日きびしい調べを受けて居るシルヴィアを残してエヴァは拘留所に移された。

「…中断して居た刑を本日から執行する…」

云い渡されたエヴァは体に番号を刷られ、囚衣をまとい、そして手足に鎖錠を施された。冷い首環をガタリと嵌められて思わず嚙り上げたエヴァは、鼻環をつけられて慟哭した。覚悟しては居たものの矢張り悲しくみじめな思いだった。脱獄女囚に対する扱いは更にきびしく、エヴァの両足首は二呎程の重い鎖で繋ぎ合わされ、その上両足に鎖で鉄丸が一個宛つけられた。腰枷から両脚に沿って垂れる足鎖も最も重いものだった。

「…こんな…。歩けやしないわ。」

下半身に施された重い鎖錠の類を見て、胸つぶれる思いでエヴァ

は息を呑んだが、婦人看守は容赦なくエヴァの背を小突いて追い立てる。

「さっさとお歩き!!」

一歩踏み出してエヴァは、鉄丸の重さに喘いだ。立ち止まると鞭が背に鳴った。十歩と行かない中に足首の鉄枷は、引き摺る鉄丸の重さを骨身に泌みて教えて呉れた。脂汗を浮べて辿り着いた独房は隔離されて一回り小さい房だった。鉄格子の外側に更に分厚い鉄扉が黒く威圧して居た。後手錠も鉄丸もそのままエヴァは文字通り蹴り込まれて床に倒れて呻く。鉄格子が閉められ、更に鉄扉が非情な音と共に閉じた。途端に房内は真暗になった。重い鉄扉の閉まる音と施錠の響きは、エヴァにとって地獄の雷鳴の様に物凄くもおぞましく聞えた。魂も凍る思いのエヴァは暗黒となった房の床で恐怖の悲鳴を洩らした。咽喉をこみ上げて来る救いを求める絶叫も漆黒の房内の固い壁に反響してエヴァを嘲けり笑う様だった。

「…もう、これで…いくら喚いても泣いても駄目なんだわ…」

エヴァは顔をコンクリートの床にこすりつけて拭い、幾度か身をもがいた末漸く起きて壁に背をもたせて坐った。床で打った肩や腰が痛み、身動きする度に鎖が鳴り鉄丸が床に軋んだ。

「脱獄囚はこんな目に会わされるのね。どの位したら普通の扱いに戻して貰えるかしら？」

エヴァはこれからの日々を想って齒の根も合わない思いだった。脱獄の罪の重さがひしひしと胸にこたえた。エヴァは再び三度、悲痛な声を絞って絶叫した。身に施された鎖錠は仕方ないとしても、一筋の光が欲しかった。エヴァは床をのた打ち回り乍ら気も狂わんばかりだった。しかし身から出た錆、いかに喚こうと誰も答え

ては呉れないのだ。エヴァにとっては一昼夜とも思える時間が過ぎ突然鉄扉が開いた。眩しさに何も見えないエヴァを鉄格子の外から婦人看守が冷たく見下ろして居た。

「ここへおいで」

鉄丸を曳いて這い寄るエヴァに婦人看守の手が鉄格子の間から延びて小突き、両脚の間のチャックが開かれた。

「早く済ませて、こっちへ来るんだよ。」

痛む眼で漸く探し当てた房の片隅からエヴァはみじめさに胸をふさがれつつ、ためらい勝ちに腰を上げる。後始末も出来ない身なのだ。再び膝で鉄格子ににじり寄るエヴァが両足の鉄丸をもつらせて床に倒れて呻いた。

「これからもあるんだよ、鉄丸を曳き摺って歩く、稽古でもするがいいわね。」

鉄格子の外で婦人看守が冷酷にそう云つて、靴先で食器を蹴り込んだ。

「さ、早くお食べ」

ドロドロの囚人食の匂いを嗅いでエヴァは泣き出した。再びこれからはこんなものしか口にする事はないのだ。両腕を動かして後手錠の硬さを確めたエヴァは床の食器に顔を寄せた。鋼鉄の首環が圧迫感を一しお強め、鼻環が食器のふちに触れて音を立て、エヴァは息を笛の様に吸い込んで嚙り上げた。嚙り慣れて居る筈の囚人食も今は胸につかえて咽喉を通らなかつたが、食べないと結局自分が苦しいだけであることを、エヴァはよく知って居た。

「済んだかい？」

食器が引き出され、そしてエヴァの頭上で鉄扉が音を立てて閉め

られた。

「……あ……」

思わ顔を鉄格子に押しつけて悲鳴を上げるエヴァの眼前に、鋼鉄の扉が冷たく光って迫りそして真暗になった。人間の住む世界、いや囚人達が囚われて居るあのおぞましい世界すらからも隔絶されたのだ。エヴァの顔が鉄格子に押し当てられたまま床に滑り落ちて行った。

エヴァは二週間余り其の暗房で過した。呻吟しのたうち回って気も狂うばかり、日に二度開けられる鉄扉を一刻千秋の思いで得ち焦がれるのだった。用便と食事をエヴァにみじめな恰好で済ませるや否や、容赦なく重い鉄扉を軋ませて閉める婦人看守の姿は地獄の鬼女のようにエヴァには思えた。或日の夜、其の鉄扉は閉められる事なくエヴァは狂喜した。

「明后日裁判だよ。」

云い捨てて立ち去る婦人看守を鉄格子越しに見送ってエヴァは吐息を洩らした。手足はとうに感覚を失い、裁判を思うと不安と恐怖で胸おののいたが、ともかく射し込む電灯の光が有難かった。

其の翌日を薄暗い独房で送ったエヴァは、次の日の朝、鼻環に革紐をつけられて曳き出された。鎖錠を除かれ囚衣を剥がれたエヴァは冷水のシャワーを浴びせられ身の始末をさせられる。棒の様に硬直した手足を必死に動かそうとするエヴァの肌に長い革鞭が蛇の様に飛んで来て所構わず炸裂した。囚衣を着替えるや、再び手足には元の様に枷と鎖と鉄丸がついてエヴァは法廷へ追い立てられた。小さく陰うつな法廷に、そのままの姿で立たされたエヴァは、ともすれば昏みそうな体を必死に踏みこたえた。素足の足裏に石の床がい

つ迄も冷たかった。

鉄丸を曳き摺る音と共に変り果てたシルヴィアが曳かれて来てエヴァと並んで立って喘いだ。人相も変ってしまった様なシルヴィアの頬には鞭の先端が当たった痕が数条、みみず脹れになって血を滲ませて居る。唇をわななかせて呻いたシルヴィアが、がっくりと膝を落した。婦人看守の一人が、シルヴィアの鼻環にぶら下ったままの革紐を握って引き上げた。糸の様な悲鳴と共にシルヴィアは立ち上がり、其の腿のあたりに鳴った鞭の先がむき出しのふくらはぎにまつわりついて鋭い音を立てた。

其の苦痛を知って居る女囚エヴァは、隣りに立ちすくんで戦慄する。古ぼけた時計が十時を指して検事と三人の判事が現われた。裁判長席についた婦人の唇が薄く一文字に引締められて居るのを仰いでエヴァは直感的に絶望した。陪審員も法廷代弁人もなしに裁判は開かれた。狭い傍聴席には一般の傍聴者の姿もなく、唯十数人の報道関係が行儀悪く坐ったり立ったりして居た。

シルヴィアとエヴァの罪状は明白だった。二人のFBIの男が、逮捕の際の状況を証言して去り、エヴァ達を運んだ定期便トラックの運転手達が手錠姿で現われて女囚達を確認して連れ出された。

逃走が自分の意志ではなかった事、そして逮捕の時にも抵抗はせずむしろ喜んで縛に就いた事等を、エヴァは声を振り絞って哀訴して身もだえたが、婦人裁判長は表情一つ変えないで女囚達を見据えて居たのだった。

午后、再開された法廷で、いきなり判決が云い渡された。

「被告シルヴィア・バコール。脱獄罪、官憲誘拐並びに不法監禁傷害罪、及び官憲殺害罪の廉により死刑に処す。」

シルヴィアの顔面が、流石に蒼白に血の氣を失って膝ががくりと折れた。

「死刑は、被告が脱獄当時に科せられて居た刑を受け終えた後、執行するものとする……」

シルヴィアの体に施された鎖錠が鳴り、シルヴィアの全身がのた打ってもだえた。二人の婦人看守が駆け寄って押えつけて立たせる。

「……被告エヴァ・ローレンス……」

エヴァの心臓が固く締めつけられた。

「……脱獄罪、官憲誘拐はう助罪の廉により、懲役十二年に処する。該刑は、被告が脱獄当時に科せられて居た刑に引き続いて執行されるものとする……」

エヴァは四十年近い年月の苦しみを想って喘いだ。しかしもはや如何とも逃れる術はないのだ。犯した罪を背負い鉄鎖と鞭と鉄格子の檻の中で悶え苦しみ通して其の償いを此の体でしなければならぬのだ。四十年!! エヴァは、刑を受け終えた時の自分の年齢を想って声もなく慟哭した。カメラのフラッシュが容赦なく前後左右から浴びせられ、やがて婦人看守が近付いて鼻環の革紐を曳いた。

「さ、来るんだよ。」

一步一步曳き摺る鉄丸の重さは、千鈞の様に思え、監房迄の通路は地底の果に迄続くかの様に感じられた。

「二度と不心得な事をするんじゃないぞ。もっとも、二度とはさせないがね……」

法廷から連れ帰られた二人の女囚を立たせて、角張った顔の男が、大きなデスクに肘を突いてきびしく云った。

「分ったな」

「ハイ、もう決して致しません。お赦し下さいまし。」

エヴァは喘ぎ乍ら必死に云った。

「お慈悲です。あのまっくらな房だけは勘忍して下さいまし。気が狂いそうで……」

哀願するエヴァの声には、昔日のあの甘く美しい響きは、とうに失われて居た。

「そんな心配は要らないよ。これから、すぐに送り込んでやるからな。」

男はそう云ってニヤリと笑った。

「それから、云つといてやるが、奴隷にして貰って刑を早く済ませる事は出来ないぞ。ジャプーの賠償奴隷が大量に入荷した機会に、奴隷刑は近々廃止される予定だ。もっとも、お前達には奴隷にして貰う資格もない訳だが。奴隷刑廃止の代りにだ、文明諸国にさきがけて仮出獄と云う制度が実施される筈だ。つまりだな、受刑成績の良い者は刑期中でも出して貰えろと云う訳だ。」

エヴァは眼を輝かせて耳を澄ませた。

「詳しい事は未だ分らないが、ざっと、そんな訳だからよく覚えておけ。」

二人の女囚を喜ばせた男は、パイプに火をつけてニヤリとして云い続けた。

「だがな、お前達にや、まあ縁のない事かも知れないな。何しろ罪が罪なんだからなあ。」

失望したエヴァの体がよろめき、婦人看守が握った鼻の革紐をグイと引張った。

「ヒュー……。お、お願いです。一生懸命に勤めますから、一日でも早く出して下さいまし……」

「俺に頼んだって無駄さ。ハ、ハ、ハ、ハ。しかしエヴァ、絶対に駄目だと云う訳でもないよ。まあ、神妙にしてお慈悲を願うんだな。」
エヴァの胸に一縷の希望が灯り、眼前が明るくなった様な気がした。

「シルヴィア・バコールの方も、性根を入れ替えておとなしく刑を受けるんだな。仮出獄はお前にゃ駄目だろうが、死一等を赦して貰えるかも知れんからな。」

ふてくされて突っ立って居たシッヴィアの頬に赤味がさし、其の両眼から涙がホロリとこぼれた。シルヴィアの涙を見るのは、エヴァには初めてのことであった。

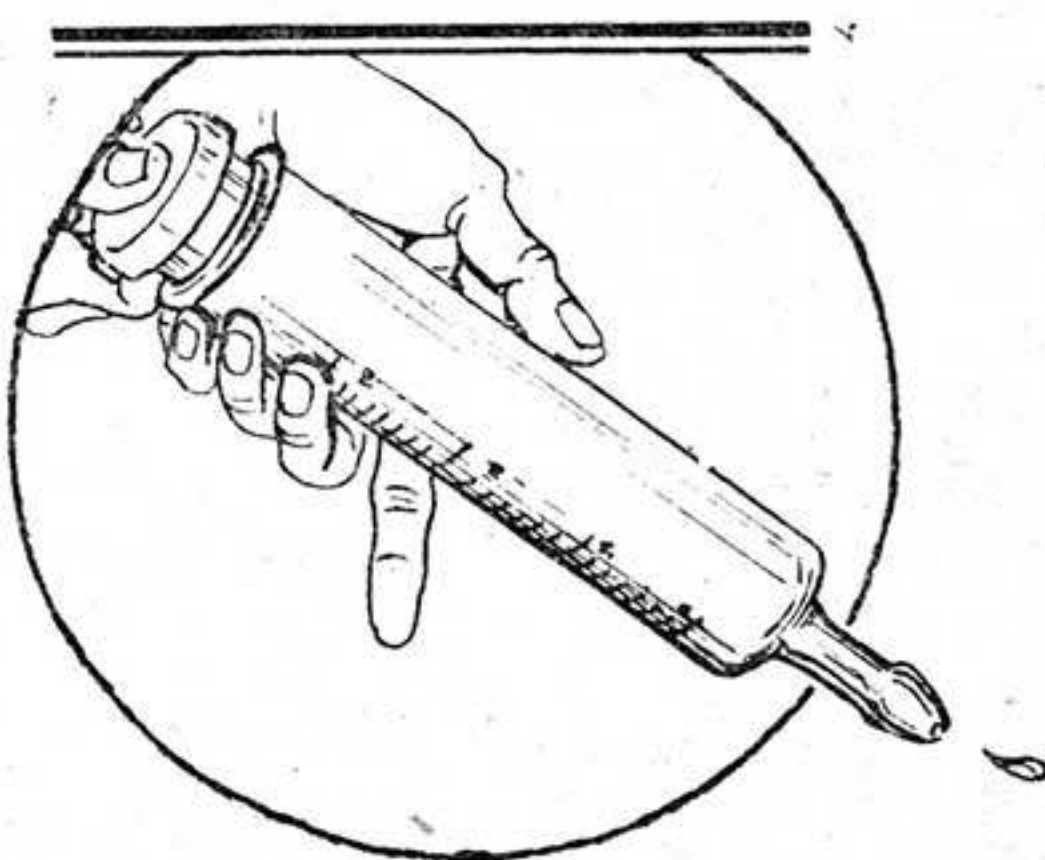
エヴァとシルヴィアは、拘置所の庭で待つて居た護送車に追い込まれた。鋼板で囲まれた黒塗りの四角な護送車の内部は、更に鉄格子で檻のようになって居る。二人の女囚は互いに背を向けて左右に坐らせられ、鉄格子の金具の短い鎖の先が鼻環にカチリとつけられた。女囚の鼻環から革紐をはずした婦人看守は、鋭い一べつで見下して出て行き、後端の鉄格子扉と鉄扉が音を立てて閉って施錠された。走り出した護送車の鉄槌の中で膝を折って坐ったエヴァは、ほろりと泣いた。涙で汚れた頬のあたりを、首環に咽喉をせかれ乍ら囚衣の肩先で押し拭いたエヴァは頭上を仰いだ。天井近くに細長く設けられた窓には白雲が青空を去来して居た。行交う自動車の音が絶え間もなく、耳を澄ませば軽やかに街を往く男女の足音や話声迄も聞えて来る様だった。

(未完)

A 感覚と浣腸

マニア 雑記

小林 薫



T子は十九才、長いマツ毛、大きな瞳、どこか初恋の人を思わせた。中々の美人だが、頬に吹出したニキビは、厚化粧でもかくしきれない。でも、ちよつと人目につく位のグラマーだ。それがうす暗い喫茶店の片隅で、こんなツヤ消しなことを口に出したのだから驚きだった。

「あたしって、便秘症なのね。お通じがなく困ってるの」

少し頬を染めながらT子は云った。私を置

き去りにしたまま、三十分以上も席に戻らなかったの、

「一体トイレで、何してたんだ」

と、少しふくれて聞いたのに対する返事である。

「幾日位ないの？」

私は異常な興奮を覚えながら、つとめて何気なく聞いてみた。

「幾日って、とに角ない日の方が多いわ」

それを聞いて、はげしい胸の高鳴りを沈め

るため、すぐには席を立てなかった。まだ学生時代の出来事である。

こんな感情が誰にでもあるのか私は知らない。只、フロイド流に考えて思い当るのは、戦時中学童疎開のときのことだ。当時、小学校三年生だった私は、父の郷里のある山奥の村に預けられた。四方を山に囲まれた、おき忘れられたような寒村。その生活様式は単純そのものだったが、中でも悩まされたのは、全く開放式の便所だった。母屋から離れた竹ヤブの近くに作られたそれは、昼は近よれば中はまる見え、夜はこわくて、そばへもゆけない。その恥しさのため、意志に反して、生理は進まなかった。加えて、隣家の一級上のN子は、姉さん気どりで、毎朝登校にむかえに来る。それがいつでも、私がトイレでりきんでいる時間とカチ合う。そしてしばらくするとときまって、

「まだでないの、遅刻するわよ」

と覗きに来る。その恥かしさと腹立たしさは、言葉に表わせなかった。

或日のこと、裏山でN子と遊んでいたとき話が私の長トイレにふれた。恥しい話題なので、つとめてさげようとしたのに、N子は「あんた出ないのに、毎日お便所にゆくから

時間がかかるのよ。三日位ガマンしてれば自然にでるわ」

「病気になるない」

「平気よ。あたしいつもそうだもの、あたしの早いわよ。今、みてらっしゃい」

といいながらくるりと裾をまくり、ズロースを下ろした。

「誰か来たら、どうする」

と私はびっくりして云ったが、

「来たっていいじゃないの、ここは誰も来ないけど」

と彼女は平気で云った。この辺の習慣では子供が人の面前で用を足す事など、何でもないことだったのだ。

しばらくの間、N子の白い臀部を、悪いことでもしている様な感じで、一心にみつめていたことを、不思議に今でも、はっきり思い出す。私がいつともなくA感覚にめざめたのは、こんな体験が伏線となっていたのかも知れない。

思春期ごろから、同性愛の文献を漁るようになった。クラフト・エビングの著書等は、大変私を満足させた。そしてこんな傾向に、拍車をかけたのは、大学に入った年の出来事である。私学のマスプロぶりは教養部時代、

特にひどかった。一級に二百人もつめてむ撰択科目は、学生の希望など全く無視され、学務課の決定で割り当てられる。私の当った科目は、難関の噂が高くて、先輩にも、「気をつけろよ、やつは点が辛いから。八十点とれるのは殆どいないぞ」

と驚かされ、我身の不運をかこっていた。

その難物の、第一期試験の終わったある日のこと、偶然、廊下で教授に出合ったとき、

「君の答案について、ちよっと話したい」と呼びとめられた。これだけの数のうちから、

どうして私の顔を知っていたかと疑問に思う余地もなく、只、恐縮してついて行った。まだハイティーンのことだった。あとは省略しよう。細かく書けばキリがないし、また誰の経験も似た様なものだろうから。

一ト月程の間に、教授のホモのお相手をさせられる迄に関係が進んだのだ。それまで一人で散々いたずらしていた私の身体は、容易にうけ入れることができたが、もともとホモでない私は、その枯草に似た体臭と、しわだらけの手で弄ばれるのは、時として、吐き気を催す程だった。私が本誌を知ったのも、クリスターを教えられたのも、実はこの人からだった。やがて、教養部も終り本校に移る頃

には、この人との交渉もなくなったが、クリスターの習慣だけは残ったのである。

当時、私の入っていたクラブには、いつもOB・OG達が出入っていた。R子も、その一人で、二四十五才になっていたろうか。明るい性格で派手な装い、いつも私達後輩を煙にまいては得意になっていた。或日クラブの旅行の話が出たときのことだ。

「旅行っていうと、困っちゃうのね」

「家で行かせて呉れない？」と私。

「じゃなくてさ」

「狼なら心配ない。反対だ、皆Rさんのこと怖がってる」

「失礼しちゃうわね。そうじゃないの、ねえあんた達、変な話だけど旅行にいったらお腹なるともない」

「うん、気をつけないと下痢するね」

「アラ、あたし反対、お腹こわしたらホッとしてるわ。出なくなっちゃうの」

その場に居合わせたS子は

「厭らしい」

と赤くなっていたが、R子はもち前の無神経さで、

「男の人って、案外便秘しないらしいわね。あたし、旅行したら、たちまちだわ」

「放っとけばいい」

私はたまらなくなっていたが、さり気なく云った。するとR子はとんでもないという顔付で、

「ダメ。そんなことしたら硬くてでなくなっちゃう。でなくてさえ時々×××なのでやわらかくする位なもの」

その時、たまりかねたS子が

「もうやめてよ、そんな話」

とさえぎったので話は終わったが、そのR子が子供が生れたと風の便りに聞いたのは、つい半月程前のことだ。妊娠中下剤を禁じるのは常識である。彼女愛用の×××を止められて、厭でも浣腸にたよったことだろう。子供が生まれるまで、何回イチジクを空にしたとか、想像するとたのしくなってくる。

「牛乳+カルシウム」便を硬くする。栗山食事療法の一部である。この著書には、種々と変った浣腸がでているが、直腸の内容物が多い程、そして硬い程、浣腸の快感が強く味わえるのは、マニアなら誰でも同じだろう。早速ためしてみた。毎朝牛乳と一緒にカルシウム剤六錠づつのんだ。二、三日は別に何んでもなかったが、四日目から、バカに粘つくしぶりはじめて五日目で完全に止まった。

女性と異り、便秘に対する、身体の耐容性は、全く弱い。たえずA感覚が意識され、人に接する度に恥かしい思いがする。とうとうその翌日は解決してしまっただが、そのうちに四、五日まとめて休暇をとり、思い切って結腸一杯につめてみたいと思う。いくらA感覚をたのしむと云っても、外で働く男性に、便秘は甚しくさまたげとなる。そこで、余りにエゲツないかも知れないけれど、こんなことを考えた。女性にその不快な面だけうけて貰い、A感覚は男性が満喫するというのである。

具体的にはこうだ。仮に私が、A感覚を知っている女性と結婚したとしよう。彼女が便秘症なら、尚都合がいい。自然便がつく迄、幾月間でもたくわえて貰う。よかったら、その難産のシーンも鑑賞させて頂く。夜がいいどうせ長いことかかるだろう。私は床につき枕もとに便器を用意してやって貰おう。恐らくそこに出たものはカチカチに硬まったそれだろう。今度はそれを特製の浣腸器（例えば太いビニールホースにシリンドラーをはめて）で、私の体内に送りこむ。直腸はたちまち硬い便でいっぱいになる。そこでそのまま翌日まで眠ってしまう。彼女の宿便をたのしみながら。

がら。その間に、内容物は直腸の逆蠕動作用で、結腸の奥深くおさまるだろう。翌朝は今迄彼女が苦しみぬいたと同じ状態に私になっている。この時の浣腸は彼女が味う状態と全く同じだろう。

こんなバカげた空想をしていると、不思議とT子、N子、R子、の顔々とそして、本誌読者の吉村英子さんとがダブってうかんで来る。吉村さんは、どうしてその後手紙を呉れないのだろう。前と同じ方法で良いのに。

とまれ、十代では、無我夢中で歪んだ欲求を追いかけた。二十代初期では、その異常性に苦しみ、罪悪感に悩まされて、ストウイツクな生活も試みた。そして破れたけれど……

今、やがて三十に手が届こうという現在、すべての罪悪感影をひそめてしまった。限られた人生で、自分の欲望に逆らうのは、愚かなことと思う様になった。才気煥発だが憂鬱なペルシャの詩人は、その倒錯したセックスを

「飲みたまえ

生きる限りは、飲みたまえ

一度死せば、とこしえに

よみがえること、なきものを」

と讚美しているのだから……。

女子寮の押え込み

高 木 紀 久 枝

今日は朝から、からっと晴れ渡って、雲一つない上天気の日曜日です。皆は楽しそうにペチャクチャさえずり乍ら、お化粧をしたりおめかしをしたりして、いそいそと出かけていきます。映画に買物に、中には彼氏とのデートの約束をしている者も居るかも知れませんが、お昼過ぎになると、不断はあれ程、騒々しい女子寮も、殆ど人けがなくなつて嘘の様にシーンと静まりかえつてしまいました。

私も此んな快い休日に、女子寮にくすぶっていることはなかったのですが、可愛い絹子と一緒にしたので、態と何所へも出かけず居残っていました。なまじ映画などを見るより

も、誰も居ない広々とした女子寮で絹子と遊んでいる方が、どれ程楽しいか知れません。

彼女も今では満十七才、やっと背丈も伸びてますます可憐で初々しい美しさを見せています。今日は大きい花模様を染め出したプリンツのワンピースを身につけている軽やかな夏姿が、殊の外愛らしく見えるのでした。

ふと見れば、彼女は窓ぎわに背をもたせかけて、膝をくずして座ったまま、明るい日差しを受け乍ら、週刊誌の頁をくっています。

「ねえ、絹ちゃん」

と私は何気ないふりをし乍ら、声をかけて見ました。すると彼女はふと顔を上げて、に

っこり唇をはころばせると、

「あら、何ですの？」

と無邪気に答えるのです。

「ねえ、貴女は私を怨んでない？」

「まあ、何うして？」

「だって私、何度も貴女を降参ごっこで押え付けていじめたでしょう。だから怨まれてるんじゃないかって思ったの」

「ああ、怨むだなんて！」

「まあ、ほんと？ 嬉しいわ、絹ちゃんありがとう」

「まあ、いやだわ」

「でもね、私、貴女が可愛くて、あんなひと

いことをしたのよ。だから悪く思わないでね」

「いいんですのよ」

「ね、私、貴女を押え付けたこと何度位あったかしら？」

「そうね、五度位でしょう？」

「あら、そんなに？ でも雪合戦の時にはひどい目に合わせたわね、苦しかった？」

「ええ、とっても、息がとまりそうだったわ」

「ああら、ごめんなさい」

「それにつめたくって……」

「そうだったわね、それで貴女は誰かを押え付けたことはなくって？」

「一度も」

「あら、あら、じゃ、私に押え付けられるばかり？一寸可哀そうね」

「まあ、」

「貴女も、一度誰かを押え付けてみればいいのに、女が女に押え込みをすると、すごくいい気持がするのよ」

「あう、そうでしょうか？」

「そうよ、断然こたえられなくってよ。身体中がズーンとしちゃう」

「まあ、」

「ね、悪いこと云わないわやって見ない？」

「あら、私弱くて、とてもだめだわ」

「それは貴女が、本気を出さないからじゃない？」

「そうかしら？」

「ね、面白いことがあるわよ」

「まあ何でしょう？」

「今から二人で降参ごっこしましょうよ」

「イヤー恥しい」

「いいわよ、誰も居ないんだから、丁度いいわ」

「だって、私負けるわ」

「ホ……だったら、私今日は態と負けて上げてもいいわよ」

「ああら、ほんとう？」

「ほんとよ、嘘なんか云わないわ。そのかわり貴女も本気を出すのよ、よくって？」

「ええ、でも……」

「大丈夫ってば、私貴女を何度も押えつけたから、一度位負かされてもいいわ。それに、可愛い貴女に押え込みされるのなら、私だって嬉しくってよ」

「まあ、いやだわ」

「さあ、そうときまったら、始めましょうよ、いらっしゃい」

私はそう云って立ち上ると、右手を彼女の方へ差しのべました。彼女は一瞬、ほんのりと白い頬を染めました。誰にも見られていない安心感からでしょうか、にっこり微笑み乍ら、意外に悪びれた風もなく、すっと腰を上げるのです。私は広々とした場所で、絹子と二人水入らず、楽しいプレーが出来ると思うと、嬉しさのあまり、思わず胸が高鳴るのを感じました。

「はじめは、お相撲の様に組むのよ」

と私が両腕を横に拡げ乍ら、組み付いて行くと、彼女も白い腕を伸ばして、がっちり組み合うのです。私のやや太い腕と絹子のしなやかな両腕が入り組んでからみ合い、とにかく形だけは、がっぷりと四つに組んでいます。

「絹ちゃん、がんばるのよ」

と云ってふんばった両腕に力を入れ乍ら、一、二度押し立てれば、彼女も負けまいとして強く私を押し返そうとするのでした。二度、三度、私と絹子は押しつ押しされつともみ合いました。其の度に畳を踏む音がドスンと静かな室内に、かすかに反響しています。もう此の辺で私は負かされたふりをしようと思っていました。でも、あまりわざとらしくし



ては、面白くありませんし、そこで私はもう一度ぐいっと絹子を押し立て乍ら、つい足がすべって、腰がくだけ膝をついた風を装いました。絹子は態と私がそうしたのを知ってい

私が抵抗らしい抵抗も殆どせず、絹子のするがままにまかせていますと、彼女は白い頬を桜色に上気させ乍ら、脚を開いて、私の胸の上にむんずと勇ましく馬乗りに跨って来ま

たか、知らなかったのか分りませんが、私がとにかく膝をついたのを見ると、得たりとばかりにのしかかって、私を押し倒そうとします。その勢いで私は其の場にストーンと尻もちをつくと、すってんころり仰向けにひっくりかえりました。

「イヤー負けたわ、早く押え付けるのよ」

と云えば、私があっけなく転がされたので、些かびっくりしたのでしょう。一瞬絹子は眼を丸くしていましたが、直ぐさま氣をとりなおして、素早く身を翻すと、私の上にがばっと蔽いかぶさって来ます。スカートの裾が乱れて、すんなりと伸び切った薄桃色をした可愛い素足が丸味のある膝のまだ上の方までちらっとあらわになりました。

す。今までに何度も私から、こうして組み敷かれたことがあるのですから、私にはあまり恥しさを感じないのかも知れません。

「あら絹ちゃん、案外重いわね」

私はそんなことを云い乍ら、彼女の膝の間から絹子を見上げて笑いました。それでも彼女の体重は四十五キロ位ですから、大した重量ではありませんが、矢張りまともにどししりと馬乗りに跨られると、可成りの圧迫を覚えるのです。

「ごめんなさい！」

彼女は首筋の付け根まで赤くし乍ら、嬉しそうに私を見下しています。

「どう？ 馬乗りになった氣持って、悪くないでしょう？」

「ええ、ええ」

「ね、押え込みしない？」

「あら、だって、いいかしら？」

「いいわよ、遠慮なんかいらないわ」

「でも、恥しいわね」

「バカね、馬乗りになつて、押え込みしなく

ちゃ意味ないわよ」

「そう？」

「そうよ、それに私ね、可愛い貴女に押え込みされて見たいのよ」

「あら！」

「貴女の奇れないな股に顔をはさまれたら、きつと素敵よ、ね、押え込みして！」

「まあ！ からかわないで」

「ホ……ごめんどめん、さあ、いいわね」

私はそんなことを云って絹子をひやかしながら両腕を横に拡げて、畳の上に長く伸ばしました。

絹子も流石に初めての押え込みとあっては恥しいのでしょう。顔を真赤にして、ためらって居ましたが、そうまで云われては、いやとも云えなくなったのでしょうか、思い切った様に身を乗り出して、じりじりとにじり上って来ます。ついに彼女の丸いくくりした膝頭が、私の肩を踏み敷いて、其の次には、私の頬を両方から、はさむのです。それにつれて彼女のどっしりした全身の重味が、私のお乳の上を乗り越えて、まだ上の方へ移って来ます。

「そうよ、もっと前に来るのよ」

私は声をはずませ乍ら、両手を絹子の弾力のあるヒップの後ろへ押しあてて、うんと押し上げてやりました。

絹子はその拍子に、前に出られるだけはずり上って、忽ち私の喉首の真上にべったりと

馬乗りに跨っています。勿論私の顔は、彼女の内股の間に完全にはさまれて、頬が柔い彼女の肌にぴったりと密着していました。

きらいな友人から無理矢理此んな目に会わされるのでしたら、さぞくやしいでしょうが、愛らしい絹子に、それも態とこうされたのですから、押え込みをされ乍ら、私はかえって異常な楽しさを味わっていました。

「押え込みって、それでいいのよ分った？」

「ええ、ええ」

「もう、私、どんなにじたばたしたって、起きられなくてよ」

「あら、そうかしら？」

「そうよ、押え込みなら絶対よ。ね、どんな気持ち？素敵でしょう？」

「あら！ それほども……」

「フフ……かくさなくたっていいわ、でも暑いわ、汗が出そうだわ」

「ああら、ごめんなさい」

「いいのよ、暑い位、平気。私だって可愛い貴女に押え込みされて、とっても素敵」

「まあ！ いやだわ」

「ね、思い切り暴れるわよ、よくって？」

「イヤーこわいわ」

「跳ね返されないように、しっかり押え込み

してなくちゃだめよ」

「だって……」

「いいわね」

私はそう云うと、いきなり脚をばたつかせて、烈しく抵抗するふりをして見ました。彼女を本当に跳ね返そうとは思っていませんでしたが、あまりじっとしては、絹子だって張り合いがないかも知れません。そう思った私は、手足をばたつかせ、身をよじって懸命にもがき始めました。まともに争うのでしたら、私の方が身体も一廻り大きくて、腕力も優っていますから、絹子に負けるはずはありませんが、今日は完全に組み敷かれ、押え込みをされているのですから、事情が全く違っています。こうなつてからは、何んに私がじたばたして見ても彼女を跳ね返すことは簡単に出来るはずありません。

「あら、いやよ。よして！」

私の首の上にどっしりと跨っている絹子は、それでも時折り上体をぐらつかせ乍ら、やっきになつて私を押え込んでいます。ウェーブした髪が乱れて、真赤に上気した頬にはちがって異様に美しいと思えました。

「ああら、矢張りだわね。跳ね返せないわ」

と私が暴れるのをやめて、大きく息を入れたと、彼女もほっとした様に唇をほころばせるのでした。

「絹ちゃん、案外強いわね」

「あら、いやですわ」

「絹ちゃんの押え込みは、此れで及第よ」

「まあ！」

「ホ：おかげで私、汗びっしょりよ」

それでもなくてもじっとしてさえ汗ばむ程の暖かさなので、押え込みをされて、じたばたもがいたりすれば、汗が滲むのも当然でしょう。私の頬も汗ばんでいる上に、ぴったり密着している絹子の内股にも汗がにじんでいますから、何となく、じっとりと濡れた感じでした。

「ね、絹ちゃん、最後のとどめをやって見ない？ そしたら私降参を云うわよ」

「あら、それ、何ですの？」

「まあ！ 知らない、ほら雪合戦で私が貴女に最後にしたでしょう。顔の上に乗って息をとめさせるのよ」

「まあ！ いやよ、ひどいわ」

「いいじゃないの、私もしたんだから、貴女がしたって構わないわ」

「だって！」

「じゃいいわ、私、何時までも降参しないから」

「ああ、意地悪るね」

「ほんとよ、私の云う通りにするものよ」

「じゃ一寸だけよ、いいわね」

「いいわ、もう一步前に出るのよ、よくって？」

「えっ、ごめんね」

絹子はそう云うと、誰も居ないのに勇気を出したと見えて、膝で上体を支え乍ら、ヒップを浮かせて、ぐぐぐと前にずり上りました。その拍子にたくれ上っていた彼女のスカートが私の顔の上に落ちかかって来て、すっぱりと額の上の方まで蔽いかくしてしまいました。もう私の顔は、絹子のスカートの中に包まれて、何一つ見えません。あっと思う間もなく、何か大きくて重々しい重量が私の顔の上にべったりのかかって来て、私の口と鼻をギュッと押しつぶしました。遂に私は絹子のスカートの中で最後のとどめをされているのです。私にしても此んなことは初めての経験でした。女一人の体重でも顔の上にまともに乗られると、大変な重圧感なのです。私は苦しまぎれに声を出そうとしましたが、絹子の弾力のあるヒップが薄いパンティー一枚を

へだてて口と鼻の上にぴったり隙間もなく密着しているのですから、声にもならず、息も出来ませんでした。かーっと身体中がのぼせる様な体温と、むせかえる様な彼女の体臭が、いやと云う程せまって来ます。私はやっこのことで両手で絹子のヒップを僅かに押し上げると、

「ワーツ、苦しい！ 降参よ！」

と叫びました。すると彼女は私の顔の上から、ぱっと飛びのきました。私は急に呼吸が楽になって

「フウー、フウー」

と大きく息を入れ乍ら、愛らしい絹子に、こんなことされたことがかえって嬉しくて、すっかりのぼせ気味でした。

「ああ、苦しかった。最後のとどめって、随分苦しいわね」

「ごめんね、許して！」

私と絹子は顔を見合せて、いたづらっぽく笑い合いました。彼女の薄桃色に上気した頬も、汗ばんで艶々と美しく輝いています。

「ね、絹ちゃん、もう一度やって見ない？」

と声をかけますと、絹子はつぶらな瞳を丸くし乍ら、

「あら！ もう一度？ いやだわ」

と云います。

「ああら、ずるいわよ。私が負けたから、今度は貴女を負かす番よ。そうでしょう？」

「まあ！だって！」

「だって何もなくてよ、今度は貴女が負かされても、あいこで丁度いいじゃない？」

「それは、そうね、だけど」

「ああら、じれったいのね。さあ、いらっしやいてば！」

私はそんなことを云い乍ら、勢よく腰を上げると、もう一度右手を彼女の方へ差し出しました。

「いやあ！仕方のない人！」

絹子も、あまり気乗りはしていないのかも知れませんが、案外素直に立ち上りました。

「ね、面白いことがあるわよ」

「あら、何でしょう？」

「服脱いで裸になりましょうよ」

「まあ！」

「でも真裸じゃないのよ。ブラジャーにパンティーだけ、よくって？」

私はそう云うと、あっけに取られている絹子の目の前でピチピチッとスナップを外すと、ブラウスとスカートを脱ぎすてました。続いてスリッパや下着を外すと、見る間にブ

ラジャーにパンティーだけの半裸になるのです。

「さあ！ 貴女も脱ぐのよ」

「イヤー、恥しいわ」

「バカね、女同志で気がねは、いらないわ」

私は絹子のプリントのワンピースに手をかけて、しつこく促すのです。とうとう彼女も云われるままに、ワンピースを脱ぎ始めました。やがて私と同じくぴっちりしたブラジャーにパンティーだけの裸になって私と向き合うのです。

それにしても彼女が服を脱いで裸になると、愛らしい美しさは一層眼立って、殊の外うっとりとした見とれる位でした。未だ成熟はしていませんが、それでもすんなりと伸び切った肢体には、新鮮でほんのりと匂う様な魅力があふれています。殊になめらかな若々しい肌の白さが浮き上って見える様です。

「まあ！ 貴女って裸になると、ますます綺麗ね」

「いやだわ、からかわないで！」

「ああら、ほんとよ。うらやましい位」

「だめですわ、私みたいな、やせっぽちは」
彼女は肩をすぼめて、手を組み合せ乍ら、赤くなつてうつむいています。私はそうした

絹子にそうと近づくと、両手を拡げて肩のあたりを、ギューとだきすくめました。今度は二人とも裸体同様ですから、肌と肌が衣服にじゃまされず、ひとりでにびったりと触れ合うのが、何とも云えず快いのです。彼女が肩をだきしめられて、顔が幾分仰向いた所を私はいきなり顔を近付けて彼女の唇の上に私自身の唇をぐっと押しあてました。

「あらッ！」

絹子はびっくりして、顔をそむけ様とします。可憐な彼女にして見れば、例え女同志でも、口づけをさせられるのは、初めてだったのでしよう。私はしっとりとして柔かい唇の感触を快く感じ乍ら、今度は右脚を踏み出して彼女の脚へからませました。

「あっ！ いやよ！」

絹子はあわてて、両脚に力を入れて、踏みこらえようとするのですが及びません。遂に中心を失って、私にがっかりとだきすくめられたまま、どうと其の場に転がるのです。其の勢で私も彼女の上に折り重なって、どすーんと倒れました。勿論私は彼女の上になり仰向にひっくりかえされた絹子の上に蔽いかぶさっています。さあ、いよいよ寝技です。私は愛らしい絹子を下敷きにした嬉しさに、

ドキッドキツと胸が高鳴るのを感じていました。でも此んな姿を誰かが見たら、何と思うでしょう。若い娘同志が、こともあろうにブラジャーにパンティーだけの、あられもない裸になって、まるで女子レスリングさながら、組み敷いたり組み敷かれたりの、みつともない光景には、誰だって狂気の沙汰だと思うかも知れません。ふっとそんなことを考え乍ら、それでも私は構わずに腰を折り曲げ両脚を彼女の頭の方へ近づけると、上半身だけを起した姿勢で、彼女の首を膝と膝の間へぐいっとはさみました。それから脚先と脚先をかみ合わせて、はなれないように組み合せると、これで何とかレスリングのヘッドロックの形になっています。

「絹ちゃん、ヘッドロックよ」

と私は両脚の間からのぞいている彼女の顔を見下し乍ら、両脚に力を入れてギュッと強く絞め付けて見ました。

「うっ！ 苦しいわ、降参よ。 かんにんして！」

絹子は須を真赤にして、しなやかな両手を私の太もものあたりに押し乍ら、やっきになって押し開こうとするのですが、そう簡単には行きません。

「ああら、だめよ。貴女は私に最後のとどめをしたでしょう。だから私も最後のとどめをするまでは、許さないわ」

「まあ！ ひどいわ！」

「仕方がないわよ。さあ！ もう一度絞めるわね」

又々私は脚に力を入れて、ギュッと首を絞めるのです。

「あ、あッ」

絹子は眉をしかめ唇を半開きにして、美しい歯をのぞかせ乍ら、せいせいと苦しそうに肩で息をしています。すんなりした脚が二、三度畳を蹴ってドスンドスンと床を鳴らせました。絹子のこうした悲痛な表情は、今初めて見るわけではありませんが、普段とは違った異常な魅力が漂っています。何時しかサジスチックな衝動にかられていた私は、三度五度と繰り返し彼女の喉首を絞めつけて、異様な楽しさをゆっくり味わっていました。

ふと見れば彼女のふっくりとした隆起した



乳房が、レースの付いたブラジャーの下でハーハーと早い呼吸をする度に、上下に烈しく波打っています。何時も私に組み敷か

れ、押え込みでいじめられて居る彼女ですから、私にいくら抵抗して見てもかなわないと思っているのでしょうか、あまりじたばたもせずに私のするがままになっています。

「どう？ もう参ったの？ 此れ位で放して上げましょうか」

と足先をゆるめ乍ら、声をかけると

「ええ、参ったわ。かんにんよ」

と云います。

「あら、あら、意気地がないわね。さっきの元気はどうしたのよ」

「だって！」

「じゃあ、ヘッドロックは止しにして、今度はいつもの押え込みにするわね」

と私はからみ合わせていた足先を放して、両脚の間に絞めつけていた絹子の首を自由にやりやりました。でも未だ私は彼女を許してやるつもりはありません。やっと呼吸が楽になってフーフーと大きく息を吸い込んでいる彼女の胸の上に、今度は脚を開いてどっしりと馬乗りに跨って行きます。スカートやスリッパまでも脱いでブラジャーにパンティーだけの裸で、同性を組み敷くのは、私にも初めてでしたが、何にもじゃまされずに随分楽なものだと思いました。それに絹子のすべすべ

した肌と、私の肌とがびったりじかに密着する感じが何にもまして快いのです。私はすっかり気をよくして、浮き浮きし乍ら、すかさず両方の太い膝頭で彼女の肩と腕の付け根のあたりを踏み敷いて、じりじりっとにじり上って行きます。勿論真赤に上気した彼女の顔が膝頭の間から、肉の上った太ももの間へとはさまれて来ました。

「あら！ また押え込み？ あまりいじめないで」

彼女はそれでも観念した様に、私を見上げ乍ら、口で云う程いやがる風ありません。

「ええ可愛い貴女に押え込みするの。私大好きよ」

と私は一気ににじり上って、遂に彼女の細くくびれた喉首の真上にずっしりとヒップを落ちつけました。いよいよ此れで絹子には六度目の押え込みでしょうか、見れば彼女は私の内股の間からやっとな顔だけをのぞかせた恰好で、肩と首を私の五十キロの体重でびったり押えられ、両腕までも膝に敷かれて全く身動き一つ出来ません。

私は倦かず絹子の表情をのぞき込んで云い様もない満足感にしばし我を忘れる思いでした。彼女も抵抗らしい抵抗はせずに、私に押

え込まれたまま大人しくしています。ことによったら、彼女も私にこんなひどいことをされ乍ら案外しいたげられる楽しさを味わっているのかも知れません。

何時もなら彼女を押え込んでも、そうそう長くは続かないのですが、此の日ばかりは私は何時までも絹子を押え込んで放したくありませんでした。彼女と二人きりで誰にも見られていない安心感もありましたし、初めてお互に裸で此んなことをしている近親感からかも知れません。

「ね、絹ちゃん、私いつまでも、こうしていいいわ、いい？ 怒らない？」

「あら怒るなんて……」

「まあ嬉しい、ほんとに怒らないでね」

「ええ、ええ」

「じゃ安心して押え込みしているわ」

それから何れ位の時間がたったでしょう。時間になれば僅かだったでしょうが、押え込みには可成りの長さだったようです。とにかく私が相変らず絹子の首の上に跨ったまま、胸をはずませ、うっとりとした気持にひたって居りますと、いきなり出し抜けに廊下に足音が聞えたかと思う間もなく、ぱっと誰かが室内に飛んで来ました。私は誰も来ないと思

って安心して絹子に押え込みをしている最中でしたので、びっくり仰天

「あッ！」

と云って絹子の首の上から飛びのこうとしました。でももうすでにおそく其の時には入って来た二人に私等の姿をすっかり見られているのです。気がつく二人は同室の友人でしたし、私はやっとほっとした気持でした。

私は彼女等に見られたからとて急に押え込みを中止するのも、何となく態とらしくていやでしたし、其の上あわてたせいもあって、相変わらず絹子の首の上に跨ったままにしています。でも驚いたのは私だけではありません。二人の友人も部屋へ飛びこんでくるなり思いがけない私と絹子の姿が目にとまって

「あらッ！」

「イヤッ！」

と、とんきょうな声を出して、立ちすくんでしまいました。

絹子は絹子で私の内股にきっちり顔をはさまれたまま

「ああッ！ いやだわッ！」

と見る見る内に真赤になるのです。

「いやねエー、急に入って来たりして、おどかさないでよ」

と云えば二人はやや落ちついたらしく

「ああ、びっくりした！ 降参ごっこしてたのね、知らなかったのよ」

「ごめんね」

と云います。

「でも紀久ちゃん、すごいわね。裸で押え込み？」

「まあ！ ほんとのレスリングみたいよ、イカスわねーエ」

「私等見てるから、止さないでねッ！」

「そうよそうよ、絹ちゃんも負けないで」

「でも紀久ちゃんに押え込まれたら、起きられないわね」

「それもそうね」

二人は私等のすぐそばに腰を下すと得手勝手なことを云いながらにこにこして眺めています。彼女らも女同志の降参ごっこは、それ程珍しくはないでしょうが、ブラジャーにパンティーだけの裸の押え込みは初めてかも知れません。私は入って来たのが気の置けない彼女等のことです。から、つつい気許して絹子との降参ごっこは最後まで続けることにきめました。

絹子にして見れば此んな姿を、女子寮の友人に見られるのは、矢張りつらいのでしょ

う。さっきまでは大人しくしていた彼女も、身をくねらせ、足をばたばたさせて、のがれようともがくのです。でもそんなことでは、私の方はびくともしません。

「あら、もっと暴れてもいいわよ」

「まあ！」

「ついでに、くすぐって上るわ」

私はそう云うと、絹子の首の上にとっしりと跨ったまま上体をまっすぐにして、両腕を幾分後ろへ引き気味に下へおろしました。すると丁度うまい工合に私の手の指が組み敷かれている絹子のわきの下にすれすれにとどくのです。私はしめたと思って指へ力を入れると、彼女のわきの下を強くくすぐってやりました。これでは絹子もたまりません。

「ああッ、あッ、や、やめてッ！」

と悲鳴を上げ乍ら、やっきになって脚をばたつかせるのです。ドタンバタンと烈しく畳を蹴る音が耳の後ろから聞えて来ました。其の度に、彼女の柔い感触がほんのりとした温かみと一緒にパンティーを通してヒップのあたりへ伝わって来ます。私はそれが嬉しくて二度、三度といい気になり乍ら、絹子のわきの下をくすぐり続けるのです。

「キヤッ、イヤッ、助けて！」

彼女はせいせい息を切らせ乍ら、しきりに悲痛な叫声を立てています。

「まあ！　すごい、絹ちゃん散々ね」

「押え込んで、くすぐる手もあるのね」

「紀久ちゃんたら、傑作なこと考えるわ」

「イヤー絹ちゃん、苦しそうじゃない？」

本誌は今月号から定価三〇〇円になりました

本誌予約購読者募集

○本誌は現在地方にては、非常に入手が困難な状態だと思われまますので、確実に毎月御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願いいたします。

○直接御予約下されるのには、天星社宛に（阿倍野局私書箱第十四号）予約購読料をお申込み下さればよいのです。

○本誌の送料、包装代などは総べて当社にて負担いたしますから、誌代のみ御送金下されば結構です。

○本誌の誌代は、七月号から一部三〇〇円です。従って、予約購読料は一カ月一冊三〇〇円、三カ月分三冊九〇〇円、半年分六冊一八〇〇円、一年分一二冊三六〇〇円です。今後誌代の改訂は当分の間しない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、お送りいたします。

私がやっつくすぐるのをやめると、絹子はほっとした様に、大きく息を吸い込んでいます。

誰にも見られていない時ならまだしもですが、二人の友人に見つめられていては、此の辺で絹子に降参と云わせ勝負をつけなくては

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代三〇〇円を、なるべく十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約者の分と一斉に発送できます。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分とお書き願います。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので、お留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから、継続お申込み願います。その際、継続でも何月号からとお書き添え下さい。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局（特定郵便局でも結構です）と受取人のお名前とお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間です。その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

恰好がつきません。

そう思った私はやや上体を前かがみにしながら、両腕をうんと伸ばして、両手を絹子の後頭部まで差し込み指と指を、がっちりとはなれないように組み合わせるのです。

「あっ！　何するのよ」

絹子はびっくりして、私の手をはらいのけようとするのですが、残念ながら、私の膝に踏み敷かれていては、とどがないのです。私は得たりとばかりに今度はそのまま上体をまっすぐに起すと、膝頭で全身を支えながら、ややそり身になってぐいっと絹子の頭を持ち上げました。

「う、うッ！」

彼女は首も肩も胸のあたりも私の五十キロの体重にびったり押えられていますから、そうなくても身動き一つ出来ません。ただ首から上の頭だけがいやおうなしに持ち上げられ、畳から浮き上って、うつむき加減になった顔があつと云うまに薄いパンティーだけをへだててギュッと、すき間もなく埋まり込む様に押しつけられるのです。

「う……うッ！」

絹子はかすかな呻き声をたてて必死に暴れもがきました。ふと下を向いてのぞいて見れ

ば彼女は顎から唇、鼻から眼の近くまで殆ど顔全体を私のお尻に押しつぶされて全然見えていません。ただ僅かに眉から上の額だけが押しつけられることを免れて、やっと見えてゐるに過ぎません。真赤に紅潮して汗でべっとりと濡れています。

もう此れで私は今日も愛らしい絹子を、完全に屈服させた感じに胸がワクワクしていました。

「うう…うッ！」

絹子は又かすかに呻きました。

「ヒャーッ」

私は頭の頂上から足のつま先までズーンと硬直する様な錯覚に思わず叫声を出して、両手を放しました。絹子の顔はクシヤクシヤに乱れた髪に蔽われて、世にも悲痛な表情を浮かべています。あまりの苦しさに涙ぐんでいたのでしょうか。額には青い静脈がすき通って見えていました。

「さあ！ 降参か！」

と私がかさにかかって声をかければ彼女は

「ええ降参よ、許して」

と小さく弱々しく答えます。

「じゃ此れ位で許して上げるわね」

私は両膝で上体を支え乍ら、ヒップを絹子

の首の上から浮かせてもう一步前ににじり上ると、べったり彼女の顔の上に腰を下しました。ついでの最後のとどめの形だけでもして見たかったからです。

「うッ！」

絹子は又もう一度呻き声を出しました。でもそれもほんの一瞬で、私はぱっと勢よく彼女の顔の上から飛び下りました。

「絹ちゃん、ごめんね」

と云い乍ら、私が彼女の肩をだきかかえて助け起すと、彼女は余程疲れはてたらしくやっと上体は起したものの、まだ両手で身体を支え乍らハアハアハアと肩をふるわせ喘ぎ喘ぎ息をしています。

「ひどいわ！」

それでも彼女は格別気を悪くした様子もなく、しばらくするとやや元気を取りもどして私と一緒に脱ぎすてていた衣服を身につけ始めました。

「苦しかった？ ごめんね」

「ええ苦しかったわ、死にそうだった」

「あらあら、オーバーね」

「オーバーじゃないわよ、ほんとなの」

「怒っちゃいやよ」

「大丈夫、怒ったりしないわ」

「ワーツ、嬉しい！」

やがて身仕度が終わると、彼女は矢張り疲れたらしく自室にもどって行きます。後に残ったのは私と友人の三人だけでした。

「まあ！ 紀久ちゃん、思い切ったことしたわね」

「ほんと、裸で押え込みするなんて、初めてよ」

「ねえ、何んな気持だった？ 矢張り裸の方がいい？」

二人は瞳を真丸くし乍ら、勢込んで尋ねます。

「そりゃそうよ、肌と肌がふれるだけでも悪くないわ」

と答えると

「まあ！ うらやましい！ いいわねエー」
「それに、紀久ちゃんの最後のとどめ、すごかったじゃない？」

「ほんと！ 絹ちゃんの顔をギュッと持ち上げたの見てたら私、気が遠くなりそうだったわ」

「まあ！ あきれた！」

「すごいわねッ！」

二人は感嘆の声を上げ乍ら、さもうらやましそうに瞳を輝かせて、キャッキャッと笑い

合っています。

此んなことがあってから、私も同じ女子寮に居るのでから殆ど毎日の様に絹子とも顔を会わせるのですが、彼女は私にあんなことをされ乍ら格別機げんを損じた様子もなく、かえって反対に親しそうな笑顔をみせるのです。

普通でしたら何んなに親しい友人同志でも女が女を馬乗り組み敷いて顔をヒップに敷きつぶしたりすれば、すっかり怨まれて、其

れ以後は顔をそむけてものも云わなくなる場合が多いそうですが、其の点私は絹子に怨まれているいませんで、ほんとに助かっています。

それでも私等の女子寮では女同志どんなに志の冗談まじりのゲームですから、むきになつて喧嘩同様必死に相争う様な場合は先ずありません。ですから私はふっと、原田順子さんの様に、にくらしい同性をうむを云わせず

投げ倒して、押え込みで散々首を絞め上げ、ついにはくやし泣きにワーツと泣かせて見たいな、と考えることも再々ある位です。でも私等の女子寮では、そんなことは望めそうにもありません。

やはり同じ寮に住んでいると、そんなことは無理ですわね。どなたか、私と真剣勝負をしようと思込まれる方は、ないでしょうか。負けても勝手も、一度私はそういった試合をしてみたいと願っております。

(終)

〔最新版〕 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙 (9×13 糎) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

B 1	全裸エビ責仰向け (関谷)	一組一枚	一〇〇円
B 2	逆エビ責め全裸像 (水本)	五組五枚	四〇〇円
B 3	乳首ペンチ挟み (竹野)	十組十枚	七五〇円
B 4	後手十字縛肩口上 (梨花)	二十組二十枚	一四〇〇円
		三十組三十枚	二〇〇〇円
		四十組四十枚	二五〇〇円
		五十組五十枚	三〇〇〇円

B 5	足の裏擦り責め (竹野)	B 6	おへソいじめ大写真 (関谷)
B 7	剥いだバタフライ (関谷)	B 8	貴方に捧げた裸身 (大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶 (大塚)	B 10	無防備双手吊り (絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り (水本)	B 12	一糸纏わぬ股間縛り (水本)
B 13	全裸亀甲股間縛り (関谷)	B 14	足踏付け二つ折り (大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち (関谷)	B 16	手錠にもだえる (竹野)

B 17	尻突立てエビ責め (水本)	B 18	椅子開股鼻責触手 (梨花)
B 19	息もつかせぬ猿轡 (竹野)	B 20	投げ出した全裸 (関谷)
B 21	美しき尻部の露出 (絹川)	B 22	猿ぐつわ悦虐境 (竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美 (竹野)	B 24	強制鼻挟水吞ませ (梨花)
B 25	苦悶にねじる裸身 (関谷)	B 26	責めに氣を失って (関谷)
B 27	さアどうでもして (関谷)	B 28	豊満乳房膨隆縛り (竹野)
B 29	投げだされた女体 (竹野)	B 30	裸身をくびる麻縄 (梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ (梨花)	B 32	全裸逆エビ片脚拳 (東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地 (東浦)		

B 34	すべてをさらけて (関谷)	B 35	ムチ打ち失神寸前 (関谷)
B 36	クリップ鼻挟み (絹川)	B 37	台上的マゾポーズ (大塚)
B 38	吊られゆく美体 (絹川)	B 39	拷問に無惨な美貌 (梨花)
B 40	マゾ女性の表情美 (東浦)	B 41	喰い込む股間縄 (絹川)
B 42	灸責めに悶える (梨花)	B 43	犠牲台の人身御供 (大塚)
B 44	美肌無茶苦茶縛り (絹川)	B 45	裸身に立つ蠟燭 (大塚)
B 46	手枷足枷大写真 (四方)	B 47	鎖に悶える足首美 (柳初)
B 48	蛇責めに柔肌栗然 (梨花)	B 49	鼻の玩弄恍惚境 (大塚)
B 50	女囚菱縄さらし (絹川)		

『テレビの責め』

牧 高 志

現実にはこういうものが、果してあるものかどうか疑わしいが、何分にも安直に家庭内に

放映されるものだけに、放送に当って色々と制約を受けることは本当のようである。恐らく分別のつかぬ青少年も観ているものと思わなければならぬし、モラルの上からいって、手放しで歓迎されるべきものではなさそうだからである。

そのためか、古い映画の再放映の際は持ち時間一杯の関係からしばしば適当にカットされたり、また新規にビデオテープに録画されるとしても、登場のスターに苦痛を無理強いしてまで緊縛するということは、まず出来ない相談であろうから、どれもこれも安易に手を後ろにした恰好で単に縄が身体にからみ

ついているというお粗末さで、お茶を濁しているのがまず普通である。

それならば、もう少し何んとかならぬものだろうか、という甚だ切なる欲求が湧いて来る。実はこの間、人気と聴視率がとみに高まって来たというフジテレビ木曜日放映の「三匹の侍」を観た際、演出者の好みと腕の冴えにもよるが、時あたかも新春早々のおめでたい時でもあったためだろう。何回も裾を曳いた芸妓が後手に縛られて、物置に檻禁され悪旗本の連中から、きものの上から股を割るなどの辱しめを受けるといふシーンが繰り返えされていた。

つまり緊縛そのものよりは、兎に角回数で画面の盛り上りを稼せようという魂胆であ

る。馬子にも衣裳で一見垂涎物の緊縛シーンが数回に亘ってしかも短時間内に放映されるとなると、どんなひとなみはずれて鈍感なばや助でも、いささか神経の高ぶりを感じるのが当り前だ。

処が仔細に点検してみると、まるで通された客間の床の間に置かれた生花のオブジェと全く同様であって極めてお上品であり、少しも残酷味を感じられない。だから、ただ単に縄類を身体に巻きつけたというだけで即座に「緊縛」と称する自体そももおかしいが、身体をもぐもぐさせたばかりで、後手首が抜けて胸の縄目が緩むむというような縄の掛け方は、寧ろこの際採りあげない方が賢明かも知れない。およそ映画、テレビ、演劇などの



テレビにあらわれた縛りシーン

直前の姿ではなからうか。つまり生きている犠牲者が示す全貌ではないかと思う。処がおよそ何事によらず犠牲者と名のつく者は若干の例外を除くと、大半は物心ともに苦痛裡に呻吟する態たらくでなければならぬ。この苦痛を最つとも表型的にあらわすものはいわゆる縛りにおいて他に存在しないという結論になる。

キリシタンの処刑にしても、何も九州くんだりは天草のほとりで演じられた、一幕もののショウではないのだから、惨殺される婦女子にしても、文字通り厳しく後手に縛られて昇天させられたのである。

ところで、被縛体として見る者側の視覚にうったえた場合と催情的にぐっと胸に突きあげてくるものとを同時に併せて考えてみた時、豊満な若い女性の肉体が何んといっても最高位であり、ギスギス繩が骨にあたって音を発するようでは最早や艶消しである。

この点、昨春封近られて町の話齣を呼んだ松竹映画、武智演出の「女・女・女物語」にさしはさまれた緊縛のシーンは、女のふとも

もに残された縄目も判っきりと写されており、今までに上映されたことがなかったことだけに、当時非常なショックな場面として注目を浴びたが、手前味噌的な物の言い方をすれば、映画における正に残酷美の最極致なりと称しても過言でないと思う。

まあ、そういった肉体に縄目の残る残らないはしばらく置くとして、一番問題視しなければならぬのは、どうも緊縛度（程度、加減）如何に在るようである。

この縄によって描かれた緊縛度の強弱性なるものは、早い話が今日市販されている月刊誌によっても表現が多少違っており、例えばA雑誌は必らずと言ってよい位、数条のたばねた縄類を用いて腕は勿論、後手首を念入りに縛りあげたものが多く、B雑誌は後手首に限って全く無関心といってよい位無罪放免の形を採っている。わが奇ク誌は平均して中程度の緊縛度を採っていると言えるが、どちらかと言えばモデルの機嫌を損ねないような、いわゆる自肅型の単縛りのものが多く、矢張り今後の研究に幾分余地がありそうだ。

今は亡き世俗的日本絵師であった伊藤晴雨氏は、氏が実際に描いた作品には不思議に一枚もないのに、画伯はしばしば心を鬼にして

中で悲劇、喜劇の如何を問わず、感興が高ぶって行く要因は、そう多くはないと思われるが、その中で全く反射的に「ああ……可哀いそうだ」と即刻反応してくるものは、いわゆる人の生命が正に一卷の終りになろうとする

女が泣き叫ぶのをどうも意に介することなく「肉がくびれるように仮借なくしめつけて縛りあげる……云々」と御自身の著書に述べておられる。

悪く解釈すると言葉のあやとも判断されるが、氏とは生前文通こそすれ、氏が実際にモデル女性を縛りあげていく処を、つぶさに拝見した訳ではないのだから、果してどのような縛られたか、今となっては皆目識るよしもないが、兎まれ、理論と実際には、およそ縛る側の男性というものは何処のどなたにしても、こういった素質がわざわざいて、口ではもっともらしく言うが出来上った作品なるものは単なるオブジェに過ぎない場合が多いものらしい。

これに関連することで、しかも少々本論から外れて申訳けないが、筆者がまだ子供であった頃の憶い出話を、ここで一寸お伝えしておきたいと思う。

それは現在の山の手線大塚駅が、田舎風な平家で池袋寄りの台地にあった頃の出来事である。確かその日は夕刻頃だったと思うが、ドヤドヤと省線の乗客が粗末な改札口から外に吐き出されている時、突然おもての方でヒイ……ヒイ……と泣き叫ぶような哀れっぽい声が聞

えた。するとバラバラ……と大勢の人が声のする方に向け出して行ったので、怖いもの見たさに私も一緒になって、その群衆に交って行ってみると、齢の頃なら二十才あまりの、今でいうお手伝いさん風の色の白い小肥りの若い女が、三人の愚連隊風の男の一人に押さえつけられて地面に捻じ伏せられていた。

薄い紫地に太い白縞のある（或は矢羽根だったかも知れぬ）きものを着て、椿の花模様のかわいいお太鼓の帯を締め、赤い無地の帯揚げの片方と、青い帯締めの片方とが垂れ下っており、お下げにしていた髪元結が切れたものか、ふさふさした髪もバラリと乱れて肩の処におおいかぶさっていた。そしてその周辺には大きな風呂敷包みと赤い鼻緒の女下駄が無残にも転ろがっていた。

「馬鹿野郎……太ていあまだ、逃げようた……て……てめいの身体にや……」と腕まくりをした、しるし半てんの男が青筋立った入墨の筋肉をピクピクさせながら「おいッ連れて行けよ」と、そばの下駄ばきの男に目くばせをする。すると三人目のこれまた一際眼のするどい男が、毛ばが取れてぬるぬるした蛇のような黒っぽい中細の麻縄をズボンのポケットから無難作に取り出すや、女の前にバサッと放

ったのである。

「どや、おとなしうせんから、こうなるンだぜ……」と、さっきの下駄ばきの男が、何やら口の中でブツブツ言いながら背後から至極慣れた手付で若い女の両腕を一緒に握り、黒い麻縄を女の両手首に絞に掛けた。そして放り出されたもう一本の割と長目の麻縄を仰向いて唇をかねている女のふくらとした胸にかけて一巻きしてはひき締め、三巻き四巻きして縄目がほとんど見えぬ位、仮借なく縛りあげ、縄尻を手首の縄にひっかけて背中の方に曳きあげ——つまり高手小手ということになるが——手首の縄と結んだ拳句に、どしんと女の腰を蹴った。蹴られた拍子に女の身体は前にのめって横倒しに倒れたが、その際着物の前は、すっかりはだけ人絹物らしいやや厚めの赤無地の長襦袢の裾が捲かれて、赤いメリンスのお腰巻が見えた。

「世話やかせやがる……」と今度は眼のするどい三人目の男が一っぺん放り投げた背中の中縄尻を採り直して、上に吊りあげるようにして女の身体を起こした……。

「何んだ、何んだ、手めい達、何の関係があるンだ、どいた、どいた……」とばかり周りの見物衆を手の先きで打ち払いながら女を囲

むようにして連れ出し、駅の坂道をバタバタ降りて行ったのである。何分にも薄暮の事ではあるし、勿論江戸時代の曳き廻しではないのだから曳かれ行く女の姿態をこまかに観察することは出来なかったが、お太鼓の帯の上に組合わされた両手首、六つの男の脚の間からチラチラこぼれる女の長襦袢と赤いお腰巻が哀れさの中にも妙に色っぽく見えつかくれつして消えて行ったのが、今でも脳裡に深く刻みこまれている。

これは事更言うまでもなく、野天の芝居ではない。何んらかの理由で逃げ出そうと駅ま

でたどりついたが、運悪く追手の用心棒につかまり再び連れ戻されたという一つの事件であって、商売道具の女に逃亡されては堪るかといばかり憎しみをこめて女を縛ったればこそ、胸の縄目は肉がちぎれるように着物の上から縛りあげたおかげで縄目がほとんど見えない位しめつけていたのではないかと思う。現実にもこのような情景に接したのは、あとにも先きにもこれだけで、その後一つも拝観ないしは瞥見する光栄に浴していないが、一家をあげて大塚在から郊外に転居してしばらく経った後、実はあのあたりに三業地つまり

梨花悠紀子逆吊り写真特集

大中判印画紙焼付
各集五枚一組 一〇〇〇円

第一集 略号(さか)

両足首括り逆吊り

足首を揃えて括られた縄を滑車に連結されて、足を上に逆さに吊り下げられた美女梨花悠紀子は、両手を背中後手に縛られ胸には乳房がつぶれんばかりの縄目が肌に喰い入っている。全体重を両足首の縄で支えて痛さを耐えている梨花悠紀子。

第二集 略号(させ)

逆吊りの女体折檻

逆さに吊りにあえぐ梨花悠紀子に対して、更にあくなき暴虐の手は、情容赦なく竹の棒にて女体のあらゆるところを叩き、こじ入れ、踏みつけ激しい折檻を加える。美しい眉をひそめて必死に耐える美貌の彼女の凄絶にして、しかも美しい吊責めフォト。

第三集 略号(さと)

手足逆宙吊り

両足首と両後手首を括った縄を滑車に連結して、じりじりと宙に吊り上げてゆく。顔胸、腹を下にして、足首と背中を上にして宙に浮いてゆく梨花悠紀子。柔肌には恐ろしい程縄がうずまって、吊責めの真価が鮮明な印画紙焼付によって発揮される。

赤線地帯があったのだと聴かされ、惜しいことをしたと思った。いうなれば、あの調子だと、現実にもこういうことが行われているか……ということなのだが、これすらもその後詮索するすべもなく、徒らに月日が経っていった。

さて、こうした稀有ともいうべき極めて珍らしい街の出来事などを参考にして翻って茶の間のテレビを観る時、演られる縛りなるものは、無いよりはましであろうが、さして重要なポイントと考えない方が、どうもよさそうだということに気付く。つまり公開性はあくまで焦点をぼかすという原則に従って茶の間に飛び込んで来るから、よろしく演技の底辺をあこれ想像しながら、万事何事もなかったかのように呵呵大笑すればよい。ということにどうもなりそうである。

以上、おこがましくも筆者の古ぼけた秘話まで御披露して「テレビの責め」を一とおり述べてみたが、ご賛同を得れば幸いである。

— 完 —

× × ×

× × ×

マゾヒスチック画廊

芳野眉美

(1) 春川ナミオ画伯

春川画伯のマゾ画廊は面白い。サジスチンの女性が若く豊満であるが故に、遊びの要素が多い。バーやキャバレーのホステスをさがさなくとも、外を歩いていくだけでも見受けられるタイプの女性である。私の好きなタイプの女性でもある。こういった親近感、マゾ画に現実感をあたえ、実際に口絵そのままを再現してみたいから妙である。

「珍案ビール飲法」というのがある。

「太股の間に挟んだビールを飲ませて貰って

いる男」こんなホステスがいたら、バーは繁盛してしょうがない。脱いだハイヒールにビールを注ぎ、飲ませるシーンは映画でも数多く見た。太股に挟むぐらい、できないことはないのである。

(やってみた人は、読者通信に報告する義務がある)

公園を散歩していると、恋人同志がブランコをこいでいる風景によくぶっかる。仲良く並んで肩を抱いている。画伯の「ブランコ」は、女性が男性の顔を太股ではさんでいる。

肩車だ。絵のように、女性がハイヒールであり、太股に男性の顔が埋められていると、ちょっと悩ましい。ところが、肩車をしてブランコに乗っている恋人同志が、いるんだからいやになる。事実は小説より奇也である。

同じことが「スベリ台」にも言える。女の子を抱いてスベリ台を楽しんでいる人がいる。頭からすべっている人もいる。小犬のようにじゃれながら、すべっている人を見た。昼間の明かるい光線の中では、SMプレイをしたとしても、七色の太陽の光の中に消えて



しまう。絵は、もう少し女性のヒップで男性の鼻口をふさいでしまった。

「重量物落下」は愉快だ。後手に縛られ、眼かくしをされてベッドに寝ている男の顔の上に、飛び上った偉大な臀部が落下する。女性の顔もいい。可愛い悪魔という感じがぴたりする。好きだ。

口絵に発表されたものではないが、椅子の上の男の顔に、スリップ一枚の女が座っている絵がある。女の豊満な臀部の割れ目が、男の顔をすっぱり埋没して、うれしくなるような絵である。実にマゾ的でいい。

トイレで男の顔の上にしゃがんでいる女の絵もある。マニア待望の構図だが、できればトイレの便器にまたがった女の裸の尻の下に、男の顔があるという、正当な構図で描いてほしかった。といって、トイレの構図は、実にうれしかった。今にも、小悪魔の落下物が男の顔を見舞うような気がして、ぞっとするのである。

画伯の描く男性は、少年のような表情で、それだけに若々しく健康だ。

(2) 滝れい子画伯

「女神の足」、「淑女の足」の足舐めの構図

は、大人の絵だと思う。足舐めを適格に表現した技量は、滝画伯ならではである。

「足の裏責め」は特に好きだ。男の下腹部に腰をおろしたスリップ一枚の女性が、男の両膝に手を置いて身体を支えながら、男の顔に足の裏を舐めさせている。背中からで女性の表情はわからないが、これだけサジスチンの零囲気がこわいほど出ている絵もない。

「継子いじめ」は、手足をまとめて猪縛りにした女の子の口に、継母が足の親指を突っ込んでいたのだが、これが小さな女の子でなく、男であつたら、私の宝となったであろうと思う。その意味では非常に残念だ。

手足を縛られて自由を奪われ、足の親指を口に突っ込まれる。責めているのが良家の夫人であれば、それこそマゾヒストの真髓というべきものであろう。見果てぬ夢と笑わば笑えである。私はそんな夫人を求める。

こんなことを考えていると「有閑令嬢と下僕」を見て、ますますぞっとした。「二十三年の美しい令嬢、今や下僕は奴隷の誓いをさせられて、女の尻の下で、美しい女に従属する幸福を味っている」パンティ一枚の美しい令嬢の尻で下僕の顔は埋まっている。「人間馬の調教」は誰もがやっていることだ

ろう。読者通信でも見受けられる。

「書生っぱ人間馬」は、「さあ、このままお風呂場まで乗っけて行くのよ、それ、もっと早く、早く」とある。タオルを巻いただけの令嬢が書生を四つ這いにさせて人間馬にしている。タオルから令嬢の可愛いお尻が覗いている。令嬢の重みよりも、書生は令嬢の肌の感触とぬくみが気が気ではなかっただろう。

モデルがないと、そう簡単に描けるものではないと思う。全部が空想だと絵が何処か不自然だ。うそになる。

(滝れい子画伯、奴隷を一匹飼育しているんじゃないかしら)

足舐めの構図の三枚共、女性の表情は全くすばらしい。すばらしすぎていやになる。

(3) 四馬孝画伯

口絵の四馬画伯の華麗なる豊筆は、どんなに賞讃しても賞讃しすぎることはない。四馬画伯の描く女性は最新流行の現代の女性であり、画伯の女性の責めは、グラビヤやフォトで表現出来ないほど、奔放で楽しい。

私も画伯のファンであり、「女体浣腸嗜虐場面図」は秘蔵している。

でも、画伯のマゾ画は少い。男性の責めは

にがてらしい。だから、ここでは触れない。許されるならば、「オムツカバー」「オムツと浣腸」シリーズをもっと描いてほしい。オムツカバーからはみでているオムツの表現もすばらしいし、ゴムの猿ぐつわやオムツの猿ぐつわも、マニアにとって驚喜するに十分な構図である。

「妊婦と浣腸」シリーズも、同時に続けてほしい。
(勝手なファンの申出をお許し下さい)

(4) 白川潤画伯

春川画伯が若者の絵であり、滝画伯が大人の絵であれば、白川画伯は二月号でも見られるように、老人の絵かもしれない。

「耽溺」「富美子の足の幻想」から受ける感じは、柔らかく古くさい。

だからといって、明治時代の絵だというわけではない。

島田で薄物をおおった婦人が老人に足の裏を舐めさせている絵も、長襦袢で老人の顔の

上に腰を掛けて逆馬乗りになっている絵も、婦人が色白で豊満であるが故に悩ましい。なまなましく思われて、かえって不思議な気がする。

老人の性慾には、以前から興味を持っていたからかもしれない。しかし、それとは別になんとなく甘い、やりきれない雰囲気画伯の筆のあとに感ぜられるから妙だ。

「犬になった或る男の告白より」的な絵も続けてほしい。

北川京子ぎみに

寄せ参らすふみ

波良 桐 太郎

床かしなつかしき北川京子のきみに、一と筆参らせそろ

あわれこの世に男子と生れて、事に処し心

ゆくまで腹かき切り、終りを潔ぎようするこそ本懐なれと思ひしは、早や二十余年のかみなり、いま四十路をすぎて独り身の、夢ひと

すじに切腹の悲願思ふ身には、このほどの京子ぎみが読者通信ほど驚かれしものはなくてそろ。

先年、中康弘通ぬしました田谷敬生ぬしなど切腹の研究著わし給いてより、些か興味関心もつほどの者、幾人か本誌に通信寄せたりしが、中康氏も申さるる如く、今どきの二十ばかりの女人にして、切腹に興味関心ありとされるは、なかなかのことに存じ参らせそろ。

定めし深き仔細あるべし、されど今は措くとして、他の常なる男子の如き思いもて女人を見しことなかりし予も、この年になりて、いとせめて十年若からんには京子ぎみを媛友となし参らせむ願ひも、到底叶わざらましけ

れど、予が生れしこと早かりしや、きみの生れ給うこと遅かりしや、何れかは知らねど思ふに任せぬが世の習い、まことはかなくてそ

ろ。
若し縁あり機ありて、きみを媛友となし参らせ、予がすさびを援け賜わるを得んか、予が畢生の悦び是にすぐるなからん。

然るときは、近ごろ日本趣味とて流行の、甲冑刀剣の類い飾りたる旅宿の一室借り受けて、きみを招じ参らせ、用意の若衆まげに大振袖、紫の地に金銀白朱藍みどりもて花鳥をぬいとれるを進め、紬の袴に小脇差前半にたばさみて、正面に御座願うべし

あるいは白無垢にうちかけ、高嶋田、懷劍の柄わずかに覗かす御殿風もお似合いあるべし。お好みに任せ参らせ、ただ願うは、予が晴れて心のままに腹切るさま模する姿をご検分賜わるばかりにてそろ。

若衆姿に扮り給わば、恐れ乍らご介添、下さるべし。予、定め座につけば、きみ床の間より用意の三宝に腹切刀、お手ずからしつらえ給いて予が前にお据え下され、さて「お望みに任せ、存分にお腹召されませ」

一と言式代下さるならば

「忝けなし、一期の願い、そこもと如き美形

のお見送り、過分に存ずれど、思うさま腹かき切つて果つるまで、とくにご検分賜わりました」

予は一礼して双肌ぬぎ、腹ひろく露わして三宝引き寄せ、右手に刃を執り左手にて三宝しりぞけ、いくたびか腹なでおろし

「御免」

と、きみが明眸見すえつつ、左の脇腹、ことと思う辺りに刃突き立て侍らん

「あなや」

きみが嘆じ給うにも心たわませず、一気にわれとわが臍下、一尺ばかりもかき切り

「おみごと」

きみが賞詞を賜わるをば、今かとはかり待ち申し候うべし

さて又、きみ姫装束にておわせば

「その方、妾に何と申訳する、それとも……」

言葉を切り給えば、予は

「それとも……？」

「知れたこと、云い開きかなわすば妾が眼の前にて、腹切つて見せよ」

冷たく云い放ち給うべし。予は

「ありがたくお承け仕りまする」

とばかりにて、脇差の鞘を払い、双肌押し

寛ろげて、腹真一文字にかき切るべし。何卒きみが明眸、ゆめ逸らし給うことなけれ。

あるいは又、きみ看護婦の服装なし給わばわれ白衣の傷兵と扮し、きみ

「覚悟なさい、最後の総攻撃です」

一椀の水すすめくれれど、毒と知れば予は肯わず、喘ぎつつも

「北川看護婦どの、せめて腹を切りたい、介添切腹を……」

きみは深く肯ずき

「切腹したいのですね、立派に死なせてあげます」

わが背後に寄り添い給いて、かき寛ろげしわが腹を、纖手もて短刀あやつり、みごと十文字にかき切り下されんには、わが快、是にすぐるなからん。

予に此の上の望みなし。

ああ、是すべて夢にして、世の人、若し予がきみにかくの如き戯れを願い参らせなば、狂愚痴人と罵るべし。きみも亦例外ならじかし。はかなの世や。予、わずかにかく夢想して鬱をやるのみ。

予と志を齊しうする人ありやなしや、京子ぎみや如何に。

可愛い啓子を求めて



近 藤 一

(1) 啓子いう女

大田垣啓子は、一風変わった、しかもサバサバした感じの良い女だった。取立てて云う程の美人ではないが、アカ抜けた身のこなして女の匂いが香ばしい奴だ。

何しろ、出会いからしてKKが絡んでいるのだから、性癖を秘匿する必要はなく、気も楽だった。東京のベッドタウンと云われる街の、国電の駅前の書店でKKを買って、バスを待つ間のつれづれに読者通信などを読んでいたとき、何気ない風で寄添って来たのが啓子だった。

無縁の人々を刺戟しないよう細心の配意はしても、他からの干渉などが許さないつもりだが、啓子も、コソコソしない所がいいと云って、いたずらっぽく笑いかける。

「ネ、私、あなたのモデルになって上げましょうか？」

「モデル？」

「ウン」

「何の？」

「何でも。」

最初の出会いで意気投合したけれど、啓子の方が余程上機嫌だった。突飛なことを口に

して、相手の戸惑いを眺めながら、いい気持ちだった。

「別に、僕は画をかく訳じゃなし、写真を撮る訳じゃないよ。」

「駄目。ムードよ。女を責めるムード。その中で奇譚クラブを読んだらいい。」

「フーン」

「私、そういうの好きだな。ネ、私を縛ってみない？縛って頂戴よ」

幾らか不躰な言葉遣いや、蓮っ葉な物云いが、却ってこの場の空気を和らげ、ふさわしいものになっていた。

それから四、五回、私達は食事をつき合ったり話合ったりした。啓子は、第一印象が余程良かったのか、私を隔てなく親しんでくれた。私の職業とか生活環境など探ろうとはしなかった。そのようなことに関心が無かったためか、探るまでもなかったためかは、分らない。私も、啓子の態度に気押された訳ではなく、啓子と逢ってから別れるまでの愉しみに必要なことしか知ろうとしなかった。

啓子は味のある女だった。なかなかの理論家だった。自由奔放で気儘のようだけれど、程度を弁えていたし、彼女なりに筋の通った人生観を持っていた。

「ネ、私みたいな図太い女が、マゾって云えるのかしら？」

啓子は縛られるのが好きだし、責められることに慣れてしていると云う。唯、そのこと自体が窮極の目的かと考えると、どうも違うらしい。女の身として、縛られたり責められたりするところが、男性から烈しく愛されることへの憧憬に通じるみたいだと云う。その証拠には、啓子が戯れる悦虐の世界では、責め手は常に男性だと云うのだ。

「女同志のサドやマゾが、あることは分るけど、私は女を責めてみたいなんて考えないし私が女の人に責められるなんて、テンデ考えられないことだワ。」

啓子は、いい体をしていて。乳房は大きく丸みを誇っているが、硬さは無く、柔らかな弾力が掌を圧す。眼を閉じ、喘ぐように身をすくめる。

「ウウッ、いやっ、赦して！」

「オイ、大分揉んでるな。」

「ハ、ハイ。」

啓子は、私が普通の言葉遣いときは、ズベ公まがいの言動でドライ振りを作るが、私が一旦強圧的に出ると、忽ちにして隷従にひたり、身も心も捧げて奉仕に飲ぶ女畜に変身

するのだ。

膚は白い。胸から腹、そして内腿は抜けるように白く光っている。幾らか毛深い。

「獣みたいでしょ。私、ませたのネ。初めは不潔みたいで嫌だったけど、毛深いお蔭でモテることもあったし、五分五分ネ。私が奴隷に憧れるようになってからは、あまり取らないの。貴男は毛深い女は嫌い？」

「俺の女奴隷は人間の女さ。獣の雌なんか、ぞっとしないね。」

私は啓子の腕の毛を、エバクリームで脱らせてしまった。

肩から腕にかけて弾力が豊かだった。胸は厚く、腰の辺りは逞しかった。全身が形良く整い、たるみは現われていない。

「いい腋毛だ。長くて柔らかいし、艶が良くて、ホラ、こんなに強い。」

「痛っ！ 駄目よ、そんなことしちゃ。」

「これだけの腋毛はザラにないよ。」

「私の自慢なの。滅多に剃らないワ。」

「大事にしろ。絶対に剃るんじゃない。」

「ハイ。」

胸の厚みはグッと迫力があるし、下腹部の膨隆は愛嬌がある。

「君、妊娠してるんじゃないか？」

「アラ、とんでもない。どうして？」

「とぼけるのか？ お前の腹の膨らみが何よりの証拠だ。素直に白状しろ。」

「ハイ、恐れ入りました。何もかも申し上げますから、何卒、お赦し下さいませ。私は只今妊娠三カ月の身でございます。」

啓子は神妙に頭を垂れてから、ニッコリ笑った。

「私って、前から『お目出度ですの？』って時々云われたワ。年頃になってから、ずっとこうなの。地腹が出てるのよ。肉がつくこともないでしょうから、女らしくなって、脂肪が集まっちゃったのよ。きつと。それにネ、今ちようど便秘してるの。時々お通じが止まっちゃうの。癖なのネ。」

「そうか、便秘か。どうりでネ。」

「アラ、匂う？ 御免なさいね。嫌だナ、私。自分じゃ分らないけど、便秘すると息まで臭くなっちゃうんですって？」

ハハア、ここが啓子の弱い所だナ、と私は合点できた。妊娠二、三カ月程度に膨れた地腹は、スタイルが良いとは云えなからうが、存外捨てたものでもない。少々ゲテものの趣味のエッチかも知れないが、それ自体を眺めていると、芸術品なんて固苦しいワクが消えて

生の女が感じられ、いろいろと想像を生む愉しさを持っているものだ。パンティだけでなく、サポーターを着けさせたり褌を締付けさせたりしても、下腹部が柔らかく張出していることは、形をいやらしく崩したりしないで、美しく可愛いものだと感じさせるのだ。

「私ネ、時々本当に妊娠した夢見るワ。その時は、私のお腹はもっともっと大きく突出しているの。そして、私はいろいろ拷問されたりするの。でも、面白いの。私が普通に縛られたり拷問される時は、私はムームーみたいな囚衣なんか着ているの。昔のお仕置みたいに白い着物の時もあるワ。それなのに、私が大きなお腹して逆さ吊りになるときだけは、いつも裸なの。それも股の所はよく分らないけど、とにかく真っ裸で、まん丸なお腹が胸の所まで垂れて苦しいの。お乳も逆さま。体全体が逆さになって揺れてるの。それでネ、私を責めてるのが時には私自身なの。私が自分で、逆さ吊りの私の髪を掴んで、グイグイ揺らしているのよ。変ネ。」

啓子の髪は豊かだ。小学校の時から長い髪に憧れ、中学二年の時から切らないと云う。「私、学生時代、これって云うこともしなかったでしょ。特に勉強した訳でもなし。だから髪を切らずにいただけが、唯一つの思い出なの。でも、どう？ いいでしょう？ 私、自毛で桃割れが結えたのよ。」

日本髪でも島田でも、女を折檻して行く間で崩す所に味があろうし、私にとって女の髪が長いことの価値は、それを掴んで女を引摺り廻し、繋いでいたぶり、それで女体を吊下げる所にあるのだ。

毛深いだけに、髪は漆黒と云おうか、烏の濡羽色で、黒々と艶がある。変に赤茶けたバタ臭さが無い。細いがしなやかで強い。

「釣糸にいいわよ。コイを釣るのよ。」

啓子が冗談にも自慢する、よい香りの髪の毛なのだ。

(2) 近藤一という男

「ネ、私、あなたのモデルになって上げましょうか？」

「また誘惑？」

「とんでもない。真面目な申し出よ。ネ、私貴男が誰だか知ってるのよ。」

「俺が？ 俺は俺じゃないか。」

「ペンネーム、貴男の。貴男が『近藤一』だってこと、私は知ってるのよ。」

「何だい、そりゃ。近藤なんとか云うのは、

誰だい。」

私はとぼけた。

「何よ、おとぼけノ 知らなきゃ、教えて上げる。奇譚クラブの投稿家で、時々分別臭い記事を書いている人なの。尤もこの頃は一寸お休みしてるけど。」

「それがどうして俺なんだい。」

「貴男は、この所、何も書いた様子が無いワ。ぴったり一致するの。」

「冗談じゃない。何か書いていて、今売出し中の人だと云うなら分るけど、書いてないから休み中の投稿家だなんて云ったら、九千万や一億も同じ条件だぜ。」

「どう致しまして。一億なんかじゃない。人口の半分は女だワ。近藤一という人は、二十歳以下の子供じゃないし、四十歳以上のオジサマやおじいさまじゃない。まア広く見て二十五歳から三十五歳の間。」

「……」

「東京生まれの東京育ち、東京在住の者。大卒は出ていて、少くとも心理学の講義くらい出席していた人なの。職業は堅い方だと思うワ。」

「……」

「古川裕子に果敢ない片想いをしたの。その

あと川端多奈子に失恋したの。女好きの癖に、女に臆病なのよ。スポーツマンらしいワ。すらっとした方じゃなくて、ガッチリ型なの。それにあんまりハンサムじゃない、普通の顔ネ。一見とっつきにくい感じ。厳しいんじゃないけど、人を見る眼が鋭いのよ。つき合ってみると気さくなんだけど、魅力的な女の子を見ると眼が喰付いちやうのネ。」

「……」

「しのぶという女の子と仲良くしていて、マミという女の人が時々コーチに現われる。誰がしのおで、誰がマミか、云わなくてもいいでしょうネ。とにかく、これだけの条件で絞ってみて、何人が残る？ 東京の人口が一千万として、一万人？ 千人？ 百人？ まア十人と居ないんじゃないの？」

「成程、それで僕が近藤一という訳か。」

「アア、案外落着いているのネ。ネ、貴男、私を生かしておける？」

「さア、殺されたい？」

「いいのよ。どちらでも。」

「もったいない。肉を喰尽くして骨までしゃぶってやれるのに。まだ味もよくみちやいなんだぜ。」

啓子の面上に戸惑いが浮かんだ。

「どう、僕の子供が産めるかい？」

「アア、しのぶさんがいるのに？」

「困るかい、やっぱり。」

「別に、でもネ、お産は、私の性に合わないの。男でも女でも、赤ん坊はいらないワ。私は子供を育てる資格なんてないし、産むことも棄権するワ。ただ、妊娠したいナって考えることはあるの。時々ネ。私のおながが本当に赤ん坊を入れてるんじゃないかって、ふっと思うこともあるの。これはネ、何か自虐的なよネ。妊娠して体の線が崩れるワ。おながが大きく突出て、変に水っぽくなって、肩がゲッソリして、犬みたいにハアハア喘いでヨタヨタノソノソしているの。不恰好よネ。美しくありたいと希う女が最も醜怪になるの。それだけじゃない。私の願望、私の空想はネ、大きなおなかを抱えて虐待されるところ。犬として繋がれ、馬として追い廻されるの。男の人を乗せて這廻るのよ。臨月になったらちゃんと坐れないから、吊られるの。妊婦の逆さ吊りのモルモットにされるの。でもおかしいのよ、おなかには裂かれないの。その代り、妊娠してめっきり大きくなったお乳を責められるの。無理にお乳を絞られ、しまいには血が出て来るのよ。これはきつと竹谷十

三さんの影響よ。すごくショックングですものネ。」

啓子は雄弁だった。だが、声は感じの良いアルトで、柔らかな口調で話すから、お喋りとは感じられなかった。

「僕と一緒に居られないか？」

「結婚？ 私は嫌。結婚してから貴男に浮気されるなんて、想像でも赦せないワ。と云って、私は貴男を独占したい癖に、拘束したくはないの。私は棄てられるなんて耐えられないけど、結婚に縛られないで自由に生きたいの。結婚なんてしたくないワ。」

表情は明るく豊かで、唇の動きが愉しい。

「誰も結婚なんて云やしないぜ。只、一緒に居ようという話だよ。俺はネ、君とは世の常の結婚なんかしたくない。君が普通の女じゃないからさ。君は根本的に変ってる。それは俺から見ると素晴らしいと云える変り様なのさ。君は当り前の女じゃないから、当り前の結婚ができないし、してはいけないのだ。君が男と結びつく方法は、君にふさわしい、根本的に風変りなものが許されるという訳さ」

「風変り？ 結婚じゃなくて、どんな方法が私にふさわしいの？」

「契約、奴隷契約さ、全く任意のネ。」

「奴隷契約？ ウウン、面白そうね。」

「君の自由意志で、君は男の奴隷になる。君と云う女は、男の所有物になるのだ。これも世の常の結婚じゃないけれど、広い意味では結婚だろう。だって、君が自分を女奴隷と認めたときは、君の意志は誰にも圧迫されないで自由だったのだ。女が奴隷になり、男が所有者になる合意で、結婚は両性の合意に基いて成立する訳だからネ。」

「契約結婚とも違うのネ。」

「うん、あんな冒険じゃないよ、少くとも。」

「気まぐれな思いつきや退屈な情性は許さないんだ。普通の結婚、なんて相手の人格を尊重するなんて云うのに限って、却って異性の特質を殺し合い、無意味な拘束を、お互いに続けているんだ。君の周りだって、そうだろう？ 男なら誰でもいい、女なら誰でもいい、只、体が欲しくなったり、誰もがする生活だから真似してみたくなったり、別にその相手と結びつく必然なんか要りゃしないんだ。そんな無責任な結婚や、結婚したんだから別れないだけの投げやりな生活なんかは、不自由で、意味のない残酷だと思う。僕の云う奴隷契約は形式上拘束があるけれど、本質は自由で、人間の生き方にハリを与える残酷じゃない

か。僕と僕の奴隷は、いつだって、力一杯相手を求め合って生きるんだからネ。」

「子供ができたなら、どうするの？」

「産みたければ産む。産みたくなければ堕ろす。その時の情勢次第だけど、君は欲しいのか？」

「まあ、そのときでなきゃ分らないわネ。でも、もし子供が産まれたら、どうなるの？ 私生子？」

「子供は俺の子だ。俺達夫婦の子供として育てる。」

「夫婦の？」

「俺としてのぶさ。君は俺の所有物たる奴隷だ。君のものはすべて俺のものだ。子供は俺の子だし、子供の母親は産む前から、しのぶなんだ。君は子供に対しても奴隷に過ぎないのだ。」

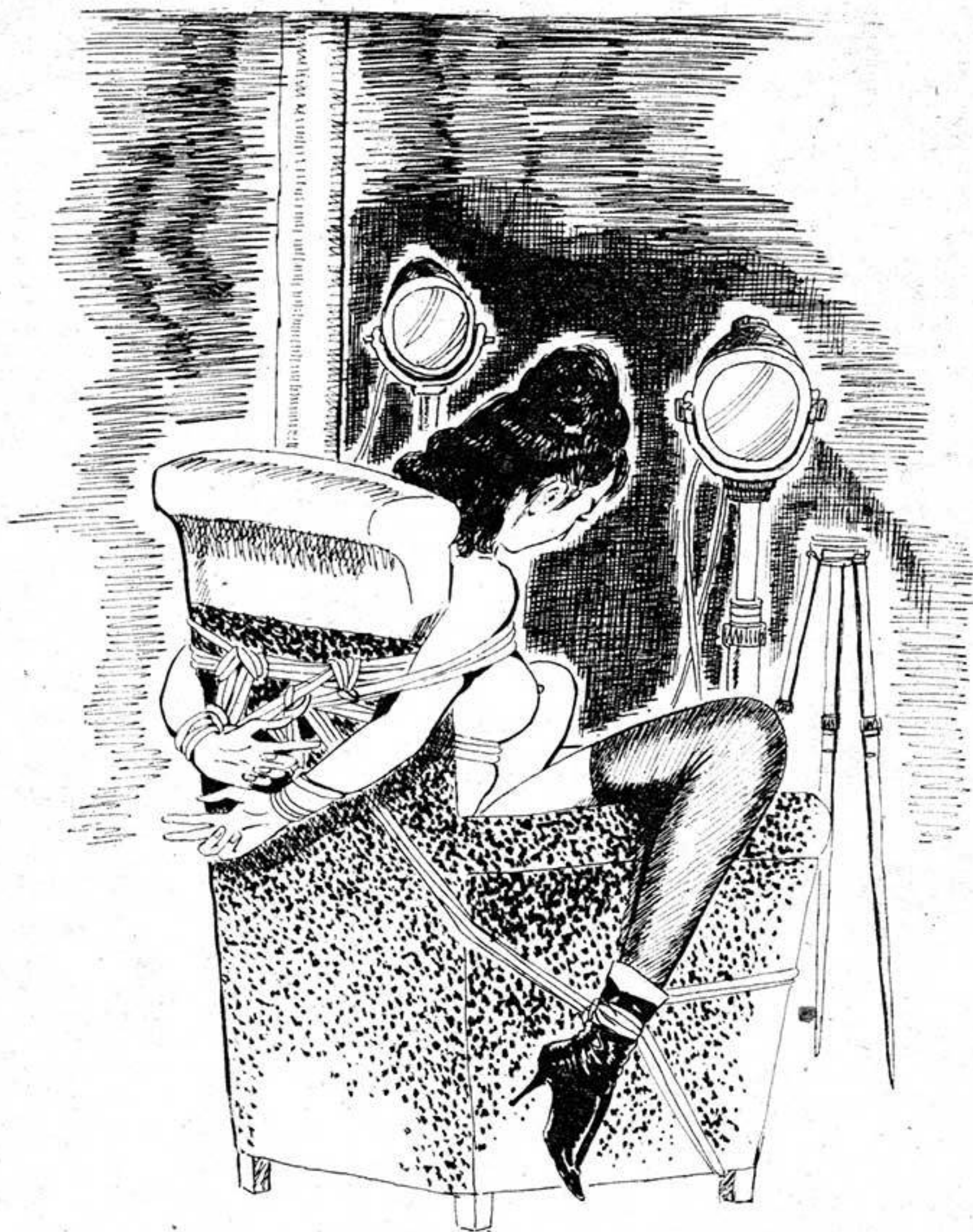
「フウン、申し分なく残酷だワ。だけど、私って女には、ふさわしい生き方かも知れないわネ。」

(3) 奴隷契約

「君は今から啓子になる、いいな？」

「アラ、私はずっと前から啓子だワ。」

「間違いするなよ。君は自分を『啓子』と呼



ぶんだ。「私」ということは許さい。そして君が他人から呼ばれるときは「お前」か「啓子」かそれに類する呼び名で呼ばれ、「君」「貴女」などは許されないのだ。」

「シビレちゃうワ。残酷さがとっても行届いているのね。」
啓子は呆れたような表情を浮かべたが、一瞬真顔に戻って私に応待する。

「分りました。啓子は只今から自分を呼ぶときは必らず啓子と呼びます。」
そこで、啓子は私に対する誓約書を作らせることになる。

「要するにだ、啓子が俺に対して絶対の服従と奉仕を誓うと云うことだ。それをどう実現させれば、最も残酷かと云うことだがネ。人によって考え方もあるだろうが、俺は強制を採らない。内心で反抗することも許したくないのだ。俺は啓子自身の意志で、啓子を一匹の女奴隷にしてやるのだ」「有難うございます。啓子は自由な契約に基いて、人間の女としての総てを放棄し、新しい生き方に歓びを見出します。」
啓子の筆跡は、柔らかな書き馴れたタッチで清潔な感じがした。

奴隷の誓約は私ばかりでなく、今までに何人もの人達の作品に登場して来た。簡単な誓いの言葉から詳細な折檻の基準まで、いろいろなものがあつたし、私自身の作品では「結婚の条件」や、イメージを綴った中に登場させた。私にとっても最もショックだった女奴隷の誓いは、やはり古川裕子の叫びであって、忘れられない。

「わたしは貴方の奴隷。貴方は何をしても

いいの。」(37年12月号「囚衣」)

要はその心なのだ。言葉の上の隷属ではなく、身も心も捧げつくす服従なのだ。御主人様の意を体して、その好みを好み、その歓びを歓ぶことが本質なのだ。奴隷と云うものは本質的に支配者に奉仕して歓ぶものであり、そして女奴隷とは「女」であることを一〇〇%活用して奴隷の生甲斐に喜悦すべきものなのだ。

啓子が書くべき誓いの言葉は、要するに、啓子が私の女奴隷だと自ら宣言すれば足りる訳だ。それが根底になり、それだけで私は啓子を恣に自由にできる、縛り、鞭撻ち、弄びあらゆる辱しめを加えることが許され、啓子は、どのような折檻も拷問も凌辱も喜んで受忍することになるのだ。

啓子が私の女奴隷という精神は良い。そして、次には形式だ。誓いを唱えさせることも誓約書も、裁判も、処刑も、すべては形式なのだ。この形式が、支配と被支配を痛烈に味わせる。御主人様の腕力より遙かに強大な力が、女奴隷を雁字搦目に縛り上げていて、それから到底逃れ得ないのだ。この力が巨大であればある程、女奴隷の観念ぶりは徹底して美しくなり、被虐の快感が昂まる。女奴隷

は、激しい暴虐の嵐に舞う一枚の木の葉となり、荒狂う嗜虐の浪に弄ばれる笹舟となつて、身を貫く疼きに、白い脂肉を悶えさせる。

啓子が私の女奴隷ということ、実際的に肉づけして、具体的表現をすることが必要になる。それが女奴隷にとっても、歓びを増すことになるうし、支配者の大きな愉しみなのだ。例えば、

「只今かぎり、啓子は人間として総ての権利や自由を棄てて、御主人様にお仕え致します。」

「啓子の生命は、御主人様のお心のままに任せ致します。」

「啓子は、賤しい一匹の女奴隷として、御主人様のお云付には、必らず従います。」

「御主人様のお心を御満足させて頂けますよう、啓子の肉体は御存分に遊ばして下さいませ。御主人様のお愉しみのために啓子の女体が少しでもお役に立てば、啓子にはこの上ない喜びなのでございます。」

「万一にも、お云付に叛きましたときは、罪の償いとして、お心のままのお仕置をお与え下さいませ。愚かな賤しい女奴隷が御主人様のお心に副わないときは、どのような折檻で

も、どのような凌辱でも、飲んでお受け致します。」等々。

女奴隷ならば当然の、しかも極めて刺戟的な実体を言葉や文字に現わす所に意義があるのだ。支配者が愉しみ、被支配者も悦ぶ。それが奴隷契約の真価ではないだろうか。女奴隷を所有する者としては、与えるものはドライに、受けるものは、ウェットにするのがよいと私は思う。

「啓子、お前は今夜来客を口実にして全裸になることを躊躇した。命令不服従として、海老縛り三十分ならびに鞭撻ち二十回、爾後生晒し三時間に処する！」

「お赦下さいませ。啓子は賤しい女奴隷の身を忘れて、お客様に見られることを恐れるあまり、御主人様のお云付を受けながら、総ての衣類を脱ぐことを怠りました。その罰に只今、海老縛り三十分、鞭撻ち二十回、生晒し三時間のお仕置を命じられました。啓子が犯しました罪の大きさに比べますと、余りにも御寛大なお仕置でございます。啓子は心から有難くお受け致しますとともに、一生懸命にお勤めさせて頂きます。」

とにかく所有者たる私の糺弾は冷厳で、怠慢はどんな些細なものであっても赦さず、全く恣意

次号(8月号)

掲載予定作品

○寒椿抄……………雄松比良彦
(女相撲美考)
○雨の夜ばなし……………万田 不二
悦庵絵灯籠その八
○クロチルドの遍歴……………佐出 須登
(十三人の女死刑囚最終篇)
○妖異女斗美八景……………佐藤 健児
(徴側、徴式の反乱)
○濡れにぞ濡れし……………芳野 眉美

(ガン作マニヤのノート)
○小説と死刑マニヤ……………黒田 寿
○「花と蛇」……………団 鬼六
(第十四回)
○青春悲歌……………中康弘通
○奇譚三十九夜物語……………辻村 隆
(第三十八夜)
○心傷たむ遍歴……………西条 操

的に啓子を断罪する。刑罰は峻厳そのもの。罪はあった方がいい。それも形式だが、全く気まぐれの縛りや責めより、芝居じみた形式のある方が奴隷契約にふさわしいと思う。男の我儘でよいから、やはり女を罰する口実を作ることは面白いと思う。

こうして、大田垣啓子の女奴隷としての誓約書が生まれ、効力を発した。

『誓約書』

元 大田垣啓子こと

啓子

二十五才

啓子は、近藤一様に対しまして、完全に自由な意志に基いて、次のとおりお誓い申し上げ、どのようなことがありましても、絶対にこの誓約をお守り申し上げます。

一、啓子は、昭和三十八年十月一日以降、近藤一様を御主人様とし、人間として保持して参りました一切の権利自由を、完全に放棄いたします。

一、啓子は、賤しい女奴隷として、身も心も捧げて、御主人様にお仕え申し上げます。

一、啓子は御主人の御命令には、どのようなことも、飲んで服従申し上げます。

一、啓子は、御主人様のお心に副うために、しのお様と松本富美子様に対しまして只管、心を低く、争いや嫉妬を持たず、愚かな賤しい女奴隷として、お仕え申し上げます。

一、啓子は、誓いを破り、御主人様のお心に副い得ないときは、どのようなお仕置

も、どのような辱しめも、飲んでお受けいたします。

昭和三十八年十月一日

右 啓子

近藤 一様

誓約書は二通作って、啓子の署名の下に、血判を捺させた。そして一通づつ分けて保管することにした。

しのおに無い資質を、啓子は持っている。啓子はこの誓約書のために、しのおの下位に在って私を娛しませることになった。貞操さえも、私が啓子を可愛いと思って求める限り、無条件に与えてもいいという。

「お金なんか、いや！ 啓子は女奴隷です。娼婦じゃないの。啓子の総ては貴方のものなのよ！」

私はしのおを正式の妻にする。そして、しのおを悦庵の淵に沈め、溺れさせる。だが、啓子も可愛い。しのおには不可能な吊責めや烈しい折檻ができ、しのおと異質な肉体の魅力もある。啓子にも子供を産ませたい。

こんなに可愛い女奴隷「啓子」が、どこかに居ないだろうか、と思う。

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

大好評！注文殺到売切れ近し

臨時増刊 写真と絵画 文献 特集号

目下発売中 直接お申込を 定価一部五〇〇円（送共） 略号（文献）

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女体切腹、女相撲、浣腸、とあらゆる趣向を網羅した本誌臨時増刊号の決定版。今後二度と再び集録出来ない特殊文献を掲載いたしました。売切れますと、補充がつかまへん故、今すぐ直接発行所まで御注文下さい。着金次第折り返えし急送いたします。

〔第一グラビヤ〕 (十六頁)

自己愛の女神を写す……………塚本鉄三、構成
「私の乳房を見て」……………長野 良子
露出癖の充足……………長野 良子
後手縛りのワンカット……………大塚 啓子
転ったエビ縛りの女体……………大塚 啓子
新井マリさんと共に……………由岐敏夫・構成
棒責め愉悅……………新井マリ子
ムチ打たれる肌……………新井マリ子
サテンの責衣緊縛……………東浦ひかる
顔なぶり、踏みつけ……………大塚 啓子
押しつぶし、足逆取り……………大塚 啓子
餅肌はくびれて……………東浦ひかる
柱縛り首縄……………梨花悠紀子

海老責二態……………梨花悠紀子
黒いアンネパンティ……………遠藤百合子

〔巻頭口絵〕 (オフセット八頁)

△絵物語▽白ターバンの女……………四馬孝・画
第一図章△捕獲……………第五図章△美容△
第二図章△飼育命令……………第六図章△洗腸△
第三図章△調教……………第七図章△矯正△
第四図章△訓練……………第八図章△仕上げ△

〔第二オフセット〕 (八頁)

女体切腹、城主の姫君切腹……………四馬孝・画
女相撲、御前相撲……………雪崎京人提供
マゾ画、犬になった男の告白より……………
マゾ画、谷崎潤一郎「富美子の足」の幻想、
女相撲「海辺にて」グラマの対戦……………雪崎
女体切腹「侍女の奮戦」……………四馬孝・画
〔第二グラビヤ〕 (十六頁)
五月亜紀子さんの場合……………由岐敏夫・構成
軽い拒否と羞らい……………五月亜紀子
美しい諦観のポーズ……………五月亜紀子
恐怖と怨嗟のまなざし……………五月亜紀子

鼻責「鼻孔測定」……………大塚 啓子

緊縛俯瞰姿態……………大塚 啓子

憧れの優美ポーズ……………長野 良子

両手吊りの構成……………新井マリ子

ズベ公天使（トカゲグループ）……………由岐 敏夫

1、「みんな剥いじまいな」……………

2、「その顔をめちやくちやにしてやる」……………

3、「それだけは止めておきなさい」……………

4、「トカゲ団の掟をよく覚えておきなさい」……………

投げ出した脚線美……………絹川 文代

悶悦ポーズ二題……………絹川 文代

厳重な本縄掛け……………梨花悠紀子

〔写真版アルバム〕 (十六頁)

裸女斗争場面……………絹川・大塚

浣腸部屋の悦楽ムード……………大塚 啓子

浣腸器を握って……………大塚 啓子

縄にくびれた柔肌鑑賞……………大塚 啓子

女やくざ一本刀姿……………大塚 啓子

女ネズミ小僧次郎吉……………大塚 啓子

高手小手二ツ折り……………松本アサ子

エビ縛り二種類……………松本アサ子

血紅使用女体切腹連続フォト……………大塚 啓子

サジスチン宮井美佐子の近影……………宮井美佐子

縛り過程の構成……………大塚 啓子

鼻責めシーンの点綴……………絹川 文代

〔本文・解説〕 (三十二頁)

新人撮影行、五月亜紀子さんの場合……………由岐、

絵物語「白ターバンの女」……………辻村 隆

新しいモデルを写す……………由岐 敏夫

（告白）宮井美佐子の略歴……………宮井美佐子

限定版写真集
グラビヤ印刷

豊満と清楚

頒価一部 一〇〇〇円 (送共)

略号「限二」

只今、編集完了印刷中ですが、予定より若干遅延いたしましたので、予約者の方々には、お詫び致します。製本完成次第、先着順に確実に発送申し上げますから、暫

くお待ち下さるようお願い致します。一般書店にては一切販売いたしませんから、必ず発行所へお申込み願います。

モデル：長野 良子、大塚 啓子
モデル：五月亜紀子、新井マリ子

若々しさと豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の両嬢の緊縛裸身を画面いっぱい、所狭ましと活躍させ、加うるに、清楚純情なフェイスと初々しい肢体の五月亜紀子と新井マリ子の両新人の痛々しいばかりに、可憐な緊縛裸身を以って、誌面を飾ってゆきます。

本誌口絵には掲載できない超弩級作品ばかりを揃え、グラビヤの極鮮明な印刷にて、皆様の前に開陳いたします。すべて、一見マニヤの方々の胸を抉る力作の網羅です。必ずや皆様の御満足を得るに足る自信を持っています。どうか御期待下さい。尚、「美3」「限2」に引き続いて、新人モデル、ベテラン・モデルによる特写フォト、モデル特集などを引続いて刊行するよう企画中です。

(告白) モデルとしての私……………大塚 啓子
自己愛の女神、長野良子撮影記……………塚本 鉄三
〔第三グラビヤ〕 (十六頁)
台所のめしうど……………新井マリ子
飼育のヴァリエーション……………新井マリ子
椅子に呻めく……………新井マリ子
長襦袢と腰巻……………遠藤百合子
豊満への擦過……………遠藤百合子
美しき小鳩の緊縛……………長野 良子
ポリウム自慢絵模様……………長野 良子
床柱縛りに耐える表情……………大塚 啓子
煙草一服の鑑賞……………大塚 啓子
組上の鯉と料理の仕方……………五月亜紀子
二ツ折り縛り……………大塚 啓子
鼻料理と鼻掃除……………大塚 啓子
上からと横からと……………梨花悠紀子
〔第一オフセット写真〕 (十六頁)
神さまへの人身御供……………絹川 文代

腕と脚の双曲線……………梨花悠紀子
足首の縄を解く……………大塚 啓子
緊縛女体モザイク模様……………愛川 悦子
光と影の表と裏……………梨花悠紀子
縄に狙われたポーズ……………梨花悠紀子
女相撲「四ツに組む」……………A氏提供
女相撲「吊り合い」……………A氏提供
爪切りと白足袋……………浜 千代子
高手小手腰縄……………梨花悠紀子
底園の塑像……………絹川 文代
〔第四グラビヤ〕 (十六頁)
女奴隷の飼育効果……………新井マリ子
ゴム衣着用中……………梨花悠紀子
バンド着用後手縛り……………東浦ひかる
荒縄さらしと折檻場……………梨花悠紀子
下着の散乱する中にて……………新井マリ子
用意周到なる馴致……………新井マリ子
白刃に狙われた柔肌……………大塚 啓子

浣腸器の恐怖と幻想……………梨花悠紀子
くさり、くさり、くさり……………長野 良子
団子鼻をいためる……………長野 良子
〔第二オフセット写真〕 (十六頁)
美しき乳房……………長野 良子
愛らしき羞らい……………長野 良子
仰角のいたずら……………長野 良子
顛倒した瞬間の表情……………大塚 啓子
森の中のニンフ……………絹川 文代
緊迫の演技(斬られる女)……………愛川 田中
ヘッドロックと首絞め……………春日・愛川
SMの魅力プレイ……………三木・浜本
前手縛りと後手縛り……………梨花悠紀子
黒フンドシと白フンドシ……………大塚 啓子
Mフォト陳列——長靴にもだゆ。鉄鎖と手枷の下で。凌辱される男ドレイ。煙草とローソクで——
愉悦ポーズ二景……………絹川 文代

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙(9×13㎝) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ (愛川)
E 2	仕置を受ける裸身 (大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌 (愛川)
E 4	ムチに耐える美肌 (関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり (愛川)
E 6	捨身の後手観念像 (大塚)
E 7	足から眺めた裸身 (水本)
E 8	全裸エビ責尻強調 (関谷)
E 9	ハリツケられた娘 (大塚)
E 10	強烈後手高手小手 (愛川)
E 11	責め抜かれた疲労 (梨花)
E 12	逆エビにもだえる (大塚)

E 13	拘禁された美囚女 (大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛 (愛川)
E 15	海老責に泣く足首 (大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ (愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘 (大塚)
E 18	美しき全裸股間縛 (大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ (関谷)
E 20	ベッドにもだえる (関谷)
E 21	身体中に強烈な縄 (愛川)
E 22	放置された海老責 (東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる (東浦)
E 24	ローソクで責める (大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ (絹川)
E 26	足指先に漂う媚態 (関谷)
E 27	後手吊り正面裸像 (関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛 (東浦)
E 29	女体の全部を晒す (愛川)
E 30	激しいムチ打の果 (関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ (東浦)
E 32	投げ出した脚線美 (絹川)
E 33	脐中心の腹部緊縛 (梨花)
E 34	セーラー服の哀歓 (梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部 (関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女 (梨花)
E 37	制服の女学生縛り (梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻 (関谷)

E 39	痛打にくねる裸身 (関谷)
E 40	乳房に加える金具 (大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔 (大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む (大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身 (梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶 (大塚)
E 45	敷布の上ののびて (絹川)
E 46	鼻いじめのアップ (梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄 (東浦)
E 48	縄にくびれる裸身 (東浦)
E 49	椅子に晒された女 (大塚)
E 50	脐そうじをされる (大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う (絹川)
E 52	火のついた煙草責 (四方)
E 53	踏みつけられた胸 (梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘 (大塚)
E 55	手足猪吊りの美態 (絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛 (絹川)
E 57	諦めた観念全裸像 (水本)
E 58	縄にもだえぬく姿 (絹川)
E 59	黒髪を吊られた女 (大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ (絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身 (竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す (竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目 (大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会 (絹川)
E 65	野外の後手宙吊り (梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中 (四方)
E 67	室内の後手宙吊り (梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態 (梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ (大塚)

E 70	足の裏ハネ操り責 (梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み (竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責 (梨花)
E 73	梯子責にあう美女 (梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる (梨花)
E 75	娘十六しぼり加減 (花坂)
E 76	踏みにじられた顔 (大塚)
E 77	逆エビニ反る足先 (大塚)
E 78	両手吊りのお仕置 (絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻 (梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像 (大塚)
E 81	食卓上の縛り人形 (大塚)
E 82	むしられる下着 (大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り (梨花)
E 84	寝台上的若妻狂態 (関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り (東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り (東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒 (関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図 (大塚)
E 89	令嬢後手高手小手 (絹川)
E 90	脐部乳房強調緊縛 (東浦)
E 91	責衣にくるまれて (東浦)
E 92	全裸逆エビ責め (水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ (梨花)
E 94	全裸後手縛り晒 (関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ (関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ (東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り (梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡 (関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡 (絹川)
E 100	強烈縛り脐いじめ (東浦)

女体切腹資料 分譲品

血紅使用、腸露出

女体切腹シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

大塚 啓子 略号(せい12)

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 四〇〇円

梨花悠紀子 略号(せん)

血紅切腹祭壇の女体切腹

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(せぬ)

禪裸女血紅切腹

大写真連続迫力フォト

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(おお)

血紅使用苦悶表情悦楽

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(くえ)

肉体美裸身切腹写真

大手札五枚一組 五〇〇円

長野 良子 略号(なせ)

女体切腹態

大手札二枚一組 三〇〇円

細川アヤ子 略号(ねは)

女体自刃態

大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねに)

血紅使用血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わい)

殿中の自決

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わは)

豊満に挑戦

大手札五枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(えん)

介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円
甘木 春子 略号(あか)

腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やい)

下腹に刺す刃

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やお)

柔肌を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やえ)

浣腸関連フォト

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCの浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

浣腸プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる液

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後排便

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意苦悶像

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

代理部分讓品一覽

○妊婦女体資料の部○

臨月腹ヌード	大手札二枚一組 略号「りく」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りく」	三〇〇円
臨月腹アップ	大手札二枚一組 略号「りと」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りと」	三〇〇円
臨月妊婦の全身	大手札二枚一組 略号「りせ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りせ」	三〇〇円
臨月腹の側面	大手札三枚一組 略号「りそ」	四〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りそ」	四〇〇円
臨月腹の背面	大手札二枚一組 略号「りも」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りも」	三〇〇円
臨月垂れ腹	大手札三枚一組 略号「りみ」	四〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りみ」	四〇〇円
妊婦ヌード	大手札三枚一組 略号「やま」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「やま」	三〇〇円
妊婦しぼり	大手札三枚一組 略号「やむ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「やむ」	三〇〇円
臨月妊婦三態	大手札三枚一組 略号「よむ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「よむ」	三〇〇円
産み月のお腹	大手札三枚一組 略号「よま」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「よま」	三〇〇円
動物的な腹部	大手札三枚一組	三〇〇円

○女体緊縛資料の部○

安原さゆり	略号「よみ」	四〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「には」	四〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「には」	四〇〇円
妊娠八カ月の緊縛	大手札三枚一組 略号「にあ」	四〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にあ」	四〇〇円
妊娠五カ月の緊縛	大手札三枚一組 略号「にこ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にこ」	三〇〇円
妊娠前期縛り	大手札三枚一組 略号「まさ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「まさ」	三〇〇円
妊娠初期の緊縛	大手札三枚一組 略号「ぬろ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「ぬろ」	三〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「にふ」	四〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にふ」	四〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「にと」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にと」	三〇〇円
分娩後縛り	大手札三枚一組 略号「につ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「につ」	三〇〇円
分娩後股間縛り	大手札三枚一組 略号「にて」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にて」	三〇〇円
全裸緊縛姿態	大手札四枚一組 略号「ゆり」	四〇〇円
遠藤百合子	大手札四枚一組 略号「ゆり」	四〇〇円
鼻をいたぶる	大手札三枚一組 略号「ゆは」	三〇〇円
遠藤百合子	大手札三枚一組 略号「ゆは」	三〇〇円

鼻の穴責め	大手札三枚一組 略号「なく」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なく」	三〇〇円
鼻なぶり	大手札三枚一組 略号「ない」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「ない」	三〇〇円
鼻責めの陶醉	大手札三枚一組 略号「なは」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なは」	三〇〇円
苦悶の裸身	大手札四枚一組 略号「くせ」	四〇〇円
関谷富佐子	大手札四枚一組 略号「くせ」	四〇〇円
裸身の晒し	大手札三枚一組 略号「わあ」	三〇〇円
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号「わあ」	三〇〇円
全裸股間縛り	大手札四枚一組 略号「せら」	四〇〇円
関谷富佐子	大手札四枚一組 略号「せら」	四〇〇円
強烈エビ責め	大手札三枚一組 略号「えり」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「えり」	三〇〇円
蒲団に悶ゆ	大手札三枚一組 略号「なき」	三〇〇円
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号「なき」	三〇〇円
悦虐の果て	大手札三枚一組 略号「なみ」	三〇〇円
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号「なみ」	三〇〇円
椅子エビ責め	大手札三枚一組 略号「おき」	三〇〇円
東浦ひかる	大手札三枚一組 略号「おき」	三〇〇円
六尺縛り	大手札三枚一組 略号「ろは」	三〇〇円
東浦ひかる	大手札三枚一組 略号「ろは」	三〇〇円
弓吊り責め	大手札二枚一組 略号「つき」	二五〇円
梨花悠紀子	大手札二枚一組 略号「つき」	二五〇円

手足宙吊り	大手札三枚一組 略号「つた」	三〇〇円
梨花悠紀子	大手札三枚一組 略号「つた」	三〇〇円
オムツの股間縛り	大手札四枚一組 略号「むく」	四〇〇円
東浦ひかる	大手札四枚一組 略号「むく」	四〇〇円
強烈責、被虐の果	大手札五枚一組 略号「りお」	五〇〇円
梨花悠紀子	大手札五枚一組 略号「りお」	五〇〇円
乳房いじめ	大手札二枚一組 略号「とお」	二五〇円
大塚 啓子	大手札二枚一組 略号「とお」	二五〇円
激痛ノ逆エビ責め	大手札四枚一組 略号「きえ」	四〇〇円
大塚 啓子	大手札四枚一組 略号「きえ」	四〇〇円
美貌の裸身に縄目	大手札三枚一組 略号「きん」	三〇〇円
絹川 文代	大手札三枚一組 略号「きん」	三〇〇円
腰元吊り責め	大手札二枚一組 略号「こり」	二五〇円
村井知可子	大手札二枚一組 略号「こり」	二五〇円
腰元間諜の拷問	大手札四枚一組 略号「こく」	四〇〇円
村井知可子	大手札四枚一組 略号「こく」	四〇〇円
強烈エビ縛り	大手札三枚一組 略号「もい」	三〇〇円
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号「もい」	三〇〇円
乳房責の苦悶	大手札二枚一組 略号「もろ」	二〇〇円
関谷富佐子	大手札二枚一組 略号「もろ」	二〇〇円
全裸ムチ打ち	大手札四枚一組 略号「もた」	四〇〇円
関谷富佐子	大手札四枚一組 略号「もた」	四〇〇円
強打に泣く裸身	大手札四枚一組 略号「むち」	四〇〇円
関谷富佐子	大手札四枚一組 略号「むち」	四〇〇円

踊り子緊縛 絹川文代三枚一組 略号「りこ」 三〇〇円	股間縛法悦境 絹川文代三枚一組 略号「ぬこ」 三〇〇円	吊り打ち 大手札三枚一組 略号「やり」 三〇〇円	足挙げ椅子責め 大手札五枚一組 略号「うる」 五〇〇円	二つ折りエビ責め 大手札五枚一組 略号「うら」 五〇〇円	後手吊り足挙縛り 大手札五枚一組 略号「せや」 三〇〇円	夫人の表情 関谷富佐子三枚一組 略号「はん」 五〇〇円	バンド責め 東浦ひかる三枚一組 略号「はこ」 三〇〇円	バンド開股 大手札三枚一組 略号「みす」 三〇〇円	ゴム衣緊縛 水本茂美三枚一組 略号「えひ」 三〇〇円	強烈エビ責め 大手札三枚一組 略号「いの」 三〇〇円	猪 大手札三枚一組 略号「せめ」 三〇〇円	責め衣 大手札三枚一組 略号「はら」 四〇〇円	六尺フンドシ 大手札五枚一組 略号「ろい」 四〇〇円	白フンドシ 大手札四枚一組 略号「ふん」 四〇〇円	黒フンドシ 大手札四枚一組 略号「くふ」 四〇〇円	ゴムぐるみ人形 大手札四枚一組 略号「こみ」 四〇〇円	ゴム包みの束縛 東浦ひかる三枚一組 略号「こは」 四〇〇円	ゴムと女体アップ 大手札四枚一組 略号「こあ」 四〇〇円	パリスバンド前開き 大手札三枚一組 略号「おい」 三〇〇円	パリスバンド縛り 東浦ひかる三枚一組 略号「おは」 三〇〇円	携帯用白バンド 大手札三枚一組 略号「おか」 三〇〇円	サカエ軽便型バンド 大手札三枚一組 略号「おた」 三〇〇円	パリスSSバンド 東浦ひかる三枚一組 略号「おこ」 三〇〇円	パピアバンド 大手札三枚一組 略号「おし」 三〇〇円	サカエバンド 東浦ひかる三枚一組 略号「おえ」 三〇〇円	六尺 細川アヤ子三枚一組 略号「ふは」 三〇〇円	変形六尺 細川アヤ子三枚一組 略号「ふい」 三〇〇円	相撲 遠藤百合子三枚一組 略号「くま」 三〇〇円	黒 遠藤百合子三枚一組 略号「しろ」 四〇〇円	白晒六尺 遠藤百合子三枚一組 略号「はら」 四〇〇円	○フエチ資料の部○ 緊縛女体撮影風景 大手札四枚一組 略号「むら」 四〇〇円	足挙開股責 梨花悠紀子三枚一組 略号「あけ」 三〇〇円	猪 梨花悠紀子三枚一組 略号「いの」 三〇〇円	強烈エビ責め 水本茂美三枚一組 略号「えひ」 三〇〇円	ゴム衣緊縛 水本茂美三枚一組 略号「みす」 三〇〇円	バンド開股 大手札三枚一組 略号「はこ」 三〇〇円	バンド責め 東浦ひかる三枚一組 略号「はこ」 三〇〇円	夫人の表情 関谷富佐子三枚一組 略号「はん」 五〇〇円	後手吊り足挙縛り 大手札五枚一組 略号「せや」 三〇〇円	二つ折りエビ責め 大手札五枚一組 略号「うら」 五〇〇円	足挙げ椅子責め 大手札五枚一組 略号「うる」 五〇〇円	吊り打ち 大手札三枚一組 略号「やり」 三〇〇円	股間縛法悦境 絹川文代三枚一組 略号「ぬこ」 三〇〇円	踊り子緊縛 絹川文代三枚一組 略号「りこ」 三〇〇円	狙われた和装の娘 大手札十二枚一組 略号「ねい」 一〇〇〇円
-------------------------------------	--------------------------------------	-----------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	------------------------------------	-------------------------------------	-------------------------------------	--------------------------------	----------------------------------	-------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------	--------------------------------------	--	---------------------------------------	--	---	--------------------------------------	--	---	-------------------------------------	---------------------------------------	-----------------------------------	-------------------------------------	-----------------------------------	----------------------------------	-------------------------------------	--	--------------------------------------	----------------------------------	--------------------------------------	-------------------------------------	------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------------	-----------------------------------	--------------------------------------	-------------------------------------	---



読者の皆様、今日は。私も皆様のお仲間入りをさせて下さい。お願いいたします。いつもこの通信欄を拝見していて、自由にのびのびと語りあっておられる皆様を見て、うらやましく思っていました。徒らに自分は孤独だ孤独だと思っていずに、勇気を出して、楽しい通信欄のグループのお仲間入りをさせていただくのが、第一だと思っ
て、はじめてお便りを書かせていただきました。私はS絵画、S写真のマニアです。しかし、教師という職業柄、余り派手なことも出

来ず、内攻しておりましたが、三年程前から親しい同好の女性も出来、S写真なんかも、時折撮ってまいりました。麻雀、魚釣り、ゴルフなんかの趣味のつもりで、好き道の道楽といった軽い気持ちでエンジンジョイして撮りためたフォトも相当枚数になりました。絵の方は友人に達者なのが出て、書いてもなかったことありますが、この方は、その友人にS趣味が皆無のため氣にいったものは、出来ませんでした。写真の方は、全く自分の趣味からでたものです故ライカ判の密着焼付で、アルバムに貼って鑑賞していますが、中々楽しみで
す。分譲品のフォトを集めたアルバムと共に私の貴重なコレクションとなつていきます。最近読者の方々の写真が誌上に時々載っていますが、やはり私と同じような方々もたくさんおられるのだなあと嬉しく思いました。それに、読者の作成された写真だという親近感、その写真の巧拙に拘らず、私達の胸をうつものがあります。新宮明夫氏や水野弘氏の勇氣に敬意を表すると共に、限られた人生をこういう態度で生きられるという点に私は一つの教訓を得たつもりです。両氏の御趣味は必らずしも

私とも一致しておりませんが、何にか親しいものを覚えしました。直接お目にかかったり文通したりしなくても、温かい心が通っているという気持ちです。どうか、これからも傑作をお寄せになることを一読者一ファンとしてお願いいたします。特に五月号でかの新宮明夫氏が書かれていた「夫婦のSMプレイ雑感」には、共鳴するところと敬意を表するところが大いにあるました。いずれ、私の拙い作品も発表させていただける日があると思います。(大阪市八目黒隆)

初めてお便りします。「奇ク」はまだ二冊しか読んでおりませんが、大変おもしろいと思っております。私は現在メンスバンドを愛好しております。持っているのは黒メリヤス製(コルセット型)とピンクのナイロン製(パンティ型)の二着です。あと前開き型のものやソフト・ネット製・手製のものなどほしいのですが、どなたか安く譲っていただけないでしょうか。多少古くとも結構ですので、よろしく願います。それから神奈川県湘南地区で浣腸・オシメ・メンスバンドその他でプレイをしたい方、お相手をさせていた

だきますので御連絡下さい。毎週日曜日は一日中、その他は夜七時以降ならいつでもかまいません。私は二十三才の男性で身長一七〇糎体重六〇糎です。特に女性の方を希望します。住所は編集部の方に連絡して有りますのでよろしくお願います。(神奈川県A・B・マニア)

私はこの本を読みましてから、色々現在の自分を考えさせられました。貴書こそ、まじめな私共の教書であり、人に云うにいいない悩みを持った者への一つの指導書となつていきます。多年妻も病弱の為それらしい夫婦のいとなみもなしえず。悶々としたし、さりとて、他に女をつくることは、それじたいすでに重い心の負担となり、そうこうするうち、私の心は、いつしか女性に対する、加虐の心で一杯となりました。女が憎く、うらやましく、そうこうする間にも、更らに近頃は、女を、いたぶり恥かしめ、屈辱の限りをつくしてみたいと云うまことに恥かしい衝動に変わってきました。そして今では、その衝動をなかなか押えることが出来ず、ひとり孤独な毎日を送っています。幸い古本

屋でもとめた「奇ク」を読み、あ世の中には、私の様な人もいるのだと、一面罪悪感からも救われたただただ誌面の絹川様や大塚様の写真にいろいろ様にして目をとめています。人を傷つけず、自分も傷つかず、一人気持の安らぎを得るには、もっとも、得難い本として、私は「奇ク」を毎月注文しようと思いましたが。勿論同好の女性との文通もしたくも思っています。が、はたして、私共にそんな女性が出来ますかどうか。病弱とは云え妻もいる私の家庭、そんな家庭を壊さず、なんとか他の女性と交際しプレイすることは、プレイそのもののみでも罪悪なものでしょうか。とはいえず、せっかく得た貴書、私はこの中に、自分の心の傷を癒して、毎月号を楽しみに待ちたいと思います。その内私の告白記、手記、日記、体験記等をお送りしましょう。(神奈川県川崎市 八喜多弘)

「奇ク」拝見しました。こういった類の雑誌が存在する事は、人間探求の上からいっても、大いに必要なものだと思います。決してアブノーマルな事ではないと小生は信じています。反って健全なも

のにのみ宿る、プレイだと思っています。S・Mは全ての人間に潜在するものであり、その度合は割拠しており、時によって変化するのではないかと思っていますので、小生自身も(S・Mの)いずれであるかと断定は出来かねております。お会い出来れば、いろいろと話しても出来、御要望にも、お応え出来るのではないかと楽しみにしています。但し、こちらの条件として、顔には、絶対傷をつけて、ほしくないという事です。商売上、いろいろと支障を来たしますから。TV関係の仕事ですので、番組にも、よりますが大体時間は、一般の人と違って自由はききますのでいつでも、そちらの御都合で会えると思います故、御返事お待ちしております。(東京都八北畠政三 自由業33才)

五月号の奇クサロンに奴隷募集と題されまして、御発表の津田亜紀子様には御願ひ申し上げます。私は一年程前から女性に週に一乃至二回位奉仕をさせて頂いて居りましたが、最近その女王様が御結婚され外国へ行ってしまわれたのです。私は東京近郊に在住し、小事業を営する三十五才の者です。

御氣に召しますか如何か一度テストして頂けませんでしょうか。何卒亜紀子女王様、日時、場所を御指定下さいませ。御命令次第参ります。(東京都立川市八麻生保二 生)

「奇譚クラブ」五月号奇クサロン四十六頁津田亜紀子さんの「奴隷募集」を読み投書致します。五月号「奇クサロン」の「奴隷募集」拝見しました。仲々ショックなもので驚きました。当方資格があるかどうか判りませんが、「応募」してみます。実は以前からS・M関係の雑誌を時々読んで居りますが全裸の女性を縛って鞭打ち、ける、踏むの責めから遂

生首フォト 分譲

△新宮明夫氏提供△

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円 略号(のく)

本誌口絵グラビアに発表して大好評を博した新宮明夫氏が美しき愛妻をモデルとして撮影された生首フォトの中、氏が生首の乱れ髪を撫でる箇所など、置かんとしていたところなど、分譲品ならではの傑作を特に氏の御好意により生首ファンにこそらんにいれます。

斬首フォト 分譲

△新宮明夫氏提供△

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円 略号(のき)

自晒フンドシ一本の裸身を後手にきびしく縛り上げられた可憐な死刑囚の細首に振り下され目白刃。痛々しき風情の彼女は、今や身首を異にしようとして残酷美のなかに、そこはかとなく漂う哀れさとエロシズム。

には浣腸責め等が大部分で、どうも自分がM的だとは思いますが、どうもピタリと来なかったのです。今迄知らなかったのはウカツでしょうが、初めて「奇ク」を読んだ処、長い間具体的に存在を知らなかったゴムプレイを愛するマニアが多数居られるのを知って全く嬉しくなった次第です。過去二十年以上自分一人の秘密かと思っていた好みを、やはり同じ様にゴムに魅入られた人達に見て今更ながら人間の趣向、感覚の似ているのに感心しました。貴女はゴムに魅了されたのは高校時代の由ですが、私は今考えても不思議な位子供の時からゴムの光沢、感触、臭いに強烈な刺激を感じました。多

分小学生の時です。当時開催された「防空展覧会」と云うので毒ガス用の全身入ゴム製の防護衣を着用のモデルを見てからだと思えます。それ以来他人の影響を全然受けないのに年上の女性にゴムで責められる空想、妄想にふけて来ました。仲々実現する筈はなく、思春期に入ってこれ又自然にゴムプレイと結合して自分で慰めて居たわけです。従ってマゾヒストと云っても全てゴムを仲介にした趣味で、当然女性がゴム製の着衣（合羽ズボン等々）を着たり裸を透明なビニールで覆った姿に強い刺激を受ける方です。ゴムのにおいにも何とも云えぬ陶醉を感じますが最近ではビニール製品の進出で一般の品でゴムのものが少なくなつてつまらないですね。当方男性ですが女性の貴女は全身遙かに強く微妙な感受性をお持ちでしょうが、私にとっては貴女が書かれてある通りの状況なら久しく望んでいたドンピシャリの趣向を備えた女性に思えました。応募の条件と云つてもギヴ・アンド・テイクです。から特別にありませんが二三記して見ましょう。①貴女が要求される奉仕は文面にあるを含めて百パーセントして差し上げる積り

ですが、先にも書きました通り程度を越えた肉体的苦痛や乱暴な事はやりたくありませんし御断りします。（人間トイレを御希望ですがこれは一寸どうも……）②今の処こちらの事情で貴女の希望する週二回は無理で一月一〜二回位なら可能でしょう。③ゴムプレイの楽しみを追求する以外はお互にプレイバシーを侵さぬ事。④こちらの命令かゴムプレイを手段として終極目標はいわゆる「御水取り」と云うことになります。苦痛はいやと云つても自転車チューブで縛ったりゴムぐつ等は結構。⑤契約成立の後、プレイに必要な品物を購入する際は費用は折半で結構です。又貴女が本場に大田区雪ヶ谷に御住いなら少し遠いかとも思います。⑥当方は（貴女の希望とは少し違いますが）33才独身で現在親と同居。身長百六十八糎六十一キロ位、男前はあまり期待されぬ方がよいといえは正直なところ。事情で夜以外は割合自由な時間を持っています。泊りは一寸困難。以上です。貴女の相手は多数応募されるでしょうから、あまり「当選」の期待はしていませんが、もし小生に興味があれば更には詳

細、連絡方法を編集部経由でお願いいたします。よろしく。（東京都新宿区八幡護生）

私は今年の一月二十歳になった。浣腸に興味を持っていて男性です。私が奇ク存在を初めて知ったのは、老人が開いている、三、四坪そこそこの小さな古本屋ででした。その中、たぶん東京の人だつたと思いますが読者通信欄の中で私は外国のある女優に似ている。私はかつて男性にドレスを作つてその人に着せたりした事があったが、楽しかった。もう一度だれかに着せてあげたい。又私は浣腸に興味を持っています。私の室は洋式で鍵がかかるので浣腸器をそばに置いて、私が眠っている間、だれかが私に浣腸をする等と空想しながらわざと破れたズロースをはいて寝る事がある。又浣腸と言う事が世間一般常識的な事になり、あらゆる家のお便所がみんなガラスばりになったら、どんなに素晴らしいだろうと書いてありました。私はそれを読んである事に非常な関心と興味を持っています。は、私ばかりではないと、胸のときめく様な感じを受けました。私はその時、出来たら、今すぐにで

も、その人の所へ飛んで行きたいと思ひました。その人と二人で浣腸プレイをする事が出来たら、どんなに素晴らしいだろうと、思ひ続けました。又私はそのころまだ、今程顔に男性的特長が表われていませんでした。でそのころよく私は鏡の前で、頭にネッカチーフをかぶり、鏡の中の自分に微笑みかけたりしたのでした。そしてその様な自分の顔を美しいと思つた事もありました。私はもし女性に生まれていたら人から美しいと言われる様になつていただろう等と思つてみた時もあった程でした。今はもう顔つきも変わつてしまひ、そんな事は考えようにも考えられません。が、そのころ、私は女装にかすかなあこがれを持っています。た。ですから、私はその女性に会い、ドレス等を着せてもらつたと言ふ事にも甘いあこがれを持っています。たのでした。その時から又、私はガラス製浣腸器、およびグリセリンを手に入れたと思つてゐるのです。が恥かしくてどうしても買ひに行く事が出来ません。この間も私はイチジク浣腸を買おうと思つて家を出たのですけれども、薬屋の前まで来てもどうしても中へ入る事が出来ません、しかたなく、

あっちこっちと色々な薬屋を捜して歩いたのですが、中をのぞくといつも客が居たり、売り子が女の人だったりして中へ入る勇気が出ません。ぶらぶら歩いていると又もとの薬屋の前へ出て来てしまいました、中をちらりと見ると、中に女のお客さんが一人おりましたし、店員も女の人だったのですが、その間、四十分近くさんざん歩いた後だったし、ええい、ここで買わなければもう買う所は無い

と、そこで買う腹を決めました。がやはり店に居る女性の客がどうもいやだったので、斜め向いに有った本屋へ入って買う気もない本を手にとってばらばらと頁をめくったりしてしばらく時間をつぶし、もう帰っただろうと思つた頃、本屋を出て、薬屋へ飛び込みました。さいわい客の方は帰っていません。入る前に、買う品物の名前を言う時、氣遅れした様な態度を見せてはいけけない、何気ない様子

で言う事だと思つていたのですが、声が小さかったのか聞き返されもう一度言わなければならぬ羽目と落ち入ってしまった。その時、私の言う言葉を聞いて、その店員の顔に妙な笑いが浮んだのを見て、私の神経はすっかり調子が狂ってしまった、店員が品物を出しながら、この中にはイチジク浣腸が二つ入っていると説明しているのを上の空で、包まれた物を受け取るとお金をわたして、その

店を飛び出してしまいました。私はいくらくり返してもこの恥かしさが取れずこまっています。この様な場合、特に女性はこの様にして購入しているのか、又恥かしくは無いのか不思議に思っています。そんなですからガラス製の浣腸器等はなおさらの事私は恥かしくてどうしても買いに行く事が出来ません。どなたかお持ちの方がございましたら、値段をお知らせの上お譲り願えないでしょうか、お

「最新版」女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

A 1	フミツケ汚辱縛り (新井)	一組一枚	一五〇円
A 2	手吊り乳房責め (五月)	五組五枚	五〇〇円
A 3	ハリツケ猿ぐつわ (新井)	十組十枚	九〇〇円
A 4	全裸正面柱しばり (遠藤)	二十組二十枚	七〇〇円
		三十組三十枚	五〇〇円
		四十組四十枚	三〇〇円
		五十組五十枚	四〇〇円

A 5	亀甲強烈乳房縛り (遠藤)	全裸手吊りムチ打	(遠藤)
A 6	豊満乳房いじめ (遠藤)	乳房責め股間縛り	(遠藤)
A 7	鼻責鼻梁いたぶり (遠藤)	全裸後手高手小手	(遠藤)
A 8	膨隆臀部さらし (長野)	全裸正面強烈縛り	(長野)
A 9	うねる緊縛裸身 (長野)	色禪の開股しばり	(長野)
A 10	正面縛蛙股ひらき (長野)	裸自慢縛りヌード	(長野)
A 11	裸自慢縛りヌード (長野)		
A 12			
A 13			
A 14			
A 15			
A 16			

A 17	正面アグラしばり (長野)	正面大の字開股縛	(長野)
A 18	遅まじき裸しばり (長野)	荒縄縛豆絞り猿轡	(大塚)
A 19	両手前縛り髪首絞 (大塚)	両手吊り股間吊り	(桜井)
A 20	両手膝下しばり (関谷)	疼れんする裸身像	(関谷)
A 21	両股縄掛け開股縛 (大塚)	正面裸身強烈本縄	(梨花)
A 22	乳房晒し肉体自慢 (長野)	責衣にはみ出る肌	(東浦)
A 23	投げ出した全裸縛 (長野)	捕われの全裸緊縛	(梨花)
A 24	羞らいの両股縛り (大塚)	猿轡乳房いたぶり	(遠藤)
A 25	荒縄全身縛り豆絞 (大塚)		
A 26			
A 27			
A 28			
A 29			
A 30			
A 31			
A 32			
A 33			

A 34	盛り上る乳房縄目 (長野)	亀甲本縄鼻いじめ	(大塚)
A 35	ムチ打悶えポーズ (関谷)	椅子またぎ汚辱責	(東浦)
A 36	縦縄股間縛り正面 (関谷)	ゴム猿ぐつわ全身	(大塚)
A 37	くさり乳房責め (長野)	強制片足挙げ責め	(大塚)
A 38	正面乳房くびり縛 (関谷)	鴨居正面ハリツケ	(梨花)
A 39	手吊りパンティ落 (絹川)	白バンド後手吊り	(東浦)
A 40	豆絞り高手小手呻 (絹川)	裸縛り鼻いじめ	(梨花)
A 41	ガンジガラメ立縛 (愛川)	亀甲本縄股間縛り	(絹川)
A 42	立木縛竹棒責め (桜井)		
A 43			
A 44			
A 45			
A 46			
A 47			
A 48			
A 49			
A 50			

願います。(大阪府吹田市八今村正雄▽)

日毎に暖かくなってまいりました。私は甲府——東京間の定期便の自動車運転手ですが毎月の二十五日が待ち遠しく思う程のKK誌の愛読者です。先日五月号を入手して一日で読んでしまい、それから又繰り返し読んでおります。中でも「花と蛇」は自分が川田になった様な気持ちで胸をわくわくさせて読んでおります。六月号では静子や京子がどのように苦しめられるか、今から楽しみます。尚、単行本になるそうですが本当に嬉しいですね。KK誌のおかげで自分の仕事にもはりが出来、生活にもうるおいが出来て有難いと思っております。又注文した分譲写真が早く手に入り、他の人が見ても一寸解らないような完全包装なので安心して注文出来ます。今後共私達熱烈的なファンのために団先生の傑作と、分譲品の傑作を発表されることをお願いいたします。(山梨県甲西町八下草三郎▽)

初めておたよりする者でございます。私はクスグリ責に非常な興味

味を持っています。ここであらためて、サド女性、マゾ女性、サドマゾ両方の女性にお呼びかけ致します。小生は、サドとマゾの両方の性格らしいのです。どうか私とプレーをしたり、クスグリ責について話し合いませんか。私がマゾ側になった時のプレーのユメをここで話しましょう。まず女王様に私は、パンツ一枚にされて、大の字にしばらく置きます。そして、私の口に、女王様のお使い古しになってメンス・バンドでサルグツワをされます。そして、まず足の裏からです。私は足を伸ばしたり縮めたり。しかしそんなことにおかまいなく手はだんだんにいき、太腿の内側をクスグリます。私は、あまりのクスグッタさに、体を動かしますが、そのはんいは知れたもの。さらに手は、横腹をなで腋の下へといきます。私の場合、腋の下が一番グスグタイのです。しかし女王様はそこをちゃんとこころえており、わざと長くゆっくり時間をかけてクスグルのです。やっとのこと5分の休みが与えられました。しかし5分たつと、こんどは羽毛で今と同じようにクスグラレルのです。私は一生懸命手足を伸ばしがんばります。女

王様の気がすまれるとこんどは、女王様がおフロに、はいるので、お体のすみからすみまでお流します。これがぼくのユメのプレーです。もちろんぼくがサド側にまわってもかまいません。この他、クスグリ責に関し興味をお持ちの三十才までの女性の方、私は毎週日曜、二時に信濃町駅を出たところの切符自動販売機の前にいます。サド女性の方は右手に、マゾ女性の方は、左手にそれぞれ白いハンカチをまいて立っていて下さい。サド、マゾ両方の方は週刊誌を左腋の下に、はさんで立って下さい。下さい。どなたかいらっしゃることを希望します。小生は二十才。(東京八丁男▽)

編集部の皆様、初めて投書致します。私は二十二才のマゾの男子です。特に東京都内か都下に住んでいられるサド女性の方へ。私のあこがれるサド女性はプレイの時は常に積極的に相手に働きかけてあらゆる機会に指導権をとり、その精神も肉体も完全に支配した上、如何に些細なことでも自分の意にそぐわない相手の言動を丹念に探し出して、処罰の口実にして責の悦楽を享受するサド女性の方

です。読者の女性の中で私とプレイをして見たい方いませんか。私は犬馬同様や奴隷として細引で身体を緊縛されてみたいと思っております。もしよかったら御便り下さい。(調布市八竹内計雄▽)

貴誌六月号拝見いたしました。最近の表紙は四馬孝氏のユニークなカット入りで、先ず表紙から楽しませてくれます。他に類例のないグラビヤ、フォトの華麗さ。中でも「奇クサロン」の豊富な話題には、私達マニヤの胸の中にさざ波に似たような思いをかき立ててくれます。いつも次号こそは、次号こそは、もっと、という期待が連載小説以上に私達に期待を持たせてくれます。六月号では近藤一氏の「悦虐フォトの回顧」が楽しみでした。よくもまあ、これだけ丹念に見られたものだ、流石のファンを自認する私でさえ感心しました。こういう批評をしながら見てゆくと本当に興味深いだろうと思えます。近藤一氏はきっと学者肌の真面目な人だろうと想像されます。次に六月号では、新連載の「心傷たむ遍歴」に心を奪われました。嘗ての、吾妻新氏の力作「被虐の家」や「感情教育」「人

生学校」のような私達の記憶にいついまでも残る作品になりますよう祈ります。(大阪市八村上生)

○ 今月号の悦唐絵灯籠、万田不仁氏の作品、「浅き夢見し」もよかった。例によって文章もうまいし時代がかったペーソスを巧みに、にじませている点、この人は年輩の方で、なかなかの腕達者の人。いつもこの筆力にはうらやましく思っている。私はこのほのぼのとしたマゾ感が好きだ。縛られる

ことや、痛いことをされるなど、私にとっては逆効果。この創作では章作と鈴子のやりとりや心の動きが、短い文章ながら、手にとるように感じられる。「流腸の部屋」は好みではなく、それより芳野眉美氏の作品では「濡れにぞ濡れし」がよかった。読者通信によるファンタジーその後の中で、佐山さんの方が貴族趣味だと思うんです。には、私も芳野氏に大賛成。佐渡耕作氏の通信で佐川奈津子さんを奇クを楽しむ貴族趣味をお持ちでないといったのは、どち

らから考えても間違いのようです。佐川さんのような考え方こそほんとうの貴族趣味というのでしよう。佐野光子さんや、佐渡耕作氏は考え違いをしておられるか、或は、本当の意味でのサジスチン(M男性が崇め憧れるという意味から)を理解していないと思える。こんな簡単なことが、六月号で芳野眉美氏が指摘されるまで、当時誰も言及されなかったことに私は不思議に思っていたし、又、今ここで芳野氏がはっきり指摘されたことに深く敬意を払います。

○ 宇野淑子様。貴女のお便りを読んで僕はびっくりしました。僕も大和川の事件を興味をもって読み、貴女と反対に犯人の方をうらやましく思ったりしたものです。しかも、僕は太和川のすぐ近くに住んでいるのです。僕は二十二才の男性で、Sをもてあましています者です。貴女と会えれば、貴女の

尚、内容に関係のないことですが六月号の目次の頁が狂っていました。今後御注意を——。(東京都△長井生)

本誌既刊号に注文殺到!

売切号続出、在庫僅少、乞至急御申込、

本誌既刊号在庫案内

○ 39年5月号誌上に(39年1月号2月号、3月号、4月号)

○ 在庫品の定価、(送料共)

○ 各月号の総目次は漸次誌上に掲載いたしますが、既掲載の分は左記の通りであります。

12月号	39年4月号	37年1月号	37年2月号	39年3月号	39年5月号	39年6月号	39年7月号	39年8月号	39年9月号	39年10月号	39年11月号	39年12月号
37年1月号	37年2月号	37年3月号	37年4月号	37年5月号	37年6月号	37年7月号	37年8月号	37年9月号	37年10月号	37年11月号	37年12月号	38年1月号
37年1月号	37年2月号	37年3月号	37年4月号	37年5月号	37年6月号	37年7月号	37年8月号	37年9月号	37年10月号	37年11月号	37年12月号	38年1月号

昭和36年6月号	昭和36年5月号	昭和36年4月号	昭和36年3月号	昭和36年2月号	昭和36年1月号	昭和35年12月号	昭和35年11月号	昭和35年10月号	昭和35年9月号	昭和35年8月号	昭和35年7月号	昭和35年6月号
昭和36年6月号	昭和36年5月号	昭和36年4月号	昭和36年3月号	昭和36年2月号	昭和36年1月号	昭和35年12月号	昭和35年11月号	昭和35年10月号	昭和35年9月号	昭和35年8月号	昭和35年7月号	昭和35年6月号
昭和36年6月号	昭和36年5月号	昭和36年4月号	昭和36年3月号	昭和36年2月号	昭和36年1月号	昭和35年12月号	昭和35年11月号	昭和35年10月号	昭和35年9月号	昭和35年8月号	昭和35年7月号	昭和35年6月号

昭和38年3月号	昭和38年2月号	昭和38年12月号	昭和38年11月号	昭和38年10月号	昭和38年9月号	昭和38年8月号	昭和38年7月号	昭和38年6月号	昭和38年5月号	昭和38年4月号	昭和38年3月号	昭和38年2月号	昭和38年1月号	昭和37年12月号	昭和37年11月号	昭和37年10月号	昭和37年9月号	昭和37年8月号	昭和37年7月号	昭和37年6月号	昭和37年5月号	昭和37年4月号	昭和37年3月号	昭和37年2月号	昭和37年1月号	昭和36年12月号	昭和36年11月号	昭和36年10月号	昭和36年9月号	昭和36年8月号	昭和36年7月号	昭和36年6月号	昭和36年5月号	昭和36年4月号	昭和36年3月号	昭和36年2月号	昭和36年1月号	昭和35年12月号	昭和35年11月号	昭和35年10月号	昭和35年9月号	昭和35年8月号	昭和35年7月号	昭和35年6月号	昭和35年5月号	昭和35年4月号	昭和35年3月号	昭和35年2月号	昭和35年1月号	昭和34年12月号	昭和34年11月号	昭和34年10月号	昭和34年9月号	昭和34年8月号	昭和34年7月号	昭和34年6月号	昭和34年5月号	昭和34年4月号	昭和34年3月号	昭和34年2月号	昭和34年1月号	昭和33年12月号	昭和33年11月号	昭和33年10月号	昭和33年9月号	昭和33年8月号	昭和33年7月号	昭和33年6月号	昭和33年5月号	昭和33年4月号	昭和33年3月号	昭和33年2月号	昭和33年1月号	昭和32年12月号	昭和32年11月号	昭和32年10月号	昭和32年9月号	昭和32年8月号	昭和32年7月号	昭和32年6月号	昭和32年5月号	昭和32年4月号	昭和32年3月号	昭和32年2月号	昭和32年1月号	昭和31年12月号	昭和31年11月号	昭和31年10月号	昭和31年9月号	昭和31年8月号	昭和31年7月号	昭和31年6月号	昭和31年5月号	昭和31年4月号	昭和31年3月号	昭和31年2月号	昭和31年1月号	昭和30年12月号	昭和30年11月号	昭和30年10月号	昭和30年9月号	昭和30年8月号	昭和30年7月号	昭和30年6月号	昭和30年5月号	昭和30年4月号	昭和30年3月号	昭和30年2月号	昭和30年1月号	昭和29年12月号	昭和29年11月号	昭和29年10月号	昭和29年9月号	昭和29年8月号	昭和29年7月号	昭和29年6月号	昭和29年5月号	昭和29年4月号	昭和29年3月号	昭和29年2月号	昭和29年1月号	昭和28年12月号	昭和28年11月号	昭和28年10月号	昭和28年9月号	昭和28年8月号	昭和28年7月号	昭和28年6月号	昭和28年5月号	昭和28年4月号	昭和28年3月号	昭和28年2月号	昭和28年1月号	昭和27年12月号	昭和27年11月号	昭和27年10月号	昭和27年9月号	昭和27年8月号	昭和27年7月号	昭和27年6月号	昭和27年5月号	昭和27年4月号	昭和27年3月号	昭和27年2月号	昭和27年1月号	昭和26年12月号	昭和26年11月号	昭和26年10月号	昭和26年9月号	昭和26年8月号	昭和26年7月号	昭和26年6月号	昭和26年5月号	昭和26年4月号	昭和26年3月号	昭和26年2月号	昭和26年1月号	昭和25年12月号	昭和25年11月号	昭和25年10月号	昭和25年9月号	昭和25年8月号	昭和25年7月号	昭和25年6月号	昭和25年5月号	昭和25年4月号	昭和25年3月号	昭和25年2月号	昭和25年1月号	昭和24年12月号	昭和24年11月号	昭和24年10月号	昭和24年9月号	昭和24年8月号	昭和24年7月号	昭和24年6月号	昭和24年5月号	昭和24年4月号	昭和24年3月号	昭和24年2月号	昭和24年1月号	昭和23年12月号	昭和23年11月号	昭和23年10月号	昭和23年9月号	昭和23年8月号	昭和23年7月号	昭和23年6月号	昭和23年5月号	昭和23年4月号	昭和23年3月号	昭和23年2月号	昭和23年1月号	昭和22年12月号	昭和22年11月号	昭和22年10月号	昭和22年9月号	昭和22年8月号	昭和22年7月号	昭和22年6月号	昭和22年5月号	昭和22年4月号	昭和22年3月号	昭和22年2月号	昭和22年1月号	昭和21年12月号	昭和21年11月号	昭和21年10月号	昭和21年9月号	昭和21年8月号	昭和21年7月号	昭和21年6月号	昭和21年5月号	昭和21年4月号	昭和21年3月号	昭和21年2月号	昭和21年1月号	昭和20年12月号	昭和20年11月号	昭和20年10月号	昭和20年9月号	昭和20年8月号	昭和20年7月号	昭和20年6月号	昭和20年5月号	昭和20年4月号	昭和20年3月号	昭和20年2月号	昭和20年1月号	昭和19年12月号	昭和19年11月号	昭和19年10月号	昭和19年9月号	昭和19年8月号	昭和19年7月号	昭和19年6月号	昭和19年5月号	昭和19年4月号	昭和19年3月号	昭和19年2月号	昭和19年1月号	昭和18年12月号	昭和18年11月号	昭和18年10月号	昭和18年9月号	昭和18年8月号	昭和18年7月号	昭和18年6月号	昭和18年5月号	昭和18年4月号	昭和18年3月号	昭和18年2月号	昭和18年1月号	昭和17年12月号	昭和17年11月号	昭和17年10月号	昭和17年9月号	昭和17年8月号	昭和17年7月号	昭和17年6月号	昭和17年5月号	昭和17年4月号	昭和17年3月号	昭和17年2月号	昭和17年1月号	昭和16年12月号	昭和16年11月号	昭和16年10月号	昭和16年9月号	昭和16年8月号	昭和16年7月号	昭和16年6月号	昭和16年5月号	昭和16年4月号	昭和16年3月号	昭和16年2月号	昭和16年1月号	昭和15年12月号	昭和15年11月号	昭和15年10月号	昭和15年9月号	昭和15年8月号	昭和15年7月号	昭和15年6月号	昭和15年5月号	昭和15年4月号	昭和15年3月号	昭和15年2月号	昭和15年1月号	昭和14年12月号	昭和14年11月号	昭和14年10月号	昭和14年9月号	昭和14年8月号	昭和14年7月号	昭和14年6月号	昭和14年5月号	昭和14年4月号	昭和14年3月号	昭和14年2月号	昭和14年1月号	昭和13年12月号	昭和13年11月号	昭和13年10月号	昭和13年9月号	昭和13年8月号	昭和13年7月号	昭和13年6月号	昭和13年5月号	昭和13年4月号	昭和13年3月号	昭和13年2月号	昭和13年1月号	昭和12年12月号	昭和12年11月号	昭和12年10月号	昭和12年9月号	昭和12年8月号	昭和12年7月号	昭和12年6月号	昭和12年5月号	昭和12年4月号	昭和12年3月号	昭和12年2月号	昭和12年1月号	昭和11年12月号	昭和11年11月号	昭和11年10月号	昭和11年9月号	昭和11年8月号	昭和11年7月号	昭和11年6月号	昭和11年5月号	昭和11年4月号	昭和11年3月号	昭和11年2月号	昭和11年1月号	昭和10年12月号	昭和10年11月号	昭和10年10月号	昭和10年9月号	昭和10年8月号	昭和10年7月号	昭和10年6月号	昭和10年5月号	昭和10年4月号	昭和10年3月号	昭和10年2月号	昭和10年1月号	昭和9年12月号	昭和9年11月号	昭和9年10月号	昭和9年9月号	昭和9年8月号	昭和9年7月号	昭和9年6月号	昭和9年5月号	昭和9年4月号	昭和9年3月号	昭和9年2月号	昭和9年1月号	昭和8年12月号	昭和8年11月号	昭和8年10月号	昭和8年9月号	昭和8年8月号	昭和8年7月号	昭和8年6月号	昭和8年5月号	昭和8年4月号	昭和8年3月号	昭和8年2月号	昭和8年1月号	昭和7年12月号	昭和7年11月号	昭和7年10月号	昭和7年9月号	昭和7年8月号	昭和7年7月号	昭和7年6月号	昭和7年5月号	昭和7年4月号	昭和7年3月号	昭和7年2月号	昭和7年1月号	昭和6年12月号	昭和6年11月号	昭和6年10月号	昭和6年9月号	昭和6年8月号	昭和6年7月号	昭和6年6月号	昭和6年5月号	昭和6年4月号	昭和6年3月号	昭和6年2月号	昭和6年1月号	昭和5年12月号	昭和5年11月号	昭和5年10月号	昭和5年9月号	昭和5年8月号	昭和5年7月号	昭和5年6月号	昭和5年5月号	昭和5年4月号	昭和5年3月号	昭和5年2月号	昭和5年1月号	昭和4年12月号	昭和4年11月号	昭和4年10月号	昭和4年9月号	昭和4年8月号	昭和4年7月号	昭和4年6月号	昭和4年5月号	昭和4年4月号	昭和4年3月号	昭和4年2月号	昭和4年1月号	昭和3年12月号	昭和3年11月号	昭和3年10月号	昭和3年9月号	昭和3年8月号	昭和3年7月号	昭和3年6月号	昭和3年5月号	昭和3年4月号	昭和3年3月号	昭和3年2月号	昭和3年1月号	昭和2年12月号	昭和2年11月号	昭和2年10月号	昭和2年9月号	昭和2年8月号	昭和2年7月号	昭和2年6月号	昭和2年5月号	昭和2年4月号	昭和2年3月号	昭和2年2月号	昭和2年1月号	昭和1年12月号	昭和1年11月号	昭和1年10月号	昭和1年9月号	昭和1年8月号	昭和1年7月号	昭和1年6月号	昭和1年5月号	昭和1年4月号	昭和1年3月号	昭和1年2月号	昭和1年1月号	昭和0年12月号	昭和0年11月号	昭和0年10月号	昭和0年9月号	昭和0年8月号	昭和0年7月号	昭和0年6月号	昭和0年5月号	昭和0年4月号	昭和0年3月号	昭和0年2月号	昭和0年1月号
昭和38年3月号	昭和38年2月号	昭和38年12月号	昭和38年11月号	昭和38年10月号	昭和38年9月号	昭和38年8月号	昭和38年7月号	昭和38年6月号	昭和38年5月号	昭和38年4月号	昭和38年3月号	昭和38年2月号	昭和38年1月号	昭和37年12月号	昭和37年11月号	昭和37年10月号	昭和37年9月号	昭和37年8月号	昭和37年7月号	昭和37年6月号	昭和37年5月号	昭和37年4月号	昭和37年3月号	昭和37年2月号	昭和37年1月号	昭和36年12月号	昭和36年11月号	昭和36年10月号	昭和36年9月号	昭和36年8月号	昭和36年7月号	昭和36年6月号	昭和36年5月号	昭和36年4月号	昭和36年3月号	昭和36年2月号	昭和36年1月号	昭和35年12月号	昭和35年11月号	昭和35年10月号	昭和35年9月号	昭和35年8月号	昭和35年7月号	昭和35年6月号	昭和35年5月号	昭和35年4月号	昭和35年3月号	昭和35年2月号	昭和35年1月号	昭和34年12月号	昭和34年11月号	昭和34年10月号	昭和34年9月号	昭和34年8月号	昭和34年7月号	昭和34年6月号	昭和34年5月号	昭和34年4月号	昭和34年3月号	昭和34年2月号	昭和34年1月号	昭和33年12月号	昭和33年11月号	昭和33年10月号	昭和33年9月号	昭和33年8月号	昭和33年7月号	昭和33年6月号	昭和33年5月号	昭和33年4月号	昭和33年3月号	昭和33年2月号	昭和33年1月号	昭和32年12月号	昭和32年11月号	昭和32年10月号	昭和32年9月号	昭和32年8月号	昭和32年7月号	昭和32年6月号	昭和32年5月号	昭和32年4月号	昭和32年3月号	昭和32年2月号	昭和32年1月号	昭和31年12月号	昭和31年11月号	昭和31年10月号	昭和31年9月号	昭和31年8月号	昭和31年7月号	昭和31年6月号	昭和31年5月号	昭和31年4月号	昭和31年3月号	昭和31年2月号	昭和31年1月号	昭和30年12月号	昭和30年11月号	昭和30年10月号	昭和30年9月号	昭和30年8月号	昭和30年7月号	昭和30年6月号	昭和30年5月号	昭和30年4月号	昭和30年3月号	昭和30年2月号	昭和30年1月号	昭和29年12月号	昭和29年11月号	昭和29年10月号	昭和29年9月号	昭和29年8月号	昭和29年7月号	昭和29年6月号	昭和29年5月号	昭和29年4月号	昭和29年3月号	昭和29年2月号	昭和29年1月号	昭和28年12月号	昭和28年11月号	昭和28年10月号	昭和28年9月号	昭和28年8月号	昭和28年7月号	昭和28年6月号	昭和28年5月号	昭和28年4月号	昭和28年3月号	昭和28年2月号	昭和28年1月号	昭和27年12月号	昭和27年11月号	昭和27年10月号	昭和27年9月号	昭和27年8月号	昭和27年7月号	昭和27年6月号	昭和27年5月号	昭和27年4月号	昭和27年3月号	昭和27年2月号	昭和27年1月号	昭和26年12月号	昭和26年11月号	昭和26年10月号	昭和26年9月号	昭和26年8月号	昭和26年7月号	昭和26年6月号	昭和26年5月号	昭和26年4月号	昭和26年3月号	昭和26年2月号	昭和26年1月号	昭和25年12月号	昭和25年11月号	昭和25年10月号	昭和25年9月号	昭和25年8月号	昭和25年7月号	昭和25年6月号	昭和25年5月号	昭和25年4月号	昭和25年3月号	昭和25年2月号	昭和25年1月号	昭和24年12月号	昭和24年11月号	昭和24年10月号	昭和24年9月号	昭和24年8月号	昭和24年7月号	昭和24年6月号	昭和24年5月号	昭和24年4月号	昭和24年3月号	昭和24年2月号	昭和24年1月号	昭和23年12月号	昭和23年11月号	昭和23年10月号	昭和23年9月号	昭和23年8月号	昭和23年7月号	昭和23年6月号	昭和23年5月号	昭和23年4月号	昭和23年3月号	昭和23年2月号	昭和23年1月号	昭和22年12月号	昭和22年11月号	昭和22年10月号	昭和22年9月号	昭和22年8月号	昭和22年7月号	昭和22年6月号	昭和22年5月号	昭和22年4月号	昭和22年3月号	昭和22年2月号	昭和22年1月号	昭和21年12月号	昭和21年11月号	昭和21年10月号	昭和21年9月号	昭和21年8月号	昭和21年7月号	昭和21年6月号	昭和21年5月号	昭和21年4月号	昭和21年3月号	昭和21年2月号	昭和21年1月号	昭和20年12月号	昭和20年11月号	昭和20年10月号	昭和20年9月号	昭和20年8月号	昭和20年7月号	昭和20年6月号	昭和20年5月号	昭和20年4月号	昭和20年3月号	昭和20年2月号	昭和20年1月号	昭和19年12月号	昭和19年11月号	昭和19年10月号	昭和19年9月号	昭和19年8月号	昭和19年7月号	昭和19年6月号	昭和19年5月号	昭和19年4月号	昭和19年3月号	昭和19年2月号	昭和19年1月号	昭和18年12月号	昭和18年11月号	昭和18年10月号	昭和18年9月号	昭和18年8月号	昭和18年7月号	昭和18年6月号	昭和18年5月号	昭和18年4月号	昭和18年3月号	昭和18年2月号	昭和18年1月号	昭和17年12月号	昭和17年11月号	昭和17年10月号	昭和17年9月号	昭和17年8月号	昭和17年7月号	昭和17年6月号	昭和17年5月号	昭和17年4月号	昭和17年3月号	昭和17年2月号	昭和17年1月号	昭和16年12月号	昭和16年11月号	昭和16年10月号	昭和16年9月号	昭和16年8月号	昭和16年7月号	昭和16年6月号	昭和16年5月号	昭和16年4月号	昭和16年3月号	昭和16年2月号	昭和16年1月号	昭和15年12月号	昭和15年11月号	昭和15年10月号	昭和15年9月号	昭和15年8月号	昭和15年7月号	昭和15年6月号	昭和15年5月号	昭和15年4月号	昭和15年3月号	昭和15年2月号	昭和15年1月号	昭和14年12月号	昭和14年11月号	昭和14年10月号	昭和14年9月号	昭和14年8月号	昭和14年7月号	昭和14年6月号	昭和14年5月号	昭和14年4月号	昭和14年3月号	昭和14年2月号	昭和14年1月号	昭和13年12月号	昭和13年11月号	昭和13年10月号	昭和13年9月号	昭和13年8月号	昭和13年7月号	昭和13年6月号	昭和13年5月号	昭和13年4月号	昭和13年3月号	昭和13年2月号	昭和13年1月号	昭和12年12月号	昭和12年11月号	昭和12年10月号	昭和12年9月号	昭和12年8月号	昭和12年7月号	昭和12年6月号	昭和12年5月号	昭和12年4月号	昭和12年3月号	昭和12年2月号	昭和12年1月号	昭和11年12月号	昭和11年11月号	昭和11年10月号	昭和11年9月号	昭和11年8月号	昭和11年7月号	昭和11年6月号	昭和11年5月号	昭和11年4月号	昭和11年3月号	昭和11年2月号	昭和11年1月号	昭和10年12月号	昭和10年11月号	昭和10年10月号	昭和10年9月号	昭和10年8月号	昭和10年7月号	昭和10年6月号	昭和10年5月号	昭和10年4月号	昭和10年3月号	昭和10年2月号	昭和10年1月号	昭和9年12月号	昭和9年11月号	昭和9年10月号	昭和9年9月号	昭和9年8月号	昭和9年7月号	昭和9年6月号	昭和9年5月号	昭和9年4月号	昭和9年3月号	昭和9年2月号	昭和9年1月号	昭和8年12月号	昭和8年11月号	昭和8年10月号	昭和8年9月号	昭和8年8月号	昭和8年7月号	昭和8年6月号	昭和8年5月号	昭和8年4月号	昭和8年3月号	昭和8年2月号	昭和8年1月号	昭和7年12月号	昭和7年11月号	昭和7年10月号	昭和7年9月号	昭和7年8月号	昭和7年7月号																																																																																										

露出症的願望と僕のS的傾向を満足さす楽しい解剖プレイができるでしょう。僕はそれを思えば貴方の呼びかけは天の配剤とまで思える程です。僕は経験もありませんので、うまくできないかもしれませんが、とにかく一度会って下さい。会って話だけでもして下さい。僕の空想は貴女のお便りを読んでから日に日にたくましくなっています。どうか失望させないで下さい。この便りが掲載されましてから、最初と、その次の日曜日三時に杉本町駅で待っています。改札口で目印にハンカチを右手にまいていて下さい。最後になりましたが、悪条件下での編集部の皆様様の御奮闘を感謝し、団鬼六さんと梨花悠紀子さんの活躍を期待しています。僕も一度、「花と蛇」のような小説を書いてみたいと思っています。乱筆、失礼（大阪人津川生）

代理部分譲写真「すか」「すね」たしかに、いただきました。珍重すべきものと存じます。モデル両女に大へん感謝します。こういうものは、企画があっても、モデルになつてくれる人がいなければ実現しないのですから。なお将

来もいろいろとお作りになつてマニアをよろこばせていただけるようお願いいたします。長い間、いわば常道でないこの方面について関心をつづけていただいている貴誌の努力にあつたためて敬意を表する次第です。又、採光がフラットでなく立体感のあるのもうれいす。（雄松比良彦）

「奇ク」五月号、昨日（四月十一日）入手しました。つい多忙のため、注文が遅れていたのです。兵頭庫一氏の、私に対する御批判がありました。なる程、赤い腰巻は徳川中期から、この間の終戦までの和服女性が、一人残らず締めていたことは常識になつていたのでわざわざそんな恥かしい物を、切腹に際して、露出する必要もなく、慎ましく、隠して死ぬところに、返って色気があるかも知れません。それを証明するのが、同じ五月号に載つた四馬孝氏の絵「若妻の自決」です。裾はおろか、衣紋も乱さず、膝も縛らずに切腹するこの女性は、やはり、気品の中に色気を包み、悲しみをたたえた美しい面差しに、そして、力をこめた全身に、切腹の苦痛と、自虐の嬉悦を漲らせて死を急いでいま

印画紙焼付 梨花悠紀子吊責写真 再分譲

連続吊り責めフォートの決定版、未発表の秘蔵写真

A5判感光紙焼付にて分譲していましたが、未だに御注文や照会が参つておりましたので、ここに再び印画紙焼付として再分譲いたします。（内容は以前分譲のものと同じです）

第一集 逆エビ吊り

第二集 逆胴吊り

大手札印画紙焼付
略号（りつ1）
六枚一組 五〇〇円

大手札印画紙焼付
略号（りつ2）
六枚一組 五〇〇円

す。私も素人が所謂「下手の横好」で描きなぐると異つて、流石は四馬孝氏、美事なものです。恐らく氏の身近かに、こんな上品な婦人が居るのでしょう。ただ想像しただけでは、容易に描けそうもない絵です。私も、今度は、兵頭氏の御意見に従つて、全然裾を乱さない、着物の上から、その下に赤い腰巻を連想させる「切腹」を描いて見ようと思います。若し色気のあるものが出来たら、また投稿させて頂きます。勿論、御採用頂ける程のものが出来るかどうか分りませんが、それから、滝れい子先生の切腹画が、最近、まるで姿を消したのは淋しい限りです。是非描いて頂きたい、あの細かい表現は、先生でなくて出来ません。全国の読者の皆様も、どし

どし切腹画を投稿しようではありませんか。モデルを使った写真より、やはり絵の方が、余程に迫力が強いものです。「下手だから」と思つて遠慮することはありません。私の下手な絵も採用になりました。各種各様の切腹姿で、毎号を飾ろうではありませんか。飯森潔様、切角描いて下さった戦陣の中に割腹する三人の女性も明暗がハッキリせず残念です。印刷する場合は、色彩は出ないので、明暗の点に、特に留意して描いて下さい。そして、これは私の個人の意見ですが、たとえ袴は着用していても、女性の場合、やはり膝前を八文字には開かないものです。民族の如何を問わず、女性の本能は膝を合わせるものです。（森田敬三）

私は某中央官庁に勤務する二十四才のビジネスガールです。子供の時からおてんばで、よく男の子を泣かせた事がありますが、潜在的なサド（この言葉も貴誌で初めて知りました）から現実的なサドになったのは、あるきっかけからでした。先年の8月の末、人より早く出勤しなければならぬ仕事

女性禪マニヤ（愛読者）

禪美フオト 分譲

フンドシ姿の魅力

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号（ふの）

フンドシ姿の差らい

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号（ふへ）

フンドシの前後左右

大手札四枚一組 四〇〇円
栗本 ミチ 略号（ふな）

フンドシの変った姿

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号（ふに）

が出来てしまった私は、いつもより三十分位早く家を出て登庁しました。そして私の椅子の上に私の仕事着用のスカートをひろげて顔をうずめている牛乳配達少年を見てしまったのです。私の近づいたのも知らないで椅子の上に顔をふせているのです。今迄きちんとたたんで机にしまっておいたスカートが、時々くずれていたり、サドルがベトベトにぬれていたり、おかしなことがあったのですが、たいして気にもしておりませんでした。真赤になった少年を詰問しますと、オドオドと彼は自分の性癖を告白しました。——暗い階段のおどり場、足の裏を舐めさせた後、彼の顔の上に足をひろげて立った私も流石に次の動作はためらってしまいました。——それから一週間位後、ふたたび、この様なことをしようとしましたが、人が来てしまい断念してしまいました。私が初めてこの欄に投書したのは、マゾの男の人達に私の体験を話し、もし気に入った人がいたらプレイをしてみたいと思っただけです。私は五尺四寸、十四貫あるのですが、私の希望としては弱々しい小柄な人を相手にしたいのです。大きな人や強そうな人

は矢張りこわい感じがします。
（東京霞ヶ関八横溝とみ子）

私は絹川嬢のファンです。この頃は猿ぐつわばかりかけられて、表情の変化がわからず落胆しています。美しい女性が高手小手に縛られた時の憂い顔や伝法肌の姐御のいたずらっぽい顔など魅力のあるものです。その点絹川文代嬢の縛られポーズは、私にとっては最高です。私は縛られた女性の苦痛やゆがんだ顔や、猿ぐつわをかまされた顔は好みません。三月号は絹川嬢のグラビアが多く楽しかったが、何れも猿ぐつわで顔中隠れていたもので、つまらなかった。猿ぐつわを好まれる人も多いでしょうが、私のような好みのファンもいることをお忘れなく、猿ぐつわなしの憂い顔或はいたずらっぽい顔をさらした緊縛フオトも、どしどし発表下さるようお願いいたします。（東京都八佐藤生）

初めておたよりいたします。二年前のある日、町の本屋さんで貴誌見つけて驚きと喜びの交錯するのを覚えました。お恥しいお話しですが、それ以来貴誌の虜になっ

てしまいました。私は東京の高校を卒業しある服装学院を出て、二年前に今おります会社に入社いたしました。二十二才になりました。わたくしS・M両方の傾向がある様でございます。と言っても本格的にムチで打ったり叩いたりすることは好みません。軽いプレイ、又浣腸責などに少しはあります。貴誌が一步一步発展して行くのは大変うれい事なのですが、本の置き場所に苦労いたします。家族の意にしなければならぬのですから、山辺まゆみさん今日は、あなたの文章を初めて見た時から興味を持って見てまいりましたが、浜田さんとのお約束がはたされず残念でした。しかし気を落さずに、私も一度同性の方とお話だけでもしたく思っておりますが仕事の関係でなかなか自由な時間が出来ません。しかし、山辺まゆみさんと一度プレイをしたくてなりません。同性のプレイですから、心配はないと思いますが、やはり何か不安を感じますわね。もしおよろしければ、KK誌が発売された次の週の日曜日（二十五日が金曜日ですと二十七日が日曜日です）。代々木駅に七時から七時十五分ま

でしょうし、そして処刑場面特集号も……。近藤氏の悦虚フォト回顧は、紹介されたものの半数がすでに売切れ、しかも興味をひくものがあるだけに御自分ひとり楽しんでるのは殺生な。島田さんの「女体解剖」は共感する点があります。もっとも私の場合は殺人としての解剖で目下考案中の作品に入っています。ところで「A収容所の大量虐殺」ですが、実はこの

原作はノート一冊分位あり、殺しの部分だけひきぬいたので、舌足らずもいいところ、どんな殺され方をしたのか、わからぬ美女もかなりありますが、適当に御想像下さい。読者通信を隔から隔まで目を通し「十三人」を喜んでくれる方が、一人でもないかさがすなど、素人のあさましきというより楽しさと云うべきでしょう。
(八佐出須登)

森田峰子様、六月号の読者通信で貴女のお便りを拝見し、いろいろ思い迷った私ですが、遂に勇を鼓してペンを執りました。私は、十年近くKK誌を愛読して来ましたがオールドフアンの人ですが、此の様に、通信欄に投書するのは始めてです。今日迄数多くの方が通信欄で呼びかけられ理解あるパトナを得られたり、又、東浦さ

ん、遠藤さんの様に誌上グラビアで活躍されておられる方々、其の度に、途中迄ペンを走らせ乍ら破いては書き書いて破りとうとう今日迄無為に過して来ました。そして、勇気のない自分の不甲斐なさに人知れずザンキの涙に咽び泣いた事でした。森田様、貴女とのプレイを通じて、未経験の私ですが、お互いに理解を深め「SM」の世界を探究し悦虚美の法悦境を

【代理部新版分譲品一覽】

全裸脚拳姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てい)

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てへ)

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てほ)

六尺禪の変形姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てに)

蹲踞と拍手

大手札二枚一組 二〇〇円
長野 良子 略号(てり)

鬼面と接吻する

大手札二枚一組 二〇〇円
長野 良子 略号(てち)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号(まと)

裸身に羞らう

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号(まつ)

女賊捕縛

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へい)

女賊処刑

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へは)

全裸緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆり)

鼻をいたぶる

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆは)

白晒六尺禪(正面)

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(しは)

白晒六尺禪(背面)

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(しろ)

黒フンドシの女(正面)

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(くま)

黒フンドシの女(背面)

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(くう)

相撲禪を締め込む

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(すい)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

バンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆお)

月経帯のまま縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆす)

初めてお呼び掛けします。平素は極く真面目なサラリーマンですが、生来の性向はどうにもならず毎日むなしい日々を送っておりますが、遂に思い切って投書する次第です。私は貴誌の数年来の読者で読者通信にはかかさず隔々まで目を通して居りますが、全部遠方の方ばかりで山陰の片田舎から

は全く高峯の花でした。どうか此の文が近隣の女性の方の目にとまる事を切に願うものです。私はどちらかと云えばM傾向ですが、女性に対するS的な一面もあり、S・Mいずれの傾向にある女性の方とでもプレイしたく思っておりま
す。たとえどちらが強烈でありましても、お相手が出来ると思いま
す。お互に自分の想像を秘めるこ
となく話し合い、心ゆくまでプレ
イし、責め合い慰め合いたいもの
と思います。私は六尺禪一本で緊
縛、むち打ちエビ責め、吊り責め
を始めどの様な方法でも、お相手
が出来ますが、女性方への希望と
してはブラジャー、パンティーを
始め各種の下着にやはり限りなく
魅力を感じ憧れでもあります。私
は三十四才ですが、年齢は問いま
せんから、どなたか思い切って私
の切ない思いを叶えて下さい。真
面目な交際であれば許されてもよ
いと思いますし、最後の一線と極
秘は絶対に守ります。サラリーマ
ンですから、初回は当市内で平日
の午後五時以降を望みたいのです
が、貴女の御都合のよい日時、会
合のよい日時、会場所を御指定
になり会合の方法、目印等を御書
きの上、社の編集部読者通信係に

鼻責めのアツプ。

鼻責めフアンの大胸をわくわさせ
る啓子鼻料理の写し写真。鼻の
穴が真上を向くほどあおむかせ片
方の穴へ小指を突っ込んで無理矢
理穴を押しひろげたり、コヨリを
鼻の奥深くさし込んで掃除をした
り、果ては二本の棒を穴に突っ込
んで、こじあげるといった若い女
の鼻に対する責めフト。

膨満正面の縛り

大手札三枚組 三〇〇円
長野 良子 略号(へな)

ある定評のある素晴しくポリウムの
 豊かに二つの乳房に掛けられた縄
 臍。正面のくわんだ腹部から長い良子
 の肉体美の緊縛を心ゆくまで眺め
 ることのできるフット。

血紅切腹絶命態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川文代略号(ちの)

フンドシ一本の真白な裸身を荒
むしろの上に横たえて、切腹の屍
をさらす凄惨なポーズ。傍には血
にまみれた脇差が、ころがって
る。脇差による真白い下腹は対す
る腹切りに加えて、切腹のあとの
絶命屍体のポーズを描いた。

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川文代略号(ちた)

色白で伸びやかな肢体の絹川文
代が自らの下腹を小刀によって、
きりきりとかさばいてゆく有様
を血紅を使用して、思いのままの
奔放なポーズによって、美しくも
あえかに表情した切腹姿態

オムツ着用写真

大手札七枚一組 七〇〇円
大塚啓子 略号 (むね)

オムツマニヤの望久しき本格
的なオムツ着用の各種写真です。
この写真には、きつとマニヤの方
なれば随喜の涙を流されること必
至の自信ある作品です。男の手に
よってオムツを当てられ、カバ
をさしてゆく順序が刻明に七枚の
フォトの中に組み入れられており
ます。是非御一見を――

バンド着用開股

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号 (つん)

又々、バンドマニヤの方々に
して贈る魅力あふれるフォト。特
に着用の模様をあからさまに鮮
に見せるために、開股のポーズに
よって替ゴム、当ゴムの部分には
つきり焦点をあてました。

マニヤ全裸緊縛

お手紙下されば回送されますので二重封書にして依頼して下さい。会合の節は縄は持参しますが、貴女も持って来て下さい。その方が楽しみです。お便りを一日千秋の思いで待っております。(島根県益田市八愛読者V)

十年来の妻と離婚し一人娘を取り此の二年半に三度も引越をする大変なマイナスの連続した年月でしたが、最近はいさながら二間続きの家も建られる様になり、一身上家庭的にも安定して来ましたのでしばらくぶりに御便りを申し上げます。其の後貴誌も社会的な諸問題がからみ本当に御苦労様でした。今年も発行を続けて居られるのは一重に編集部御努力による結果であるものとして小生心から敬意を表し、又SM生として心から感謝致しております。もうお忘れになったと思いますが、小生は昭和三十六年十二月頃「美姫城主の最期」と題して口絵を初めて投稿しました所、早速採用下さった上昭和三十七年二月号「奇クサロン」に発表して下さい、其の上編集部のお力にて「沖田寿」という筆名まで御付け下さった名付親の皆様に心から深く感謝致してお

ります。これからは沖田寿として口絵、挿絵、に最善の努力を少しでも早く上手に描ける様になり、又体験告白、創作面でも色々なアイデアが有りますが、現在には思う様に書けませんので、仕上り次第に下手ながら是非投稿させて頂きます。小生の長年の夢で有る妊婦写真入手に重ねてお礼申し上げます。小生は切腹マニヤで有る半面大小腸とか女性だけの下腹部内の胎児を宿す諸臓器には特に深い興味を持って居る内臓マニヤでもあります。今後真実味溢れる切腹画を描く為にも参考資料としては是非解剖写真(出来るだけ女性の)を入手して戴きたいのです。其の訳は解剖による皮肉を切裂いた時の創口の開き方創口から見た内臓の列び具合、又傷口から流れだした腸、たれ下り重り合った腸管の様子其の他諸臓の実物の色とか腸の曲形などを正しく知る事にあるのです。入手方法として考えられる事は、大学の医学部の医学生に写真を取ってもらうとか、又は貴誌の編集部員は大変お忙がしいと思いますが部員の方々に御足労をお願いして解剖実習を見学して写真を取って戴く訳には居かないでしょうか。是非入手して下さいる様

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(いな)
特に彼女の希望によって口絵には掲載しませんでした。分譲フォトとして全裸緊縛ポーズをならにいます。若々しく伸々とした美しい肢体に蛇のようにまといつる美しい新しいモデルのフォト一組をコレクションの一端に。

重ねてお願い致します。私の希望又はアイデアとも考えられますが、SM的な同好の結婚紹介などをして下されば世の中に本当の幸福な人生を得る人が一人でも多くなる事だと思いますが、此の考えはいかがでしょうか。此の度小生が離婚したのも、原因としてSM的な事が理由にもなっているのです。貴誌でも御一考の上お返事を出来ればお願い致します。(千葉県習志野市八沖田寿V)

赤井様おたより拝見しました。ドナンは使用したことがございますが刺戟が強烈すぎて私の場合液だけ出てしまい排便の目的を達することができませんでした。でもいつかあのようにして責められたいと存じます。オシメカバーは表がトリコット、内側はビニール張りの大人用を愛用しております。色は淡いブルー、両脇ボタン止で

斬首処刑場面

大手札二枚一組 三〇〇円
新宮氏提供 略号(くし)
目かくしをされ、全裸の柔肌に厳しく捕縄をかけられた女囚が大刀一閃、むごたらしい斬首されようとする緊迫した場面。

す。オシメはふつうですが肌にふれる方に紙オシメを用いますとお洗濯がずっと楽です。他にチュリ一印産後バンドがあります。これは前開きでふつうの生理バンドよりも、お尻のゴム引の部分が、ずっと広いので簡易カバーとして愛用しております。そのまま排泄するのは無理ですが、少しくらいなら洩らしても大丈夫ですので、ぎりぎりまでがまんして便器をあてたりトイレへ走るのには便利です。日常パンティ代りに着用してゴムの感触を楽しむこともできます。バンドは他にも二種類ほど所持しておりますが、これは純然たる生理用ですので、とりたて、申上げることもございません。赤井様、名古屋市内でグリセリン坐薬を販売している薬局を御存知ないでしょうか、これが入手できますかと変ったプレイができるのですが恥しくてなかなか訊けませんので

(八吉村英子)

咲きはこった花も早や散って葉ざくらの季節となりました。編集員の皆様御清栄の御事、御慶び申し上げます。私は始めてお手紙をお出しする二十八才の独身男性です。貴誌を中学校の時貸し本屋で見つけて以来の大ファンです。しかし今迄独りでいろいろ考える方で実行は余りしておりません。しかしこれからは積極的なファンとして貴誌の発展に努力致したいと考えペンを取った次第です。私は大学を出て、現在公務員(特に税金の方)を職業と致しております。此度六月号を二十五日に買いまして読者の声の欄を読んでおりますと森田峰子さんの事が出ていたのです。誠にあつかましいと思うのですが御紹介願えませんか。どうか。私は職業が責任は十分取らしてもらおう決心です。森田峰子さん、私はいつでも布施を通じて役所に行っております。時間もありません。御交際願えれば、誠に幸せに存じます。住所は編集部に知らせてあります。くれぐれもよろしくお願い申し上げます。(奈良県八池孝)

小山田久美様。六月号の奇クサロンにて貴女の記事嬉しく拝見致しました。私は二十九才のマゾ青年です。貴女様は責苦や拷問を試みて見たいそうですが、私を、女王様たる貴女様の拷問用の奴隷として一生飼育しにして下さい。女王様の御命令には絶対に背いたり致しません。まして反抗など思いもありません。ただ恐れ戦きながら鞭打たれる奴隷としてお仕え致します。女王様のお仕置ならどんなにされても、異存はありません。女王様の拷問が激し過ぎて傷ついたり、不具になっても決して恨んだり致しません。女王様の意のままに食事も与えられず、一晩中逆吊りにされて、息も絶えだえに、ヒイ、ヒイ、悲鳴をあげながら悶え苦しむとうございます。そして、女王様の尊いお体から排泄される、エサだけで飼育していただけなら本当に幸福です。何卒、女王様の特別のお慈悲を持ちまして、徹底的に飼育して戴く機会をお与え下さいますよう伏してお願ひ致します。(大阪八石本生)

東北にもおそまきながら春がやってきました。桃や桜は今が満開です。御社増々御発展の事と

存じ上げます。私は御社が堺市にあった頃からの読者なのですが、今日初めて便を差上げます。地方に住む関係上、全部はそろえられませんが、書店にて見かけしだいに買求めていたものが、本箱二つにいっぱいになりました。最近二十五日以後ですと店頭姿を現わします。古いのを時々取出しておられます。だんだん良くなってくるのには嬉しくなります。たださし絵に好きな絵が少ないのが淋しくかんじられます。正直を申し上げますと、私は御誌にある口絵やグラビア写真の縛り絵が好きなのです。戦前から見つけ次第縛り絵ののっている雑誌を買い求めては切抜いて溜めて居りましたが、今度の戦争で全部焼いてしまいました。(戦後まで東京住いをしておりました)戦後は御誌などで或る程度それが満されまいりました。が、慾望には切りがないもので、公刊誌に発表されたものでは満足出来なくなりました。そこで、私の好むような作品がございましたらば御譲りして下さいるわけにまいます。私は郵便局に勤めている四十七才の男です。現在電

最近撮影 (未発表)

新作Mフオト

一、女の尻の下敷

大手札印画紙焼付二枚一組
略号(まぬ) 五〇〇円

二、女の足に踏まれる

大手札印画紙焼付二枚一組
略号(まあ) 五〇〇円

三、女の股責め

大手札印画紙 二枚一組
略号(ませ) 五〇〇円

四、足舐めの奉仕

大手札印画紙 二枚一組
略号(まし) 五〇〇円

以上のマゾフオトは、いずれも分譲用としてではなく、プレイとして最近撮影したものの中の一です。Mフオト撮影の再開を望まれる方も多いため、一応打診的に分譲品としました。従って以上は全部未発表のものです。

報と速達とを配達して居ります。が、家族は両親と妻、子を含めて八人です。生活は豊であります。が、一カ月二、三千円の小使ならば支出出来ます。私のS歴は相当に古く十才前後から縛り絵に引かれました。当時はこのような絵のある雑誌が少なくて見るきかいも

少なかつたのですが、一度見つけると、その本の名前と月号をおぼえておいて古本を長い間かかって見つけたものです（小使が足りなくて新本が買えないから）。そうしてその絵を切抜いて大切に保ざんして置きました。現在あるのは戦後の物ばかりです（焼いてしまつて）御誌に発表された寒川先生の「甘美なるアリスの降伏」は、私の最も好む作品で、これの連載

されている号は別に宝物のように保ぞんしてあります。おそまきながら御誌と寒川先生に厚く御礼を申し上げます。失礼のところは御許下さるよう重ねて御願ひ申し上げます。（福島県八須賀生）

津田亜紀子さんへ。亜紀子さん、ドレイ第一号として御採用下さい。条件は何もありません、貴女の命令に無条件で応じます。強

いて申し上げればおみやげとして亜紀子さんの使い古したメンスバンド（メンスを充分にすいこんだ線をつけて）とナイロンのパンティが頂ければ幸いです。ゴムのみりよくはつきません。素裸の上に一枚ゴムの合羽を着せられる、この感触はゴムマニアのみの知る喜びです。是非ゴムパンティの制服をはかせて下さい、パンティのゴム紐はなるべく強い方が私には気持がよいのです。人間トイレノ素晴しい、どうぞ遠慮ならずに（プレーに遠慮は禁物です）亜紀子さんの凡ての排泄物を頂きたいと願っております。それにゴム長の足で踏んだり跨ったり或は顔をけとばしたり、口の中におしこんだり、更に、私をうつぶせにしておいて、太ももの間に足先をさし込んでこね上げるプレイ等々。ドレイはヒールうれし泣きしてしまいま

〔新版〕 女体悦虐フォト七十選

Z組七十集 大手札印画紙（9×13種）焼付各組一枚一組（送料共）

一組 一枚	一〇〇〇円
五組 五枚	四〇〇〇円
十組 十枚	七五〇〇円
二十組 二十枚	一四〇〇〇円
三十組 三十枚	二〇〇〇〇円
四十組 四十枚	二五〇〇〇円
五十組 五十枚	三〇〇〇〇円
六十組 六十枚	三五〇〇〇円
七十組 七十枚	四〇〇〇〇円

Z1 ゴムの猿ぐつわ	（梨花）
Z2 囚女第六十三号	（柳）
Z3 猪型手足吊り	（梨花）
Z4 逆エビ強烈縛り	（大塚）
Z5 ローソク責め	（四浦）
Z6 豊臀への珍責め	（絹川）
Z7 淫らな変型縛り	（愛川）
Z8 ザリガニしばり	（梨花）

Z9 引き回しシーン	（東浦）
Z10 全裸後手高小手	（加茂）
Z11 豊満な肌の被虐	（大井）
Z12 黒髪いたぶり	（大塚）
Z13 足吊り媚態責め	（絹川）
Z14 黒縄高小手縛り	（四方）
Z15 強烈荒縄しばり	（梨花）
Z16 肌の喰込む白い縄	（東浦）
Z17 くの字の足指苦悶	（桜井）
Z18 裸身にいどむ縄	（前本）
Z19 無茶な猿ぐつわ	（竹野）
Z20 ハリツケの女体	（梨花）
Z21 おへソなぶり	（大塚）
Z22 逆手足吊り	（竹野）
Z23 美肌のいたぶり	（絹川）
Z24 仰向きの鼻いじめ	（加茂）
Z25 恐怖の表情一瞬間	（若原）
Z26 火箸で責める乳房	（梨花）

Z27 全裸の海老責め	（熱海）
Z28 ベッド上の痴態	（絹川）
Z29 足の裏の櫛り責め	（大塚）
Z30 閨の女体飾り縛り	（竹野）
Z31 首絞め晒しもの	（大塚）
Z32 鼻孔に加虐	（若原）
Z33 悦虐責放心状態	（梨花）
Z34 手枷足ぐさり	（四方）
Z35 寝室でのプレイ	（花本）
Z36 猿ぐつわの妙味	（梨花）
Z37 首縄、柱しばり	（絹川）
Z38 巻煙草責め	（大塚）
Z39 尻立て縛りポーズ	（桜井）
Z40 厳しきエビ責め	（東浦）
Z41 ゴムのカバール縛り	（竹野）
Z42 ワンピースの縛り	（花本）
Z43 荒縄縛り竹棒責め	（梨花）
Z44 尻を突つ立てて	（大塚）
Z45 鏡に映す縛り裸像	（山路）
Z46 苦悶に喘ぐ柔肌	（大塚）
Z47 酔後の淫らしばり	（絹川）
Z48 逆十字エビ縛り	（大塚）

Z49 全裸縛り猿ぐつわ	（東浦）
Z50 欄間に宙吊り	（梨花）
Z51 全裸逆エビ縛り	（絹川）
Z52 荒縄のお仕置室	（梨花）
Z53 庭園の惨酷風景	（館）
Z54 被虐の果て	（大塚）
Z55 痛められた裸身	（大塚）
Z56 鏡の中の全裸像	（愛川）
Z57 セーラー服縛り	（梨花）
Z58 檻の中の緊縛裸身	（愛川）
Z59 全裸の股間縛り	（絹川）
Z60 オムツ逆エビ責め	（田中）
Z61 胴縄に膨らむ腹部	（桜井）
Z62 ゴム人形の女	（竹野）
Z63 荒縄のトゲ責め	（梨花）
Z64 女子大生恥態責め	（田中）
Z65 白肌露出の全裸縛	（絹川）
Z66 強要する開股縛り	（絹川）
Z67 強烈縛り全裸の晒	（愛川）
Z68 亀甲縛り乳房責め	（梨花）
Z69 ベッド上の乳もだえ	（愛川）
Z70 恥しさに耐えて	（館）

す。私はどうしても声が出てしま
うので、困るようでしたらパンテ
イやブラジャーを口中に十二分に
入れ、黒のストッキングで猿轡を
して下さい。反対に声や動作をテ
ープにとって下さってもけっこう
です。以上のことを私は空想で書
いているではありません。はっ
きり申上げて、SMプレーなどは
分別をつけなければ出来ません。
別な表現をすれば、時間をかけて
到達すると云うことです。——プ
レー中には理性はうちけさなけれ
ばなりません。プレー終了と同
時に理性をよび戻し、正常な状態
になるべきは申すまでもありませ
ん、その切替を速かにしない所に
一般社会から迷惑がられたりする
のでしよう。私は42才妻子ある商
店主です。亜紀子さん、突飛な
嚴命の出ることを期待しておりま
す。ビックリしたり、逃出したり
は決して致しません、喜んで応じ
ます。尚婦人科医の使うゴムの指
袋があります、色々に応用出来ま
すので持参致します（東京八森重
治）

四月号に於る森田敬三氏の「切
腹幻想」の一文に双手をあげて同
意します。世界中のどの国の服装

よりも和服のもつお色気は群を抜
いている。緋縮緬の腰巻、真白な
足袋、優雅な振袖、それらのかも
し出す美しさは他の追随を許さな
いのである。和服に切りはなすこ
との出来ない筈の腰巻、白足袋が
奇巧の口絵、グラビヤそして本文
やそのさし絵の中に忘れ去られて
いるのは、いかなるわけか。現代
女性はパンティがあるから腰巻は
いらないのか？しかしパンティを
した上で腰巻もしているのとは違
うだろうか。白足袋も五枚六枚の
コハゼが流行している。七枚コハ
ゼも特別注文で作るそうである。
映画「芸者学校」不倫のつぐな
い等々では、ふんだんに白足袋
が出て来る。衣服はパンティ一つ
なく、白足袋だけのカラー写真が
ある本の中にあつた。白足袋はそ
れだけの色気があるのである。真
紅の腰巻、雪かと思われる真白な
七枚コハゼの白足袋、それだけで
もどの様な色気をもつて来ても負
けぬ程の素晴らしさである。本誌は
此点充分に考えて戴きたいと思
う。素晴しいと云えば切腹がよく
なつた。腹一文字にかき切り腸が
ウネウネと露出し、鮮血が吹き出
し、白衣を染めてゆく。四月号奇
クサロンのさし絵は充分に満足す

「今月の新版分譲品」

オシメ・フオート

・シリーズ

おしめ着用

連続写真

第一集

前開きゴム製力カバー

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円
略号（しま）

第二集

前開き布製防水カバー

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円
略号（しな）

オシメ・マニヤの方々の強い
要望によって、ここに大塚啓子
嬢を煩して、連続写真を新しく
撮影しました。一糸まとわぬ全
裸となった彼女が、自らオシメ
を整え、中腰になつて当てつ
オシメ・カバーをつけてゆく有
様を刻明に捉えました。尚、カ
バーの間からオシメがはみ出
ている状態も、オシメだけ前に当
てた状態も、仰向けになつてオ
シメを当てられてゐる状態も加
えました。マニヤの方々のお申
込みが多いようでしたら、更に
御希望のアイデアによつて、次
々に撮影したいと思ひます。何

卒奮つてお申込み下さい。

乳房しばり

略号

（うは）

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野良子

凄く恰好がよくて大きな乳房
は、彼女の自慢のものである。
只でさえ、むっくりと突き出て
両手でも握みきれないほど立派
な乳房のまわりを、ロープでぎ
ゆうぎゆう力一杯しめつけられ
只さえ大きい乳房が一層強調さ
れて物凄いくらい見事な張りき
りぶりをかせてゐる。同じ責め
るなら、これぐらいの乳房をい
たぶるのが効果的である。

鼻責と緊縛

略号

（うい）

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚啓子

何にもつけていない豊かな胸
に縄が喰ひ込み、後手首は背中
で痺れるように括られてゐるの
で、も早や彼女はどのような鼻
をいたぶられようとも、無抵抗
の状態におかれてゐる。鼻の穴
を上に向けてあお向にころがされ
た上、ドキドキと光る短刀で、
金属棒で足の裏で、グイと鼻の
先をあぐらにされる。無抵抗な
女性の鼻責めに、関心をお持ち
の方のために最近撮影の写真の
中から選びました。

新宮明夫氏提供

「処刑」フォト 分譲

新宮明夫氏から『夫婦のSMプレイ』として提供を受けました。本誌口絵発表が不適当です。分譲品として処刑マニヤの方々にお分けいたします。

一、絞首刑 略号(こけ)

大手札三枚一組 三〇〇円
後手高手小手、胴じばりにされ目かくしをされた麗人が、首に痛ましい吊り縄をかけられて絞首にされる哀れな処刑の姿を、前、後、側面からごらんにいたします。

二、磔 略号(はみ)

大手札三枚一組 三〇〇円
両手を左右いっぱいひろげて側木に厳じつけられた可憐な女囚が、大の字に、或は十の字に将又哀れみを乞う膝立の姿勢でハリツケられる美しい裸身をどうぞ。

三、晒し 略号(さら)

大手札三枚一組 三〇〇円
両手首を揃えて高々と吊り上げられ、或は万才の形に左右にせい一杯ひろげて吊り上げられて、衆人の目の中に、かくすことなき裸身の隅々までを視線になぶられる晒しの処刑ポーズ。

べきものであった。今後この様な切腹絵を多数のせて下さる事を切に希望したい。森田氏の腹を切る女と腰巻中の絵三葉。あなたの描かれたものですね、上手です。小生もよく描きますが、とてもとても足もとにも及びません。腰巻、鮮血、露出した腸。私好みですが、今一つ、白足袋が見えず、今度は白足袋姿のものを願いたいと存じます。分譲品の血紅使不用腸露出の写真がほしくてたまらないが、望むのは和装白足袋姿の切腹場面であり、洋装或いは裸体では森田氏の言葉ではないが情緒がない。(せい12)がその点不明であるので二の足を踏んでいる。何ごとにもムードは重要である。充分此の点奇く編集部にお願いたします。(八浜路貞之助)

編集部の皆様。ファン諸兄姉お元気ですか。ゴムマニヤの一人として仲間に入れて下さい。最近の読者のページ、フェチマニヤとくにオシメカバーについての投稿が割に多いのは、ほんとうにウレシイことです。小生はゴムマニヤで現在メンスバンドを集めています。最近例の前開きのバンドが余り見かけなくなり少しガッカリ

リしています。今使用しているのは、バンロン製品で股下が二重になって、その上に替ゴムのついた水色のとナイロン製のピンク色の二種を交互に履いています。今度アンネクリスタルを買ってみたいと思っています。又最近女性の生理用品の広告が電車の中や新聞紙上一頁一面に堂々と出ているのは、ファンにとってとても楽しいものです。ファンの皆様、現在市販されているバンドで履き心持の良い物があつたら誌上で教え下さい。特に女性の方には必要です。すから、どの様なものが良いか、お分りと思いますので、女性の方の体験をお知らせ下さい。又バンドやルナテックス、アメジストについても御存じの方お教え願います。小生は長年痔を病んでいいますので、肌着が汚れるのを防ぐため痔バンドとメンスバンドを毎日着用しています。バンドは薬局の女主人がじょうだん半分教えくれたので、初めは顔から火が出た程恥しかったが、其の場でも買いもとめ、それから病みつきになり現在肌身離さず使用しています。初のうちは会社や銭湯の脱衣場では気を使いましたが、現在では大勢人がいても誰にも気付かぬ

様に着脱出来ます。最近男性のパンツやブリーフも女性肌着の様な色ものが出廻っているの、バンドも目立たぬ様ですね。百貨店以外で阪神間、殊に尼崎付近で大人用のオシメカバー、誰か売っている所知ってたら、お知らせ下さい。ぜひともほしいのです。では又。(尼崎市八樟田博)

六月号拝見致しました。本信におよせの三原寛、坂井昇、高田、森山、北多摩のNの諸兄方。同じM傾向の一人としてうれしく拝見致しました。我々Mの力はSに対して弱く、誌上にもその反映がみられますが、今後我々は一致して強力にM推進に頑張ろうではありませんか。本信へのS女性の投稿が最近殆んどありませんが、このことも我々としてはまことに残念です。S女性へのよびかけにも力を入れて、その出現を待とうではありませんか。坂井様のMフォト再開に対する御意見全く同感です。偉大なる女王様の力の下に完全屈服されたM男の姿をあらゆる角度から撮ったのを期待します。小生の一番望むものは顔面騎乗のフォトです。これは今まで絵としてはありましたが、実際のフ

オトとしてはなかったようです。誌上公開のグラビアには、どうかと思いますが、分譲用としては、仰向けにねかされたM男の顔の上にブラジャーとパンティだけの女性が無のりにまたがり、その巨大なお尻で男の顔を完全に下敷にしたポーズをいろいろな角度からとったようなのが、もしできたらどんなにすばらしいでしょう。Mにとって顔を女性の巨大なお尻の下にしかれ、その重圧におしつぶされ息の根もとめられんばかりに鼻や口をふさがれること、そしてパンティを通して嗅がされるお尻と股の下の強烈な臭気にむせぶことは最上の光栄であり望みでもあります。最後に編集部の方の御苦心の程を深く感謝し、少しでも私たちの期待をみたして下さるようお願い致します。(京都市八間垣弘)

○ みつみクラブの泉様。六月号の奇クサロンにて、「SM会」のことで大変興味深く拝見致しました。身近な京都の地にこのような会のあることを始めて知り大変心強く思います。小生もM傾向として現在まで長く「奇ク」を愛読し、多くの方々の貴重な体験などを興味

深く拝見してきましたが、実際のプレイは一度もありません、同好の者の集りは以前から望んでいたのですが。これも中々ありませんでした。貴会の場合は規約が大変厳重なようですが、もしできれば、くわしい内容をお知らせ頂けないでしょうか。貴会の御発展を心からお祈り致します(京都H・M生)

○ 奇クの皆様お元気のことと思います。僕は奇クの大ファンです。奇クを知りましてからはじめておたより書きます。僕が奇クを知りましたのは、今年の始めでした。以前からS派の持主で美女貴に大変興味をもっている僕は、小学校五年の頃、ある少女雑誌の連載小説に手足を縛られた女の絵が載っているのを見ました。その時僕は今迄に味わったことのない不思議な気持が、心の中に静かに現われはじめたのです。それからというものの、僕は「縛る」という事に対して異常な興味を持つ様になりました。自分一人で縛り絵を書いたり、色々な本を見たりしました。それから何年かたって大人になった今日。ちょうど正月をすぎた頃、僕はある一軒の本屋さんへ

新作マゾ・フオト

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まの)

背中に馬乗りになった若い女性の甘美な人間馬の調教ぶり

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まわ)

あお向けになった男の口へ差し込まれる足の指と踵。

股責めにあう顔面

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(また)

ふくよかで真白な太股で顔面を挟みつけられるソフト責め。

縛られて翻弄される

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まひ)

後手に縛り上げられた男の縄尻は若い女性の手に握られている。

△新モデルにて

撮影した分譲品▽

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まな)

立った女の足の裏の下には、男の顔が踏みにじられていた。

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まは)

ポリウムのある二本の足が男の顔を挟んで肩車に興ずる女性。

玩具にする縛り人形

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まて)

高手小手に縛られた男を思いのままにいたぶる面白さ。

首を太股に絞めあげる

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まや)

冷ややかに上から見おろされながら太股で首を締められる。

行きました。そして何か自分の気持を満足させてくれる本はないものかと、ずいぶんさがして見ました。その時一冊だけしかなかった「奇ク」をなにげなくとりあげてページをめくってみました。する

とグラビアに自分のもとめていた写真が載っていたのです。その時の感激といったら、口で表現することができません。もちろん、それから奇クの大ファンになったのです。ここで編集部の皆様に、奇

クのグラビアをもっと多くして下さる様にお願ひします。最近、僕は自分の手で女性を縛って見たのです。真白なスリップの上から、又は水着、ブラウスとタイトスカートの上から、女性の胸に縄をかけ両手、足を縛る、なんて考えただけで胸がわくわくしてきます。どなたか女性の方で僕とまじめにプレーをして下さる方おられますでしょうか、社会的秩序をみださず、秘密を守ります。僕は年は二十三才。僕は自分で自動車を持っております。車の中でプレーを楽しみながらドライブしませんか。たとえば東京から鎌倉まで、

で、両手を後手に縛り両足を縛ったまま、なにくわぬ顔をして国道を通りぬけるスリルの楽しさ。僕は、この空想が実現しますことを心から願っております。欲を言うて申し訳ございませんが二十五才位までの女性を、希望しております。どなたか僕とプレーをして下さる方、七月二日、又は三日、又は九日に、有楽町丸ノ内日活の表へ六時半においで下さいませんか。目標としまして、手に「週刊女性」を持ってい下さい。僕は車で参りますので時間はかならず守って下さい。僕の車は六十三年型ブルーバードで色はクリムム色

木馬責三態

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(もく)

椅子責の果

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(いす)

女体切腹「血紅立腹」

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(るな)

双胸の強調縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

略号(そう)

動感エビ縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(とう)

色禪開股縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

略号(いふ)

とうぐいす色のツートーンカラーです。「週刊女性」を手にして日活館前に立っている女性を見つけましたら「キクさんですか」とおたずねします。一緒にS・Mについて話しあいましょう。もし、一人ではいやだと思ふ方は、友人と二人でこられてもかまいません。ぜひお願いします。(東京都八山内順造)

森田峰子さま。いちど会ってくださいませんか。初めは、お会いして、きつき店ででもお話をすることをにしたいわかれたいと思います。あなたは私を信用して、モデルになろうという気持ちになられるようでしたら、ぼくのシネカラ

もっています。ぼくは8ミリカラーで、美しい色彩感のある女性の着衣姿を撮してみたいという願いをいだいている男です。被写体になつてくださるときには適当なお礼はいたします。あなたの体に触れることは決してありません。昭和六年生まれ、未婚、気の弱い人間です。撮影時間の合計はフィルム一本分、つまり五分間ほどですが、全体の所要時間は、三十分はかかります。日よう日の午後が光線の関係上いちばん有がたい。ご都合はいかですか。日時と場所をおしえてください。ヌードや半ヌードは撮りたくないのです。(大阪市上六A TH生)

よいのです。ぼくは旧制商業卒、中小企業の会社の社員です。しかし、あなたへの申し込みの連絡の通信がたくさんきているだろうと思ふと、ぼくも、すこしゆううつになります。また、あなたとぼくのビジネスのあいだへ、だれか、こわい男がわりこんできたりしはしないかと、そのことが心ばいです。誌上でお返事を下さい。ぼくは体の貧弱な、風采の上らない男ですが、紳士であるという誇りを

分譲品「らふ」入手致しました。絹川文代得意のポーズは大きいに良いと思いますが、惜しむらくは顔の表情のみに苦痛が表現され手胸等に斬られた感じの乏しいので、この点が残念でした。それと立位でなかったのと、一方のみの撮影ですのもう一つの感があります。しかし、こういうアイデアの分譲品の増えるのを切に希望しております。最近同好の方が増え、川田氏も便りを寄せられまし

た。小生は他の方々と違い裸姿には全く興味はありません。どう考えても不自然の様に思われます。やはり着衣の方、時代劇調の方が感じが出る様です。綸子の小袖姿の肩先を、衣装もろとも乳の下まで斬られた着物の下にのぞく白い肌吹き出す血潮、断末魔の悲鳴、のけぞり痙攣と悶えて崩れ伏す女、我が血汐の海にひたり落ち入る女、小生はそこに残酷美を感じます。なお東映の近作「大殺陣」シナリオ方では二人女が斬り倒されるので今から楽しみです。同好の方の通信を期待しております。

(八中屋敷真)

○

僕は、何を忘れても「奇ク」だけは忘れた事のない愛読者の一人です。毎月、次号の発売されるのを首を長くして待っています。僕達愛読者も、必ず「奇ク」を守り「奇ク」を愛し、今後の発展を願っていますから、編集部の皆様も頑張ってください。僕は生まれつき強度のマゾ男ですので、もし、強烈なマゾ画、マゾ写真等がありましたらぜひ御紹介下さい。絹川文代さんの様な美人のモデルにして頂けたら嬉んで便器がわりになります。五月号にのっていた津

田亜紀子さんに紹介して頂けませんか。どなたか女性の方で、僕をドレイに使用して下さい様な人がいましたらぜひ紹介して下さい。初めてのお便りで、ぶしつけな失礼な文章をお許し下さい。(東京都八K・F生)

○

五月号では、私の初めて出したお便りを載せて下さいまして有難うございました。いろいろと親しみのある通信を寄せていただき、ほんとうにうれしく思いました。自分ひとりで胸の中におさめていた頃と違って、たくさんのお友達が身近かにいらっしやるという心強さが、急に目の前が明るく開けてきたような気持ちで、毎日のお勤めもたのしく暮しております。六月号では、嶋田雪子さんの解剖マニヤの手記「女体解剖」を、まるで自分のことを書いてあるような親しみて読ませていただきました。私も空想では嶋田さんと同じような解剖についての夢を持っています。それはいつも、自分が解剖されるのを、自分で眺めているという夢なのです。自分が生きながら解剖されると思っただけで、胸がわきたつように興奮します。こんな変わったことを考えているの

は、自分だけかと思っていました。嶋田雪子さんのような同好の方がいられることを心強く思います。嶋田さんのような方と一度お逢いして、ゆっくり話したいと思いますが、内気な私のことですから、若しお逢いしても、きっと何もお話し出来ないだろうと思います。お便りを下さいました皆さまに厚くお礼申し上げて筆をおきます。(大阪市八宇野淑子)

○

「花と蛇」の六月号は感激しました。殊に静子夫人の犠牲的自演も及ばず、場面は一転して美しい姉妹の強制競演とたたみかけるあたり、読者の願望をつかんで、団先生の麗筆に酔うのみです。ただ残念なのは、姉妹が施されている魔の数分間の描写が少いことです。効果的な姿態のまま、えりぬきの係二名宛により、非情な嘴管を受け入れ、思わず連続して声をあげた美女二人が、そのままたっぷりと一滴あまさを送り込まれるまでの、満場かたずをのむ沈黙の場面。続いて当然の結果として展開される最高潮場面。年若い美津子があえなく屈伏したのは致し方ありませんが、京子は自ら哀願するまで便器を当てて貰えません。遂

に京子も耐えきれず妹のあとを追うでしょう。団先生に代ったつもりで、私の夢は限りなく続きます。まず清純な美津子には純白な輝を当て、桂子にはライトブルーと決め、これで四人のユニフォームは出来上ります。翌朝の余興は、四美女(オールスターキャスト)の国電のラッシュ・アワーならぬ時差失禁パレードです。此の場合、促進剤同時服用、各人腰に異様の鈴をつけます。体位はなるべく直立型、ユニフォームも取った方が良いでしょう。そして順位正解者が後始末の榮譽を担います。続いて趣向をかえた浣腸連続競演(静子は三十CC原液二本。桂子は六十CC一本、京子はイリリ大量注入。美津子はいちじく連続三本は如何?)等々、はては、別室にて衆人環視を選ぶか、一対一を選ぶかと、美津子が朱実に因果を含められ遂に自らすすんで、台の上で色々の姿勢を迫られて演ずる注入の数本そして——併し、いずくんぞ知らん、隣室より透視鏡にて一部始終は観察されているのです。アイデアとして、既に浣腸の経験を数多く積んだ静子夫人には、ウィスキーの水わりを何本も注入して、慎み深い羞恥を徐々

に解放してやり、誘導訊問により刹那までの御感想を、すべて口走って頂くのも一興でしょう。次に「美津子を女にする」というおどろしが、最後の武器として、これくらい度々使われていいと思います。が、実際には最後の線はどうにか守らせてやりましょう。楽しい空想の日々を与えて下さった作者並に貴誌に感謝いたします。今後更に団先生の筆による美女羞恥責めの小説を連載して下さいようお願いします。(神奈川県川崎市八)

畑村信一

○
ゴールデンウィーク近く新緑美しい頃となりました。6月号有難うございました。M絵や写真は、このところ甚だ減少しているようですが、Sの方がより男性の自然で変態性が稀薄と見られる社会通念に基づいているものと私は想像しております。それにしてもSの方も公刊の性質上、御苦心の程窺われるレイアウトですネ。まあ私のような者には、あまり太い縄や

殊に荒縄は誠に美観をそこねるように思われます。勿論S派の方々にからすれば嗤うべき説でしょう。今月では「女性切腹の可能性」「忍者TV切腹」が佳いと思いましたが。私はとても理論的にMを分析整理することなど出来る頭ではありませんが、こういうエッセイの殖えることは貴誌の為に良いことと信じます。白い表紙の頃に藤山さんの猛烈な自己礼拝的な筆致を閉口しながら、それでも愛読したものです。何と云ってもSが

主軸の世の大勢で、その嗜好も解りますが、(曾ての如く沼、原、黒田氏などの文献的、哲学的な文章が懐かされます)。次号からは大分賑やかになる模様。より一層愉しき倒錯美の世界を打出して下さいますようお願い致します。(八万田不仁拝)

最新版分譲品

豊満を切り裂く刃

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(ほふ)

鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 三〇〇円
モデル 愛川悦子、田中芳代
略号(らく)

咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 三〇〇円
モデル 愛川悦子、田中芳代
略号(らみ)

血紅使用 斬られる女

大手札七枚一組 七〇〇円
絹川 文代 略号(らふ)

雲斎の相撲フンドシ姿

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ろみ)

凄んだ女賊スタイル

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へに)

バンド、ゴム見せ

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(へみ)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちら)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(たく)

淫らな長髪の乱れ

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(ろも)

ふり乱す長髪のもだえ

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(ろめ)

縄目にもだえる夫人

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(ほく)

髪を引き回される夫人

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(ほむ)

自から施す浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちり)

す。先ず梨花さんの作品は平凡な物ですが彼女の美しさはそれを補って余りあります。「うごめく拘束女体」のような見なれたポーズも彼女が演ずれば手放せない作品になります。素晴らしい姿勢、美しい表情、可愛い乳房、背中の翳り一つまでが魅力的です。他に「あでやかな女囚ムード」が好きです。熱演する大塚さんの作品がグラビヤの半分以上を飾っています。彼女の作品の中では「竹棒の小道具利用」を取ります。苛められる女の感じがよく出ています。もっと枚数を多くし次々と苛められる過程を捉えてはどうでしょう。他に「華々しきいたぶり」が良く「浣腸具のある風景は」マニヤにとって見逃せない作品でしょう。遠藤さんの「豆絞りのアクセント」は可愛さがあります。他のグラビヤも10年前の萩千枝子、伊吹真佐子さんの作品に比し美しくすっきりと10年の進歩の跡が分ります。口絵は10年前の方が伊藤晴雨・滝麗子・杉原虹児・畔亭数久の諸氏に美しい外誌からの転載画で賑っています。特に畔亭氏の「縄について」斬首が素晴らしく、今日氏の作品を「奇クサロン」でしか拝見出来ないのを残念に思

ます。新6月号の四馬孝氏の作品は裏表紙のを取ります。表情が良く特に腕の線が美しいからです。腕が美しいので「女体生体実験」も好きです。これはもっと乳房を締めつけて欲しかった。次回は美しい腕責めの絵をお願いします。記事は旧6月号の方が文献誌にふさわしく思います。吾妻新氏の「海外サディズム雑誌(3)服装の利便(上)」と森本愛造氏訳「残酷なる女性達」を興味深く読みました。他に二俣志津子、古川裕子、飛田良二、松井籟子、沼正三等の諸氏の名が見えます。新6月号の「奇クサロン」の編集子欄が、やっと本来の姿をとり戻しました。やはりこの欄は編集者としての立場から読者に語りかけるものが良いようです。「悦虐フォト回顧」は良い企画でした。出来れば昭和38年迄回顧してほしかった。それとベスト10迄の作品の再録です。「花と蛇」何回読み返しても素晴らしい。単行本を待ちかねています。この号ではもう少し丁寧に書き込んだ方が良いと思われる個所がありました。単行本発行の際もう一度手を入れて頂ければ幸いです。読者通信の飯田氏の「羞恥責の方法」として静子夫人又は美津子にエロ本

を大きな声で朗読」させる案に賛成です。然し伏字本の発行は反対です。本誌全体を通じて挿絵が少し良くなったようです。然し旧6月号の方が全面的に美しい作品が多いようです。「毎月特集号形式にて、グラビヤ写真、オフセット口絵を大幅に増頁、充実した内容にいたします」といううたい文句で7月号より値上げとの事です。素直に賛成出来ません。経営のルーズさを思わせるからです。同じ文句で前に値上げしてから一年も経っていず内容も変わらないどころか質的に低下したぐらいだからです。内容の低下、売行きの不振、値上げ、の悪循環をくり返しているのでしょうか。どこまでもマニヤはついて来るといった特殊誌経営の安易さがあると思います。値上げするなら50円づつでなく一度に二倍三倍にしてはどうでしょう。一般読者は減るでしょうがマニヤとの結び付きは内容の充実によって強まると思います。そこにこそ無理をしない販売方法により内容を制限されないマニヤのための特殊誌の生れる可能性がります。今のままではジリ貧です。

(八佐渡耕作)

全裸の切腹悦楽

モデル 大塚啓子

△第一組▽略号(ひた)

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

△第二組▽略号(ひと)

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

女体切腹プレイの醍醐味は、一糸まとわぬ全裸になって演ずるそれであるという事は、切腹マニヤの若き女性、例えば信太啓子さんの告白をはじめ多くの女性の方々の言によって裏づけられていきます。三宝を前にして、衣服をきちんとして、腹巻に身を固めて切腹プレイに興じていた彼女も、次第に衣服を脱し、それらの散乱した中に、一糸まとわぬ全裸の肉体をさらして、さまざまポーズによって柔肌を白刃によって切りさばいてゆく。

奇クが「悪書」に指定されているときいておどろいた。ミソもクソも一緒とはこのことだ。なるほど世間にはずい分ひどい雑誌もある。刑法第一七五条のわいせつ文書頒布等の罪にさえひっかかるなれば何をしてもよいと考えているとしか思えない煽情挑発雑誌が

本屋のしかも一番人目につき易い表通りに面した店先や新聞雑誌の立売所に堂々と並べられていたのには顔負けだ。これらは当然自粛がでなければ清算規制されても仕方ない。しかし、奇クの場合には違ふ。奇クは人間性の奥深く潜む部分を真面目に追求している文献風俗マニア誌であって、煽情挑発を事としているのでもなければ、大きな広告を出している売らん哉の雑誌でもない。これらのことは、よく奇クを見ればすぐ分ることである。それが分らないで奇クを悪書呼ばわりすることは、つぎのことと少しも変らない。戦前

大きな文化の流れに害がある。「悪書」にしても、美濃部達吉博士の「憲法提要」は悪書であった。末弘厳太郎博士の「法窓雑誌」も悪書に指定された。その他、横田喜三郎、大内兵衛、河合栄治郎、有沢広己、宮沢俊義、森戸辰男……数え上げれば際限がなかった。そもそも、何んの見識をもって「悪書」などと指定できるのであるか。「思想と風俗とは別」というかもしれない。どっこい、思想も風俗も文化も一体にして不可分のものである。それが分らない人は、戦前と同じく自分の掘った穴に落ち込むばかりではない。(牧野正)

読者通信で御好意あふれた批評を頂き感謝しております。奇クの貴重な誌面の一端を勝手な迷文で占領して申し訳なく思っております。迷文の如く、一匹狼よろしくマニヤを楽しんでおりますが、よろしかったら奇ク愛読者の方々からお手紙を頂戴して種々と勉強したいと思っております。殊に東京在住の方々ですとお会いして話も出来るしうれしいのですが、津田

次号(八月号)は六月二十五日発売いたします。

亜紀子様、三原寛様、内田洋一様をはじめ皆様のお手紙をお待ちします。連絡先は友人の住所を借りましたので、封書にてお願い致します。(東京都台東区竜泉寺町百十一番地中村方芳野眉美)

今年の四月は例年に無く暖かった。暖かいというより暑いといった方が当たっているかも知れない。寒暖計が毎日二十四・五度をさしていたのだから、福島県のはぼ中央に位する東北本線磐越東線西線、水郡線等の交通の要でもある郡山という町から知人に聞いたK温泉に行くのにはバスで駅前から五十余分もかかった、宿はたった一軒、男女混浴である。前に一寸した川が流れ、裏山に登れば何も聞こえなくなる様な静けさ。モデルが特に持って行った被縛用とでもいいますか、夏浴衣夏帯等で山道を登って行く事、約三十分。四界は唯々木あるのみ、先ずモデルを持参の真田紐で縛す。彼女はM傾向の強い女性で小生とはこれで十幾回目かの同行である。この所東北地方の寒気のせいで野外でのプレーは仲々出来なかったもので、もっぱら旅館等の一室で声を殺してのプレーで暫く振りの野外プレー

ーに彼女は約束の時から待ち望んでおりました。彼女の夫が交通事故で死亡してから知り合いで、ある酒場勤めをしていたのを、小生が呑みに行き酔ったあまりに、ずらに、その手を取り後手にネジ上げた時、酔っていた彼女が頬を寄せてネエ縛ってと言った事が彼女を知る様になった始めでした。年令は三十一才、中肉中背、同封の写真が素人の小生の言より雄弁に話してくれるものと思います。奇クに投稿すると申しました所、NO4の写真だけは送らないでくれと申しますので、その前のを送ります。御覧下さい。吊り縄は彼女の場合、ほとんどいりませんが彼女が始めの内痛くて逃げたくなる時があるので、ゆるく縛ってだけ居てくれる様にと申します。でその様にしております。彼女はこのプレーの後一週間は酒場を休まねば客の横に腰を下ろせぬそうです。今の所一カ月半に一度位のプレーですが、その内よいものを写して奇クの同好の方に見て戴きたいと考えております。(福島県郡山市八山上誠一)

【編集部】御送付の写真は誌面の都合で、今月号に掲載できませんが、次号「サロン」に発表します。

新人異色原稿募集

一、告白

「私は、こんな趣向を持ちます」
○自分はこのような人に言えぬ変わった趣向を持っているという方はペンに托して、その偽らざる真実の告白をお寄せ下さい。どのような奇想天外のものでも驚きませんから、どうか、全国のファンの方々に、貴方（貴女）の真実の告白を引っさげて、お呼びかけ下さるよう心からお待ちします。

二、手記

「私は、このように思います」
○真面目な御批判をお寄せ下さるよう、お待ちします。御自分の生活のこと、社会一

般のこと、本誌のこと、同好者への呼びかけ等なんでも結構です。

三、体験

「私はこんな変わった体験をしました」
○長い人生の中には、誰でも一度や二度は凄惨な体験をするものです。ぜひ、とっておき異色体験記をお書き下さい。また、特に変わった体験でなくとも、御自身で非常に強い印象を受けた事柄を、この際再び追体験して下さい。
◎以上の「告白」「手記」「体験」の三項目の応募原稿は、近く発行予定の『特集号』に一括掲載したいと思ひます。採用篇には、相当稿料お支払い致します故、奮って御応募あらんことを。
◎締切日、毎月三十日

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるるのたとえどうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語△

御自分の描く夢をまとめて

下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△（映画、雑誌）通信△

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信△

新聞記事等に関心をお持ちの事項或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

◎尚、以上の五項目の採用原

△読者通信△

稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈いたします。

△奇クサロン△

奇クサロン向きの短文、マニヤ通信、写真絵画などを募ります。文章は原稿用紙三枚まで。採用篇には薄謝進呈します。

☆本誌御購読の榮☆

一月分（1冊）三〇〇円△送共△
三月分（3冊）九〇〇円△送共△
半年分（6冊）一八〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価三〇〇円

七月号

（第十八巻第八号）
（通刊第一九二号）

昭和三十九年六月二十日 印刷
昭和三十九年七月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二
大阪阿倍野局私書函第十四号

発行所 天星社

（振替口座大阪五〇〇四二番）
（昭和三年四月三日第三種郵便物認可）
（国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号）

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。尚、分譲品の詳細は、目錄を御請求の上ごらん願います。
○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫してありますから、売切れぬ中御注文願います。
○口絵写真の複写転載は固く禁じます。